

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第361集

---

東 松 山 市

---

# 反 町 遺 跡 I

---

高坂駅東口第二特定土地区画整理事業地内  
埋蔵文化財発掘調査報告 I  
(第 1 分冊)

2 0 0 9

独立行政法人 都市再生機構  
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



反町・銭塚・城敷遺跡空中写真（合成）



反町遺跡遠景（南より）



反町遺跡B区全景（北より）



第 36 号溝跡 古墳時代前期汀線



第 36 号溝跡 奈良・平安時代汀線





反町遺跡第2号土器棺墓（弥生土器）



反町遺跡（A区）出土弥生土器



反町遺跡（B区）出土古墳時代前期土器



第 36 号溝跡 第 1 号祭祀跡関連遺物



第 3 号溝跡 第 2 号祭祀跡関連遺物 (墨書土器など)



第36号溝跡出土遺物（金銅製花瓶）



第36号溝跡第1号祭祀跡出土墨書土器「神矢」



第36号溝跡第1号祭祀跡出土墨書土器「弓」



第36号溝跡甬股鐵出土状態

## 反町遺跡の紹介

そりまち 反町遺跡は、ひがしまつやまし 東松山市の南東側に位置しています。ときがわ 都幾川が運んだ土砂によって造られた古い自然堤防の上に立地しています。

本遺跡は、高坂駅東口第二特定土地地区画整理事業に伴って調査され、弥生時代（約2,000年前）から平安時代（約1,000年前）にかけての集落跡や河川の跡などが発見されました。調査された住居跡は総数117軒に上ります。その内の1軒は古墳時代前期の碧玉製管玉、水晶製勾玉の工房であることが明らかになりました。

河川跡からは古墳時代前期を中心とする大量の土器と木製品が出土しました。岸辺からは、墨で「神矢」「弓」「三田万呂」「飯万呂」などの文字が書かれたぼくしよど 墨書土器やき かりまたぐく 雁又鎌が使われた「まつり」の跡が見つかっています。

## 序

埼玉県は「都市の魅力」と「田園の魅力」をあわせ持ち、快適でゆとりとにぎわいのある生活が送れる「田園都市」の創造を目指しています。東松山市は都心から約50km圏にあり、東武東上線や関越自動車道、一般国道254号・407号など公共交通機関や道路網が発達しています。同時に比企丘陵と都幾川・越辺川など多くの河川が流れる、水と緑に恵まれた地域です。独立行政法人都市再生機構による「高坂駅東口第二地区特定土地区画整理事業」は、こうした快適な住環境と良好な都市基盤の整備を通じて、ゆたかな「むさし緑園都市」づくりを意図したものです。

事業用地内には、周知の埋蔵文化財包蔵地として反町遺跡、城敷遺跡、銭塚遺跡の3遺跡が知られていました。これら埋蔵文化財の取り扱いについては、関係機関が慎重に協議してまいりましたが、やむを得ず発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなりました。発掘調査は、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課（当時）の調整により、当事業団が独立行政法人都市再生機構埼玉地域支社の委託を受けて実施いたしました。

反町遺跡は弥生時代から中世に至る複合遺跡です。特に、大溝（河川流路）とそれに沿って形成された集落や古墳などが発見され、数多くの土器や埴輪、木製品が出土しました。古墳時代の玉づくり工房、流路に設置された大規模な灌漑用の堰跡、鉄剣を副葬した前方後円墳、奈良・平安時代の河川祭祀跡などの発見は、特筆される成果として挙げることができます。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護や学術研究の基礎資料として、また、普及・啓発や各教育機関の参考資料として広く活用していただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、発掘調査から報告書刊行に至るまでご協力をいただきました独立行政法人都市再生機構埼玉地域支社、東松山市教育委員会並びに地元関係者各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成21年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 刈部 博



## 例言

1. 本書は東松山市に所在する反町遺跡第1、2次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。
  - 第1次調査 反町遺跡第1次（SRMC1次）  
埼玉県東松山市大字高坂153-1他  
平成17年4月11日付け 教生文第2-1号
  - 第2次調査 反町遺跡第2次（SRMC2次）  
埼玉県東松山市大字高坂257番地他  
平成18年4月28日付け 教生文第2-10号
3. 発掘調査は、高坂駅東口第二特定土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査であり、埼玉県教育庁生涯学習部文化財保護課（当時）が調整し、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 反町遺跡（第1、2次調査）については、以下の文献があるが、本報告がすべてに優先する。
  - 菊地真2006「東松山市反町遺跡（第1次）の調査」『第39回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会
  - 赤熊浩一・上野真由美2007「東松山市反町遺跡の調査」『第40回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会
  - 富田和夫2007「埼玉県東松山市反町遺跡出土の祭祀関連遺物について」『祭祀考古学』第6号 祭祀考古学会
5. 発掘調査・整理報告書作成事業はⅠ-3の組織により実施した。
  - 第1次調査は平成17年4月1日から平成18年3月31日まで、富田和夫・大谷敏・山本靖・菊地真が、第2次調査は平成18年4月1日から平成19年3月31日まで、山本靖・赤熊浩一・村端和樹が担当して実施した。
  - 整理報告書作成事業は平成19年度から平成22年度まで4ヶ年の予定で実施している。今回は平成19年4月9日から平成21年3月24日まで、赤熊浩一・福田聖が担当して実施し、事業団報告書第361集として印刷・刊行した。
6. 発掘調査における基準点測量・空中写真撮影は、中央航業株式会社に委託した。
7. 出土木製品の樹種同定（平成19年度）、年代測定、獣骨同定（平成20年度）はバリノサーヴェイ株式会社、漆器の科学分析（平成20年度）は漆器文化財研究所に、漆器の保存処理（平成20年度）は吉田生物研究所に委託した。
8. 平成20年度の樹種同定は、独立行政法人森林総合研究所能城修一氏に依頼した。
9. 発掘調査における写真撮影は各担当者が行い、出土遺物の写真撮影は富田・福田が行った。口絵写真については、小川忠博氏に委託した。
10. 出土品の整理・図版作成は赤熊・福田が行い、富田・新屋雅明・澤口和正・中嶋淳子・兵ゆり子・大和田暁の協力と菊地有希子・矢田美智子の補助を受けた。第36号溝跡出土の籠の保存処理については、(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所のご協力により、西尾太加二氏の指導のもと、澁瀬芳之が実施した。
11. Ⅴ-1を新屋が、Ⅳ-4の祭祀跡、奈良時代以降の土器、鉄器、Ⅳ-5を富田が、Ⅳ-1を森林総合研究所が、Ⅱ-2・3をバリノサーヴェイが、Ⅳ-4を漆器文化財研究所が、Ⅳ-5を吉田生物研究所が、Ⅳ-1を赤熊が、Ⅱ-2を菊地が、Ⅳ-4を大和田が、他は福田が行った。
12. 本書の編集は福田が行った。
13. 本書に掲載した資料は平成21年4月以降埼玉県教育委員会が管理・保管する。
14. 発掘調査、本書の作成にあたり、下記の機関・方々からご教示・ご協力を賜った。記して感謝いたします。（敬称略、50音順）  
東松山市教育委員会（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 浅野晴樹 飯塚武司 岩田明広

江原昌俊 大西 顕 岡本一雄 栗岡眞理子  
柿沼幹夫 金井塚良一 黒沢和彦 黒津玉恵  
久保智康 小出輝雄 酒井清治 坂本和俊  
篠原祐一 鈴木靖民 植山林繼 酒寄雅志

関 和彦 瀧音能之 津野 仁 西尾太加二  
松本 完 水口由紀子 宮島秀夫 宮本長二  
郎 宮舘交二 山田昌久 渡辺 一

## 凡 例

1. 遺跡全体におけるX・Yの数値は、日本測地系による国土標準平面直角座標第Ⅱ系（原点北緯36°00'00"、東経139°50'00"）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位はすべて座標北を示す。

A I-67グリッド北西杭の座標は、X=150.00m、Y=-37710.00m。北緯36°00'02.24"、東経139°24'54.00"である。（小数点以下第3位切捨て）

A I-67グリッドの世界測地系による換算値はX=504.47m、Y=-38002.42mである。（小数点以下第3位切捨て）

2. 調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標に基づく10×10mの範囲を基本（1グリッド）とし、調査区全体をカバーする方眼を組んだ。
3. グリッド名称は、北西隅を基点とし、北から南方向にアルファベット（A・B・C…）、西から東方向に数字（1・2・3…）と付し、アルファベットと数字を組み合わせて、例えばR-8グリッド等と呼称した。

4. 本書の本文、挿図、表中に記した遺構の略号は以下のとおりである。

S・J…竪穴住居跡 SE…掘立柱建物跡  
SD…溝・流路跡 SE…井戸跡 SK…土塹  
SX…その他・特殊遺構 Pit…小穴・柱穴

5. 本書における挿図の縮尺は以下のとおりである。但し、一部例外もある。

全測図 1:300  
遺構図 1:60 遺構拡大図 1:30

土師器・須恵器など 1:4  
土器拓染須図・石器・土製品（土鍾・土玉など）  
1:3  
鉄器・小型製品（耳環・勾玉・ミニチュア土器など）1:2

6. 実測図の表記方法は以下のとおりである。断面を黒塗りしたものは須恵器。また、彩色された土器についてはその範囲に網を掛けて示した。（赤彩10%・施釉20%・黒色処理30%）

7. 遺構断面図に表記した水準数値は、海拔標高を表す。

8. 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。

・器種は弥生土器→弥生、土師器、須恵器と表記した。

・口径・器高・底径はcm単位である。

・（ ）内の数値は推定値を示す。

・胎土は土器中に含まれる鉱物等のうち、特徴的なものを記号で示した。

A-雲母 B-片岩 C-角閃石 D-長石  
E-石英 F-軽石 G-砂粒子 H-赤色粒子  
I-白色粒子 J-白色針状物質  
K-黒色粒子 L-その他

・残存率は図示した器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。

・備考には出土位置、注記No、赤彩の有無、煤の付着、推定される須恵器産地などを記した。

8. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行1/5000・1/25000地形図、東松山市都市計画図1/2500を使用した。

# 目次

## (第1分冊)

口絵
序
例言
凡例
目次

### I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過	1
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2
(1) 発掘調査	2
(2) 整理報告書の作成	2
3. 発掘調査・報告書作成の組織	4

### II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境	5
2. 歴史的環境	9

### III 遺跡群の概要

1. 遺跡群の概要	26
2. 銭塚・城郭遺跡の概要	26
3. 反町遺跡の概要	29
4. 反町遺跡A・Bの概要	33

### IV A区の遺構と遺物

1. 弥生時代	39
(1) 住居跡	39
(2) 方形須岡溝墓	48
(3) 土器棺墓	57
(4) 溝跡	62
2. 古墳時代	67
(1) 方形須岡溝墓	67
(2) 畠跡	71
3. 河川跡	79
4. 古代以降の遺構と遺物	90
(1) 溝跡	90
(2) 土壌	97
(3) ピット	99

### V B区の遺構と遺物

1. 縄文時代	104
2. 古墳時代	105
(1) 古墳時代前期の住居跡	105
(2) 古墳時代中期・後期の住居跡	141
(3) 古墳時代の土壌	149
(4) 畠跡	154
3. 古代以降の遺構と遺物	155
(1) 住居跡	155
(2) 溝跡	157
(3) 土壌	161
4. 河川跡	164
(1) 第3号溝跡	164
(2) 第36号溝跡	182

### (第2分冊)

(3) 第48号溝跡	263
5. グリッド	310
(1) ピット	310
(2) グリッド出土の遺物	310
6. 表採の遺物	314

### VI 科学分析

1. 反町遺跡出土木材の樹種	315
2. 反町遺跡出土木製品の樹種可定	346
3. 反町遺跡出土遺物の自然科学分析	353
4. 反町遺跡出土漆器の科学分析	360
5. 反町遺跡から出土した漆器の高級アル コール法による保存処理	369

### VII まとめ

	372
--	-----

# 挿図目次

## (第1分冊)

第1図	埼玉県の地形	5	第33図	第11号方形須石溝墓	55
第2図	東松山周辺の地形	6	第34図	第11号方形須石溝墓出土遺物	56
第3図	都幾川最下流域の微地形分類図	7	第35図	第1号土器棺墓	58
第4図	早稲低地の微地形と集落	8	第36図	第1号土器棺墓出土遺物	59
第5図	弥生時代中期から古墳時代中期の周辺の遺跡	10	第37図	第2号土器棺墓	60
第6図	古墳時代後期から中世の周辺の遺跡	18	第38図	第2号土器棺墓出土遺物(1)	60
第7図	基本順序	26	第39図	第2号土器棺墓出土遺物(2)	61
第8図	反町・城敷・銭塚遺跡の調査区位置図	27	第40図	第10・12号溝跡	63
第9図	グリッド網図	28	第41図	第12号溝跡出土遺物	64
第10図	反町遺跡全体図	30	第42図	第47号溝跡	65
第11図	反町遺跡第3次調査全体図	32	第43図	第47号溝跡出土遺物	66
第12図	A・B区全体図	34	第44図	第1号方形須石溝墓	67
第13図	全掘図(1)	36	第45図	第1号方形須石溝墓出土遺物	68
第14図	全掘図(2)	37	第46図	第6号方形須石溝墓(1)	70
第15図	全掘図(3)	38	第47図	第6号方形須石溝墓(2)	71
第16図	第1号住居跡・出土遺物	40	第48図	第7号方形須石溝墓(1)	72
第17図	第2号住居跡	41	第49図	第7号方形須石溝墓(2)	73
第18図	第2号住居跡出土遺物	41	第50図	第7号方形須石溝墓出土遺物(1)	73
第19図	第3号住居跡・出土遺物	42	第51図	第7号方形須石溝墓出土遺物(2)	74
第20図	第4号住居跡	43	第52図	第1号冢跡	76
第21図	第4号住居跡出土遺物	43	第53図	第2号冢跡	77
第22図	第6号住居跡	45	第54図	第3号冢跡	78
第23図	第7号住居跡	46	第55図	第2号溝跡(1)	80
第24図	第7号住居跡出土遺物	46	第56図	第2号溝跡(2)	81
第25図	第8号住居跡	47	第57図	第2号溝跡(3)	82
第26図	第8号住居跡出土遺物	48	第58図	第2号溝跡(4)	83
第27図	第3号方形須石溝墓・出土遺物	49	第59図	第2号溝跡出土遺物(1)	84
第28図	第4号方形須石溝墓	50	第60図	第2号溝跡出土遺物(2)	85
第29図	第4号方形須石溝墓出土遺物	50	第61図	第2号溝跡出土遺物(3)	86
第30図	第5号方形須石溝墓・出土遺物	52	第62図	第2号溝跡出土遺物(4)	87
第31図	第10号方形須石溝墓	53	第63図	第2号溝跡出土木製品	88
第32図	第10号方形須石溝墓出土遺物	54	第64図	第1・4・5号溝跡	91
			第65図	第4号溝跡出土遺物	92
			第66図	第6・7・8・9号溝跡	93
			第67図	第6号溝跡出土遺物	94

第68図	第11・38・39・40・41・42号溝跡	95	第105図	第21号住居跡	131
第69図	第43・44・45・46号溝跡	96	第106図	第24号住居跡	131
第70図	第9・10・13～21号土壌	98	第107図	第31号住居跡	132
第71図	グリッドピット(1)	99	第108図	第31号住居跡出土遺物	132
第72図	グリッドピット(2)	100	第109図	第32号住居跡・出土遺物	133
第73図	グリッドピット(3)	100	第110図	第33号住居跡	135
第74図	グリッドピット(4)	101	第111図	第33号住居跡出土遺物	135
第75図	グリッドピット(5)	102	第112図	第38号住居跡(1)	136
第76図	グリッドピット出土遺物	103	第113図	第38号住居跡(2)	137
第77図	B区出土の縄文土器	104	第114図	第38号住居跡(3)	138
第78図	第10号住居跡(1)	105	第115図	第38号住居跡出土遺物	139
第79図	第10号住居跡(2)	106	第116図	第40号住居跡	140
第80図	第10号住居跡出土遺物	107	第117図	第51号住居跡	140
第81図	第11号住居跡	108	第118図	第17号住居跡	141
第82図	第11号住居跡出土遺物	109	第119図	第17号住居跡出土遺物	142
第83図	第12号住居跡(1)	110	第120図	第25号住居跡	143
第84図	第12号住居跡(2)	111	第121図	第25号住居跡出土遺物	143
第85図	第12号住居跡出土遺物(1)	112	第122図	第30号住居跡	144
第86図	第12号住居跡出土遺物(2)	113	第123図	第30号住居跡出土遺物	145
第87図	第12号住居跡出土遺物(3)	114	第124図	第34号住居跡	146
第88図	第13号住居跡	116	第125図	第34号住居跡出土遺物	146
第89図	第13号住居跡出土遺物	117	第126図	第46号住居跡	147
第90図	第14号住居跡	118	第127図	第47号住居跡	148
第91図	第14号住居跡出土遺物	118	第128図	第46・47号住居跡出土遺物	149
第92図	第15号住居跡	119	第129図	第23・24・25・26・35号土壌	150
第93図	第15号住居跡出土遺物	120	第130図	第23・24・26号土壌出土遺物	151
第94図	第16号住居跡	121	第131図	第26号土壌出土遺物	152
第95図	第16号住居跡出土遺物	121	第132図	第5号高跡	154
第96図	第18号住居跡	122	第133図	第23・29号住居跡	155
第97図	第18号住居跡出土遺物	122	第134図	第23・29号住居跡出土遺物	156
第98図	第19号住居跡	123	第135図	第13・15号溝跡・ 第13号溝跡出土遺物	158
第99図	第19号住居跡出土遺物	124	第136図	第16号溝跡	159
第100図	第20号住居跡	125	第137図	第16号溝跡出土遺物	159
第101図	第20号住居跡出土遺物(1)	126	第138図	第17・35・51号溝跡・ 第51号溝跡出土遺物	160
第102図	第20号住居跡出土遺物(2)	127	第139図	第1～3・6～8・22・27号土壌	162
第103図	第20号住居跡出土遺物(3)	128			
第104図	第20号住居跡出土遺物(4)	129			

第140图	第3号清跡(1) .....	163	第173图	第36号清跡出土遺物(1) .....	205
第141图	第3号清跡(2) .....	164	第174图	第36号清跡出土遺物(2) .....	206
第142图	第3号清跡(3) .....	165	第175图	第36号清跡出土遺物(3) .....	207
第143图	第3号清跡出土遺物(1) .....	166	第176图	第36号清跡出土遺物(4) .....	208
第144图	第3号清跡出土遺物(2) .....	167	第177图	第36号清跡出土遺物(5) .....	209
第145图	第3号清跡出土遺物(3) .....	168	第178图	第36号清跡出土遺物(6) .....	210
第146图	第3号清跡出土遺物(4) .....	169	第179图	第36号清跡出土遺物(7) .....	211
第147图	第3号清跡出土遺物(5) .....	171	第180图	第36号清跡出土遺物(8) .....	212
第148图	第3号清跡出土遺物(6) .....	172	第181图	第36号清跡出土遺物(9) .....	213
第149图	第2号祭祀跡(1) .....	173	第182图	第36号清跡出土遺物(10) .....	214
第150图	第2号祭祀跡(2) .....	174	第183图	第36号清跡出土遺物(11) .....	215
第151图	第3号清跡出土木製品(1) .....	175	第184图	第36号清跡出土遺物(12) .....	216
第152图	第3号清跡出土木製品(2) .....	176	第185图	第36号清跡出土遺物(13) .....	217
第153图	第3号清跡出土木製品(3) .....	177	第186图	第36号清跡出土遺物(14) .....	218
第154图	第3号清跡出土木製品(4) .....	178	第187图	第36号清跡出土遺物(15) .....	219
第155图	第36号清跡(1) .....	184	第188图	第36号清跡出土遺物(16) .....	220
第156图	第36号清跡(2) .....	185	第189图	第36号清跡出土遺物(17) .....	221
第157图	第36号清跡(3) 土器分布① .....	187	第190图	第36号清跡古墳後期遺物分布 .....	222
第158图	第36号清跡(4) 木製品分布① .....	188	第191图	第36号清跡出土遺物(18) .....	223
第159图	第36号清跡(5) .....	189	第192图	第36号清跡上層概念図 .....	224
第160图	第36号清跡(6) 遺物分布拡大図① .....	190	第193图	第36号清跡上層遺物分布(1) .....	225
第161图	第36号清跡(7) 遺物分布拡大図② .....	191	第194图	第36号清跡上層遺物分布(2) .....	226
第162图	第36号清跡(8) 遺物分布拡大図③ .....	191	第195图	第36号清跡上層遺物分布(3) .....	227
第163图	第36号清跡(9) 遺物分布拡大図④ .....	193	第196图	第36号清跡上層遺物分布(4) .....	228
第164图	第36号清跡(10) 土器分布② .....	194	第197图	第36号清跡上層遺物分布(5) .....	229
第165图	第36号清跡(11) 木製品分布② .....	195	第198图	第36号清跡浮子・土錘出土状況 .....	230
第166图	第36号清跡(12) .....	196	第199图	第36号清跡龍出土状況拡大図 .....	231
第167图	第36号清跡(13) 土器分布③ .....	197	第200图	第36号清跡北岸古代遺物全体図 .....	232
第168图	第36号清跡(14) 木製品分布③ .....	198	第201图	第1号祭祀跡 .....	233
第169图	第36号清跡(15) .....	199	第202图	第1号祭祀跡遺物拡大図 .....	234
第170图	第36号清跡(16) 土器分布④ .....	200	第203图	第36号清跡出土遺物(19) .....	236
第171图	第36号清跡(17) 木製品分布④ .....	201	第204图	第36号清跡出土遺物(20) .....	237
第172图	第36号清跡(18) 遺物分布 .....	202	第205图	第36号清跡出土遺物(21) .....	238
			第206图	第36号清跡出土遺物(22) .....	239
			第207图	第36号清跡出土遺物(23) .....	240
			第208图	第36号清跡出土木製品(1) .....	249
			第209图	第36号清跡出土木製品(2) .....	250



第210図	第36号溝跡出土木製品 (3) ……………	251	第246図	第48号溝跡出土遺物 (19) ……………	293
第211図	第36号溝跡出土木製品 (4) ……………	253	第247図	第48号溝跡出土木製品 (1) ……………	300
第212図	第36号溝跡出土木製品 (5) ……………	255	第248図	第48号溝跡出土木製品 (2) ……………	301
第213図	第36号溝跡出土木製品 (6) ……………	256	第249図	第48号溝跡出土木製品 (3) ……………	303
第214図	第36号溝跡出土木製品 (7) ……………	258	第250図	第48号溝跡出土木製品 (4) ……………	304
第215図	第36号溝跡出土木製品 (8) ……………	259	第251図	第48号溝跡出土木製品 (5) ……………	305
第216図	第36号溝跡出土木製品 (9) ……………	260	第252図	第48号溝跡出土木製品 (6) ……………	306
第217図	第36号溝跡出土木製品 (10) ……………	261	第253図	第48号溝跡出土木製品 (7) ……………	307
第218図	第36号溝跡出土木製品 (11) ……………	262	第254図	第48号溝跡出土木製品 (8) ……………	308
<b>(第2分冊)</b>					
第219図	第48号溝跡 (1) ……………	264	第255図	第48号溝跡出土木製品 (9) ……………	309
第220図	第48号溝跡 (2) ……………	265	第256図	グリッドピット (1) ……………	311
第221図	第48号溝跡土器分布 ……………	266	第257図	グリッドピット (2) ……………	312
第222図	第48号溝跡木製品分布 ……………	267	第258図	グリッド出土遺物 ……………	313
第223図	第48号溝跡遺物分布 (1) ……………	268	第259図	表採の遺物 ……………	314
第224図	第48号溝跡遺物分布 (2) ……………	269	第260図	第36号溝跡出土の編組製品 (1) ……	325
第225図	第48号溝跡遺物分布 (3) ……………	270	第261図	第36号溝跡出土の編組製品 (2) ……	326
第226図	第48号溝跡遺物分布 (4) ……………	271	第262図	分析試料実測図 ……………	355
第227図	第48号溝跡遺物分布拡大図 (1) ……	272	第263図	ウマ上顎骨概念図 ……………	357
第228図	第48号溝跡出土遺物 (1) ……………	273	第264図	赤外線吸収スペクトル ……………	363
第229図	第48号溝跡出土遺物 (2) ……………	274	第265図	赤外線吸収スペクトル ……………	363
第230図	第48号溝跡出土遺物 (3) ……………	275	第266図	赤外線吸収スペクトル ……………	363
第231図	第48号溝跡出土遺物 (4) ……………	276	第267図	赤外線吸収スペクトル (下地) ……	364
第232図	第48号溝跡出土遺物 (5) ……………	277	第268図	蛍光X線スペクトル (試料番号330) ……	364
第233図	第48号溝跡出土遺物 (6) ……………	278	第269図	蛍光X線スペクトル (試料番号331) ……	364
第234図	第48号溝跡出土遺物 (7) ……………	280	第270図	蛍光X線スペクトル (試料番号335) ……	365
第235図	第48号溝跡出土遺物 (8) ……………	281	第271図	岩鼻式土器と関連土器 ……………	374
第236図	第48号溝跡出土遺物 (9) ……………	282	第272図	岩鼻式土器を出土する遺跡 ……	376
第237図	第48号溝跡出土遺物 (10) ……………	283	第273図	反町遺跡古段階の資料 (1) ……………	378
第238図	第48号溝跡出土遺物 (11) ……………	285	第274図	反町遺跡古段階の資料 (2) ……………	380
第239図	第48号溝跡出土遺物 (12) ……………	286	第275図	反町遺跡古段階の資料 (3) ……………	381
第240図	第48号溝跡出土遺物 (13) ……………	287	第276図	反町遺跡古段階の資料 (4) ……………	382
第241図	第48号溝跡出土遺物 (14) ……………	288	第277図	反町遺跡古段階の資料 (5) ……………	383
第242図	第48号溝跡出土遺物 (15) ……………	289	第278図	反町遺跡古段階の資料 (6) ……………	384
第243図	第48号溝跡出土遺物 (16) ……………	290	第279図	反町遺跡古段階の資料 (7) ……………	385
第244図	第48号溝跡出土遺物 (17) ……………	291	第280図	反町遺跡新段階の資料 ……………	387
第245図	第48号溝跡出土遺物 (18) ……………	292	第281図	第1号・第2号祭礼跡概念図 ……	393
			第282図	第1号・第2号祭礼跡出土遺物 ……	394

## 表 目 次

## (第1分冊)

第1表	調査の工程	3
第2表	第1号住居跡出土遺物観察表	40
第3表	第2号住居跡出土遺物観察表	41
第4表	第3号住居跡出土遺物観察表	42
第5表	第4号住居跡出土遺物観察表	44
第6表	第7号住居跡出土遺物観察表	46
第7表	第8号住居跡出土遺物観察表	48
第8表	第3号方形埴埴溝墓出土遺物観察表	49
第9表	第4号方形埴埴溝墓出土遺物観察表	50
第10表	第5号方形埴埴溝墓出土遺物観察表	52
第11表	第10号方形埴埴溝墓出土遺物観察表	54
第12表	第11号方形埴埴溝墓出土遺物観察表	56
第13表	第1号土器棺墓出土遺物観察表	59
第14表	第2号土器棺墓出土遺物観察表	60
第15表	第12号溝跡出土遺物観察表	64
第16表	第47号溝跡出土遺物観察表	66
第17表	第1号方形埴埴溝墓出土遺物観察表	68
第18表	第7号方形埴埴溝墓出土遺物観察表	75
第19表	第2号溝跡出土遺物観察表	89
第20表	第4号溝跡出土遺物観察表	92
第21表	第6号溝跡出土遺物観察表	94
第22表	ビット一覧表(1)	101
第23表	ビット一覧表(2)	102
第24表	ビット一覧表(3)	103
第25表	グリッドビット出土遺物観察表	103
第26表	第10号住居跡出土遺物観察表	107
第27表	第11号住居跡出土遺物観察表	109
第28表	第12号住居跡出土遺物観察表(1)	114
第29表	第12号住居跡出土遺物観察表(2)	115
第30表	第13号住居跡出土遺物観察表	117
第31表	第14号住居跡出土遺物観察表	118
第32表	第15号住居跡出土遺物観察表	120

第33表	第16号住居跡出土遺物観察表	121
第34表	第18号住居跡出土遺物観察表	122
第35表	第19号住居跡出土遺物観察表	124
第36表	第20号住居跡出土遺物観察表(1)	129
第37表	第20号住居跡出土遺物観察表(2)	130
第38表	第31号住居跡出土遺物観察表	132
第39表	第32号住居跡出土遺物観察表	133
第40表	第33号住居跡出土遺物観察表	135
第41表	第38号住居跡出土遺物観察表	139
第42表	第17号住居跡出土遺物観察表	142
第43表	第25号住居跡出土遺物観察表	143
第44表	第30号住居跡出土遺物観察表	145
第45表	第34号住居跡出土遺物観察表	146
第46表	第46・47号住居跡出土遺物観察表	149
第47表	第23・24・26号土壌出土遺物観察表	153
第48表	第23・29号住居跡出土遺物観察表	156
第49表	第13号溝跡出土遺物観察表	157
第50表	第16号溝跡出土遺物観察表	159
第51表	第51号溝跡出土遺物観察表	159
第52表	第3号溝跡出土遺物観察表(1)	180
第53表	第3号溝跡出土遺物観察表(2)	181
第54表	第3号溝跡出土遺物観察表(3)	182
第55表	第36号溝跡出土遺物観察表(1)	241
第56表	第36号溝跡出土遺物観察表(2)	242
第57表	第36号溝跡出土遺物観察表(3)	243
第58表	第36号溝跡出土遺物観察表(4)	244
第59表	第36号溝跡出土遺物観察表(5)	245
第60表	第36号溝跡出土遺物観察表(6)	246
第61表	第36号溝跡出土遺物観察表(7)	247
第62表	第36号溝跡出土遺物観察表(8)	248
(第2分冊)		
第63表	第48号溝跡出土遺物観察表	294
第64表	第48号溝跡出土遺物観察表	295

第65表	第48号溝跡出土遺物観察表	296
第66表	第48号溝跡出土遺物観察表	297
第67表	第48号溝跡出土遺物観察表	298
第68表	第48号溝跡出土遺物観察表	299
第69表	ピット一覧表 (B区)	310
第70表	グリッド出土遺物観察表	314
第71表	表採出土遺物観察表	314
第72表	反町遺跡出土木材の樹種	316
第73表	反町遺跡出土木材の樹種同定結果(1)	328
第74表	反町遺跡出土木材の樹種同定結果(2)	329
第75表	反町遺跡出土木材の樹種同定結果(3)	330

第76表	反町遺跡出土木材の樹種同定結果(4)	331
第77表	反町遺跡出土木材の樹種同定結果(5)	332
第78表	反町遺跡出土木材の樹種同定結果(6)	333
第79表	反町遺跡出土木材の樹種同定結果(7)	334
第80表	反町遺跡出土木材の樹種同定結果(8)	335
第81表	樹種同定結果	347
第82表	分析試料	353
第83表	放射性炭素年代測定結果	354
第84表	暦年較正結果	356
第85表	骨同定結果	358
第86表	埼玉県内出土の雁股鏃一覧表	399

## 写真図版目次

図版1	1 反町遺跡遠景 (東から)		3 A区第5号方形周溝墓
	2 反町遺跡全景 (北から)		
図版2	1 A区南全景 (北から)	図版9	1 A区第5号方形周溝墓南溝遺物出土状況 (東から)
	2 A区南全景 (中央から南)		2 A区第5号方形周溝墓南溝遺物出土状況 (1)
	3 A区南全景 (中央から北)		3 A区第5号方形周溝墓南溝遺物出土状況 (2)・土層断面
図版3	1 A区方形周溝墓群全景 (南から)	図版10	1 A区第6号方形周溝墓 (北から)
	2 A区方形周溝墓群全景 (北から)		2 A区第7号方形周溝墓 (北から)
	3 A区南基本土層		3 A区第7号方形周溝墓西溝遺物出土状況 (西から)
図版4	1 A区第1号住居跡	図版11	1 A区第7号方形周溝墓南溝遺物出土状況 (北から)
	2 A区第3号住居跡		2 A区第7号方形周溝墓遺物出土状況
	3 A区第4号住居跡		3 A区第10号方形周溝墓 (南東から)
図版5	1 A区第6号住居跡	図版12	1 A区第10号方形周溝墓遺物出土状況 (北東から)
	2 A区第7号住居跡		2 A区第10号方形周溝墓 (No.3) 遺物出土状況 (北西から)
	3 A区第7号住居跡		3 A区第10号方形周溝墓 (No.4) 遺物出土状況 (北東から)
図版6	1 A区第8号住居跡	図版13	1 A区第11号方形周溝墓 (南から)
	2 A区第1号方形周溝墓		2 A区第11号方形周溝墓 (東から)
	3 A区第1号方形周溝墓遺物出土状況		
図版7	1 A区第1号方形周溝墓遺物出土状況		
	2 A区第3号方形周溝墓		
	3 A区第4号方形周溝墓		
図版8	1 A区第4号方形周溝墓		
	2 A区第4号方形周溝墓・第1号土器棺墓		

	3	A区第11号方形須岡墓西壁断面	(南西から)		
図版14	1	A区第11号方形須岡墓南溝遺物出土状況(北東から)		図版22	1 A区第47号溝跡遺物出土状況
	2	A区第11号方形須岡墓北溝遺物出土状況(北東から)			2 A区第47号溝跡(Na.1)遺物出土状況(1)
	3	A区第11号方形須岡墓北溝(Na.1)遺物出土状況			3 A区第47号溝跡(Na.1)遺物出土状況(2)
図版15	1	A区第11号方形須岡墓北溝北東隅側遺物出土状況		図版23	1 A区第47号溝跡(Na.1)遺物出土状況(3)
	2	A区第11号方形須岡墓北溝(Na.1)遺物出土状況			2 A区第47号溝跡(Na.1)遺物出土状況(4)
	3	A区第1号土器棺墓断面(南から)			3 A区第1号冢跡
図版16	1	A区第1号土器棺墓出土状況(1)		図版24	1 A区第1号冢跡(南東から)
	2	A区第1号土器棺墓出土状況(2)			2 A区第2号冢跡(東から)
	3	A区第2号土器棺墓検出状況			3 A区第9・10号土壇(南から)
図版17	1	A区第2号土器棺墓断面(北から)		図版25	1 A区第13・14号土壇(東から)
	2	A区第2号土器棺墓出土状況(1)(北から)			2 A区第16・17・18・19号土壇(北東から)
	3	A区第2号土器棺墓出土状況(2)(北から)			3 A区AF66グリッドピット2
図版18	1	A区第2号土器棺墓(東から)		図版26	1 B区南半部全景(南から)
	2	A区第2号土器棺墓口縁部の閉塞状況(1)			2 B区南半部全景(中央から南)
	3	A区第2号土器棺墓口縁部の閉塞状況(2)			3 B区全景(北から)
図版19	1	A区第2号溝跡(南から)		図版27	1 B区全景(南から)
	2	A区第2号溝跡遺物出土状況(東から)			2 B区第10号住居跡(北東から)
	3	A区第2号溝跡遺物集中状況(東から)			3 B区第10号住居跡ピット2遺物出土状況
図版20	1	A区第2号溝跡遺物出土状況		図版28	1 B区第10号住居跡ピット2炭化物分布状況
	2	A区第6・7号溝跡(東から)			2 B区第10号住居跡貯蔵穴
	3	A区第12号溝跡(北東から)			3 B区第11号住居跡(北東から)
図版21	1	A区第12号溝跡遺物出土状況(Na.3・4)		図版29	1 B区第12号住居跡(南から)
	2	A区第47号溝跡(南西から)			2 B区第12号住居跡掘り方(南から)
	3	A区第47号溝跡遺物出土状況			3 B区第12号住居跡遺物出土状況(1)
				図版30	1 B区第12号住居跡遺物出土状況(2)
					2 B区第12号住居跡遺物出土状況(3)
					3 B区第12号住居跡遺物出土状況(4)
				図版31	1 B区第12号住居跡遺物出土状況(5)
					2 B区第12号住居跡掘り方遺物出土状況

	況	2	B区第3号溝跡北岸遺物出土状況
	3 B区第13号住居跡(東から)	3	B区第3号溝跡北岸墨書土器出土状況
図版32	1 B区第13号住居跡遺物出土状況		
	2 B区第14号住居跡(南東から)	図版43	1 B区第3号溝跡墨書土器 「三田万呂」出土状況(1)
	3 B区第14号住居跡遺物出土状況		2 B区第3号溝跡墨書土器 「三田万呂」出土状況(2)
図版33	1 B区第15・21号住居跡(東から)		3 B区第3号溝跡墨書土器 「三田万呂」出土状況(3)
	2 B区第15号住居跡掘り方(東から)	図版44	1 B区第3号溝跡墨書土器 「三田万呂」出土状況(4)
	3 B区第18号住居跡(東から)		2 B区第3号溝跡墨書土器 「飯万呂」出土状況
図版34	1 B区第19号住居跡(東から)		3 B区第3号溝跡欄出土状況
	2 B区第19号住居跡掘り方(東から)	図版45	1 B区第3号溝跡出土状況 (木製品№6)
	3 B区第20号住居跡遺物出土状況(1) (北西から)		2 B区第3号溝跡施設2 (木製品№7・8)(1)
図版35	1 B区第20号住居跡遺物出土状況(2)		3 B区第3号溝跡施設2 (木製品№7・8)(2)
	2 B区第20号住居跡遺物出土状況(3)	図版46	1 B区第3号溝跡施設2(3)
	3 B区第20号住居跡(№12)遺物出土 状況		2 B区第3号溝跡施設1(1)
図版36	1 B区第23号住居跡(西から)		3 B区第3号溝跡施設1(2)
	2 B区第23号住居跡遺物出土状況	図版47	1 B区第36号溝跡全景
	3 B区第23号住居跡カマド		2 B区第36号溝跡完掘(南から)
図版37	1 B区第25号住居跡		3 B区第36号溝跡全景(中央から南)
	2 B区第29号住居跡(西から)	図版48	1 B区第36号溝跡北面断面(1)
	3 B区第29号住居跡カマド		2 B区第36号溝跡(中央から北)
図版38	1 B区第30号住居跡(東から)		3 B区第36号溝跡断面
	2 B区第30号住居跡カマド	図版49	1 B区第36号溝跡西壁断面(1)
	3 B区第33号住居跡(西から)		2 B区第36号溝跡西壁断面(2)
図版39	1 B区第38号住居跡(南から)		3 B区第36号溝跡北岸 (古墳時代前期丁線)
	2 B区第38号住居跡北東コーナー遺物 出土状況	図版50	1 B区第36号溝跡北岸 (古墳時代前期丁線)(北から)
	3 B区第38・39・40号住居跡		2 B区第36号溝跡北岸 (古墳時代前期丁線)遺物出土状況
図版40	1 B区第38・39・40号住居跡		
	2 B区第46号住居跡遺物出土状況		
	3 B区第3号溝跡全景(西から)		
図版41	1 B区第3号溝跡全景(南から)		
	2 B区第3号溝跡全景(南東から)		
	3 B区第3号溝跡全景(北から)		
図版42	1 B区第3号溝跡遺物出土状況 (東から)		

	3	B区第36号清跡施設1・土器集中	遺物出土状況
図版51	1	B区第36号清跡北岸(古墳時代前期)遺物出土状況(1)	3 B区第36号清跡(木製品No.2)出土状況
	2	B区第36号清跡北岸(古墳時代前期)遺物出土状況(2)	図版58 1 B区第36号清跡P66G北側木製品出土状況(1)
	3	B区第36号清跡北岸(古墳時代前期)遺物出土状況(3)	2 B区第36号清跡P66G北側木製品出土状況(2)
図版52	1	B区第36号清跡北岸(古墳時代前期)遺物出土状況(4)	3 B区第36号清跡(木製品No.15)出土状況
	2	B区第36号清跡北岸(古墳時代前期)遺物出土状況(5)	図版59 1 B区第36号清跡P66G北側木製品出土状況
	3	B区第36号清跡P66G付近(古墳時代前期)遺物出土状況(1)	2 B区第36号清跡(木製品No.1)出土状況
図版53	1	B区第36号清跡P66G付近(古墳時代前期)遺物出土状況(2)	3 B区第36号清跡(木製品No.3)出土状況
	2	B区第36号清跡P66G付近(古墳時代前期)遺物出土状況(西から)	図版60 1 B区第36号清跡木製品出土状況(1)
	3	B区第36号清跡P66G付近(古墳時代前期)遺物出土状況(南から)	2 B区第36号清跡木製品出土状況(2)
図版54	1	B区第36号清跡P66G施設(東から)(1)	3 B区第36号清跡P66G(古墳時代前期)杭打設状況
	2	B区第36号清跡P66G施設(東から)(2)	図版61 1 B区第36号清跡遺物出土状況(1)
	3	B区第36号清跡P66G施設(東から)(3)	2 B区第36号清跡遺物出土状況(2)
図版55	1	B区第36号清跡P66G付近遺物出土状況(南から)	3 B区第36号清跡遺物出土状況(3)
	2	B区第36号清跡北岸杭列	図版62 1 B区第36号清跡(Na.77)遺物出土状況
	3	B区第36号清跡遺物集中出土状況(1)	2 B区第36号清跡台付甕出土状況
図版56	1	B区第36号清跡P66G付近遺物出土状況	3 B区第36号清跡(Na.63)遺物出土状況
	2	B区第36号清跡北岸杭打設状況	図版63 1 B区第36号清跡(Na.75)遺物出土状況
	3	B区第36号清跡P66G南側木製品出土状況	2 B区第36号清跡遺物出土状況
図版57	1	B区第36号清跡施設(北から)	3 B区第36号清跡(Na.40)遺物出土状況
	2	B区第36号清跡P66G北側	図版64 1 B区第36号清跡器台出土状況
			2 B区第36号清跡遺物出土状況
			3 B区第36号清跡南側(北から)
			図版65 1 B区第36号清跡古墳前期遺物出土状況
			2 B区第36号清跡(Na.152)遺物出土状況
			3 B区第36号清跡遺物出土状況
			図版66 1 B区第36号清跡(Na.6)遺物出土状況



	2	B区第36号溝跡S66G付近(西から)	2	B区第36号溝跡第1号祭祀跡		
	3	B区第36号溝跡(N:219)遺物出土状況		須恵器長頸瓶出土状況		
図版67	1	B区第36号溝跡S66G自然木出土状況(東から)	3	B区第36号溝跡第1号祭祀跡		
	2	B区第36号溝跡T66G付近杭列出土状況(東から)		須恵器坏出土状況		
	3	B区第36号溝跡加工材出土状況	図版74	1	B区第36号溝跡第1号祭祀跡	
図版68	1	B区第36号溝跡S66G付近古墳時代前期遺物出土状況(1)			須恵器坏出土状況	
	2	B区第36号溝跡S66G付近古墳時代前期遺物出土状況(2)	2	B区第36号溝跡漆バレット出土状況		
	3	B区第36号溝跡(N:74)遺物出土状況	3	B区第36号溝跡R66G		
図版69	1	B区第36号溝跡北岸古墳時代後期丁線			雁股織(N:356)出土状況	
	2	B区第36号溝跡北岸古墳時代後期丁線	図版75	1	B区第36号溝跡R66G	
	3	B区第36号溝跡北岸古墳時代後期立ち上がり断面			雁股織(N:356)矢柄表着状況	
図版70	1	B区第36号溝跡古墳時代後期遺物出土状況	2	B区第36号溝跡		
	2	B区第36号溝跡土師器残出土状況			付札状木製品(N:21)出土状況	
	3	B区第36号溝跡土師器坏出土状況	3	B区第36号溝跡刺し網出土状況(1)		
図版71	1	B区第36号溝跡北岸第1号祭祀跡「神矢」墨書土器出土状況(1)	図版76	1	B区第36号溝跡刺し網出土状況(2)	
	2	B区第36号溝跡北岸第1号祭祀跡「神矢」墨書土器出土状況(2)			2	B区第36号溝跡
	3	B区第36号溝跡第1号祭祀跡遺物出土状況(南西から)				刺し網出土状況アップ(1)
図版72	1	B区第36号溝跡第1号祭祀跡遺物出土状況(北西から)	3	B区第36号溝跡		
	2	B区第36号溝跡第1号祭祀跡遺物出土状況(北西から)				刺し網出土状況アップ(2)
	3	B区第36号溝跡第1号祭祀跡遺物出土状況(北から)	図版77	1	B区第36号溝跡	
図版73	1	B区第36号溝跡第1号祭祀跡遺物出土状況(南東から)				刺し網出土状況アップ(3)
			2	B区第36号溝跡		
						刺し網出土状況アップ(4)
			3	B区第36号溝跡Q66G		
						籠(N:72)出土状況(北東から)
			図版78	1	B区第36号溝跡Q66G	
						籠(N:72)出土状況(南西から)(1)
			2	B区第36号溝跡Q66G		
						籠(N:72)出土状況(南西から)(2)
			3	B区第36号溝跡		
						籠(N:72)出土状況(全体)
			図版79	1	B区第36号溝跡	
						籠(N:72)前側縁部出土状況
			2	B区第36号溝跡		
						籠(N:72)中央部分の編物部分(1)
			3	B区第36号溝跡		
						籠(N:72)中央部分の編物部分(2)

図版80	1 B区第36号溝跡黒書土器 (No.323)	図版88	1 B区第48号溝跡北岸遺物出土状況 (西から)
	2 B区第36号溝跡締め具 (No.43) 出土状況		2 B区第48号溝跡北岸遺物出土状況 (南から)
	3 B区第36号溝跡締め具 (No.43) 出土状況アップ		3 B区第48号溝跡遺物出土状況 (西から)
図版81	1 B区第36号溝跡遺物出土状況	図版89	1 B区第48号溝跡北岸と玉作工房 (南から)
	2 B区第36号溝跡 須恵器 (漆ノパレット) 出土状況		2 B区第48号溝跡可床 (西から)
	3 B区第36号溝跡漆椀出土状況		3 B区第48号溝跡北東斜面
図版82	1 B区第36号溝跡遺物出土状況	図版90	1 B区第48号溝跡河床出土状況
	2 B区第36号溝跡 曲物底部 (No.34) 出土状況		2 B区第48号溝跡北側テラス遺物出土状況
	3 B区第36号溝跡馬の下顎出土状況		3 B区第48号溝跡下層遺物出土状況
図版83	1 B区第36号溝跡樹皮巻出土状況(1)	図版91	1 B区第48号溝跡下層 (No.1) 遺物出土状況
	2 B区第36号溝跡樹皮巻出土状況(2)		2 B区第48号溝跡 (No.250) 遺物出土状況
	3 B区第36号溝跡樹皮巻出土状況(3)		3 B区第48号溝跡 (No.9) 遺物出土状況
図版84	1 B区第36号溝跡 短刀 (No.362) 出土状況	図版92	1 B区第23号土壇遺物出土状況
	2 B区第36号溝跡 簪 (No.18) 出土状況		2 B区第25号土壇 (南から)
	3 B区第36号溝跡 曲物底部 (No.33) 出土状況		3 B区第26号土壇遺物出土状況
図版85	1 B区第36号溝跡漆椀出土状況	図版93	1 第10号住居跡 (第80図2)
	2 B区第36号溝跡花瓶 (No.355) 出土状況		2 第10号住居跡 (第80図4)
	3 B区第36号溝跡夾頭壺 (No.354) 出土状況		3 第10号住居跡 (第80図5)
			4 第10号住居跡 (第80図3)
図版86	1 B区第36号溝跡籠出土状況		5 第11号住居跡 (第82図2)
	2 B区第48号溝跡全景 (南から)		6 第11号住居跡 (第82図1)
	3 B区第48号溝跡北岸テラス遺物集中地点 (西から) (1)		7 第12号住居跡 (第85図13)
図版87	1 B区第48号溝跡北岸テラス遺物集中地点 (西から) (2)	図版94	1 第12号住居跡 (第87図38)
	2 B区第48号溝跡 木樋 (No.16) 出土状況 (東から)		2 第12号住居跡 (第85図14)
	3 B区第48号溝跡 木樋 (No.16) 出土状況 (南から)		3 第12号住居跡 (第86図29)
			4 第12号住居跡 (第87図42)
			5 第12号住居跡 (第86図31)
			6 第12号住居跡 (第85図3)
			7 第12号住居跡 (第85図2)

图版95	1	第12号住居跡 (第86図32)	2	第20号住居跡 (第102図20)
	2	第12号住居跡 (第87図43)	3	第20号住居跡 (第102図15)
	3	第12号住居跡 (第86図36)	4	第20号住居跡 (第101図5)
	4	第12号住居跡 (第85図18)	5	第20号住居跡 (第102図12)
	5	第12号住居跡 (第85図16)	6	第20号住居跡 (第102図19)
	6	第12号住居跡 (第85図12)	图版102	1 第20号住居跡 (第101図2)
图版96	1	第12号住居跡 (第87図41)	2	第23号住居跡 (第134図1)
	2	第12号住居跡 (第85図20)	3	第25号住居跡 (第121図2)
	3	第12号住居跡 (第85図11)	4	第30号住居跡 (第123図4)
	4	第12号住居跡 (第85図10)	5	第30号住居跡 (第123図7)
	5	第12号住居跡 (第85図21)	6	第30号住居跡 (第123図1)
	6	第12号住居跡 (第85図19)	图版103	1 第34号住居跡 (第125図1)
图版97	1	第13号住居跡 (第89図10)	2	第38号住居跡 (第115図5)
	2	第17号住居跡 (第119図1)	3	第38号住居跡 (第115図4)
	3	第17号住居跡 (第119図5)	4	第38号住居跡 (第115図6)
	4	第18号住居跡 (第97図2)	5	第47号住居跡 (第128図1)
	5	第18号住居跡 (第97図1)	6	第1号土器棺墓 (第36図1)
图版98	1	第20号住居跡 (第104図44)	图版104	1 第1号土器棺墓 (第36図3)
	2	第20号住居跡 (第104図45)	2	第1号土器棺墓 (第36図2)
	3	第20号住居跡 (第104図43)	3	第2号土器棺墓 (第38図3)
	4	第20号住居跡 (第102図21)	4	第2号土器棺墓 (第38図3) 細部
	5	第20号住居跡 (第102図14)	5	第2号土器棺墓 (第38図2)
	6	第20号住居跡 (第102図13)	图版105	1 第2号土器棺墓 (第38図1)
	7	第20号住居跡 (第103図37)	2	第10号方形須眉溝墓 (第32図3)
图版99	1	第20号住居跡 (第104図41)	3	第10号方形須眉溝墓 (第32図3)
	2	第20号住居跡 (第104図42)		細部
	3	第20号住居跡 (第101図3)	4	第11号方形須眉溝墓 (第34図1)
	4	第20号住居跡 (第104図39)	5	第11号方形須眉溝墓 (第34図1)
	5	第20号住居跡 (第104図39)		口縁細部
	6	第20号住居跡 (第104図39)	6	第11号方形須眉溝墓 (第34図1)
图版100	1	第20号住居跡 (第101図1)		胴部細部
	2	第20号住居跡 (第103図30)	图版106	1 第5号方形須眉溝墓 (第30図1)
	3	第20号住居跡 (第103図33)	2	第7号方形須眉溝墓 (第50図2)
	4	第20号住居跡 (第101図4)	3	第7号方形須眉溝墓 (第51図10)
	5	第20号住居跡 (第103図31)	4	第10号方形須眉溝墓 (第32図4)
	6	第20号住居跡 (第102図17)	图版107	1 第1号方形須眉溝墓 (第45図1)
图版101	1	第20号住居跡 (第102図18)	2	第4号方形須眉溝墓 (第29図2)

	3	第7号方形础清墓 (第51图11)	图版114	1	第2号清跡 (第59图3)	
	4	第7号方形础清墓 (第51图15)		2	第2号清跡 (第61图20)	
	5	第7号方形础清墓 (第50图1)		3	第2号清跡 (第60图14)	
	6	第7号方形础清墓 (第50图5)		4	第3号清跡 (第143图1)	
图版108	1	第7号方形础清墓 (第51图13)		5	第3号清跡 (第143图2)	
	2	第7号方形础清墓 (第51图16)		6	第3号清跡 (第143图10)	
	3	第10号方形础清墓 (第32图2)	图版115	1	第3号清跡 (第143图3)	
	4	第11号方形础清墓 (第34图2)		2	第3号清跡 (第143图15)	
	5	第23号土城 (第130图1)		3	第3号清跡 (第144图19)	
	6	第23号土城 (第130图3)		4	第3号清跡 (第144图22)	
	7	第24号土城 (第130图7)		5	第3号清跡 (第144图24)	
图版109	1	第26号土城 (第130图10)		6	第3号清跡 (第144图36)	
	2	第26号土城 (第131图12)	图版116	1	第3号清跡 (第144图28)	
	3	第26号土城 (第131图11)		2	第3号清跡 (第144图34)	
	4	第26号土城 (第130图9)		3	第3号清跡 (第144图26)	
图版110	1	第26号土城 (第131图13)		4	第3号清跡 (第144图29)	
	2	第26号土城 (第131图14)		5	第3号清跡 (第145图42)	
	3	第26号土城 (第131图15)		6	第3号清跡 (第145图50)	
	4	第2号清跡 (第61图23)		7	第3号清跡 (第145图49)	
	5	第2号清跡 (第62图41)	图版117	1	第3号清跡 (第145图51)	
图版111	1	第2号清跡 (第59图1)		2	第3号清跡 (第145图52)	
	2	第2号清跡 (第60图10)		3	第3号清跡 (第145图56)	
	3	第2号清跡 (第61图15)		4	第3号清跡 (第145图53)	
	4	第2号清跡 (第61图15) 細部		5	第3号清跡 (第146图64)	
图版112	1	第2号清跡 (第59图5)		6	第3号清跡 (第147图75)	
	2	第2号清跡 (第59图5)		7	第3号清跡 (第147图76)	
	3	第2号清跡 (第59图5)	图版118	1	第3号清跡 (第147图88)	
	4	第2号清跡 (第59图6)		2	第3号清跡 (第147图88) 墨書	
	5	第2号清跡 (第60图12)		3	第3号清跡 (第147图88) 墨書	
	6	第2号清跡 (第59图2)		4	第3号清跡 (第147图88)	
图版113	1	第2号清跡 (第61图16)		5	第3号清跡 (第147图88) 墨書	
	2	第2号清跡 (第61图17)		6	第3号清跡 (第147图88) 墨書	
	3	第2号清跡 (第62图25)	图版119	1	第3号清跡 (第147图89)	
	4	第2号清跡 (第60图13)		2	第3号清跡 (第147图89) 墨書	
	5	第2号清跡 (第62图42)		3	第3号清跡 (第147图89) 墨書	
	6	第2号清跡 (第62图24)		4	第3号清跡 (第147图97)	
	7	第2号清跡 (第61图22)		5	第3号清跡 (第147图97) 墨書	

	6	第3号清跡 (第147图87)	墨書	2	第36号清跡 (第175图32)	
図版120	1	第3号清跡 (第147图80)		3	第36号清跡 (第175图33)	
	2	第3号清跡 (第147图82)		4	第36号清跡 (第175图34)	
	3	第3号清跡 (第148图100)		5	第36号清跡 (第175图36)	
	4	第3号清跡 (第148图99)		6	第36号清跡 (第175图38)	
	5	第3号清跡 (第148图106)		7	第36号清跡 (第175图37)	
	6	第3号清跡 (第148图105)		8	第36号清跡 (第175图39)	
	7	第3号清跡 (第147图94)	墨書	9	第36号清跡 (第176图44)	
	8	第3号清跡 (第147图96)	墨書	図版126	1	第36号清跡 (第177图63)
図版121	1	第3号清跡 (第147图87)	墨書	2	第36号清跡 (第177图64)	
	2	第3号清跡 (第147图95)	墨書	3	第36号清跡 (第177图61)	
	3	第3号清跡 (第147图95)	墨書	4	第36号清跡 (第177图62)	
	4	第3号清跡 (第147图90)	墨書	5	第36号清跡 (第177图59)	
	5	第3号清跡 (第147图93)	墨書	6	第36号清跡 (第177图60)	
	6	第3号清跡 (第148图108)	見込み	図版127	1	第36号清跡 (第177图71)
	7	第3号清跡 (第148图108)	底面	2	第36号清跡 (第177图72)	
図版122	1	第6号清跡 (第67图1)		3	第36号清跡 (第177图73)	
	2	第16号清跡 (第137图1)		4	第36号清跡 (第177图74)	
	3	第16号清跡 (第137图3)		5	第36号清跡 (第177图75)	
	4	第12号清跡 (第41图5)		6	第36号清跡 (第177图77)	
	5	第12号清跡 (第41图3)		図版128	1	第36号清跡 (第178图78)
	6	第12号清跡 (第41图4)		2	第36号清跡 (第178图79)	
図版123	1	第36号清跡 (第173图1)		3	第36号清跡 (第178图81)	
	2	第36号清跡 (第173图6)		4	第36号清跡 (第178图82)	
	3	第36号清跡 (第173图9)		5	第36号清跡 (第178图83)	
	4	第36号清跡 (第173图2)		6	第36号清跡 (第178图84)	
	5	第36号清跡 (第173图3)		図版129	1	第36号清跡 (第178图85)
	6	第36号清跡 (第173图15)		2	第36号清跡 (第179图86)	
	7	第36号清跡 (第173图14)		3	第36号清跡 (第179图87)	
図版124	1	第36号清跡 (第174图22)		4	第36号清跡 (第179图88)	
	2	第36号清跡 (第174图19)		5	第36号清跡 (第179图89)	
	3	第36号清跡 (第174图20)		6	第36号清跡 (第179图91)	
	4	第36号清跡 (第174图30)		図版130	1	第36号清跡 (第180图92)
	5	第36号清跡 (第174图26)		2	第36号清跡 (第180图93)	
	6	第36号清跡 (第174图26)	細部	3	第36号清跡 (第180图94)	
	7	第36号清跡 (第174图31)		4	第36号清跡 (第180图95)	
図版125	1	第36号清跡 (第174图28)		5	第36号清跡 (第180图96)	

	6	第36号清跡 (第180图97)		6	第36号清跡 (第187图245)
图版131	1	第36号清跡 (第181图108)		7	第36号清跡 (第187图246)
	2	第36号清跡 (第181图110)	图版137	1	第36号清跡 (第187图248)
	3	第36号清跡 (第181图113)		2	第36号清跡 (第187图253)
	4	第36号清跡 (第181图127)		3	第36号清跡 (第188图255)
	5	第36号清跡 (第181图130)		4	第36号清跡 (第188图256)
	6	第36号清跡 (第181图131)		5	第36号清跡 (第188图257)
图版132	1	第36号清跡 (第181图132)		6	第36号清跡 (第188图259)
	2	第36号清跡 (第181图117)		7	第36号清跡 (第188图261)
	3	第36号清跡 (第181图119)	图版138	1	第36号清跡 (第188图264)
	4	第36号清跡 (第181图120)		2	第36号清跡 (第188图266)
	5	第36号清跡 (第181图121)		3	第36号清跡 (第188图267)
	6	第36号清跡 (第181图122)		4	第36号清跡 (第188图270)
图版133	1	第36号清跡 (第182图136)		5	第36号清跡 (第188图269)
	2	第36号清跡 (第182图137)		6	第36号清跡 (第188图272)
	3	第36号清跡 (第182图138)		7	第36号清跡 (第188图274)
	4	第36号清跡 (第182图139)	图版139	1	第36号清跡 (第188图275)
	5	第36号清跡 (第182图140)		2	第36号清跡 (第188图276)
	6	第36号清跡 (第182图141)		3	第36号清跡 (第188图279)
图版134	1	第36号清跡 (第182图142)		4	第36号清跡 (第188图280)
	2	第36号清跡 (第182图145)		5	第36号清跡 (第188图281)
	3	第36号清跡 (第183图150)		6	第36号清跡 (第191图301)
	4	第36号清跡 (第186图213)	图版140	1	第36号清跡 (第191图302)
	5	第36号清跡 (第186图215)		2	第36号清跡 (第191图309)
	6	第36号清跡 (第186图219)		3	第36号清跡 (第191图306)
	7	第36号清跡 (第186图220)		4	第36号清跡 (第191图303)
图版135	1	第36号清跡 (第186图225)		5	第36号清跡 (第191图303)
	2	第36号清跡 (第186图228)		6	第36号清跡 (第191图310)
	3	第36号清跡 (第186图229)	图版141	1	第36号清跡 (第200图312)
	4	第36号清跡 (第186图230)		2	第36号清跡 (第200图313)
	5	第36号清跡 (第186图231)		3	第36号清跡 (第200图314)
	6	第36号清跡 (第187图236)		4	第36号清跡 (第200图315)
图版136	1	第36号清跡 (第187图237)		5	第36号清跡 (第200图316)
	2	第36号清跡 (第187图238)		6	第36号清跡 (第200图317)
	3	第36号清跡 (第186图224)		7	第36号清跡 (第200图319)
	4	第36号清跡 (第187图250)		8	第36号清跡 (第200图320)
	5	第36号清跡 (第187图244)	图版142	1	第36号清跡 (第200图318)



	2	第36号清跡 (第203图318)	墨書		2	第48号清跡 (第228图4)	
	3	第36号清跡 (第203图321)			3	第48号清跡 (第228图4)	胴部細部
	4	第36号清跡 (第203图321)	墨書		4	第48号清跡 (第229图5)	
	5	第36号清跡 (第203图322)			5	第48号清跡 (第229图6)	
	6	第36号清跡 (第203图322)	墨書		6	第48号清跡 (第229图12)	
	7	第36号清跡 (第203图322)	墨書		7	第48号清跡 (第229图13)	
図版143	1	第36号清跡 (第203图323)			8	第48号清跡 (第230图18)	
	2	第36号清跡 (第203图323)	墨書	図版149	1	第48号清跡 (第230图23)	
	3	第36号清跡 (第203图323)	墨書		2	第48号清跡 (第230图28)	
	4	第36号清跡 (第203图332)			3	第48号清跡 (第230图31)	
	5	第36号清跡 (第203图332)	墨書		4	第48号清跡 (第230图32)	
	6	第36号清跡 (第203图332)	墨書		5	第48号清跡 (第231图33)	
図版144	1	第36号清跡 (第203图330)			6	第48号清跡 (第231图34)	
	2	第36号清跡 (第205图354)			7	第48号清跡 (第231图35)	
	3	第36号清跡 (第205图353)			8	第48号清跡 (第234图89)	
	4	第36号清跡 (第205图350)		図版150	1	第48号清跡 (第234图90)	
	5	第36号清跡 (第207图363)			2	第48号清跡 (第234图91)	
	6	第36号清跡 (第207图364)			3	第48号清跡 (第234图93)	
	7	第36号清跡 (第206图359)			4	第48号清跡 (第234图94)	
図版145	1	第36号清跡 (第205图351)			5	第48号清跡 (第234图95)	
	2	第36号清跡 (第205图351)			6	第48号清跡 (第234图96)	
	3	第36号清跡 (第205图355)		図版151	1	第48号清跡 (第234图97)	
	4	第36号清跡 (第206图356)			2	第48号清跡 (第234图98)	
図版146	1	第36号清跡 (第206图357)			3	第48号清跡 (第234图99)	
	2	第36号清跡 (第206图358)			4	第48号清跡 (第234图100)	
	3	第36号清跡 (第206图361)			5	第48号清跡 (第234图101)	
	4	第36号清跡 (第206图356)	細部		6	第48号清跡 (第234图101)	
	5	第36号清跡 (第206图360)	細部	図版152	1	第48号清跡 (第234图102)	
	6	第36号清跡 (第206图360)			2	第48号清跡 (第234图103)	
	7	第36号清跡 (第206图362)			3	第48号清跡 (第234图104)	
図版147	1	第47号清跡 (第43图1)			4	第48号清跡 (第235图108)	
	2	第48号清跡 (第228图2)			5	第48号清跡 (第235图109)	
	3	第48号清跡 (第228图3)			6	第48号清跡 (第235图110)	
	4	第48号清跡 (第228图1)		図版153	1	第48号清跡 (第235图111)	
	5	第48号清跡 (第228图1)	口縁細部		2	第48号清跡 (第235图112)	
	6	第48号清跡 (第228图1)	口縁細部		3	第48号清跡 (第235图113)	
図版148	1	第48号清跡 (第228图4)	口縁細部		4	第48号清跡 (第236图114)	

	5	第48号清跡 (第236図115)		4	第48号清跡 (第243図236)
	6	第48号清跡 (第236図116)		5	第48号清跡 (第243図236) 細部
図版154	1	第48号清跡 (第236図117)	図版160	1	第48号清跡 (第243図237)
	2	第48号清跡 (第236図118)		2	第48号清跡 (第243図237) 墨書
	3	第48号清跡 (第236図119)		3	第48号清跡 (第246図268)
	4	第48号清跡 (第237図121)		4	第48号清跡 (第246図268) 墨書
	5	第48号清跡 (第237図122)		5	第48号清跡 (第246図269)
	6	第48号清跡 (第237図129)		6	第48号清跡 (第246図269) 墨書
図版155	1	第48号清跡 (第237図131)	図版161	1	第48号清跡 (第245図260)
	2	第48号清跡 (第237図132)		2	第48号清跡 (第245図261)
	3	第48号清跡 (第237図133)		3	第48号清跡 (第245図262)
	4	第48号清跡 (第237図134)		4	第48号清跡 (第245図265)
	5	第48号清跡 (第237図137)		5	第48号清跡 (第246図267)
	6	第48号清跡 (第238図158)		6	第51号清跡 (第138図1)
図版156	1	第48号清跡 (第238図161)	図版162	1	グリッド (第258図1)
	2	第48号清跡 (第240図180)		2	グリッド (第258図6)
	3	第48号清跡 (第240図181)		3	グリッド (第258図7)
	4	第48号清跡 (第240図184)		4	グリッド (第258図8)
	5	第48号清跡 (第240図190)		5	グリッド (第258図9)
	6	第48号清跡 (第240図191)		6	グリッド (第258図10)
図版157	1	第48号清跡 (第240図197)	図版163	1	第1・3・4・7・11号方形居跡、 第4号住居跡、第12号清跡
	2	第48号清跡 (第240図201)		2	第2・47号清跡
	3	第48号清跡 (第240図202)		3	第2・3・36号清跡
	4	第48号清跡 (第240図203)	図版164	1	第10・12・13・14・19号住居跡
	5	第48号清跡 (第240図204)		2	第3号清跡
	6	第48号清跡 (第240図212)		3	第36号清跡
図版158	1	第48号清跡 (第241図219)	図版165	1	第36号清跡 (1)
	2	第48号清跡 (第241図220)		2	第36号清跡 (2)
	3	第48号清跡 (第241図221)		3	第36号清跡 (3)
	4	第48号清跡 (第241図223)	図版166	1	第36号清跡 (4)
	5	第48号清跡 (第242図232)		2	第36号清跡 (5)
	6	第48号清跡 (第243図235)		3	第36号清跡 (6)
図版159	1	第48号清跡 (第242図233)	図版167	1	第16・36号清跡
	2	第48号清跡 (第242図233) 口縁細部		2	第48号清跡 (1)
	3	第48号清跡 (第242図233) 胴部細部		3	第48号清跡 (2)
			図版168	1	第48号清跡 (3)

	2	第48号清跡 (4)	图版177	1	第36号清跡 (第210图8)
	3	板碑 表採 (第259图3)		2	第36号清跡 (第210图8)
图版169	1	第2号清跡 (第63图1)		3	第36号清跡 (第210图9)
	2	第2号清跡 (第63图1)		4	第36号清跡 (第211图27)
	3	第3号清跡 (第151图1)	图版178	1	第36号清跡 (第210图2)
	4	第3号清跡 (第151图2)		2	第36号清跡 (第210图13)
图版170	1	第3号清跡 (第151图3)		3	第36号清跡 (第210图13)
	2	第3号清跡 (第152图5)		4	第36号清跡 (第210图14)
	3	第3号清跡 (第152图6)		5	第36号清跡 (第211图15)
	4	第3号清跡 (第152图7)	图版179	1	第36号清跡 (第211图16)
图版171	1	第3号清跡 (第152图8)		2	第36号清跡 (第211图17)
	2	第3号清跡 (第152图8)		3	第36号清跡 (第211图18)
	3	第3号清跡 (第152图8)		4	第36号清跡 (第211图19)
	4	第3号清跡 (第152图8)		5	第36号清跡 (第211图20)
	5	第3号清跡 (第153图9)		6	第36号清跡 (第211图21)
图版172	1	第3号清跡 (第153图10)	图版180	1	第36号清跡 (第211图22)
	2	第3号清跡 (第153图10)		2	第36号清跡 (第211图23)
	3	第3号清跡 (第154图14)		3	第36号清跡 (第213图43)
	4	第3号清跡 (第154图17)		4	第36号清跡 (第211图25)
	5	第3号清跡 (第154图18)		5	第36号清跡 (第212图30)
图版173	1	第3号清跡 (第153图12)		6	第36号清跡 (第212图35)
	2	第3号清跡 (第153图12)		7	第36号清跡 (第211图29)
	3	第3号清跡 (第154图12)	图版181	1	第36号清跡 (第213图38)
	4	第3号清跡 (第154图19)		2	第36号清跡 (第213图39)
图版174	1	第36号清跡 (第208图1)		3	第36号清跡 (第213图40)
	2	第36号清跡 (第208图1)		4	第36号清跡 (第213图41)
	3	第36号清跡 (第208图1)		5	第36号清跡 (第213图42)
	4	第36号清跡 (第208图1)	图版182	1	第36号清跡 (第213图44)
图版175	1	第36号清跡 (第209图2)		2	第36号清跡 (第213图45)
	2	第36号清跡 (第209图2)		3	第36号清跡 (第213图46)
	3	第36号清跡 (第209图2)		4	第36号清跡 (第213图47)
	4	第36号清跡 (第209图3)		5	第36号清跡 (第213图48)
	5	第36号清跡 (第209图3)		6	第36号清跡 (第213图49)
图版176	1	第36号清跡 (第209图4)		7	第36号清跡 (第213图50)
	2	第36号清跡 (第209图5)	图版183	1	第36号清跡 (第213图51)
	3	第36号清跡 (第209图6)		2	第36号清跡 (第213图52)
	4	第36号清跡 (第209图7)		3	第36号清跡 (第213图53)

	4	第36号清跡 (第213图54)	图版191	1	第48号清跡 (第249图11)
	5	第36号清跡 (第213图55)		2	第48号清跡 (第250图13)
	6	第36号清跡 (第214图66)	图版192	1	第48号清跡 (第247图7)
	7	第36号清跡 (第214图67)		2	第48号清跡 (第250图12)
图版184	1	第36号清跡 (第212图36)		3	第48号清跡 (第250图14)
	2	第36号清跡 (第214图63)		4	第48号清跡 (第250图15)
	3	第36号清跡 (第214图65)	图版193	1	第48号清跡 (第251图16)
	4	第36号清跡 (第214图56)		2	第48号清跡 (第251图16)
	5	第36号清跡 (第214图68)		3	第48号清跡 (第251图16)
图版185	1	第36号清跡 (第215图69)	图版194	1	第48号清跡 (第252图17)
	2	第36号清跡 (第215图70)		2	第48号清跡 (第252图17)
	3	第36号清跡 (第215图70)		3	第48号清跡 (第252图17)
	4	第36号清跡 (第215图71)		4	第48号清跡 (第252图19)
	5	第36号清跡 (第215图71)		5	第48号清跡 (第252图19)
图版186	1	第36号清跡 (第216图72)	图版195	1	第48号清跡 (第252图18)
	2	第48号清跡 (第247图2)		2	第48号清跡 (第252图20)
	3	第48号清跡 (第247图3)		3	第48号清跡 (第253图21)
图版187	1	第48号清跡 (第247图1)		4	第48号清跡 (第253图25)
	2	第48号清跡 (第247图1)	图版196	1	第48号清跡 (第253图23)
	3	第48号清跡 (第247图1)	图版197	1	第48号清跡 (第253图24)
图版188	1	第48号清跡 (第247图4)		2	第48号清跡 (第254图28)
	2	第48号清跡 (第247图4)		3	第48号清跡 (第254图29)
	3	第48号清跡 (第247图4)	图版198	1	第48号清跡 (第254图26)
图版189	1	第48号清跡 (第247图5)	图版199	1	第48号清跡 (第254图27)
	2	第48号清跡 (第247图6)		2	第48号清跡 (第255图32)
	3	第48号清跡 (第247图6)		3	第48号清跡 (第255图34)
图版190	1	第48号清跡 (第248图8)	图版200	漆分析顕微鏡写真(1)	
	2	第48号清跡 (第248图9)	图版201	漆分析顕微鏡写真(2)	
	3	第48号清跡 (第248图10)			

# I 発掘調査の概要

## 1. 発掘調査に至る経過

埼玉県教育委員会は、都市基盤整備公団埼玉地域支社（当時・現独立行政法人都市再生機構）が東松山市高坂地区で行う高坂駅東口第二地区特定土地区画整理事業に係る埋蔵文化財の保護について、平成13年度より調整を図ってきた。

本書で報告される反町遺跡（No.34-371）については都市基盤整備公団埼玉地域支社都市整備部長（当時）より平成13年11月7日付け、き24-24で「埋蔵文化財の所在及び取扱い」に関する照会がなされた。当時この地区では周知の埋蔵文化財包蔵地が確認されていなかったことから、県教委では平成13年12月に試掘調査を実施、事業予定地内に埋蔵文化財の所在を確認した。試掘結果をもとに都市基盤整備公団と協議を行い、県の発掘調査等取扱い基準に基づく埋蔵文化財の取扱いについて説明し、公団側は工事方法について検討することとなった。

再度、平成14年1月に埋蔵文化財の所在を詳細に把握するための試掘調査を実施し、平成14年2月7日付け教文第1459号にて埋蔵文化財の所在に関する回答を行った。

当初の試掘結果では事業地全体が遺跡の範囲と重複することから、より厳密に埋蔵文化財の所在状況を把握するために、前回未調査区域等で試掘調査を実施した（平成14年8月、11月）その結果、用地内には銭塚遺跡、城形遺跡、反町遺跡の3遺跡が所在することが明確となり、再び詳細な回答を公団あてに送付した（平成14年11月25日付け教文第1169号）。

発掘調査については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施機関としてあたることとし、財団、公団、文化財保護課（当時）の三者により調査方法、期間、経費等の問題を中心に協議を行い、平成15年3月31日付けで「高坂駅東口第二地

区埋蔵文化財に関する協定書」を都市基盤整備公団埼玉地域支社長（当時）、埼玉県教育委員会教育長、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長の三者で締結した。協定書では区画整理地内の道路部分は記録保存、道路以外の部分については、「現況地形に盛土する場合は、公団は埋蔵文化財に支障を及ぼさないことを検証し、県教委と協議の上現況保存することを原則とする。なお、道路部分以外の調査の可否については、別途、公団・県教委協議の上、判断するもの」としている。

反町遺跡については、平成17年4月に調査を開始したが、調査の中で遺跡の範囲が南北に拡大することが明らかとなった。そのため、平成17年10月6日に試掘調査を実施し、平成17年10月19日付け教文第1635号で、遺跡の範囲が拡大した部分についても事前に記録保存を行う必要があることを回答した。なお、協定書については平成18年3月6日付けで変更した。

文化財保護法第94条の規定による埋蔵文化財発掘通知は都市再生機構埼玉地域支社長から平成17年3月28日付け、き53-29で提出され、それに対する保護法上必要な勧告は平成17年4月11日付け教文第3-5号で行った。

文化財保護法第92条の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。発掘調査の届出に対する指示通知番号は次のとおりである。

平成17年4月11日付け、教文第2-1号  
平成18年4月28日付け、教文第2-10号  
また、反町遺跡の調査期間は以下のとおりである。  
平成17年4月1日～平成18年3月31日  
平成18年4月1日～平成19年3月31日  
（埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課）

## 2. 発掘調査・報告書作成の経過

### (1) 発掘調査

反町遺跡の発掘調査は、高槻駅東口特定第二土地区画整理事業に先立ち、平成17・18年度の2ヶ年に亘って実施した。

後述するように事業地内には本遺跡とともに城敷、銭塚の3遺跡が存在する。本遺跡を含めた一連の調査として、平成15・16年度に城敷遺跡の第1・2次調査、平成16・17年度に銭塚遺跡の第2・3次調査を実施した(表1)。

#### 第1次調査

第1次調査は、平成17年4月1日から平成18年3月31日まで実施した。調査面積は9,215㎡である。4月当初から事務手続きを行い、5月中旬から表土掘削に着手し、重機を使用して遺構確認面まで表土を除去した。

並行して補助員による作業に着手し、基準点測量を経て、遺構確認作業後、A・B・C区において遺構精査を実施した。遺構精査の後、土層断面図・平面図等の作成、遺物出土状況や遺構の写真撮影を行い、3月9日に空中写真撮影を実施した。

A区南追加調査区507㎡、B区北追加調査区1,008㎡、C区中央～東部3,012㎡、D区(水路部分)700㎡は表土掘削と遺構確認調査のみの実施である。

#### 第2次調査

第2次調査は、平成18年4月1日から平成19年3月31日まで、A区南追加調査区、B区北追加調査区、C区中央～東部、D区(水路部分)の調査を実施した。調査面積は6,180㎡である。

4月当初から事務手続きを行い、補助員による作業に着手した。遺構確認作業と並行して、各時期の遺構精査を実施した。遺構精査の後、土層断面図・平面図等の作成、遺物出土状況や遺構の写真撮影を行い、C区は平成18年10月18日に、D区は平成19年2月7日に空中写真撮影を実施した。

遺構の調査終了後、機材及び事務所撤去、事務手続きを行い、調査を終了した。

### (2) 整理・報告書の作成

整理・報告書作成事業は4ヶ年計画で実施しており、本報告に関わる整理事業は、平成19年4月9日から平成20年3月24日、平成20年4月8日から平成21年3月24日までの2ヶ年にわたって実施した。

遺物の水洗・註記作業を行った後、接合・復元作業を実施した。接合の終了した遺構から順次、遺物実測を開始した。機械実測機を利用して素図を作成し、この素図をもとに実測図を完成させた。実測図は製図ペンで墨入れ(トレース)し、必要に応じて拓影を採った。実測図と拓影図を組み合わせてレイアウトを行い、遺物図版の版下を作成した。

遺構図版は図面整理と修整を経て第二原図を作成した。第二原図はスキャナーでコンピューターに取り組んだ後、グラフィックソフトでデジタルトレース・土層説明等の入力データを組み込んで編集作業を実施し、遺構図版の版下を作成した。

実測遺物はその属性をパソコンに入力し、データ処理・編集して遺物観察表を作成した。また、遺存度の高い遺物を中心に石膏による復元作業を行い、選択して写真撮影を実施した。並行して調査中に撮影した写真を選択し、写真図版を作成した。

作成したデータをもとに原稿を執筆し、遺構図版・遺物図版・写真などを組み合わせて割付を作成した。完了後印刷業者を選定、入稿し、校正を3回行い、平成21年3月下旬に報告書を刊行した。

また、校正と並行して、図面類・写真類・遺物・データ類、委託成果を整理し、報告書との対照を可能にした上で収納した。

第1表 調査の工程

	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度
発掘調査 城敷(1次) (2次)	■	■				
銭塚(2次) (3次)		■	■			
反町(1次) (2次)			■	■		
報告書作成 城敷・銭塚					■	■
反町					■	■
						(本報告)

### 3. 発掘調査・報告書作成の組織

#### 平成17年度（発掘調査）

理 事 長	福田 陽 充	調査部	
常務理事兼管理部長	保 永 清 光	調 査 部 長	今 泉 泰 之
管理部長		調 査 部 副 部 長	坂 野 和 信
管理 部 副 部 長	村 田 健 二	主 席 調 査 員 (調 査 第 二 担 当)	劍 持 和 夫
主 席	高 橋 義 和	統 括 調 査 員	富 田 和 夫
		統 括 調 査 員	大 谷 徹
		統 括 調 査 員	山 本 靖
		調 査 員	菊 地 真

#### 平成18年度（発掘調査）

理 事 長	福田 陽 充	調査部	
常務理事兼総務部長	岸 本 洋 一	調 査 部 長	今 泉 泰 之
総務部長		調 査 監	坂 野 和 信
総 務 部 副 部 長	昼 間 孝 志	調 査 部 副 部 長	小 野 美 代 子
総 務 課 長	高 橋 義 和	調 査 第 二 課 長	細 田 勝
		主 査	山 本 禎
		主 査	赤 熊 浩 一
		主 査	村 端 和 樹

#### 平成19年度（報告書作成）

理 事 長	刈 部 博	調査部	
常務理事兼総務部長	岸 本 洋 一	調 査 部 長	村 田 健 二
総務部長		調 査 部 副 部 長	磯 崎 一
総 務 部 副 部 長	昼 間 孝 志	整 理 第 二 課 長	富 田 和 夫
総 務 課 長	松 盛 孝	主 査	赤 熊 浩 一
		主 査	福 田 聖

#### 平成20年度（報告書作成）

理 事 長	刈 部 博	調査部	
常務理事兼総務部長	萩 元 信 隆	調 査 部 長	村 田 健 二
総務部長		調 査 部 副 部 長	磯 崎 一
総 務 部 副 部 長	昼 間 孝 志	整 理 第 二 課 長	富 田 和 夫
総 務 課 長	松 盛 孝	主 査	福 田 聖



## II 遺跡の立地と環境

### 1. 地理的環境

反町遺跡は、埼玉県のほぼ中央、東松山市の南部、大字高坂字反町に所在する。東武東上線高坂駅の東側約2kmに位置し、現在の遺跡周辺は水田と屋敷林に囲まれた住宅地になっている。

埼玉県は、おおまかに秩父山地を中心とする山地、それに連なる台地・丘陵からなる西部地域と、荒川低地を中心とする日本最大の平野である関東平野の多くを占める東部地域に分けられる(第1図)。遺跡は両者の接点に当たる県のほぼ中央にあたり、北側に東松山台地、南側に高坂台地を臨む都幾川右岸の低地に立地する。この低地は県東部の低地に連続している。

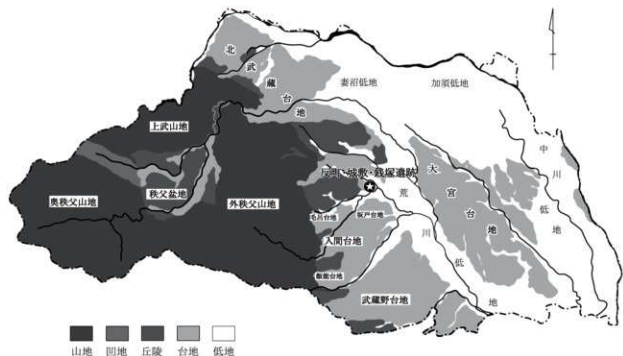
埼玉県はこうした地形形状の特性から、西部の山地・丘陵を源流とする河川が発達しており、県土の約3分の1を河川とその周辺の低地が占めている。流域面積としては、国内で最大である。大きく、県北部は利根川とその支流の流域、県中部、

県南部は荒川とその支流の流域になり、その流下によって現在の地形は形成されている。

周辺の地理的環境については、菊池真により詳細に検討されており、それを引用する(菊池2007)。

[埼玉県中央部には半島状に突き出す2つの丘陵があり、北側を比企丘陵、南側を岩殿丘陵と呼ぶ。丘陵は市野川、都幾川、越辺川による開析が進み、谷が発達している。比企丘陵の東側は独立した残丘となり、吉見丘陵とも呼ばれている。この丘陵の間において、市野川と都幾川に挟まれる台地を東松山台地と呼び、都幾川と越辺川に挟まれた小さな台地を高坂台地と呼ぶ(第2図)。

東松山台地は武蔵嵐山の管生から東松山市根岸まで、東西に伸びる台地である。現在の東松山市街で標高約40m、根岸で約20mを測る。約10~8万年前に形成された武蔵野面(M2面、ステージ4)に対比され、都幾川などによる扇状地の地形



第1図 埼玉県の地形

である。北の江南台地などはより早く、約12万年前に形成された（M1面）。

台地上は北側から谷の開析が進むものの、全体としては平坦である。市野川、都幾川の両河川沿いは、断続的に一段低い面が分布する。これは河岸段丘であり、約5万年前の立川期（ステージ3）以降に形成されたと考えられる。

高坂台地は東武線の高坂駅が位置する台地で、岩殿丘陵の東側に続く小規模な台地である。東松山台地と同様、扇状地の台地で、河川の浸食をまぬがれて三角形に残されている。台地上は平坦であり開析されていない。

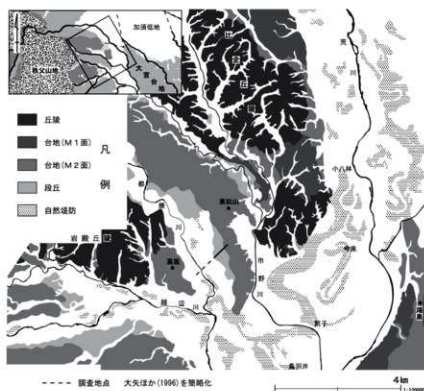
都幾川は東松山市内を流れる代表的な河川の一つであり、滑川、市野川と比べ、下流に広い沖積低地を形成している。都幾川は高坂台地の東側で大きく南へと流れを変え、落合橋で越辺川と合流する。坂戸市と川島町との境界でもある。堤外は現在の氾濫原で旧河道などが認められる。堤内の沖積低地には、集落がのる自然堤防が細長くのび

ている。」

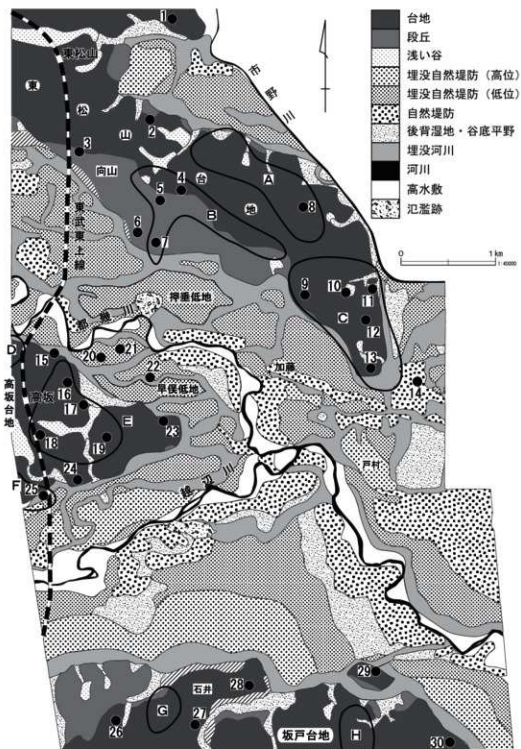
遺跡はこの都幾川の低地に当たる。東松山市唐子橋以東は特に氾濫原が広くっており、都幾川左岸が押垂低地、右岸が早俣低地と仮称されている。菊地氏は米軍撮影空中写真の判読によって、この低地の自然堤防を、自然堤防、沖積面（自然堤防Ⅰ）、沖積面（自然堤防Ⅱ）に区分し、後二者は沖積面下に埋没している過去の自然堤防であるとしている（第3図）。

遺跡の乗る自然堤防（沖積面Ⅱ）は、河床の礫層中から今回報告するローリングを受けた縄文後期の土器片が出土しており、縄文後期から遺構の検出されている弥生時代中期までの時期に陸化した可能性が高い。

また、本事業に伴う反町・城敷・銭塚遺跡の調査では複数の河川跡が検出され複雑な変遷が考えられる。反町遺跡では、各時代の都幾川により異なる水際の景観が広がっていたものと推定される。

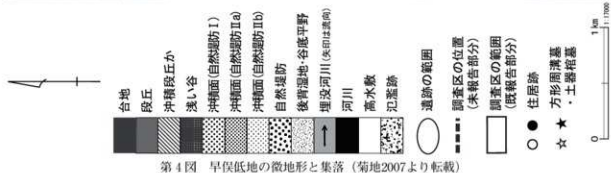
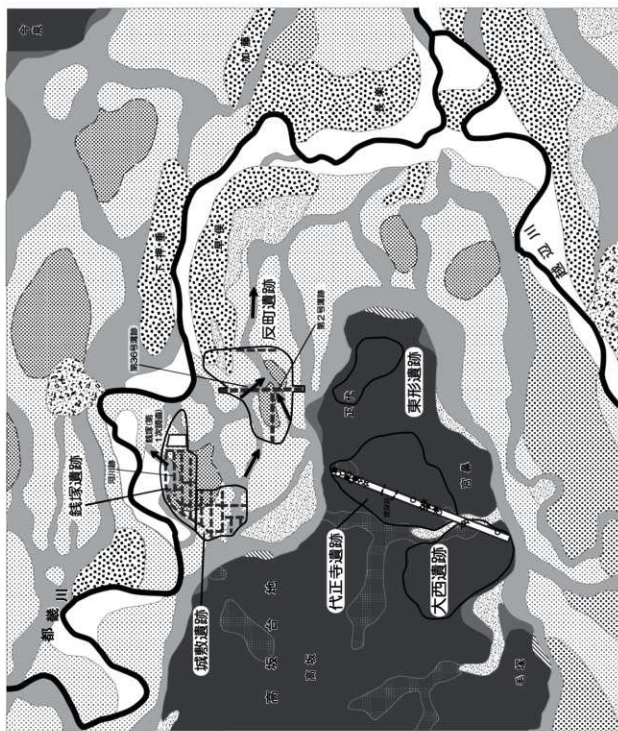


第2図 東松山周辺の地形（菊地2007より転載）



- 1 上松本遺跡 2 五領遺跡 3 菟田遺跡 4 山王裏遺跡 5 上川入遺跡 6 西浦遺跡 7 野本将軍塚古墳  
 8 香清水遺跡 9 古古海道遺跡 10 下道浜遺跡 11 下山遺跡 12 古濱根岸裏遺跡 13 天神原遺跡  
 14 正直稻荷塚遺跡 15 高坂一番町遺跡 16 高坂式番町遺跡 17 高坂参番町遺跡 18 下寺前遺跡  
 19 代正寺遺跡 20 城敷遺跡 21 鏡塚遺跡 22 反町遺跡 23 東形遺跡 24 大西遺跡 25 杉の木遺跡  
 26 勇福寺遺跡 27 終遺跡 28 勝呂遺跡 29 附島遺跡 30 木曾免遺跡  
 A 柏崎古墳群 B 野本古墳群 C 古濱古墳群 D 諏訪山古墳群 E 高坂古墳群 F 毛塚古墳群 G 新町古墳群  
 H 雷電塚古墳群

第3図 都幾川最下流域の微地形分類図（菊地2007より一部改変して転載）



第4図 早稲低地の微地形と集落(菊地2007より転載)

## 2. 歴史的環境 (第5・6図)

### 弥生時代中期後半

弥生時代中期では、高坂台地、松山台地、吉見丘陵、坂戸台地に遺跡が展開する。

本遺跡の南側に広がる高坂台地上には、東形、代正寺(鈴木1991)、大西(鈴木1991)の各遺跡が所在する。早俣低地に面する台地北縁の東形遺跡(85)からは、詳細は不明だが竪穴住居跡数軒が検出されている。台地の中央にある代正寺遺跡(13)は、埋没谷を挟んで南北に遺構が展開している。宮ノ台式の竪穴住居跡14軒、方形周溝墓6基が検出されている。代正寺遺跡の南西には、谷を隔てて大西遺跡(14)がある。越辺川の低地に面した南向きの緩斜面に立地し、竪穴住居跡1軒、土器棺墓2基、土壇1基が検出されている。反町遺跡の南側の高坂台地上は、台地全体にこの時代の遺跡が展開しているのである。

高坂台地とは都幾川を隔てた対岸に当たる松山台地南側の段丘面には、西浦遺跡(4)、野本氏館跡(6)(山本・西井1997、菊地2007)が所在する。西浦遺跡、野本氏館跡は隣接する一体の遺跡である。中期後半の竪穴住居跡2軒、方形周溝墓2基、土壇6基が検出されている。

西浦遺跡、野本氏館跡の2.5km下流の台地南東端には天神原遺跡(24)(埼玉県教育委員会1996)が所在する。竪穴住居跡1軒、溝跡1条が調査されている。

以上のように、都幾川兩岸の台地裾を中心に、中期後半の遺跡が展開している様子が窺える。

松山台地東側の吉見丘陵の尾根上には、大行山遺跡(40)(弓1995)が所在する。東側に広がる市野川の低地が一望できる場所で、竪穴住居跡12軒、方形周溝墓1基が検出されている。未報告のため詳細は不明だが、宮ノ台式を主体とし、中部高地系土器が出土しているとのことである。

高坂台地と越辺川を挟んで南側に当たる坂戸台地には、台地の北縁に当たる小台地上に新町遺跡

(52)(加藤・北堀・柳楽1988)が、越辺川が東から南に大きく流れを変えた東縁に塚越渡戸遺跡(56)、附島遺跡(57)(加藤1985b・1988)が、更に南側に木曾免遺跡(59)(篠田2008)、小沼堀ノ内遺跡(60)(加藤1985a)が所在する。

新町遺跡からは竪穴住居跡1軒、溝跡1条が、塚越渡戸遺跡からは住居跡3軒が、附島遺跡からは住居跡6軒、溝跡3条が検出されている。塚越渡戸遺跡からは中部高地系土器が出土している。附島遺跡の出土土器は大部分が宮ノ台式である。

木曾免遺跡は、この地域で唯一全体の様相が明らかになっている環濠集落である。竪穴住居跡は13軒検出され、そのうちの11軒が断面V字形の環濠に囲まれている。環濠外には方形周溝墓3基が造られている。宮ノ台式を中心に中部高地系や東海系の土器が出土している。小支谷を挟んだ北側にある小沼堀ノ内遺跡では、土器棺墓1基が調査されている。

弥生時代中期後半は、都幾川流域の台地縁辺部や坂戸台地を中心に多くの遺跡が分布し、さいたま市の芝川流域と並ぶ県内でも有数の弥生時代の中心地域の一つであったと考えられる。また、宮ノ台式を中心に、中部高地系を客体的に出土する様相が共通しており、地理的な位置関係を反映した地域色となっている。

### 弥生時代後期前半

埼玉県内ではほとんどこの時期の遺跡の存在が明らかでないが、反町遺跡の所在する比企地域は柳描文が施される岩塚式の遺跡が分布する地域として知られている。

早俣低地では、反町遺跡に隣接する銭塚遺跡(2)(富田2005)から土器棺墓1基が検出され、この時期に反町、銭塚の広い範囲に遺構が分布していたことが分かる。南側の高坂台地では、中期から継続して代正寺・大西遺跡で竪穴住居跡12軒、方形周溝墓3基が検出されている。対岸の松山台



第5図 弥生時代中期から古墳時代中期の周辺の遺跡

(●)宮ノ台式、▲)岩墓式、■)百ヶ台式、○)五頭式、□)和泉式、▼)前方後方墳、▲)前方後円墳

1	反町遺跡	23	根岸稲荷神社古墳	45	屋田遺跡	67	鶴ヶ丘遺跡
2	銭塚遺跡	24	天神原遺跡	46	長岡遺跡	68	女塚Ⅰ・Ⅱ遺跡
3	城敷遺跡	25	古津根岸裏遺跡	47	稲荷前遺跡	69	御伊勢原遺跡
4	西浦遺跡	26	古古海道遺跡	48	広面遺跡	70	東女塚原遺跡
5	野本村軍塚古墳	27	下道添遺跡	49	中耕遺跡	71	上組Ⅰ・Ⅱ遺跡
6	野本氏館跡	28	下山遺跡	50	相模場遺跡	72	西ヶ岡遺跡
7	高坂二番町遺跡	29	香清水遺跡	51	勇福寺遺跡	73	日枝神社遺跡
8	高坂一番町遺跡	30	天神山古墳	52	新町遺跡	74	窪戸遺跡
9	諏訪山古墳群	31	龍田遺跡	53	石井前原遺跡	75	天王山古墳群
10	諏訪山29号墳	32	五領遺跡	54	株遺跡	76	景台遺跡
11	高坂三番町遺跡	33	西吉見冬里遺跡	55	勝呂遺跡	77	高窪遺跡
12	下寺前遺跡	34	三ノ坪地遺跡	56	塚越渡戸遺跡	78	富田後遺跡
13	代正寺遺跡	35	原遺跡第3地点	57	附島遺跡	79	白井沼遺跡
14	大西遺跡	36	山の根古墳	58	北谷遺跡	80	平沼一丁田遺跡
15	杉の木遺跡	37	原遺跡第2地点	59	木曾免遺跡	81	村並遺跡
16	松山古墳群	38	下遺跡	60	小沼原ノ内遺跡	82	柳町遺跡
17	駒塚遺跡	39	久米田遺跡	61	堂地遺跡	83	宮ヶ谷戸遺跡
18	根平遺跡	40	大行山遺跡	62	花影遺跡	84	安楽寺遺跡
19	舞台遺跡	41	観音寺遺跡	63	宮裏遺跡	85	東形遺跡
20	附川遺跡	42	八幡遺跡	64	一天狗遺跡	86	小代氏館跡
21	雫子山遺跡	43	岩鼻遺跡	65	御折山田遺跡		
22	正直玉作遺跡	44	大谷古墳群	66	鶴ヶ丘遺跡		

地の西浦遺跡・野本氏館跡からは、竪穴住居跡2軒が検出されている。

都幾川を北西に遡った自然堤防上には雫子山遺跡(21)(栗原ほか1973)が所在する。竪穴住居跡2軒が調査されている。その南側1kmの河岸段丘上にある附川遺跡(20)(今泉・横川ほか1974)からは遺構は検出されていないが、壺や甕がまつまって出土している。

都幾川を中心とする遺跡の分布は、兩岸の沿辺部を中心としており、概ね中期から継続しているといえよう。

松山台地には、北東側の市野川の低地を臨む台地縁辺に観音寺遺跡(41)(宮島・江原1989、渡辺・宮島1996)が、市野川と滑川によって分断された狭長な岩鼻台地上に岩鼻遺跡(43)(江原1993)、八幡遺跡(42)(渡辺・宮島1988)が所在する。観音寺遺跡からは、岩鼻式の遺構は検出されていないが、土器片が出土している。岩鼻遺跡は「岩鼻式」の標識遺跡で、これまでに11次に亘り14軒の竪穴住居跡、2基の土器棺墓が検出されている。八幡遺跡からは土器棺墓が1基検出されている。

遺跡の分布は希薄だが、岩鼻遺跡のような中核的な集落の存在は松山台地における新たな遺跡の展開を窺わせるものである。

坂戸台地には、台地の北縁に当たる小台地上の新町遺跡を取り囲むように、株遺跡(54)(加藤2001)、石井前原遺跡(53)(加藤・北堀・柳葉1988)、勇福寺遺跡(51)(加藤・北堀・柳葉1987)、相模場遺跡(50)(谷井1973)が立地する。

株遺跡は坂戸台地を開析して北流する谷内川の右岸に当たり、同じく坂戸台地を開析して北流する飯盛川に通ずる小支谷に面している。一辺10mを超える大型のものを含む竪穴住居跡2軒、方形周溝墓4基、土器棺墓4基が検出され、北側が集落、南側が墓域と考えられている。

石井前原遺跡からは長径7.7mの大型の竪穴住居跡1軒が検出されている。

相模場遺跡からは竪穴住居跡3軒が検出されている。

坂戸台地の遺跡は、越辺川の支流に当る小河川の縁辺に立地しているのが特徴的である。谷水田との関係を探るものである。

また株遺跡で見られるような方形周溝墓と土器



棺墓との並設される様相は、弥生時代後期前半の妻沼低地や千葉県等でもみられるもので、共通した様相を示している。時間的な特徴ともいえるであろう。

#### 弥生時代後期後半

早稲低地や東松山市域は、比企地域を中心に分布する吉ヶ谷式が展開する地域である。

早稲低地では、反町遺跡にこの時期の遺構は検出されておらず、城敷遺跡とともに吉ヶ谷系の土器が出土しているものの、弥生時代の吉ヶ谷式とは異なるようである。

一方南側の高坂台地では、中期から継続する大西遺跡で竪穴住居跡8軒、土壇1基が検出され、代正寺遺跡から集落域が移ったものと考えられている。対岸の松山台地の西浦遺跡・野本氏館跡からは、竪穴住居跡2軒が検出されている。この両遺跡は中期から継続し、早稲低地で遺構が検出されない吉ヶ谷式期にも継続しており注目される。同じく都幾川を臨む支谷に面して笹田遺跡(31)(村田1984)が所在する。住居跡1軒が調査されている。

また、この時期はこうした継続型の集落のみではなく、新たに台地のより奥に展開する遺跡がみられる。特に比企丘陵の物見山丘陵の東縁から高坂台地には集中した分布が見られる。根平遺跡(18)(井上1980)からは竪穴住居跡6軒が、駒堀遺跡(17)からは竪穴住居跡14軒、方形周溝墓1基(今泉1974)が、舞台遺跡(19)(井上1978・1979)からは住居跡1軒、杉の木遺跡(15)(小峰1963、宮島・江原2003、大谷・宅間2006)からは竪穴住居跡16軒、茅跡2ヶ所、土壇3基、溝跡1条が検出されている。駒堀遺跡の住居跡は大型のものが多い。未報告のため詳細は不明だが、高坂二番町(7)・高坂三番町遺跡(11)(楢沼・佐藤・宮島2008)からは数十軒の住居跡や環濠の可能性が高い溝跡が検出されているとのことである。

松山台地では、未報告部分が多いため詳細は不

明だが、後期前半から継続する観音寺遺跡(宮島1995、渡辺・宮島1996)で竪穴住居跡8軒以上、方形周溝墓5基以上が検出されている。特に第4号方形周溝墓は20m程度の規模があり、中心埋葬施設が検出され、銅剣と鉄剣が出土しており注目される。また五領遺跡(32)では遺構は不明だが、吉ヶ谷式の新しい段階の資料が出土している。下道添遺跡(27)からは住居跡が検出されているが、どちらかといえば古墳時代に下がる可能性が高い。

東松山台地北側の比企丘陵の南側になる、滑川左岸の谷津谷には吉ヶ谷式の標識遺跡である吉ヶ谷遺跡(金井塚1965)があり、住居跡2軒が調査されている。その西側には、詳細は不明だが、住居跡14軒、方形周溝墓6基が調査された新井遺跡(木村1986)がある。吉ヶ谷式としては、駒堀、高坂二番町・三番町遺跡と並ぶ大規模集落といえよう。

坂戸台北側のこの時期の集落は前段階から継続するものが多い。附島遺跡では住居跡2軒が検出されている。

更に高麗川を遡った箇所にも遺跡が造られる。鶴ヶ丘遺跡(66)では住居跡3軒、一天狗遺跡(64)(齊藤1994)では2軒の住居跡から、吉ヶ谷式と岩鼻式の土器が出土しているが、古墳時代前期の土器が混在しており、住居跡の時期については評価が分かれているようである。その対岸に当たる高麗川と小畔川によって挟まれた台地上の高麗川を臨む北西縁に花影遺跡(62)(谷井1974)が立地する。方形周溝墓8基が検出され、現在のところ吉ヶ谷式の方形周溝墓群の全容を知ることができる唯一の例になっている。

またその南の飯能台地では、霞ヶ関(72)、女堀(68)、上組(71)の各遺跡から吉ヶ谷式の土器が主体的に出土しており、分布域の南限になっている。吉ヶ谷式の集落はあまり大規模なもののみならず、単発的なものが多いがそうした中で物見山丘陵や滑川左岸の台地上に分布が集中する様



相はこの時期の遺跡の谷地との関係を示すものであり、時期的な特徴になっている。

#### 古墳時代前期

比企地域では、吉ヶ谷式と型的な連続関係をもたない五節式土器が展開する。弥生時代に比べて遺跡数が急激に増加することが知られている。早俣低地でも本遺跡と城敷遺跡で広い範囲で遺構が分布することが知られている。

南側の高坂台地では、吉ヶ谷式の資料がほとんど見られなかった代正寺遺跡に再び集落、墓域が営まれる。

代正寺遺跡からは住居跡28軒、方形周溝墓1基が検出され、大西遺跡からは住居跡6軒が検出されている。大西遺跡の南側に程近い下寺前遺跡からは住居跡25軒、方形周溝墓1基が検出されている。また未報告であるが小代氏館跡(86)からは方形周溝墓6基が検出されているという。対岸の松山台地の西浦遺跡・野木氏館跡からは、竪穴住居跡2軒が検出されている。大西、西浦の両遺跡は前述のように、弥生時代中期から古墳時代前期まで継続しており、長期継続型の集落として注目される。吉ヶ谷式から継続する菟田遺跡からは、住居跡8軒が検出されている。更に西側の都幾川を臨む附川遺跡からは、住居跡6軒が検出されている。

吉ヶ谷式の集中した分布が見られた物見山丘陵から高坂台地にかけては遺跡の分布が異なっている。根平遺跡の資料は一部に五節式土器が含まれており、住居跡の平面形も吉ヶ谷式に特徴的な長方形のものではなく隅丸方形であることから、この時期まで下がる可能性もある。駒塚遺跡からは竪穴住居跡3軒が、桜山古墳群(16)(小久保・利根川1981)で住居跡4軒が検出されている。未報告のため詳細は不明だが、高坂三番町遺跡からは搬入品の器高1mを越える大甗式の完形甗を用いた土器棺墓が検出されている。関東地方では完形の大甗式土器の甗の出土は知られておらず、貴

重な例である。

松山台地の遺跡の分布はあまり濃密とはいえないが、関東地方の古墳時代前期の標識遺跡である五節遺跡(大塚1963・1964・1965・1967、金井塚1963・1965)や布留式系の土器群が出土している下道添遺跡(坂野1987)などの注目される遺跡が展開している。

五節遺跡は100軒以上の軒数からなる大遺跡だが、未報告であるため詳細は不明である。標識遺跡であるとともに、古くから畿内系、東海系、山陰系の土器が出土したことで知られている。

市ノ川と都幾川に挟まれた形で松山台地が南東に伸びる先端近くには古凍根岸裏遺跡(25)、下道添遺跡が立地する。古凍根岸裏遺跡(村田1984)からは住居跡4軒、方形周溝墓7基が検出されている。古凍根岸裏遺跡と一体になると考えられる下道添遺跡からは住居跡19軒、方形周溝墓13基が検出されている。住居跡群が先行し、周溝墓群は同じ箇所にそれを壊して造られている。2号墓は検出された範囲で14.5mの規模を測る大型のもので、報告書では方台部の規模が20mを超える前方後方形と推定されている。吉ヶ谷系統の土器をはじめ東海西部系、畿内系とされる土器群が出土している。観音寺遺跡からは住居跡3軒が、岩鼻遺跡からは住居跡7軒が検出されている(東松山市1981)。両遺跡とも吉ヶ谷式から継続するものである。

市野川に面した台地の東側には番清水遺跡(29)が立地する。住居跡2軒が検出され、この時期のものとしてはきわめて大きな一辺13.9mにも及ぶものがある。

以上のように、五節式の松山台地上の遺跡は注目されるものが多く、こうした様相が後述するような多くの古墳を析出する背景になっているものと思われる。

吉ヶ谷式の集落が多く認められた比企丘陵の北部は遺跡の分布が希薄で、熊谷市(旧江津町)の

塩古墳群を中心とする地域に集中した分布が認められるのみである。

五節遺跡、古凍根平裏・下道添遺跡のような大規模な集落も存在するが、その他の集落は単発的で少数の住居から構成される場合が多く、吉ヶ谷式における台地・丘陵上の様相とは異なるようである。

逆に関東地方全体でいえることだが、この時期にはこれまで遺跡のなかった場所に多くの遺跡が展開するようになる。吉見丘陵の東側、市野川の自然堤防上には原遺跡(35)、下遺跡(38)(太田2004)、西吉見条里遺跡(33)(太田2005)、三ノ耕地遺跡(34)(弓1997、太田1998)といった集落遺跡が知られている。特に原遺跡からは、未報告のため詳細は不明だが、豪族居館の区画溝と考えられる大溝が検出されているという。下遺跡からは周溝が1基検出されている。西吉見条里遺跡からは、多量の木製品が出土する溝跡が検出されている。

三ノ耕地遺跡からは前方後方形周溝墓3基、方形周溝墓28基、住居跡14基が検出されている。未報告のため詳細は不明だが、特に前方後方形墓は、墳長48.8m、30mにも及ぶもので「古墳」と呼べる規模であるが、県内の出現期古墳とは立地が全く異なることから、ここでは周溝墓としておきたい。また、調査区の東側の河川跡からは大量の木製品が出土しているとのことである。

丘陵上の大行山遺跡(弓1995)からは竪穴住居跡16軒が検出されている。

その南側、松山台地の南東に当たる川島町域の荒川低地にもこの段階から多くの遺跡が展開するようになる。安楽寺(84)、宮ヶ谷戸(83)、柳町(82)、村並(81)、尾崎(津田ほか2002)、元宿(埼玉県埋蔵文化財調査事業団2006・2007)、富田後(78)(福田2006)、白井沼(79)(中山2005、栗岡2007)、平沼一丁田(80)(岡田・上野2009)、堂地(61)(若松ほか2000)の各遺跡が荒川の縄

文時代以来の度重なる乱流により形成された自然堤防上に立地している。

このうち本格的な発掘調査が実施されたのは、尾崎遺跡と首都圏連絡中央自動車道路関係で調査された元宿、富田後、白井沼、平沼一丁田、堂地の各遺跡である。また、これらの遺跡からは周溝遺構が検出される場合が多い。この遺構は最近の研究では、建物跡の外側に巡らされた周溝と考えられている。早稲低地では現在のところ一例の検出例もなく、対照的である。

町教育委員会で調査した尾崎遺跡からは周溝遺構5基が検出されている。

図史道関係の遺跡で報告書が刊行されているものは、白井沼、堂地遺跡である。白井沼遺跡からは竪穴住居跡7軒、掘立柱建物跡5棟、周溝遺構9基、井戸跡6基、溝跡66条、谷1ヶ所が、堂地遺跡からは井戸跡1基が検出されている。白井沼遺跡からは搬入品の大型式土器や県内で2例目となる鷲形土製品が出土している。

元宿、富田後、平沼一丁田の各遺跡はいずれも未報告である。元宿遺跡からは周溝遺構10基、方形周溝墓6基、溝跡7条が検出されている。その西側の埋没河川を隔てた対岸に当たる富田後遺跡からは周溝遺構105基、掘立柱建物跡5棟、方形周溝墓7基、井戸跡27基、溝跡25条、土塚14基が検出されている。荒川低地でも屈指の周溝群で、相当大規模な集落と考えられる。

やや離れた平沼一丁田遺跡からは、周溝遺構3基、掘立柱建物跡2棟、溝跡4条、土塚5基が検出されている。県内では初例となる布振りをもつ掘立柱建物跡が1棟確認されている。

以上のように川島町域に当たる低地には大規模な遺跡が展開しており、反町遺跡の都幾川・越辺川の下流域に当たることから両者の関係が問題となるであろう。

これらの周溝が検出される遺跡とは別に、注目されるものとして、正直玉作遺跡(22)(石岡

1980)が挙げられる。遺跡は農業用水管の敷設時に発見され、当初規模感が出土していること、県内で前期の玉作遺跡の例が知られていなかったことから後期のものと考えられてきた。しかし、腕輪形石製品の木製品が存在することや、反町遺跡、桶川市前原遺跡でも玉作工房の存在が明らかになったことから前期のものとする評価が定まりつつある。本遺跡における玉作りとの関係や至近に立地する根岸稲荷神社古墳との密接な関係が考えられる。

坂戸台地北側では方形周溝墓が検出されているものが多い。木曾免遺跡では16.4×14.2mの大型の周溝墓1基が、小谷を隔てた西側の北谷遺跡(58)(黒坂2008)でもほぼ同規模の周溝墓が検出されている。附島遺跡で周溝墓2基、勇福寺遺跡で周溝墓5基、景台遺跡(76)(加藤1997・1999)で周溝墓1基が検出されている。籾田が指摘するようにこれらの周溝墓は台地の縁辺部に造られているものがほとんどである。逆に大規模な集落は知られておらず、附島遺跡で住居跡6軒、高宮遺跡(77)で住居跡8軒、石井前原遺跡で大小の住居跡5軒が検出されるにとどまっている。

高麗川右岸の花影遺跡に隣接して、墓域と集落域の双方が調査されている宮裏遺跡(63)(澤口2008)が所在する。住居跡50軒以上、方形周溝墓40基以上が検出され、やはり台地の縁辺に方形周溝墓群が展開している。方形周溝墓には大小があり、大型の24号周溝墓の中心埋葬施設からは碧玉製の管玉と勾玉、水晶の霰玉が出土している。水晶の霰玉は前期の例としては県内で唯一のものである。また勾玉も方形周溝墓から出土しているものとしてはさいたま市井沼方遺跡、熊谷市一本木前遺跡の例が知られるのみである。反町遺跡の玉作りを考える上で興味深い資料である。

高麗川左岸の毛呂山台地の北側、越辺川を北に臨む自然堤防上には入西遺跡群が広がる。五領式の集落は中耕遺跡(49)(杉崎1993)で知られる

のみである。住居跡73軒、掘立柱建物跡6棟が検出され、吉ヶ谷系の土器が出土している。その集落を壊して方形周溝墓群が造られている。この墓域は南西側の広面遺跡(48)(村田1990)の方形周溝墓群と一体のものと考えられ、中耕遺跡で68基、広面遺跡で22基が検出されている。また西約400mに位置する稲荷前遺跡(47)(富田1992・1994)からも周溝墓36基が検出されている。これらの周溝墓は平面形態が四隅切れから全周、一隅切や一辺の中央が切れる形態へと変遷することが明らかになっており、集落出土土器からも窺える吉ヶ谷系の集団が変質していく様相を示している。特に広面S Z 9や中耕SR 41・42は方台部に盛土が遺存し、古墳同様の版築状の工程が明らかになっていることから、古墳との関係も問題になる。いずれも残念ながら埋葬施設は検出されていない。

子畔川を挟んだ飯能台地には、日枝神社遺跡(73)、鶴ヶ丘(67)、霞ヶ関、女塚、上組の各遺跡から古墳時代前期の集落跡が検出されている。

#### 出現期古墳

反町遺跡が位置する東松山市周辺は、出現期古墳が多く分布することでも知られている。

諏訪山29号墳(10)(坂本・金子1986)は4世紀から7世紀にかけて展開する諏訪山古墳群の一基である。高坂台地の縁辺に立地し、早稲低地を臨む位置にある。墳長53m、後方部長29m、後方部高3.6m、前方部高1.6mの前方後方墳であることが知られている。焼成前穿孔壺や大塚式土器が出土している。反町遺跡の玉作り工房や集落とほぼ同時期と考えられ、両者の関係が問題となる。

古墳群中の墳長68mの前方後円墳、諏訪山古墳は後続する古墳である可能性があり、中期の33号墳と合わせて系譜関係が窺えるものである。

天神山古墳(30)(金井塚1968・埼玉県教育委員会1994)は香清水遺跡の西側に位置し、前方後円墳であるおくま山古墳をはじめとする稲崎古墳群の一基である。従来前方後円墳だと考えられて

いたが、詳細分布調査により4世紀後半の前方後方墳であることが明らかになった。墳丘の東側は削られて住宅が建てられているが、調査の結果全長57m、周堀幅5m以上になると推定されている。周堀から赤彩された大型の複合口緑壺が出土している。昭和初期の土取りの際に石室が発見され、玉と彷彿した内行花文鏡が出土している。

根岸稲荷神社古墳(23)(埼玉県教育委員会1994)は舌状の松山台地の南端、東側の広大な荒川低地を臨む箇所に立地している。眼下の低地には正直玉作遺跡があり、両者の密接な関係が窺える。現在この台地は新しく掘削された新江戸川により独立した景観になっているが、本来は松山台地と一体のものであり北西側に展開する古凍古墳群の一基として位置づけられるものである。北西側には古凍根岸裏、下道添遺跡がある。方墳状であるが、詳細分布調査により小型の前方後方墳であることが明らかになった。墳長25m、周堀幅5m以上になると推定されている。周堀から古ヶ谷系の完形の焼成後底部穿孔壺、五領式の複合口緑壺、焼成後穿孔の壺底部、鉢等が出土しており、4世紀前半の築造と考えられる。

山の根古墳(36)(埼玉県教育委員会1994)は古見丘陵から派生する尾根上に立地し、その地形を生かして墳丘が造られている前方後方墳である。眼下には市野川の低地が広がり、三ノ耕地遺跡等を見下ろす位置にある。円墳1基、方墳1基とともに古墳群を形成し、その主墳となる。墳丘長54.8mで前方部の高さ1.9m、後方部の高さ3mである。周堀は巡らされておらず、裾をテラス状の平坦面として削り出している。出土遺物はくびれ部に集中しており、五領式の複合口緑壺、甕、鉢、高杯が出土している。

このように、遺跡周辺の台地、丘陵上には前方後方墳の分布が多く、それらは流域の低地を睥睨するような立地にある。一方、低地部にも三ノ耕地遺跡や中耕・広面遺跡に前方後方形の墳墓が認

められる。この違いは何によるものかが問題である。

野本將軍塚古墳は、墳長115m、後円部高13m、前方部高13mの前方後円墳である。築造年代については、4世紀代(甘粕1976)、5世紀後半から6世紀初頭(金井塚1979)、5世紀中葉から後葉(坂本1990)の3つの考えがあるが、いずれも確証は得られていない。仮に4世紀代のものであるとすれば、本遺跡の集落や玉作り工房との関係、特に玉作りという特殊な製品の生産の評価が問題になると考えられる。

#### 古墳時代中期

反町遺跡の近辺では、城敷・銭塚遺跡が最大規模の集落で、それを除くとほとんど遺跡が知られていない。玉太岡遺跡で1軒、大西遺跡で1軒とといったように点的な分布しか知られず、双方とも路線幅の調査であるがそれほど大きな集落が営まれなかったことを示している。

一方で諏訪山古墳群中にはB種横刷毛の埴輪を出土する第33号墳などの中期の例が知られており、城敷・銭塚がそれを支える集落と考えられる。

坂戸台地では、鶴ヶ島市御新山田遺跡で11軒の住居跡が調査されている(西川・斉藤1981)。

子畔川を挟んだ飯能台地には、弥生時代後期、古墳時代前期から継続する鶴ヶ丘、霞ヶ関、女堀(立石1987)、上組(黒坂1989)の各遺跡から古墳時代中期の集落跡が検出されている。特に女堀遺跡で6軒、女堀Ⅱ遺跡で8軒、上組Ⅱ遺跡で22軒、御伊勢原遺跡(立石1989)(69)では68軒といった大規模な集落が形成されている点は特筆される。また御伊勢原遺跡からは所謂集落内祭祀跡が2ヶ所検出されている。これらの遺跡の住居跡は、遺構の中央に地床が造られるものがほとんどで、カマドは未だに造られていない。

前期まで遺跡が多く造られてきた東松山台地、高坂台地、坂戸台地の集落が散在的で単発的であるのとは対照的である。城敷遺跡の大規模な集落

との比較が問題になるであろう。

#### 古墳時代後期

まず、反町遺跡の位置する都幾川右岸から越辺川右岸・高坂台地周辺の集落様相を概観する。城敷・銭塚遺跡では五領期終末段階前後に集落が一度衰退し、再興するのが和泉期後半～鬼高期初頭段階と思われる。鬼高期初頭～前半（5世紀末葉～6世紀前半）の集落は主に城敷遺跡を中心に営まれ、6世紀後半頃には城敷遺跡の集落は衰退するようである。その後、7世紀頃からは北側の銭塚遺跡に集落の中心があり、大きく見ると城敷遺跡から銭塚遺跡に集落が移動したと考えることもできる。城敷遺跡はその後、木田土壌が形成されていることから、次第に湿地化し水田（高坂条里か）として土地利用がなされたようである。

一方、反町遺跡では隆盛を極めた五領期から和泉期に至ると、一転して集落が衰退する。城敷遺跡の動向と軌を一にする現象である。和泉期終末から鬼高期初頭以降は集落域から墓域に転化し、古墳群が形成されるようになる。調査前は水田であったために古墳の存在は予想されていなかったが、現在までに28基の古墳が調査され、高坂台地上に密集して展開する古墳群が、低地部にも進出していったことが明らかになった点でも両期的な調査であった。反町古墳群（仮称）は前方後円墳を主墳として、大小の円墳で構成された古式群集墳と考えられる。詳細は次の報告に委ねるが、古墳群を形成した母集落に関しては、存続期間などから城敷遺跡がその有力候補となるうか。今後、整理を進める中での検討課題である。

反町遺跡南側の高坂台地には、大西遺跡（184）がある。大西遺跡では古墳時代後期（6世紀前半～7世紀後半）集落の一部が調査されている（鈴木1991）。また、大西遺跡西側に隣接する下寺前遺跡（183）1次2号住居跡からは初期須恵器（有蓋高坏と埴）が伴出し、5世紀末から集落が形成されている（高橋他1994）。第2次調査では

6世紀前半から中頃にかけての住居跡が3軒検出されている（宮島1990）。同じ高坂台地に位置する大門遺跡では7世紀以降の集落が調査されている（宮島1991）。高坂台地から西側に位置する比企丘陵には舞台遺跡（69）がある。舞台遺跡は関越自動車道建設事業と区画整理事業に伴って3次に及ぶ調査が実施され、5世紀末葉～7世紀後半段階までの93軒の住居跡が調査されている（谷井1974、井上1978・1979）。須恵器生産とも関わりを持つと推定され、台地から丘陵上の集落としては最大規模かつ中心集落と考えられる。舞台遺跡南方、越辺川水系に面した丘陵南端には駒形遺跡（76）があり、主に5世紀後半～末葉と7世紀の集落が調査されている（今泉1974）。比企地域の中でも先導的にカマドが導入された遺跡でもあり、注目される。大塚原遺跡（74）では7世紀後半の住居跡が8軒調査されている。

高坂台地は古墳群の密集地でもある。高坂台地南縁には毛塚古墳群（N）が展開する。毛塚古墳群は30基を超える円墳から構成され、最近では杉の木遺跡（185）の調査による3基の円墳調査により6世紀代の造葬活動であったことが明らかにされた（大谷2006）。

高坂古墳群（M）は高坂台地中央から東部にかけて展開する。反町遺跡を見下ろす台地東縁部には、前方後円墳高崎寺古墳が築造されている。詳細は不明であるが、採集埴輪から6世紀前半の築造と推定されている（大谷前掲書）。代正寺遺跡（68）からは16基の古墳跡が調査され、5世紀後半～6世紀前半に築かれた古式の群集墳の存在が明らかにされた。その他、高坂神社古墳、弘田神社古墳、高坂式番町遺跡や高坂三番町遺跡などからも古墳跡が発見されており、古墳密集度の非常に高い地域である。調福山古墳群（L）は都幾川を望む高坂台地北縁に位置する古墳群で、50基を越える古墳から構成される。4世紀前半代の前方後方墳、調福山L29号墳（全長45m）を嚆矢に、4



第6図 古墳時代後期から中世の周辺の遺跡

1	反町遺跡	46	前耕地遺跡	91	桑原遺跡	136	大塚遺跡	181	揚楯木遺跡
2	城牧遺跡	47	筍田遺跡	92	田島遺跡	137	松原前遺跡	182	滝・砥側遺跡
3	銭塚遺跡	48	五領遺跡	93	中原遺跡	138	古海東遺跡	183	下寺前遺跡
4	嵐山町金平遺跡	49	上川入遺跡	94	広面B遺跡	139	伴六遺跡	184	大西遺跡
5	花見堂遺跡	50	野木氏前跡	95	広面A遺跡	140	出雲伊波比神社	185	杉の本遺跡
6	茶臼山古墳	51	西浦遺跡	96	西峰西浦遺跡	141	塚場遺跡	186	若宮八幡古墳
7	原田遺跡	52	野木將軍塚古墳	97	中津遺跡	142	新しき村遺跡	187	勝呂庵寺
8	平谷宮跡	53	野木中原遺跡	98	足洗遺跡	143	大寺庵寺遺跡	188	堀ノ内遺跡
9	寺谷庵寺遺跡	54	山王東遺跡	99	金井A遺跡	144	旭台遺跡	A	唐子古墳群
10	羽七宮跡	55	権現塚古墳	100	金井B遺跡	145	西原遺跡	B	月輪古墳群
11	五輪沼宮跡	56	香清水遺跡	101	芦山遺跡	146	上新田遺跡	C	西原古墳群
12	打越遺跡	57	おくま山古墳	102	金内山遺跡	147	共栄遺跡	D	黒岩横穴墓群
13	城原北遺跡	58	笹塚遺跡	103	相模場遺跡	148	お寺山遺跡	E	御所古墳群
14	沢口遺跡	59	誓神社東遺跡	104	勇福寺遺跡	149	在家遺跡	F	戸戸山横穴墓群
15	八幡遺跡	60	古古海道遺跡	105	石井上宿遺跡	150	南精進遺跡	G	根古屋古墳群
16	中原遺跡	61	下道浜遺跡	106	石井前原遺跡	151	東洋大学工字部境内遺跡	H	久米田古墳群
17	岩鼻遺跡	62	下山遺跡	107	御門遺跡	152	河越郡内・能光他	I	羽黒山古墳群
18	八幡地遺跡	63	古瀬・根厚塚遺跡	108	明泉遺跡	153	山王遺跡	J	西吉見古代道路跡
19	伊波比神社	64	根岸稲荷神社古墳	109	青木堀ノ内遺跡	154	山王久保遺跡	K	野木古墳群
20	横見神社	65	天神原遺跡	110	住古中学校遺跡	155	霞ヶ岡遺跡	L	諏訪山古墳群
21	青塚古墳	66	高取氏前跡	111	宮町遺跡	156	的場古墳群	M	高取古墳群
22	岩の上遺跡	67	小代氏前跡	112	精進場遺跡	157	御伊勢原遺跡	N	毛塚古墳群
23	附川遺跡	68	代正寺遺跡	113	陽鳥遺跡	158	東女塚原遺跡	O	鳩山宮跡群
24	二十二耕地遺跡	69	舞台遺跡	114	駒方遺跡	159	女堀ノ遺跡	P	戸戸古墳群
25	息降院	70	桜山古墳群・宮跡群	115	横沼新田遺跡	160	上組Ⅰ・Ⅱ遺跡	Q	川角古墳群
26	松本町遺跡	71	田木山遺跡	116	小沼郷の内遺跡	161	五畑東遺跡	R	若林古墳群
27	観音寺遺跡	72	根平遺跡	117	木曾台遺跡	162	中組遺跡	S	善能寺古墳群
28	古見百穴横穴墓群	73	緑山遺跡	118	丸山遺跡	163	八幡前・若宮遺跡	T	入西古墳群
29	松山城	74	大塚原遺跡	119	高宮遺跡	164	東下川原遺跡	U	成瀬寺古墳群・若宮遺跡
30	大行山遺跡	75	立野遺跡	120	大穴遺跡	165	仙波遺跡	V	片柳古墳群
31	散布地	76	駒郷遺跡	121	上谷遺跡	166	道光林遺跡	W	新山古墳群
32	日向山遺跡	77	雷遺跡	122	前林遺跡	167	若宮遺跡	X	新町古墳群
33	かぶと塚古墳	78	小川庵寺	123	西谷ッ宮跡	168	王神遺跡	Y	勝呂古墳群
34	久米田遺跡	79	小川宮跡	124	登戸遺跡	169	松石遺跡	Z	塚越古墳群
35	和名宮跡群	80	西戸丸山宮跡	125	山田遺跡	170	新宮遺跡	AA	雷電塚古墳群
36	和名遺跡	81	神明台遺跡	126	富士見遺跡	171	光山・上鎌ッ登戸遺跡	AB	牛塚山古墳群
37	山の根古墳	82	明神台遺跡	127	花影遺跡	172	登野山遺跡	AC	柳折遺跡群
38	御所遺跡	83	まま上遺跡	128	折折遺跡	173	宮ノ越遺跡	AD	小坂古墳群
39	原遺跡第2地点	84	長岡遺跡	129	宮裏遺跡	174	城ノ越遺跡	AE	鷲ヶ丘古墳群
40	原遺跡第3地点	85	榎田遺跡	130	八幡遺跡	175	小山ノ上遺跡	AF	南大塚古墳群
41	西吉見条里遺跡	86	稲荷前遺跡	131	一天狗遺跡	176	稲荷上遺跡	AG	上広瀬古墳群
42	三ノ森地遺跡	87	塚の越遺跡	132	宮田遺跡	177	旭原遺跡	AH	笹井古墳群
43	倉敷遺跡	88	稲荷森遺跡	133	雷電池東遺跡	178	堂摩久保遺跡	AI	下唐子古墳群
44	江網遺跡	89	三福寺遺跡	134	若葉台遺跡	179	堂の根遺跡		
45	志久遺跡	90	大河原遺跡(古墳群)	135	富士見一丁目遺跡	180	今宿遺跡		

世紀後半の前方後円墳、諏訪山古墳（全長68m）、5世紀後半の諏訪山33号墳など首長墓の系譜が辿れる有力な古墳群である。諏訪山古墳群は後期群集墳に引き継がれ、富士製陶神社古墳、横穴式石室を採用した諏訪山4号墳（6世紀後半）、埴輪の消滅した諏訪山3号墳（7世紀前半）の存在か

ら7世紀まで概ね古墳造営が継続されたと考えられている（若松他1987）。高坂台地と九十九川を挟んで隣接する比企丘陵（田木台地）には田木山（71）・桜山（70）・舞台（69）・根平（72）・駒郷遺跡（76）などで厩瓦質砂岩切石積み横穴式石室を埋葬主体とする円墳が調査されている。

都幾川流域左岸の松山台地及び北比企丘陵・吉見丘陵上の集落は古吉海道遺跡(60)、籠田遺跡(47)、古凍根岸裏遺跡(63)、番清水遺跡(56)、観音寺遺跡(27)、笹塚遺跡(58)、玉太岡遺跡などがある。東松山市観音寺遺跡では鬼高期の住居跡50軒余りが調査されている(高橋他1994、渡辺1996)が、今のところ大規模な古墳時代後期集落の調査例は少ないようだ。古凍14号墳の墳丘下から後期(6世紀中葉頃)の住居跡が3軒調査された(宮島他1999)。吉見町久米田遺跡からは和泉期から鬼高期初頭の住居跡が6軒検出されている(埼玉県1982)。都幾川水系を遡ると嵐山町行司免遺跡から和泉期の集落、嵐山町東落合遺跡から鬼高期の集落が調査されている(嵐山町2003)。

後期古墳(群)は台地縁辺部や丘陵上に多数築造されている。松山台地では古凍・柏崎古墳群、下松古墳群、岩鼻古墳群、吉見丘陵の久米田古墳群(H)、北比企丘陵では三千塚古墳群が著名である。古凍・柏崎古墳群には野本榎塚古墳(52)が含まれるが、築造年代が明らかになっていない。野本榎塚古墳以外ではおくま山古墳(57)が前方後円墳であり、6世紀初頭前後の盟主墳となろう。古凍古墳群は12基の円墳が現存し、6世紀前半を中心とする後期群集墳である。古凍根岸裏遺跡で10基、宿東遺跡で2基、下道添遺跡(61)で3基の古墳が調査されている。古凍14号墳第2号土庫からは鉄製密鏡一対、3・4号土庫から轡など馬具がまとまって出土した。時期的に6世紀末から7世紀にかかると推定され、隣接する古凍4号墳に伴う馬の殉葬墓の可能性が指摘されている(宮島他1999)。柏崎古墳群は4基の古墳が調査され、3基から横穴式石室が検出された(金井塚1968)。比企地方の主要古墳群の消長をまとめた若松良一によれば古凍・柏崎古墳群は古式の群集墳であり、6世紀前半には造営を停止したという(若松1987)。下松古墳群は1基の帆立貝式古墳と3基の円墳の存在が調査され、6世紀初頭

から6世紀第3四半期にかけて順次築造されたことが判明した。特に5号墳(帆立貝式古墳)からは「弓を担ぐ人物埴輪」が検出され注目を集めた(江原2004)。この下松古墳群は市ノ川右岸に位置するが、対岸の吉見丘陵には222基からなる吉見百穴横穴墓群(28)と数百基に及ぶと推定される黒岩横穴墓群(D)が存在する。6世紀末には成立し、7世紀にかけて相次いで築造されたと考えられている(金井塚他1978)。その一方で吉見丘陵には久米田古墳群が知られている。埴輪をもつ姫塚古墳、久米田1~3号墳と埴輪をもたないかぶと塚古墳(33)、方墳の茶臼塚古墳(6)があり、6世紀から7世紀中頃にかけて築造されたことがわかる。古墳群と横穴墓の両埋葬形態が並存する点は注意を要する。

市ノ川左岸の台地上には岩鼻古墳群が存在する。6世紀初頭前後から中葉にかけて築造された群集墳で、埋葬主体は竪穴系(粘土椁)である。北比企丘陵には三千塚古墳群がある。三千塚古墳群の盟主墳である秋葉塚古墳と長塚古墳の2基の前方後円墳には前方部に竪穴式石室、後円部に片袖型横穴式石室が採用されていた(金井塚他1962)。6世紀中葉段階の築造と推定されており、横穴式石室導入のあり方を示すものと考えられる。

都幾川水系を遡ると下唐子古墳群(AD)がある。下唐子古墳群には附川古墳群・若宮古墳群が含まれる有力な群集墳である。円墳の若宮八幡古墳(186)が胴張横穴式石室を採用し、唯一埴輪を持つ点で古墳群中最古(6世紀末葉)である。冨塚古墳(21)、附川遺跡7・8号墳(23)など埴輪をもたず、胴張横穴式石室構造の内部主体を採ることから7世紀前半から中頃にかけて築造された古墳群と考えられる。

この地域は古墳群や横穴墓が非常に多く形成されていることがわかる。その一方で集落の検出例は少なく意外な感もある。今後、都幾川や市ノ川によって形成された広大な沖積地微高地上の遺跡



に注目して行く必要がある。

次に越辺川右岸・高麗川流域の様相を見ると、中流域では坂戸市桑原遺跡(91)・田島遺跡(92)・棚田遺跡(85)・稲荷前遺跡(86)・塚の越遺跡(87)・金井遺跡(99)・足洗遺跡(98)などから構成される入西遺跡群がある。入西遺跡群では桑原遺跡・田島遺跡・棚田遺跡など低位面に位置する遺跡では鬼高期初頭前後(5世紀末葉頃)から集落が形成される。6世紀後半の様相が不明確な点はあるが、7世紀には塚の越遺跡・稲荷前遺跡・金井遺跡・足洗遺跡に集落が拡大していく。入西遺跡群西側に位置する長岡遺跡(84)でも6世紀後半～7世紀の集落が大規模に展開している模様で(加藤他1992)、特に7世紀段階の住居跡の密集度が高いことが指摘されている(加藤2008)。入西遺跡群周辺が古墳時代後期における拠点的な集落であったことは疑いない。周辺には毛呂山町西戸古墳群(P)、川角古墳群(Q)、毛呂山町大類古墳群と坂戸市塚原古墳群を総称した苦林古墳群(R)、坂戸市入西古墳群(T)(善能寺・大河原・三福寺・北峰古墳群の総称)、など、越辺川を臨む台地縁辺部に後期～終末期に至る古墳群が累々と築かれ、古墳分布からも入西遺跡群の隆盛を伺うことができる。苦林古墳群には5基の前方後円墳が含まれている。高麗川左岸には坂戸市成願寺古墳群(U)、右岸の浅羽野古墳群などがある。浅羽野古墳群の主墳土屋神社古墳は直径45m、凝灰岩切石積みの胴張横穴式石室である。

一方、越辺川下流域右岸では坂戸市上谷遺跡(121)・前林遺跡(122)・大穴遺跡(120)から構成される中小坂遺跡群は5世紀から6・7世紀にかけて継続する拠点的な遺跡群で、安定的に集落が展開する(加藤2008)。この地域には新山古墳群(W)、片柳古墳群(V)、新町古墳群(X)、勝呂古墳群(Y)、塚越古墳群(Z)、雷電塚古墳群(AA)、牛塚山古墳群(AB)など多数の古墳群が造営されている。新町古墳群は前方後円墳副

山古墳と方墳太子塚古墳、円墳8基から構成される古墳群である。副山古墳は全長63.2m、埴輪の破片が採集されており、6世紀後半の築造とされている。勝呂古墳群の主墳は勝呂神社古墳で、径40mを超える円墳である。雷電塚古墳群には前方後円墳雷電塚古墳が含まれる。墳長47m、多条凸帯の円筒埴輪の存在から6世紀中葉の築造と推定される。坂戸台地の東端には牛塚山古墳群が位置する。10基を超える円墳から構成され、1号墳からは木棺直葬の主体部が発見され、大刀一振が副葬されていたという(塩野2004)。3・6・7・8号墳から比企型埴輪や埴輪が出土しており、6世紀代の築造と考えられる。

入間川・小畷川水系の入間台地では、川越市御伊勢原遺跡(157)・女塚Ⅱ遺跡(159)・上組Ⅰ・Ⅱ遺跡(160)が主要遺跡で、5世紀から6・7世紀にかけて営まれた拠点的な集落である。小畷川流域の古墳群は川越市下小坂古墳群(AD)、川越市鶴ヶ丘古墳群(AE)、日高市六ツ塚古墳群などがある。下小坂古墳群は6世紀前半～7世紀にかけて築造された古墳群で、どうまん塚古墳(円墳)からは挂甲、馬具、乳文鏡などが、粘土椀を採用した下小坂3号墳からは珠文鏡、馬具、円筒埴輪など豊富な副葬品が発見されている。小堤山神社古墳は55×63mの円墳で、主体部は胴張横穴式石室、7世紀の築造と考えられている。他に前方後円墳2基、帆立貝式前方後円墳1基を擁し、有力な首長墓系列が連れる古墳群といえる。鶴ヶ丘古墳群では鶴ヶ丘稲荷神社古墳(岩瀬1985)と鶴ヶ丘1号墳(小久保1976)の発掘調査が実施され、7世紀後半代の版築と掘込地業工法を採用した注目すべき方墳である。

入間川水系では前方後円墳牛塚古墳と円墳30基以上で構成される川越市市場古墳群(156)、上円下方墳山王塚古墳を擁する南大塚古墳群(AF)、狭山市笹井古墳群(AH)、上広瀬古墳群(AG)などがある。牛塚古墳からは、金銅製指輪や銀装

刀子など特殊な遺物が出土している。埴輪の出土から6世紀末葉の築造年代が想定されている。南大塚古墳群山王塚古墳は方台部一辺63mの大型墳である。律令期に繋がる在地勢力の動向を見極めるうえで重要視される古墳である。

引き続き生産遺跡を概観すると古墳時代の比企丘陵は武蔵国の中でも須恵器生産の揺籃地でもある。高坂台地に接する丘陵にある桜山窯跡群から埴輪窯跡と共に、県内最古段階の須恵器窯跡2基(6世紀前半・M T15平行期)が発見された(水村1982)。須恵器窯跡は桜山窯跡を嚆矢として、7世紀初頭の根平遺跡1号窯跡(井上1980)、7世紀中葉～後半の舞台遺跡C-1・2号窯跡(井上1978・1979)が相次いで操業された。各窯跡出土の器形は非常に個性的で時期的にも継続しないことから、今のところ技術的な系譜関係を辿ることはできない。また、立野遺跡(75)では7世紀後半の工房跡と思われる竪穴住居跡2軒が調査され、多量の須恵器や円面硯などが出土した。遺跡周辺に未知の須恵器窯がまだ眠っていることを教えてくれている。いずれにせよ、古墳時代須恵器窯跡が集中する地域であり、律令期武蔵国最大の須恵器窯跡である南比企窯跡群成立の胎動と見ることができ注目される。

比企丘陵では7世紀前半の鳩山町小用窯跡(79)で、特徴的な櫛描波状文を施す小型頸頭壺が焼成されている(高橋1977)。その他、坂戸台地には西谷ツ窯跡(123)1号窯が単独で築かれ、須恵器大甕と坏日蓋が焼成されていた(加藤他1992)。比企丘陵北部に位置する滑川町には羽尾窯跡(10)、平谷窯跡(8)が築された。

埴輪窯跡は先述した桜山窯跡群があり、須恵器窯跡2基のほかに埴輪窯跡17基が調査された。桜山窯跡群は6世紀前半～後半に操業され、附川古墳群出土の人物埴輪に作風が類似するという。また、毛塚2号墳の円筒埴輪や人物・馬形埴輪の特徴から桜山窯跡群から供給された可能性が指摘さ

れている(大谷2006)。吉見町の和名窯跡群(35)では4基の埴輪窯跡が検出されている。6世紀中葉～後半の操業と推定され、久米田古墳群や吉見丘陵地内の古墳群に供給されたと考えられている(高橋他1994)。

#### 奈良・平安時代

まず、都幾川右岸と越辺川に挟まれた高坂台地周辺の状況から概観する。反町遺跡には該期の集落は非常に少ないが、現都幾川自然堤防に寄った銭塚遺跡からは安定した集落が検出されており、低地帯における集落形成は継続した、というよりも水田開発とともに集落形成も積極的に進められたと推定される(菊地2007)。高坂台地上には代正寺遺跡、大西遺跡、下寺前遺跡、大門遺跡で7世紀後半～9世紀の集落が検出されているが、大規模な例は少ないようだ。下寺前遺跡では「堂」的な建物跡と勝呂庵寺II期の平瓦が出土しており、その性格が注目される。南比企丘陵東麓では、立野遺跡から7世紀後半の須恵器選別所的な大型住居跡2軒、緑山遺跡から8世紀初頭前後の住居跡4軒、大塚原遺跡から7世紀後半の住居跡8軒が検出されている。緑山遺跡では3軒の住居跡から勝呂庵寺II期の平行叩きを施す平瓦が出土しており、酒井清治氏は立野遺跡が須恵器、緑山遺跡が瓦の「製品管理・製作工房の統率者の居住地」と捉えた(酒井1982)。これら丘陵東麓の窯業生産は8世紀前半以降途絶し、代わって比企丘陵には7世紀後半以降南比企窯跡群が成立し、8世紀初頭から本格的な生産体制が整備され、9世紀末葉に至るまで大規模な須恵器と瓦生産が行われた。中核的な支群である鳩山窯跡群では須恵器窯跡群と工人集落が一体的に調査され、大きな成果を挙げている(渡辺1988・1990・1991・1992)。

都幾川左岸の松山台地周辺では山王裏遺跡(54)、上川入遺跡(49)、中原遺跡(93)、西浦遺跡(51)、古吉海道遺跡(60)、下山遺跡(62)、香清水遺跡(56)、岩鼻遺跡(17)、岩の上遺跡(22)、沢口遺

跡(14)などがある。下山遺跡は比企郡家の遺称地「古凍」に位置する。山王裏・上川入・中原・西浦遺跡は、古凍の西方至近距離に位置する遺跡で実質的に同一遺跡と見てよい。山王裏遺跡からは8世紀初頭～9世紀後半の住居跡37軒と基壇状遺構・竪穴状遺構・粘土採掘坑、中原遺跡からは7世紀後半～8世紀前半の住居跡13軒、上川入遺跡からは8世紀初頭～9世紀後半の住居跡7軒、西浦遺跡からは8世紀初頭～10世紀初頭前後の住居跡35軒が検出され、松山台地の中心的な集落である。山王裏遺跡では基壇に竪穴状遺構と区画溝が伴い、勝呂庵寺Ⅱ期の瓦が出土した。粘土採掘坑は基壇構築に伴い掘削されたと考えられている。時期は8世紀初頭である。西浦遺跡からは円面硯22点、「比」「厨」などの墨書土器、「企」と朱書された須恵器が出土している。郡庁院や正倉は発見されていないが、比企郡家または(且つ)寺院に密接に関係する遺跡群であろう(赤熊2002)。古吉海遺跡からは8世紀初頭～9世紀後半の住居跡4軒、下山遺跡からは須恵器淨瓶、香清水遺跡からは住居跡17軒、岩の上遺跡からは9世紀の住居跡が8軒検出されている(野辺1973)。

古見丘陵の律令期集落の様相は不明確である中で、西古見古代道路跡(J)の発見は注目される(永井2002)。従来の予想されていた東山道武蔵路からは若干方位を違えて、比企郡家推定地「古凍」と埼玉古墳群を結ぶライン上に位置している。東山道武蔵路あるいは郡家道ともいわれ、その性格は議論を呼ぶところである(弓2002)。

越辺川右岸・高麗川流域では越辺川支流の大谷木川左岸に毛呂山町伴六遺跡(139)、高麗川左岸にまま上遺跡(83)などがあるが、中・下流域に比較して集落規模は小さいようだ。伴六遺跡北側には出雲伊波比神社(140)が鎮座している。越辺川中流域には稲荷前遺跡・塚の越遺跡・金井遺跡・足洗遺跡などから構成される「入西遺跡群」が7世紀以降9世紀まで継続的に集落が維持され

ている。住居跡数は稲荷前遺跡230軒、塚の越遺跡89軒、金井遺跡91軒、足洗遺跡38軒を数え、隣接する長岡遺跡を加えると越辺川流域で最大規模の遺跡群である。越辺川右岸の広大な可耕地を生産基盤とした古墳時代以来の在地勢力が、律令期に至っても勢力を伸張しえた集落群であり、南比企産須恵器を交易場に搬入する際の中継地という性格も指摘されている(渡辺2006)。いずれにせよ律令期人間郡内において屈指の遺跡群であることは疑いない。

越辺川下流域では7世紀後半に勝呂庵寺(187)が建立された。勝呂庵寺は北武蔵最大級の白鳳寺院であり、8・9世紀に至るまで存続したとされている。在地有力氏族の関与が想定される。周辺には勝呂神社古墳をはじめ、6～7世紀の集落が分布(勝呂遺跡)している。勝呂遺跡からは「寺」と墨書された9世紀初頭前後の須恵器が住居跡から出土し(加藤1992)、門前町的な集落が展開する可能性はあるものの、今のところ大規模に展開する集落となる様相は見られないようだ。坂戸台地東端部には附島遺跡(113)、木曾免遺跡(117)、上谷遺跡(121)、前林遺跡(122)が調査されているが、集落規模には小さく、律令期には衰退するようだ。台地を開拓する小支谷沿いには番匠・下道遺跡と横沼新田遺跡(115)がある(黒坂2008)。両者は同一遺跡と見てよく、平安時代の住居跡18軒、掘立建物跡12棟が検出された。調査区の北東端に1間四面の建物跡と3×2間の側柱建物跡が位置する。仏堂的な宗教施設と考えると集落との関係を示唆するものといえようか。

一方、坂戸台地内陸部に集落が進出するのが該期の特徴で、勝呂庵寺の南方に宮町遺跡(111)、住吉中学校遺跡(110)、精進場遺跡(112)御門遺跡(107)、青木堀ノ内遺跡(109)などがある。宮町遺跡では「路家」の墨書土器、梓秤の櫛が出土し、陸上交通や交易に関わる遺跡の性格を暗示している。

さらに内陸に遡上すると若葉台遺跡(134)、富士見一丁目遺跡(135)、山田遺跡(125)、一天狗遺跡(131)などがある。若葉台遺跡では住居跡279軒、掘立柱建物跡234棟等が検出され、四面庇建物跡や5×3間の長大な掘立柱建物跡など、特異な建物群を内包する(加藤1995・斉藤1994)。古墳時代まで空閑地であった場所に、8世紀1/4期後半に忽然と大集落が形成される点でも特異である。出土遺物の中には、奈良三彩陶器3点、和同開珎、銅鈴、円面硯25点、青銅製帯金具、朱書土器14点などがある。隣接する富士見一丁目遺跡は実質的に若葉台遺跡と同一遺跡で、住居跡14軒、掘立柱建物跡33棟が検出されている(黒坂1998)。竪穴住居跡に対する掘立柱建物跡の比率が際立って高い点特徴である。こうした点と可耕地から離れた占地、出土遺構・遺物の特異性などから若葉台遺跡群の性格に関して人間家説・郡司層の居宅説・庄家説(斉藤他1983)など諸説が唱えられてきた。近年では716年建郡の高麗郡家との関係性が指摘されている(宮瀧1999)他、地方豪族(大伴部直氏)の居宅集落説が提示されている(渡辺2006)。山田遺跡は若葉台遺跡に隣接する。奈良三彩の火舎や「片牧」の墨書土器が出土しており、一天狗遺跡からは多量の墨書土器、漆紙文書や円面硯が出土している。

小野川水系では左岸に日高市光山・上猿ヶ谷戸遺跡(171)がある。上流に遡ると左岸に日高市拾石遺跡(169)、王神遺跡(168)、道光林遺跡(166)、若宮遺跡(167)、右岸に堀ノ内遺跡(188)、飯能市域では堂ノ根遺跡(179)・張摩久保遺跡(178)などが代表的な遺跡である。光山・上猿ヶ谷戸遺跡は住居跡55軒、掘立柱建物跡40棟などが検出され、小野川中流域の拠点的な集落である。7世紀後半から8世紀後半まで継続する点で旧高麗郡域の集落とすると特異である。大型住居跡の存在や墨書土器、漆付着土器、馬具・鍵の出土から、報告者は近くを通るであろう東山道武蔵路と

水路の結節点に作られた流通・交易の拠点集落と捉えた。さらに8世紀後半に集落が衰退する点に関しても、宝亀二年(771)武蔵国が東山道から東海道に所属替えになる事象との関連を探っている(井上1994)。

光山・上猿ヶ谷戸遺跡以外は8世紀前半以降形成された集落で、高麗建郡という歴史動向を反映している。拾石・王神遺跡はいずれも8世紀中葉～9世紀中葉にかけて形成された集落で、拾石遺跡からは住居跡46軒が検出され、「家長」の墨書土器、漆紙、石製帯金具が出土している。王神遺跡からは鳥形硯が出土した。水路跡と道路跡は両遺跡を貫通していることが判明している。堀ノ内遺跡の9世紀前半の住居跡からは皇朝十二銭の隆平永寶(796年初鑄)が出土した(日高市1997)。

道光林遺跡は3軒の住居跡が調査され、8世紀前半の土器群が出土しており、高麗建郡当初の集落と考えられる(日高市1997)。

飯能市堂ノ根遺跡からは8世紀初頭の常陸国新治産須臾器と土師器のいわゆる常総型甕が検出された。これらは常陸から下総・上総国那珂に広く分布する土器群であり、高麗建郡段階に常総地域からの移住を、具体的に物語る一級資料である(富元1993)。堂ノ根遺跡に隣接する張摩久保遺跡は飯能市域最大級の集落で、円面硯や銅碗、第22次調査では皇朝十二銭の隆平永寶(796年初鑄)が出土している(富元1994)。新堀遺跡・新井原遺跡からはロクロ整形の土師器甕が出土した。陸奥地域の甕に類似するが、短期的な整合性が取れない。今後の課題であろう。

入間川水系では左岸に川越市霞ヶ関遺跡(155)、天王遺跡(153)、山王久保遺跡(154)、五畑東遺跡(161)、花見堂遺跡(5)、東下川原遺跡(164)、八幡前・若宮遺跡(163)などがある。霞ヶ関遺跡・天王遺跡・山王久保遺跡は実質的に同一遺跡である。畿内産土師器・「入厨」墨書土器、大型掘立柱建物跡の存在などから、人間郡家の有力候

補であり、最近平野寛之氏らによって詳細な検討が加えられている（古代の入間を考える会2008）。郡家政庁と正倉は未だ確定はできないが、状況証拠からみて霞ヶ関遺跡群の中に入間郡が存在したと考えるのが最も妥当であろう。五畑東遺跡からは「入主」の墨書土器が出土した。八幡前・若宮遺跡からは「驛長」の墨書土器と酒の醸造に関わる榎樽木筒が出土し、東山道武蔵路第三駅に比定する見方が有力である（酒井1993・木本2000）。しかし、遺跡そのものは土師器焼成域と粘土採掘域が検出された土器生産遺跡であり、駅家施設そのものとは異なる（富元2005）。平野氏は八幡前・若宮遺跡は郡家近傍の生産拠点と評価し、駅家は霞ヶ関遺跡と八幡前・若宮遺跡の間を通過すると考えている（平野2008）。最近、古海道東遺跡（138）で東山道武蔵路の一部と思われる道路跡側溝が発見され、ルートの特定に一石を投じた（内田2007）。これが正しいとすれば「勝呂庵寺ルート」よりも東に振れる「宮町ー古凍ルート」に近くなるのか。今後の検討が必要である。

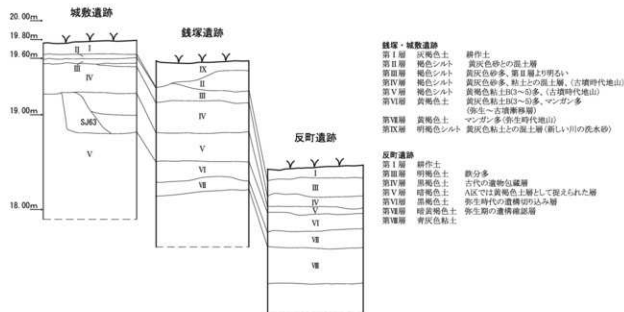
入間川を遡上すると、左岸に狭山市宮ノ越遺跡（173）、城ノ越遺跡（174）、小山ノ上遺跡（175）、今宿遺跡（180）、宮地遺跡など、遺跡が入間川沿いに帯状に連なる一大集落群が形成されている。8世紀以降の集落がほとんどであるが、上広瀬古墳群（AG）や笹井古墳群（AH）、柏原古墳群が存在することから集落形成は古墳時代後期に遡ることが予想される。右岸下流域では川越市小仙波・弁天西遺跡があり、弁天西遺跡からは畿内産土師器が出土している（富田2002）。現状では遺跡数が少ないが、周辺には広大な可耕地が広がっており、今後遺跡の増加が予想される。右岸中流域では狭山市稲荷上遺跡（176）、揚楯木遺跡

（181）、滝・祇園遺跡などがある。上流の入間市域には前内出・八坂前・新久窯跡等から構成される東金子窯跡群が存在し、8世紀中葉以降10世紀に至るまで大規模な須恵器生産が行われた。

## 中世

反町遺跡には中世の遺構は確認されていない。遺物としては河川跡から陶器類や金銅製花瓶、竹製籠など鎌倉時代初期の製品が少量検出されているのみで、時期的な動向を語るには材料不足である。一方遺跡周辺は中世の遺跡が数多く分布し、蓄積資料も膨大である。ここでは遺跡近在の中世遺跡の紹介にとどめておく。まず、都幾川対岸の野本将軍塚古墳墳頂、利仁神社経筒遺跡から発見された建久七年（1196）銘銅製経筒が最古段階の資料である。経筒・鏡の銘文に「源次郎」、「吉見郡大串郷住人藤原氏」などと記されていた。将軍塚古墳の北西に隣接する野本氏館跡（50）は鎌倉時代の所産とされている（埼玉県教育委員会1988）が、幅4mの堀跡の一部等が調査され、14世紀後半のかわりけや片口鉢が出土した（山本1997）。反町遺跡の南側と西側にある高坂台地には小代氏館跡（67）と高坂氏館跡（66）、高坂武番町遺跡などがある（江原2005）。小代氏館跡は確認調査で14世紀前半頃の堀跡が検出された。高坂氏館跡は都幾川を望む急崖縁辺にある。高済寺境内周辺に土塁と空堀が残る。後北条家家臣、高坂刑部が居住したといわれている。高坂氏館跡と小代氏館跡との間には高坂武番町遺跡、大西遺跡、代正寺遺跡があり、13世紀～14世紀の遺物が濃密に分布している。江原氏は高坂台地全体を、牧や信仰空間を含みこんだ「居館」と捉えている（江原1996）。

### III 遺跡群の概要



第7図 基本層序

#### 1. 遺跡群の概要

高坂駅東口第二土地区画整理事業地は東松山市大字高坂地内に所在する。事業地内には反町、城敷、銭塚の3遺跡が検出されている。いずれも都幾川の乱流によって形成された。現在は水田になっている埋没自然堤防上に立地している。遺構の検出される面は灰褐色のシルトもしくは砂質であり、覆土も同様の土質であることから、遺構確認は困難を極めた。

3遺跡の基本土層(第7図)は、現代の耕作土(I層)、分層は困難だが中世から近世の水田土壌と考えられる土層(II～III層)、古代の遺物包含層(IV層)、古墳時代の地山(V層)、弥生～古墳時代の漸移層(VI層)、弥生時代の地山(VII層)、粘土層(VIII層)という構成である。地点によって堆積環境が異なることから、色調はもとより、含有物、土質も異なる。全体的に、城敷・銭塚遺跡はシルト質で、反町遺跡は砂質である。

古墳時代の遺構検出面の標高は、城敷遺跡西側が19.2m前後、銭塚遺跡中央部が18.6m前後、反町遺跡中央部が18.0m前後である。地形形のもの

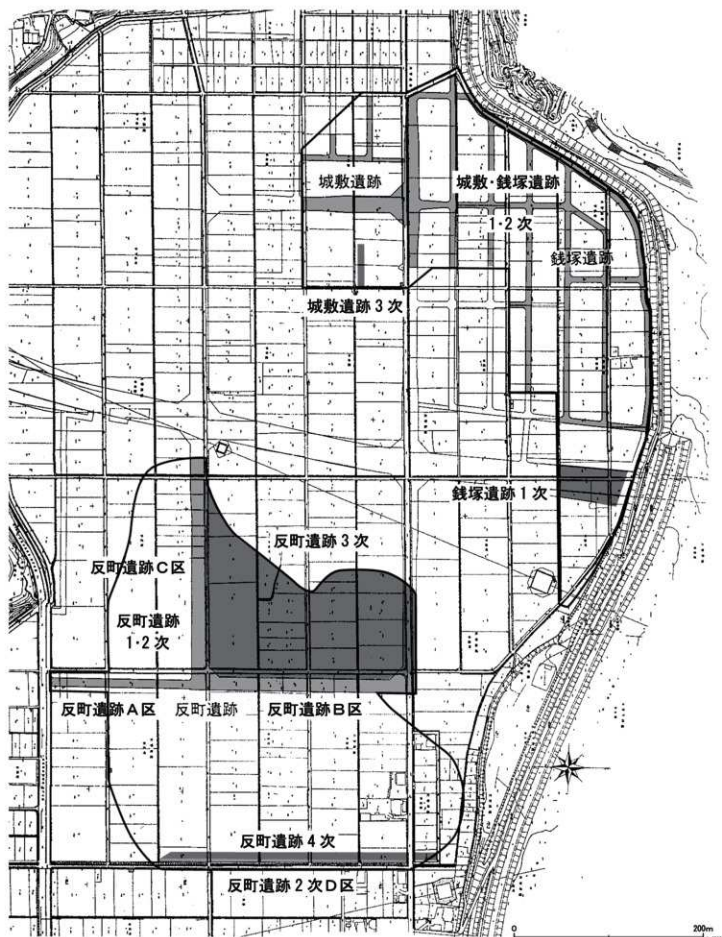
も傾斜しており、反町遺跡の中でもC→A→D区と遺構検出面の標高が下がっている。遺跡内で検出されている河川跡の河床面も東へ行くほど傾斜している。昭和40年代まで早稲の渡しまで帆掛け舟が入っていたということなので下流に行くほど、更に水深が増すのであろう。

遺跡の南側に接する高坂台地とは6～7mの比高差が、都幾川を挟んだ対岸の松山台地縁辺の段丘面にある西浦遺跡とは3～4m、松山台地上の山王裏遺跡とは10m近い比高差がある。

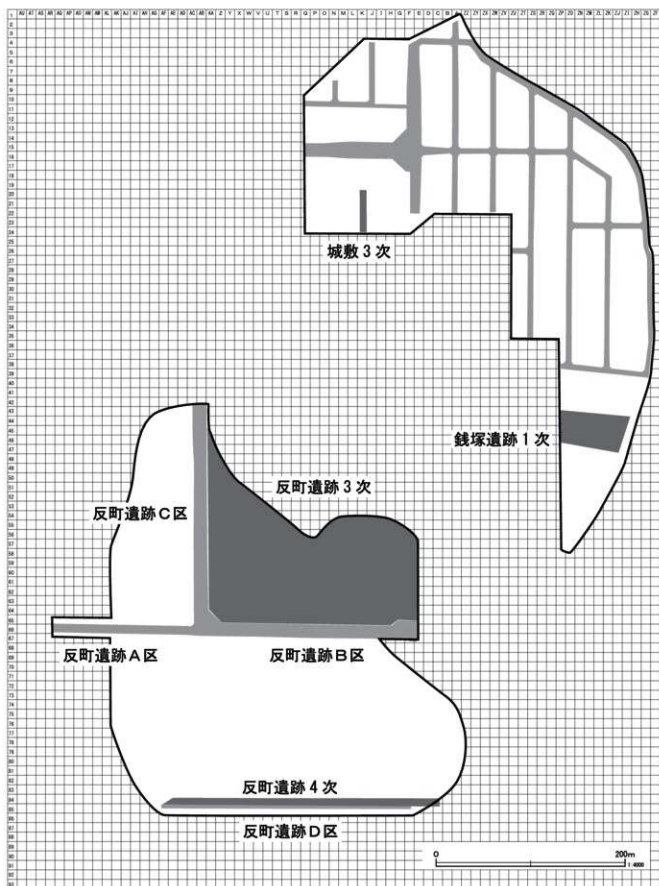
また第3次調査では古墳時代前期の大規模な洪水による住居跡の埋没が確認されており、古墳時代中期前半の遺構の途絶はその影響と考えられる。

#### 2. 銭塚・城敷遺跡の概要

銭塚遺跡は国道407号バイパス関係の調査(第1次)で、平安時代の住居跡1軒、平安時代から中世の溝跡10条、土層19基、ピット多数が検出されている。本事業の調査地点の東側50mの地点に当たり、銭塚遺跡の広い遺構の広がりを示すもの



第8図 反町・城敷・銭塚遺跡の調査区位置図



第9図 グリッド網図



である。

銭塚遺跡の本事業に伴う調査区（2・3次）は、南北約200m、東西約500mの遺跡の範囲に縦横にトレンチを入れた形になっている。

城敷遺跡（1・2次）は銭塚遺跡の南側に接しており本来は一遺跡とすべきものであろう。南北約270m、東西約250mの広がりを持つ。

銭塚・城敷遺跡の調査面積は21,700㎡に上る。調査の結果、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代の大規模な集落跡であることが明らかになった。検出された遺構数は、竪穴住居跡174軒、掘立柱建物跡33棟、大溝（河川跡）4条、溝跡68条、土城72基である。

概ね銭塚遺跡側に奈良・平安時代の遺構が分布し、城敷遺跡側に古墳時代の遺構が分布する傾向が見られる。

遺跡全体を蛇行するように検出された大溝からは大量の遺物が出土するとともに、堰状施設や階段状施設、護岸状の施設が確認された。

出土遺物は古墳時代から平安時代の土師器、須恵器、石製品（石製模造品、紡錘車、砥石）、鉄製品（鉄斧・鉄鎌・鉄製刀子・鉄釘・銅鐵）、木製品（扉材・柱材・壁材・杭・垂木・槽・竪柱・碇・田下駄・火鎖口・弓・木鎌）である。

土師器、須恵器は住居跡、大溝、溝跡から大量に出土した。古墳時代の須恵器には陶邑産のものが多く含まれている。特に全形の知れる大甕は当時の河川交通を示すものとして注目される。また県内ではほとんど例の知られていない陶邑産の樽形甕も出土している。

鉄製品の内、古墳時代前期の袋状鉄斧や柄の付いた刀子などはほとんど例のないものである。

木製品は大溝から大量に出土した。特に建築部材が多く、長大な梯子や扉材が出土するなど大規模な建物跡が近傍にあったことを窺わせる。他に農具の未製品や加工の際に出るチップが見られ、農具をはじめとする木製品が製作されていたもの

と考えられる。

平成20年9・10月に実施された城敷遺跡の調査（3次）では、竪穴住居跡7軒、掘立柱建物跡2棟、溝跡1条が検出されている。

### 3. 反町遺跡の概要

反町遺跡は現在までに4次に亘る調査が実施されている。

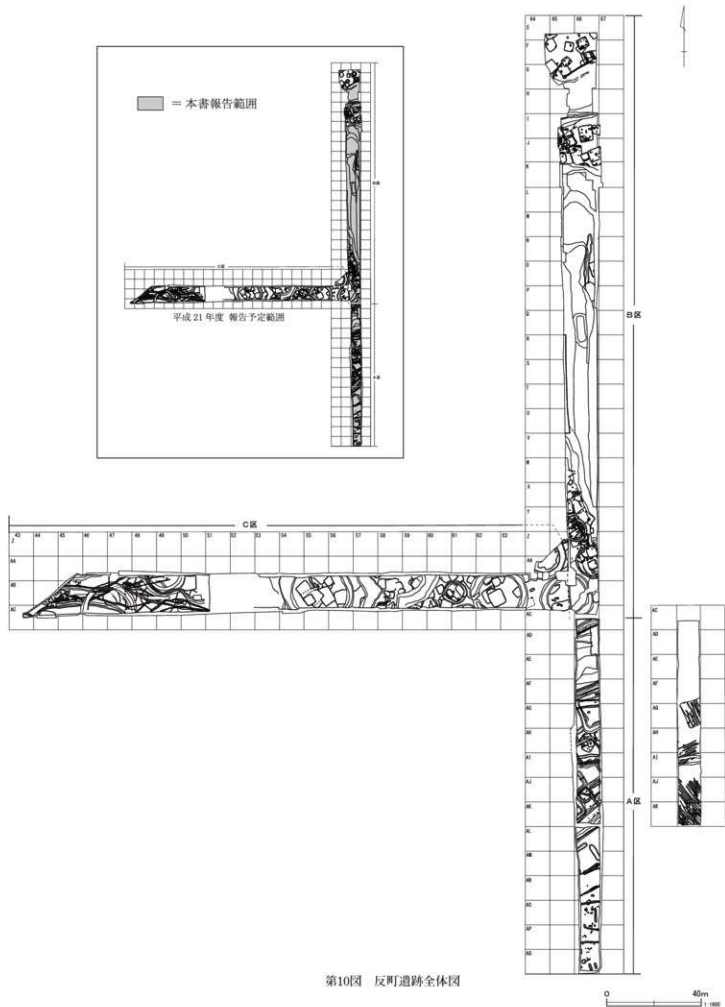
本事業に伴う第1・2次調査は、1～2で述べたようにA～D区にかけて15,385㎡の範囲で実施した。

遺跡全体では縄文時代後期から江戸時代にまでわたる遺構・遺物を検出したが、中心となる時期は弥生時代中期から弥生時代後期前半、古墳時代前期～後期、平安時代である。検出遺構総数は竪穴住居跡117軒、方形周溝墓7基、土器棺墓2基、古墳12基、大溝跡（河川跡）5条、溝跡68条、土城61基である。竪穴住居跡、溝跡等の時代別遺構数については、現在整理中のため次回に報告する。

弥生時代中期から後期前半の遺構はA区では竪穴住居跡7軒、方形周溝墓5基、溝跡3条、土器棺墓2基を検出した（本書報告）。遺構の分布の中心はB区を除く、A区からC区にかけてである。

中期段階（宮ノ台式）では、A・C区双方に集落が展開している。C区の第107号住居跡は12m×9.5mを測る大型住居跡である。またA区の南側からは大規模な溝跡を検出した。出土遺物は宮ノ台式土器が大部分である。他に大形短刃石斧の優品が出土している。

後期段階（岩鼻式）では、A区で集落から墓域への変遷が確認され、A区側が墓域を主体とし、C区側が集落域となると考えられる。A区の墓域は方形周溝墓と土器棺墓から構成されており、同時期の熊谷市前中西遺跡や坂戸市柵遺跡などと同様の状況である。出土遺物は櫛描文系の櫛状文、波状文が施される岩鼻式土器を中心とする。埼玉県域では後期前半の様相がほとんど明らかでない



第10図 反町遺跡全体図

が、当地域はその様相を伝える数少ないものである。また東京湾岸の久ヶ原式や朝光寺原式の影響を受けた土器群も出土している。ところが、続く後期後半の古ヶ谷式期の遺構は検出されておらず、反町遺跡の集落は一旦途絶すと考えられる。

今回の調査では古墳時代前期（五領式）の遺構・遺物が最も多く検出された。遺構はB・C区を中心に分布し、A区からは方形周溝墓3基が検出されているに過ぎない。B・C区からは現在整理中のため詳しくはわからないが、百軒を上回る竅穴住居跡が検出されている。D区、並びに後述する4次調査ではこの時期の方形周溝墓を検出した。遺構の分布はB・C区が集落域の中心、その南側のA区からD区にかけてが墓域の中心になっていると考えられる。

また、B区からは水晶製勾玉と緑色凝灰岩製管玉の玉作り工房を検出した（次回報告）。水晶製品の玉作り工房は関東地方では初例となる。所謂碧玉製玉作り工房も県内ではこれまで知られておらず、両方の石材を用いた玉作りを行っている点も特筆されよう。

古墳時代中期から後期の遺構は、竅穴住居跡をB区で5軒、掘立柱建物跡をC区で1棟検出したほかは古墳のみである。

古墳は前方後円墳1基、円墳11基を検出した。5世紀後半の前方後円墳の前方部からは粘土椽を検出し、鉄剣一振りが出土した。6世紀前半の4基の円墳は周堀のみを検出した。円筒埴輪、人物埴輪、馬形埴輪が出土した。

奈良・平安時代の遺構はA区から溝跡2条を、B区から竅穴住居跡2軒、溝跡4条を検出した。

大溝（河川跡）は調査区内の4ヶ所から検出された。一つの蛇行する流路跡を串刺し状に調査したものと考えられる。

第3次調査は平成19年10月から平成20年9月にかけて、大規模小売店舗建設に伴い実施された。第1・2次調査のA・C区を東・南辺とする調査

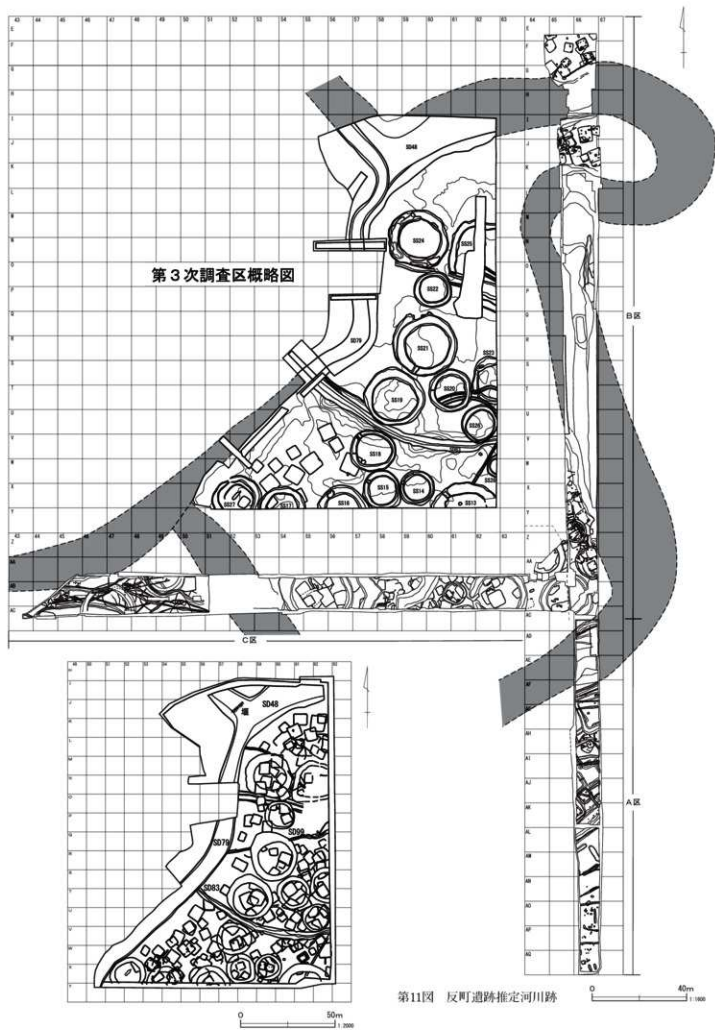
区で、面積は24,363㎡に上る。調査の結果、第1・2次調査同様の弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代の大規模な集落跡、古墳群、大溝（河川跡）が面的に広がっていることが明らかになった。

古墳時代前期の住居跡は調査区全体に分布しており、第1・2次調査と合わせて250軒を上回る軒数が検出されたことになる。反町遺跡は古墳時代前期の集落としては県内屈指の規模である。住居跡の中にはB区の工房跡同様に碧玉の剥片類が出土しているものがあり、工房が群としての広がりを持つ可能性がある。土器以外にも複製の内行花文鏡や土錘等が出土している。

また住居跡の覆土には砂礫の堆積が見られるものがあり、大規模な洪水のために遺跡群全体で古墳時代中期前半の遺構が形成されていない可能性が考えられる。

古墳群は古墳時代中・後期のもので、円墳16基が検出された。C区で調査されたものと一連のものである。この調査では埋葬施設は確認されなかった。埴輪が出土しているものは3基にとどまり、円筒、人物、馬形、鞍形が出土している。

河川跡は2ヶ所で確認されている。本書で報告する河川跡（第48号溝跡）に連続するもので、覆土や出土物も同様である。第48号溝跡から分岐する第70号溝跡は、大規模な堰によって分水されている。堰は2列の杭列と支保工によって構成された所謂合掌形の堰である。大径木をみかん割りにした杭が用いられている。出土遺物は土器とともに木製品が多く出土している。鋤・鍬等の農具をはじめ、その未成品、柱材、床材、垂木といった建築部材が出土している。中でも古墳時代前期の臼は完形品で、関東地方では唯一のものである。建築部材はほとんどが古墳時代中期後半のものである。長大な柱材が多く、城壁遺跡同様に大型の建物の存在を窺わせる。上層の調査区東側からは第36号溝跡同様に平安時代の須臾器や雁又鋸が出土している。



第4次調査は平成20年4月から9月にかけて、一連の第二土地区画整理事業の一環として実施された。第1・2次調査のD区に接する南北の調査区で、面積は1,840㎡である。

検出された遺構数は、古墳時代前期の竪穴住居跡5軒、方形周溝墓3基、溝跡17条、土壌8基である。調査区の中央に大溝（河川跡）1ヶ所が確認され、ほとんどの遺構がその南側に分布している。方形周溝墓3基は調査区南端近くで検出され、近接（連接）して築造されている。埋葬施設は確認されなかったが、周溝から底部穿孔壺や赤色顔料が出土している。

大溝は河川跡である。幅40m、深さ4mを測り、土器、木製品が出土し、第1～3次調査の河川跡の延長になるものと考えられる。

#### 4. 反町遺跡A・B区の概要

本書では、第1・2次調査の、南側のA区と第48号溝跡より北側の追加調査区を除くB区について報告する。主工作房とそれに関連する遺構・遺物については次回報告とする。

A区からは弥生時代中期から後期前半の竪穴住居跡7軒、方形周溝墓5基、溝跡3条、土器棺墓2基、古墳時代前期の方形周溝墓3基、畠跡3ヶ所を検出した。

弥生時代の竪穴住居跡は隅丸方形のものである。第8号住居跡のように長方形に近いものもあるが、後期後半の吉ヶ谷式に見られるような長方形で、複数のが跡が造られるようなものではなく、中期末から後期前半という時期的な特徴をよく示しているといえるであろう。

方形周溝墓は、全周形の第3号周溝墓を除き、部分的に確実ではないが、四隅切れのものと考えられる。周溝の幅が直線的で狭く、各周溝が独立しているような感を受け、古い特徴をよく示している。中でも第5・10・11号からは完形に近い土器が出土しており、類例の少ないこの時期のま

まった資料となった。

土器棺墓は2基検出された。特に第2号のものは、完形の大型壺を打ち欠き、それに蓋として、他の壺を組み合わせ、更に口縁、底部に栓をするように他の土器の破片を組み合わせている。当該期の土器棺墓が複数の中型土器の破片を組み合わせる例が多い中で貴重である。また、この大型壺も東京湾岸の久ヶ原式の特徴を持つものであり、その点からも注目される。

南側の幅の広い第12・47号溝跡は中期の土器片が出土しており、これより南側では住居跡が検出されないことから、環濠等の区画溝である可能性がある。

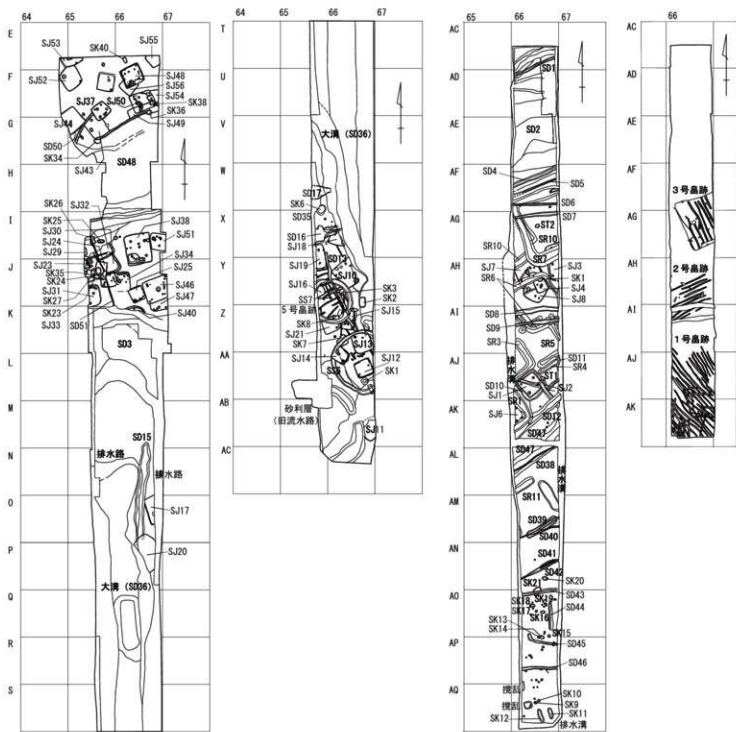
古墳時代前期の遺構は方形周溝墓と畠跡である。方形周溝墓は規模が大きく、周溝幅も広くて深い。弥生時代のものとは対照的である。既に全項で述べたように、D区・4次調査でも周溝墓が分布することから、集落の南側に墓域が展開するものと考えられる。中でも7号が10号を、6号が5号の方台部を壊して切り合っている点は特筆される。群馬県や神奈川県でも類例が見られるが、本来的に方形周溝墓は方台部の切り合いが見られないことから、重複の原因を今後の整理の中で検討していかなければならないであろう。

畠跡は方形周溝墓より新しく、古墳跡より古いと考えられることから、時期の特定には至らないが、前期末から中期のものと考えられる。

B区からは古墳時代前期（五節式）の住居跡30軒が検出された。前述のように、第2号溝跡を境に北側に集落域、南側に墓域という分布を示している。

本書では、水晶・碧玉工作房を含むB区北道追加調査区の12軒を除いた18軒について報告する。

住居跡は隅丸正方形を基本とする。長軸6.5mほどの大型のものと、4mほどの小型のものがある。柱穴は典型的な4本柱穴のものはほとんど見られない。また、貯蔵穴が見られるものも少なく、



第12図 A・B区全体図

本遺跡の住居跡は同時期の台地上のものとは大きく様相を異にしている。出土遺物は概して少ないが、第36号溝跡の北岸に位置する第20号住居跡が

らは大量の遺物が出土している。この直下の第36号溝跡の上層にも多量の土器が出土しており、両者の関係が問題になるであろう。

古墳時代中期から後期の遺構は、竪穴住居跡5軒検出したのみである。前期に比べて格段に遺構数が少なく分布が薄くなっていることが分かる。小型の第25号住居跡は7世紀中葉のもので、南カマドである。

奈良・平安時代の遺構は竪穴住居跡2軒、溝跡6条を検出した。住居跡は調査区の西縁にかかっており、詳細は不明である。

大溝（河川跡）は調査区内の4ヶ所から検出された。A区の第2号溝跡からは弥生時代から古墳時代までを中心とした土器や埴子が出土している。

B区から検出された第3・36・48号溝跡も同様である。河床面の砂利層の中から縄文時代後期の土器が出土しており、覆土から遺物が出土する弥生時代中期までの間に遺跡周辺が陸化したことを物語っている。B区の河川跡からは大量の土器、木製品、自然木が出土した。弥生時代中・後期（宮ノ台式、岩鼻式）の遺物は少なく、多くを占めるのが古墳時代前期のものである。後期後半の遺物はほとんど出土しておらず、集落域、墓域と対応した状況で、この時期に一旦遺構の造営が途絶えるものと考えられる。上層からは古墳時代中・後期の遺物が、最上層からは奈良時代から室町時代の遺物が出土した。いずれも量的には少量である。

第3・36号溝跡からは古墳時代前期の水場遺構の可能性が高い木材の配置が認められた。階段状に長い材を斜めに配置し、それを杭で留める形となっている。周辺からは織組製品が出土しており、今回は充分検討できなかったが、将来的に検討の余地を残すものである。

土器類は五稜式のものが大部分である。非常に作りの良いものが多いのが特徴で土器の製作において本遺跡が中心的な役割を果たしていた可能性が高い。東海系、北陸系、畿内系の所謂外来系土

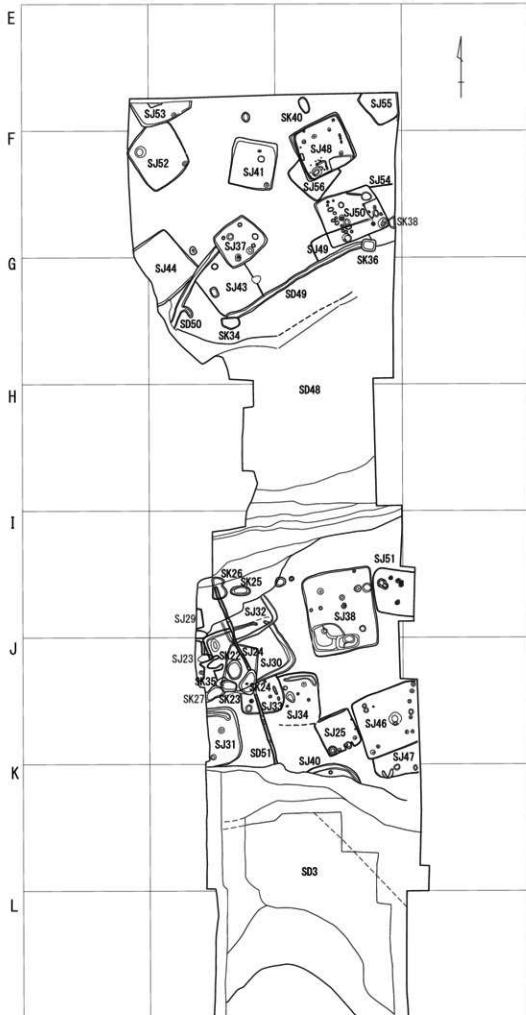
器も出土している。それに加えて、東遠江の壺や駿河を中心とする大塚式土器の破片といった類入品が少量ながら含まれているのが特徴的である。

木製品類は、農具、容器、漁撈具、建築材、曲物等が出土した。農具の未成品や工程途中で生じたチップと考えられる木片も出土しており、いずれかの場所で農具等の製作が行われていたものと考えられる。容器は槽がほとんどだが、曲物底と考えられるものも認められる。また、小型の槽状の赤漆塗容器は古墳時代前期では関東地方で唯一の例である。建築材は柱材が多いが、扉の欄や壁材なども出土しており、板壁の建物が建てていたことを窺わせる。

古代では、第36号溝跡の上層、最上層の川岸に、平安時代の「神矢」「弓」と書かれた墨書土器を中心とした須恵器坏、土師器甕が雁列された状態で、流路の中からは雁又鎌が出土し、両者を合わせて第1号祭祀跡とした。ほかに径1.5mにも及ぶ大型の籠が出土しており、当初は祭祀跡を構成する一つと考えたが、年代測定の結果中段階のものである可能性が高まったため除外した。第3号溝跡からは同時期の「三田万呂」や「飯万呂」の墨書土器が出土し、第2号祭祀跡とした。

また、第36号溝跡からは、関東地方ではほとんど類例が知られていない漆塗布用のパレットとして用いた須恵器碗が出土しこの地で漆器の製作が行われていたものと考えられる。

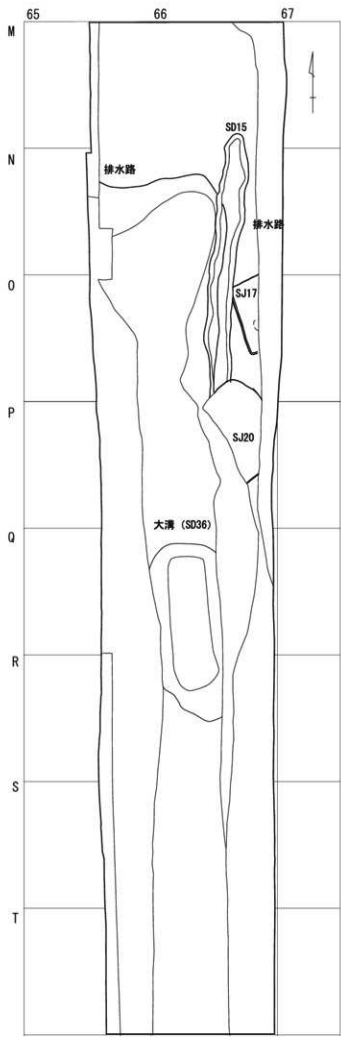
中世では、調査区内に明確な遺構は認められないが、河川跡（第36号溝跡）の中からは漆碗と金銅製花瓶、曲物が出土しており、引き続き宗教的な空間として意識されていたことが窺える。また前述の籠は真竹製で大型品としては国内でも例のないものである。前述の祭祀跡に伴わないのであれば、用途や性格が問題である。



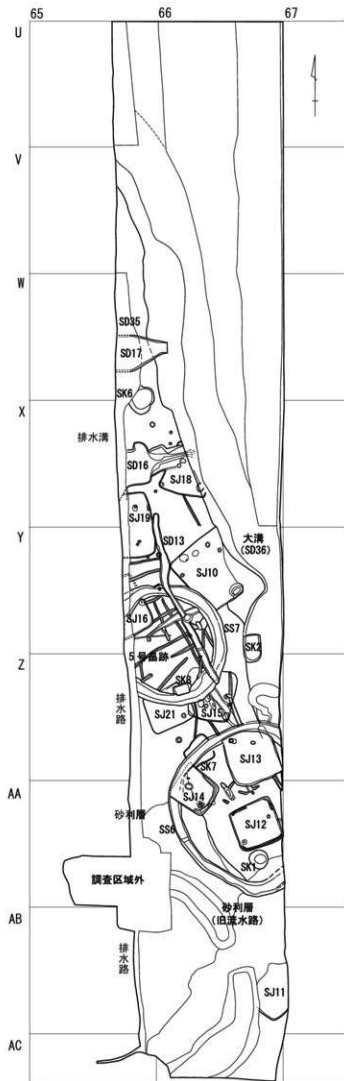
第13図 全測図 (1)

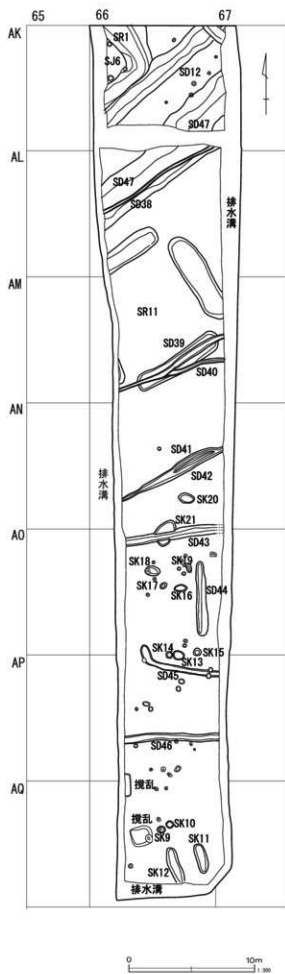
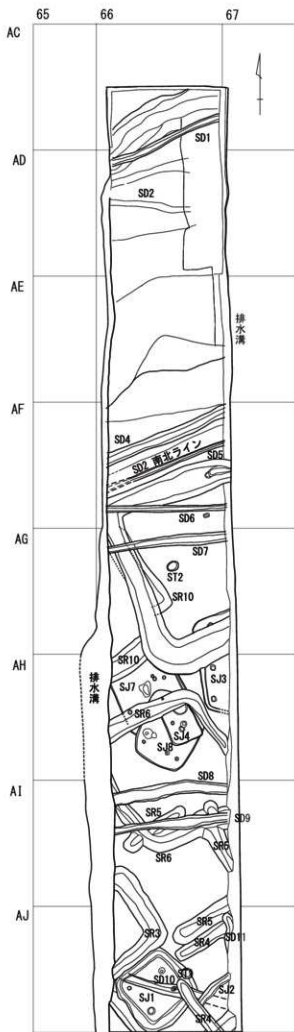






第14図 全測図(2)





第15区 全測図(3)

## Ⅳ A区の遺構と遺物

### 1. 弥生時代

#### (1) 住居跡

A区からは弥生時代の竪穴住居跡7軒が検出されている。いずれも弥生時代中期後半から後期前半にかけてのものである。おおまかにA J-66グリッド付近と、A H-67グリッド付近の2ヶ所のまとまりがある。

#### 第1号住居跡 (第16図)

調査区のほぼ中央、A J-66グリッドに位置する。第2号住居跡が南東側2m、第6号住居跡が南西側6mにある。遺構の北東側が第1号土器棺墓と、北西側が第3号方形周溝墓と、南西側が第1号方形周溝墓と、西コーナーが第4号方形周溝墓と重複する。直接の新旧関係は不明である。また東西コーナーの対角線上に第10号溝跡が重複し、本遺構の方が新しい。

床面は既に削平されており、柱穴と掘り方を検出した。主軸は北を基準とするとN-50°-Eを指す。規模は西側の二辺を検出できなかったことから確実でないが、現状で長軸5.60m、短軸5.35mを測る。平面形は重複が激しいため判然としませんが、北東辺、南東辺の縁相から、やや胴の張る隅丸方形と考えられる。床面に貼床等は検出できなかった。カ跡は検出されなかった。柱穴は4本で、いずれもやや不整な円形である。径30~62cm、深さ42~54cmを測る。柱はいずれも引き抜かれている。P1の底面に径5cmほどの柱の当りを確認した。覆土は第5層が柱痕、第6・7層が掘り方の埋め土、第4層が引き抜き後の堆積層と考えられる。

掘り方は幅1.0~2.0m、深さ10~20cmで、周溝状に全周している。埋め土は灰色粘土や炭化物を含む。

遺物は僅少で、弥生時代後期前半の甕・高坏の

細片が出土したのみである。図示しえたものは甕形土器の頸部の破片のみである。内面に煤が付着している。上部が欠損しているが、4条以上を一単位とする波状文が上位に施され、下位に6条1単位の右回りの縞状文が2段施される。波状文が縞状文を切っている。

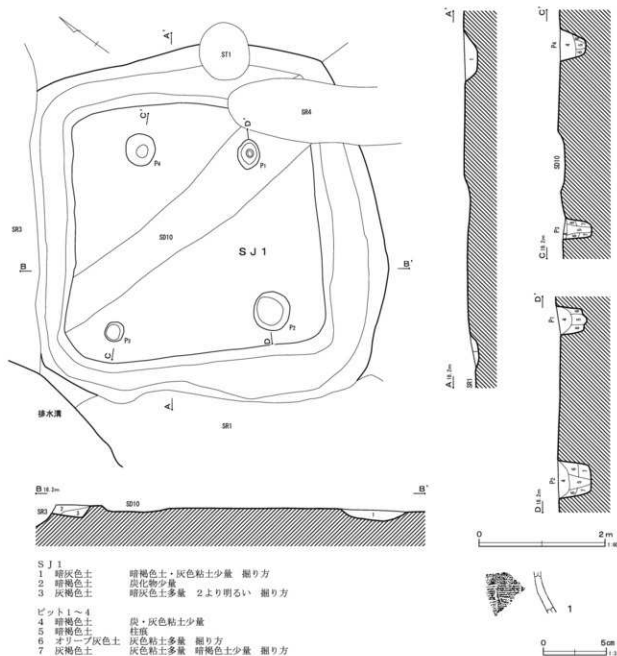
#### 第2号住居跡 (第17・18図)

調査区のほぼ中央、J-66グリッドに位置する。第1号住居跡が北西側2mにある。遺構の東側の大部分は調査区域外にかかり、西側も第4号方形周溝墓と重複し、本遺構の方が古い。遺構の北側を中心とする一角を三角形に検出できたのみである。また東西に遺構を貫く形で第10号溝跡が重複するが、本遺構の方が古い。

柱穴やカ跡といった施設は検出できなかった。主軸は北を基準とするとN-50°-Eを指す。残存している規模は、北東-南西方向で長軸5.60m、北西-南東方向で短軸5.35mを測る。平面形は判然としませんが、北西辺はやや外側に張るようである。床面に貼り床等は検出できなかった。覆土は粘性のある暗褐色土である。

掘り方は幅50~70cm、深さ10~15cmで、周溝状に検出した。埋め土は暗褐色粘土や炭化物を含む。遺物は床面直上から、弥生時代中期後半の甕形土器の破片が出土したのみである。1~3・5・6は口縁部の破片で端部は交互押捺により波状を呈している。いずれも風化が著しく、わずかにヘラナデの痕跡が見られるのみである。

4は5条1単位の波状文が上位に3段、下位に2段確認できる。上から下への施文である。外面には煤が付着している。



第16図 第1号住居跡・出土遺物

第2表 第1号住居跡出土遺物観察表 (第16図)

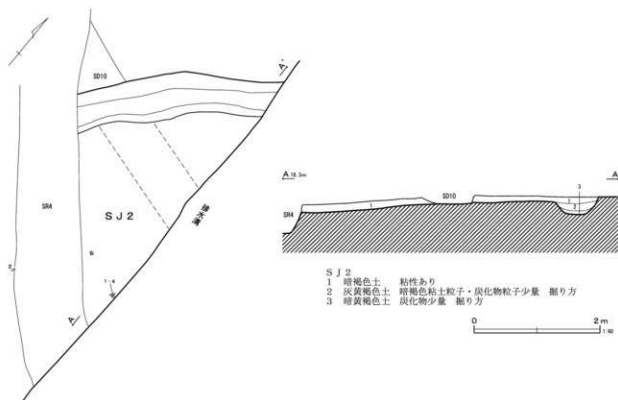
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	弥生	甕	—	3.4	—	ACEHI	5	普通	明黄褐色	内面煤付着	

### 第3号住居跡 (第19図)

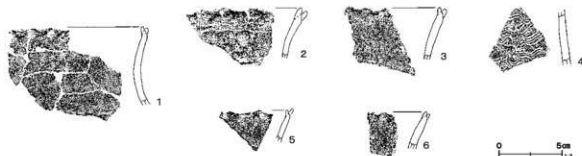
調査区の中央やや北寄りの、AH-67グリッドに位置する。遺構の東側は調査区域外にかかる。第8号住居跡が南西側1mにコーナーが接するように、西側3mに第7号住居跡がある。遺構の中

央が第7号方形周溝墓と重複し、全体に第3号高跡が重複する。本遺構の方が古い。

主軸は北を基準とするとN-9°-Wを指す。残存している規模は、南北方向で長軸8.20m、東西方向で短軸3.34mを測る。平面形は判然としな



第17図 第2号住居跡



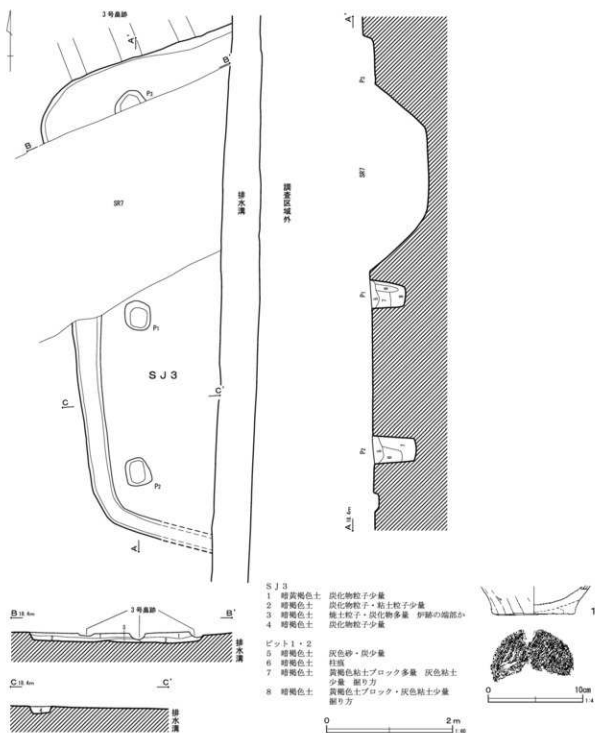
第18図 第2号住居跡出土遺物

第3表 第2号住居跡出土遺物観察表 (第18図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	弥生	甕	—	6.1	—	BCEGHIJ	5	普通	橙	No.2	
2	弥生	甕	—	4.0	—	EHI	5	普通	橙	No.1	
3	弥生	甕	—	4.2	—	AEGHI	5	普通	にぶい黄橙		
4	弥生	甕	—	4.3	—	AEGHI	5	普通	灰褐	外面埋付着 No.2	
5	弥生	甕	—	2.6	—	AEGIK	5	普通	黄褐色		
6	弥生	甕	—	2.9	—	CEGHI	5	普通	褐色	外面埋付着	

いが、南北辺は直線的で、東西辺は外側に張るようである。覆土は炭化物を含む暗褐色土、黄褐色土である。壁周溝は遺構の南半から検出された。

幅30～40cm、深さ10cmほどである。柱穴は検出されたものは3本だが、その位置関係から本来は6本柱と考えられる。円形というよりやや角張った



第19図 第3号住居跡・出土遺物

第4表 第3号住居跡出土遺物観察表 (第19図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	弥生	甕	—	3.0	7.9	A C E H I	50	普通	明褐色	外面煤付着	

隅丸方形に近い平面形である。長辺は44～48cm、短辺は40cmほどである。深さはP3がごく浅く10cm、P2・P3が55cmほどである。柱はいずれも引き抜かれている。柱痕はいずれも底面に達して

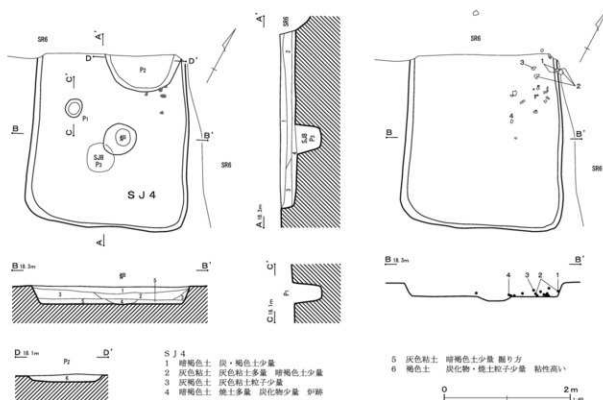
いない。覆土は6層が柱痕、7・8層が掘り方の埋め土、5層が引き抜き後の堆積層と考えられる。床面に腐床、掘り方等は検出できなかった。

遺物は僅少で、覆土中から弥生時代後期前半の壺・甕の破片が出土したのみである。1は甕の底部で、底面が非常に平坦に仕上げられている。円板に粘土が積み上げられて成形されている。外面

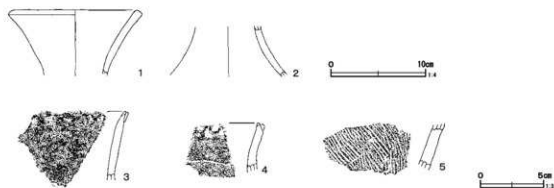
はヘラナデできれいに底部外周まで仕上げられている。外面に煤が、内面の見込み部分にコゲが付着する。

#### 第4号住居跡 (第20・21図)

調査区の中央やや北寄りのAH-66グリッドに位置する。第8号住居跡の中に掘り込まれる形に



第20図 第4号住居跡



第21図 第4号住居跡出土遺物

第5表 第4号住居跡出土文物観察表(第21図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	弥生	甕	(13.0)	7.0	—	ABGHIJ	20	普通	橙	N4	
2	弥生	甕	—	5.4	—	ABEGHI	25	普通	橙	N4・6	
3	弥生	甕	—	5.4	—	ABCDEFGHI	5	普通	にぶい褐	N5	
4	弥生	甕	—	4.0	—	BCGHI	5	普通	橙	N4・16	163-1
5	弥生	甕	—	3.5	—	A E H I	5	普通	にぶい黄橙		

なっている。第3号住居跡が北東側1mに、ほぼ主軸を同じくして、北西側1mに第7号住居跡がある。遺構の北側が第6号方形周溝墓と重複し、本遺構の方が古い。

平面形は遺構の北側が重複により不明だが、現状では長方形プランになると考えられる。葬跡は検出範囲のほぼ中央から検出された。葬跡を基準に考えると、主軸はN-24°-Wを指す。規模は遺存している範囲で南北6.76m、短軸6.54mを測る。葬跡は不整な円形で、長径54cm、短径48cm、深さ8cmを測る。覆土は焼土と炭化物を多量に含む暗褐色土である。

床面上のピットには、柱穴と掘り方がある。柱穴は1本のみ検出できた。P1はやや不整な円形である。径26~32cm、深さ48cmを測る。覆土は観察できなかった。

P2は、大型で不整な平面形である。判然としないが掘り方としておきたい。径1.24m、深さ56cmを測る。埋め土は炭化物、焼土を含む粘性の高い褐色土である。

遺物は少量で、遺構の北東側に集中する。弥生時代中期後半の壺・甕の破片が出土したのみである。図示したものは壺・甕の口縁部、胴部の破片である。1・2は同一個体の可能性がある。双方とも内外面の風化が著しく調整は不明である。口唇部に縄文とみられる痕跡がある。甕の口縁部は交互押捺が加えられている。3の外側は縦方向のヘラナデが施され上位に横位のナデが加えられている。3の内面、4の内外面は風化が著しく不

明である。5の外側には刷毛目、内側にはヘラナデが施される。2~4は胎土に粒子が多く、特に長石と考えられる白色粒子が多いのが特徴である。

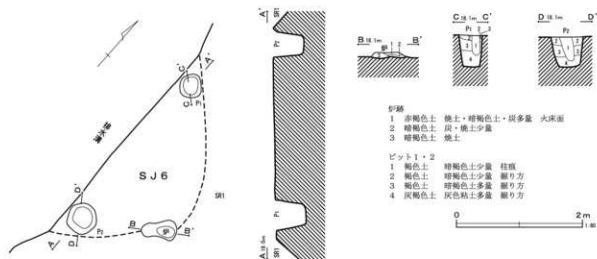
### 第6号住居跡(第22図)

調査区のほぼ中央、AK-66グリッドに位置する。第1号住居跡が北東側2.5m、第2号住居跡が北東側7mにある。竪穴の掘り込みは、第1号方形周溝墓と重複することにより不明である。葬跡と柱穴を検出したことにより住居跡と認定した。床面は地山と硬度も変わらず、貼床も確認できなかったため、周溝墓の外側にその広がりをもって住居跡の範囲を画することはできなかった。遺構の西側は排水溝にかり確認できなかったが、排水溝の西側にその痕跡を確認できなかったため、西壁はその中に取まってしまう可能性が高い。P1とP2を結んだ線が排水溝に平行することも、その蓋然性を高めていると考えられる。

柱穴(P1・P2)は検出されたものは2本だが、先の推定に立てば、その位置関係から本来は4本柱と考えられる。P1は隅丸方形に近く、径48cm、深さ50cmを測る。P2は不整円形で、径38cm、深さ48cmを測る。柱が引き抜かれているかは不明である。柱痕は明瞭で、いずれも底面に達していない。第1層が柱痕、第2~4層が掘り方の埋め土である。

遺物は出土していない。本遺構の時期は不明だが、他の住居跡との位置関係、推定される軸方向から弥生時代のものと考えられる。





#### 第7号住居跡 (第23・24図)

調査区の中央やや北寄りの、AH-66グリッドに位置する。遺構の西側は調査区西側の排水溝にかかる。遺構の北側、東側、南側を、それぞれ第10号、6号、7号方形周溝墓と重複し、そのいずれよりも本遺構の方が古い。遺構の中央の東西壁を検出するに止まった。

主軸は南北方向を基準とすると、 $N-24^{\circ}-W$ を指す。残存している規模は、南北方向2.60m、東西方向5.52m、深さ20cmを測り、本来は相当大型と考えられる。平面形は判然としないが、東西の各辺は直線的である。覆土は炭化物を含む暗褐色土である。

炉跡は遺構のほぼ中央から検出した。径1.28×0.96m、深さ20cmほどである。第1層は焼土で、第2層との層理面が良く焼け、火床面と考えられる。壁周溝は東側からのみ検出された。幅30cm、深さ5cmほどである。柱穴は2本を検出した。位置関係は非対称で本来の柱本数を推定することはできない。いずれも不整形である。P1は径30~38cm、深さ36cmである。P2は径28cm、深さ44cmである。覆土は観察できなかった。貼床、掘り方等は検出できなかった。

遺物は僅少で、弥生時代中期後半の壺・甕の破

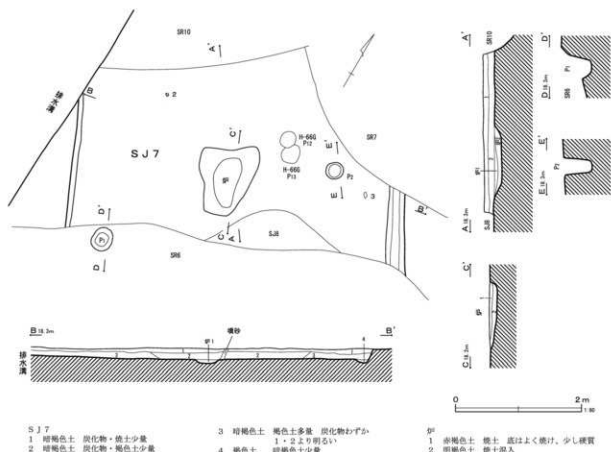
片が上・中層を中心に散在して出土したのみである。図示したものは壺の口縁部・底部、甕の口縁部・胴部である。1~3は壺である。双方とも器面の風化が著しく、調整は不明である。2の底面には木葉痕が認められる。多少底部が突出するため、やや新しい時期のものである可能性もある。3は外面に変形工字文が施され、RLの縄文が充填されている。4は甕の口縁部である。端部内面に粘土を貼付して複合口縁部としている。5は胴部の破片で、刷毛目調整である。煤が付着している。

#### 第8号住居跡 (第25・26図)

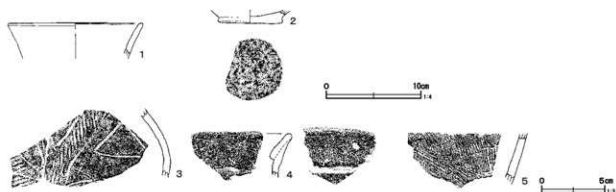
調査区の中央やや北寄りのAH-66グリッドに位置する。遺構の北側は第6号方形周溝墓と重複し、第4号住居跡が掘り込まれている。いずれよりも本遺構が古い。

主軸は、 $N-21^{\circ}-E$ を指す。規模は、主軸(長軸)方向5.88m、短軸方向4.80m、深さ20cmを測る。各辺ともやや丸みを帯びた隅丸方形である。覆土は灰色粘土を多く含む褐色土である。

炉跡は遺構のほぼ中央から検出した。径40cm、深さ5cmほどである。覆土は焼土があまり発達していない状態であった。炉跡と重複するP6は、本遺構よりも古い土壌である可能性もあるが、覆



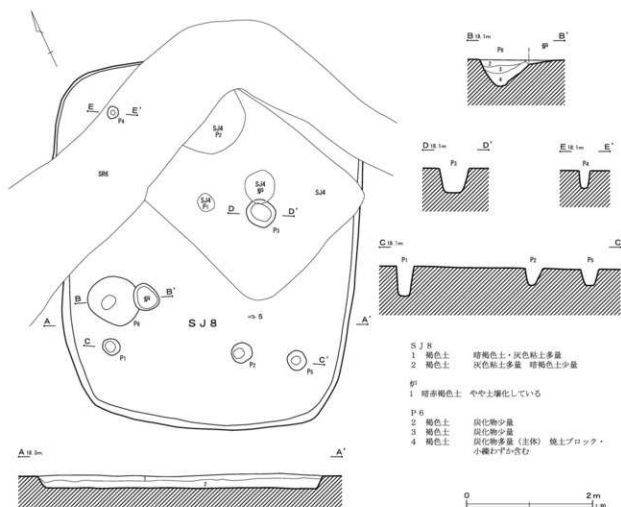
第23図 第7号住居跡



第24図 第7号住居跡出土遺物

第6表 第7号住居跡出土遺物観察表 (第24図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	弥生	甕	(13.8)	3.7	—	CEHIJK	20	普通	橙		
2	土師器	甕	—	1.4	5.3	ABCDEGHJ	85	普通	橙	No.1	
3	弥生	甕	—	5.1	—	ACDEGH	5	普通	橙	No.2	
4	弥生	甕	—	3.5	—	ACDEGHI	5	普通	にぶい黄褐	内面煤付着	
5	弥生	甕	—	4.0	—	AEHJK	5	普通	にぶい黄橙	外面煤付着	



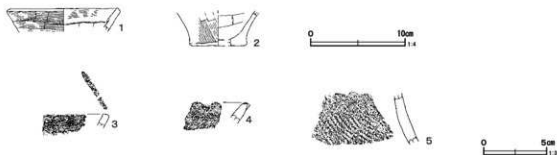
第25図 第8号住居跡

土中に炭化物、焼土を多く含み炉跡と関係する可能性を考え、本遺構の施設としたものである。径80×74cm、深さ40cmで、覆土は前述のように炭化物を含む褐色土である。特に第3層は炭化物を主体として焼土ブロック、小礫を含んでいることから、燃焼施設との関係を窺わせる。

柱穴は5本検出した。位置関係からはP1・4・5が主柱穴と考えられるが、P2・3もややずれるものの対称的な位置にあるため、何らかの構造材の役割を持っていた可能性もある。いずれも不整形である。P3が径46×40cm、深さ37cmでやや大型だが、それ以外は径30cm前後である。P2の径が小さいのは上位を第6号方形周溝墓により壊されているためである。深さはP1～P5

の順で54cm、28cm、37cm、32cm、34cmである。P1のみが深い。それ以外は30～40cmほどである。

遺物は僅少（33点）で、弥生時代中期後半の壺・甕の破片が覆土中から出土したのみである。図示したものは壺の口縁部・胴部・底部、甕の口縁部である。1・3・5は壺である。1は端部内面に粘土を貼付して複合口縁としている。内外面刷毛目調整である。3は口縁端部の破片で、端面に単節のRLが施される。5は頸部の破片で、器肉が厚い。外面に2段の粒の大きな単節RLが施される。2・4は甕である。2は底部である。底面はヘラナデが施され、平坦である。円板に粘土を積み上げて成形しており、底部から胴部下位にスムーズに移行している。外面に刷毛目、内面



第26図 第8号住居跡出土遺物

第7表 第8号住居跡出土遺物観察表 (第26図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	弥生	壺	(11.3)	2.5	—	EGH	20	普通	橙		
2	弥生	甕	—	3.7	(5.5)	A E G H I	10	普通	褐	外面赤変	
3	弥生	壺	—	1.1	—	A C E G I K	5	普通	明赤褐	P3	
4	弥生	甕	—	1.7	—	A E G H I J	5	普通	橙	P3	
5	弥生	甕	—	4.0	—	A E G H J K	5	普通	明赤褐		

にヘラナデが施される。内外面とも2次加熱を受けている。4は口縁端部の破片で、交互押捺が施されている。器面の風化が著しい。

## (2) 方形周溝墓

方形周溝墓は弥生時代中期後半から後期前半のものが入り出されている。

### 第3号方形周溝墓 (第27図)

調査区のほぼ中央、A I・A J-66グリッドに位置する。調査区域外にかかり、遺構の南西側を検出したのみである。南東溝が第1号住居跡と重複し、本遺構の方が新しい。第5号方形周溝墓が本遺構の北東溝を共有するため、本遺構の方が古いと考えられる。

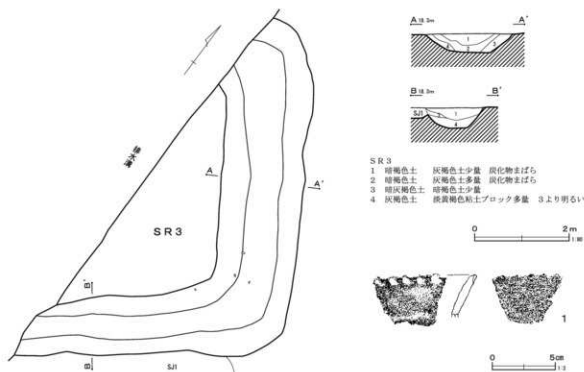
方台部は既に削平されており、盛土、埋葬施設は検出されなかった。

全体の平面形は直線的な辺を持つ隅丸方形である。方台部も同様の平面形を呈する。規模は北東側5.22m、南東側は検出している範囲で4.50mを

測る。北東側の数値がある程度確実なものであれば、小型といえるであろう。周溝は規模に比して幅広である。北東溝は最も広い部分で上場幅1.84m、下場幅0.88m、最も狭い部分で上場幅1.68m、下場幅0.70mを測る。断面形は大略逆台形である。深度は0.31～0.43mである。南東溝は最も広い部分で上場幅1.26m、下場幅0.5m、最も狭い部分で上場幅1.0m、下場幅0.4mを測る。断面形は大略逆台形である。深度は0.37～0.42mである。

覆土は、最下層に粘土ブロックを多く含む灰褐色土が堆積する。上・中層は灰褐色土、炭化物を含む暗褐色土、暗灰褐色土である。最下層の灰褐色土は方台部からの流れ込みで、盛土の崩落土である可能性がある。

遺物は、第1層の下位から層面にかけて、中層を中心に、壺・甕の破片が出た。図示したものは甕の口縁部のみである。口縁部には交互押捺が施される。内外面とも風化が著しく、調整は不明である。



第27図 第3号方形周溝墓・出土遺物

第8表 第3号方形周溝墓出土遺物観察表(第27図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	弥生	甕	—	3.3	—	A E G H I J K	5	普通	にぶい黄褐色		163-1

#### 第4号方形周溝墓(第28図)

調査区のほぼ中央、A J・A K-66グリッドに位置する。遺構の東側半分が調査区域外にかり、遺構の西側を検出したのみである。北西溝は第5号方形周溝墓と連結する。本遺構の方が古いと考えられる。第11号溝跡も同様に、北西溝と重複し、本遺構の方が古い。南西溝は第1・2号住居跡、第10・12号溝跡と重複しており、本遺構の方が新しい。

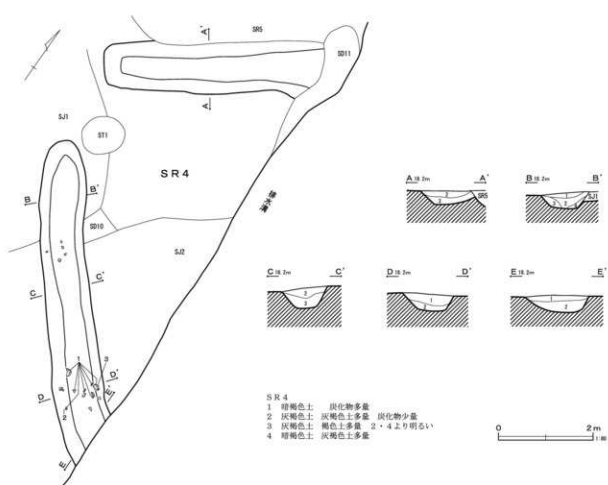
方台部は既に削平されており、盛土、埋葬施設は検出されなかった。

全体の平面形は直線的な辺を持つ方形である。方台部も同様の平面形を呈する。各周溝とも遺構の全体を調査していないため規模は不明である。現状で北西-南東側4.8m(北溝方台部側下場-西溝方台部側下場の排水溝際)、北東-南西側

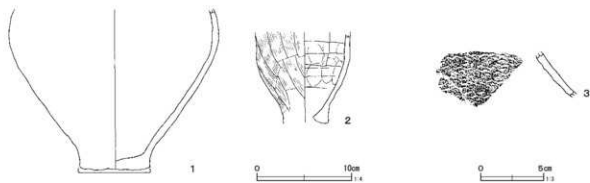
(西溝方台部側下場-北溝方台部側下場の排水溝際)で5.30mを測る。北西-南東側数値がある程度確実なものであれば、小型といえるであろう。

陸橋部は西側の1ヶ所を確認した。

各周溝の長さは、現状の確認で、北西溝が4.64m、南西溝が6.50mである。周溝はいずれも直線的で、幅狭である。北西溝は最も広い部分で上場幅1.04m、下場幅0.72m、最も狭い部分で上場幅0.90m、下場幅0.42mを測る。断面形は大略逆台形である。深度は0.25~0.30mである。南西溝は最も広い部分で上場幅1.10m、下場幅0.58m、最も狭い部分で上場幅0.9m、下場幅0.4mを測る。周溝は全体的に幅が狭く、細長い印象を受ける。断面形は大略逆台形である。方台部側が急で、周溝外側がやや緩やかな傾向がある。深度は0.14~0.46mである。



第28図 第4号方形周溝墓



第29図 第4号方形周溝墓出土遺物

第9表 第4号方形周溝墓出土遺物観察表 (第29図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	弥生	甕	—	16.9	7.4	A E G H I K	50	普通	にぶい・黄橙	No.10・11	
2	弥生	小型甕	—	9.6	—	E H I K	60	普通	にぶい・黄橙	No.3	107.2
3	弥生	甕	—	3.3	—	C E G H I J K	5	普通	赤褐色	No.10	163-1

覆土は4層に分層できる。方台部からの流れ込みである第2・4層が地山ブロックを多く含み、盛土の崩落土である可能性がある。第1～3層中には炭化物を含んでいる。

遺物は少量で、弥生時代後期前半のものである。北西溝から出土し、図示したものは南側の調査区際集中する。下層の第2層中から壺、甕・高坏の破片が出土した。図示したものは壺・甕の胴部下半、壺の肩部のみである。1は風化が著しく器表面がほとんど残っていない。底面も欠落している。2は小型の甕の胴部下半である。外面は刷毛目、内面は指頭による押さえ後ヘラナデが施される。丁度底部がすっぽり抜けるような状態になっている。3は外面に組紐を原体とする縄文が施文されている。1・3は砂粒が多い。

#### 第5号方形周溝墓 (第30区)

調査区のほぼ中央、A I・A J-66グリッドに位置する。遺構の東コーナーは調査区域外にかかる。周溝墓群の中央に位置し、他遺構との重複関係が多い。第3号方形周溝墓と南西溝を共有しており、本遺構の方が新しいと考えられる。第4号方形周溝墓北西溝と本遺構の南東溝が連結する。第10号方形周溝墓と同様に、古墳時代前期の第6号方形周溝墓に方台部北側を壊されている。また、第9号溝と重複し、本遺構の方が古い。

方台部は既に削平されており、盛土、埋葬施設は検出されなかった。

全体の平面形は直線的な辺を持つ方形である。方台部も同様で直線的な辺をもつ長方形である。

規模は北西-南東方向7.8m、西側を第3号方形周溝墓の外下場とすると北東-南西方向7.36mになる。

陸橋部は北・東・南側の3ヶ所を確認した。四隅切れの形態とされる。

周溝は、概して直線的で細長い。北東溝の第6号方形周溝墓との重複箇所は、第6号方形周溝墓

が掘削された際に崩落したものと考えられる。

北東溝は、最も広い部分で上場幅1.52m、下場幅0.60m、最も狭い部分で上場幅1.10m、下場幅0.34mを測る。断面形は大略逆台形である。深度は0.48～0.57mで深い。北西溝は、最も広い部分で上場幅1.38m、下場幅0.48m、最も狭い部分で上場幅1.02m、下場幅0.38mを測る。断面形は逆台形である。深度は0.27～0.53mである。南東溝は上場幅1.60m、下場幅0.7m、最も狭い部分で上場幅1.42m、下場幅0.36mを測る。断面形は大略逆台形で、深度は0.36～0.50mである。

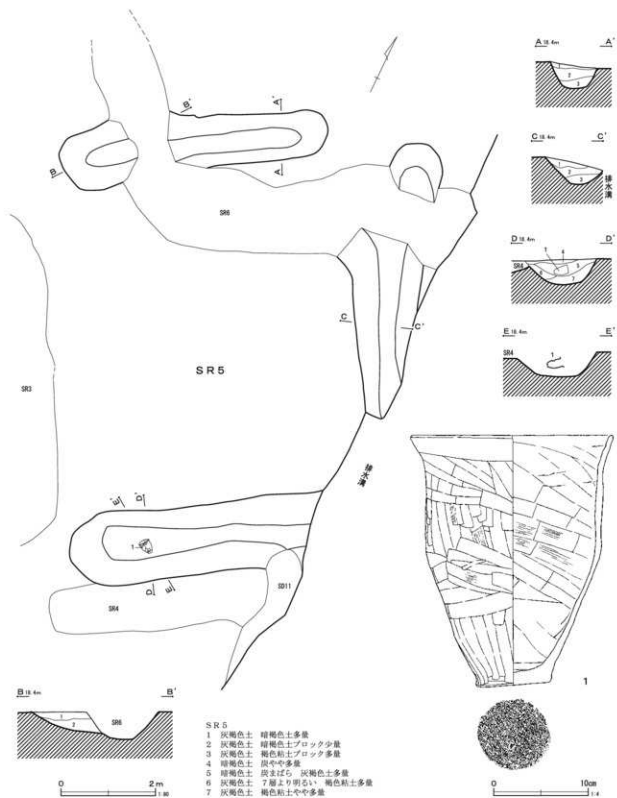
覆土は7層に分層できる。暗褐色土ブロックを含む灰褐色土、暗灰色土中心である。第4・5層には炭化物を含んでいる。第3層中には多量の粘土が含まれており、盛土の崩落土である可能性がある。

遺物は少量である。南西溝の第5層中から完形に近い甕が出土した。出土状況からは方台部から転落したものではなく、中層まで埋没した段階で据え置かれた可能性が考えられる。第10号方形周溝墓も同様に南溝から土器が出土しており、あるいは群全体として南側を意識した土器配置が行われている可能性が考えられる。また上層から弥生時代後期前半の壺・甕の破片が出土している。

1の甕は砲弾形のプロポーションを呈し、無文である。口縁部は丸く収められ、横位の強いナデが施される。底面は平坦である。内外面とも非常に丁寧な木口ナデが施され平滑に仕上げられている。底面はヘラケズリに近いナデが施される。内外面全体に煤が付着する。胎土に砂粒を多く含んでいる。

#### 第10号方形周溝墓 (第31・32区)

調査区の中央よりやや北側、A G・A H-66グリッドに位置する。遺構の西側は調査区域外にかかる。周溝墓群の最も北側に位置し、他遺構との重複関係が多い。南東溝が第7号住居跡の北側と



第30図 第5号方形周溝墓・出土遺物

第10表 第5号方形周溝墓出土遺物観察表 (第30図)

番号	種別	器種	L径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	弥生	甕	21.0	26.5	7.0	ACEGIK	95	普通	にぶい赤褐	内外面上部 煤付着 №1	106-1



重複し、本遺構の方が新しい。第7号方形周溝墓  
は方台部と周溝の東側が重複し、本遺構の方が古  
い。

方台部は既に削平されており、盛土、埋葬施設  
は検出されなかった。

全体の平面形は直線的な辺を持つ方形である。  
方台部も同様で直線的な辺をもつ長方形である。

規模は検出されている範囲で、北西-南東方向  
8.16m、北東-南西方向5.60mである。

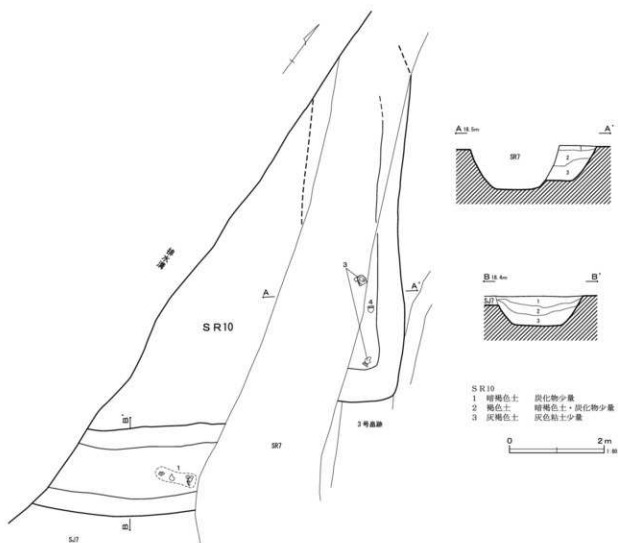
陸橋部は東側の1ヶ所を確認した。

第7号方形周溝墓との重複により、部分的にし  
か確認できないが、周溝は概して直線的で幅広で  
ある。

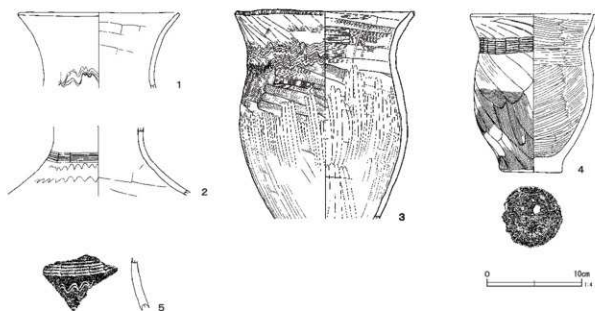
北東溝は、周溝の西側が検出されておらず、幅  
は不明である。断面形は逆台形になると考えられ  
る。深度は0.56~0.74mで深い。北西溝は、最も  
広い部分で上場幅1.88m、下場幅1.05m、最も狭  
い部分で上場幅1.80m、下場幅0.98mを測る。断  
面形は逆台形である。深度は0.38~0.64mである。  
南東溝は上場幅1.60m、下場幅0.7m、最も狭い部  
分で上場幅1.42m、下場幅0.36mを測る。断面形  
は大略逆台形で、深度は0.36~0.50mである。

覆土は自然堆積で、炭化物、暗褐色土を含んで  
いる。暗褐色土ブロックを含む灰褐色土、暗灰色  
土である。

遺物は少量で、北東溝の床面から弥生時代後期



第31図 第10号方形周溝墓



第32図 第10号方形周溝墓出土遺物

第11表 第10号方形周溝墓出土遺物観察表 (第32図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	弥生	壺	16.8	8.0	—	E H I K	20	普通	にぶい黄橙	No.1	
2	弥生	壺	—	7.3	—	A H I J K	30	普通	にぶい黄橙		108-3
3	弥生	甕	18.7	22.0	—	A C E I J K	70	良好	灰褐	No.2・4	105-2
4	弥生	甕	12.9	16.8	6.1	A C E H I K L	90	普通	にぶい褐	No.3	106-4
5	弥生	甕	—	4.1	—	H I K	5	普通	にぶい黄橙		163-1

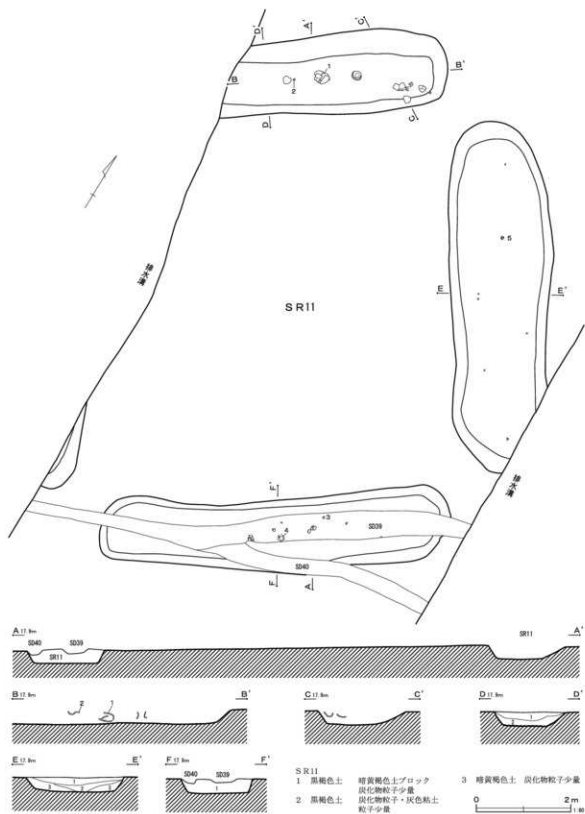
前半の壺・甕、(3・4)古墳時代前期の壺の破片が出土している。南東溝の確認面からは、1の壺が出土している。壺(1・2・5)は、頸部から肩部にかけて簾状文、波状文が施される。1の波状文は4条1単位の右回転のものだが、振幅、ピッチとも不規則である。2は上位に5条1単位の右回転の簾状文が、その下位に波状文が施される。波状文は最上位と最下位の櫛しか確認できない。5は上位に5条1単位の簾状文が、下位に波状文が施されているが、上の2条しか明瞭に確認できない。その下位にもう一つ波状文が見えることから、2段以上の施文の可能性がある。甕(3・4)も同様に簾状文と波状文が施されている。3は口唇部に浅い刻み目が施される。頸部には4条1単位の右回転の波状文が2段施されるが、

振幅、ピッチとも不規則である。内外面の刷毛目は木コナデに近いものである。4は頸部に7条1単位の右回転の簾状文が施される。ピッチは不規則である。底面の調整はヘラケズリに近く、非常に平坦である胎土中に小礫や白色粒子が多い。

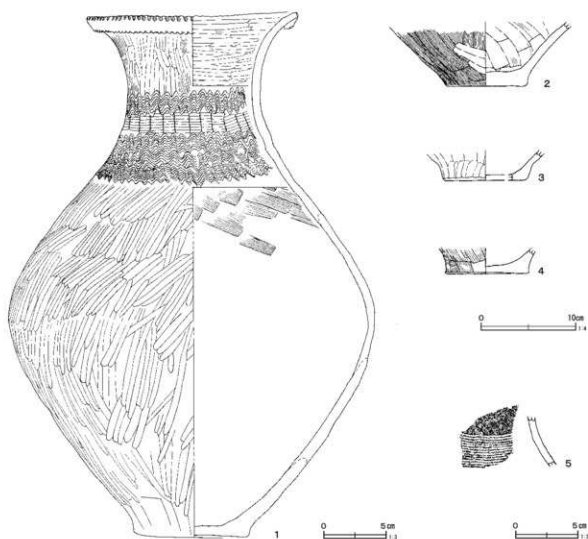
#### 第11号方形周溝墓 (第33・34図)

調査区中央よりやや南側のAL・AM-66グリッドに位置する。遺構の東西は調査区域外にかかる。南東溝が第39・40号溝と重複するが、本遺構の方が古い。調査区中央の周溝墓群よりやや距離をおいて造られている。同時期で最も近い第4号方形周溝墓からも15mほどの距離がある。

方台部は既に削平されており、盛土、埋葬施設は検出されなかった。



第33図 第11号方形周溝墓



第34図 第11号方形周溝墓出土遺物

第12表 第11号方形周溝墓遺物出土観察表 (第34図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	甕生	壺	16.4	41.2	8.7	A D E I	90	良好	にぶい橙	No.19・22	105-4
2	甕生	壺	—	6.7	8.1	A B E G H I K	85	普通	にぶい橙	内面煤付着 No.18	108-4
3	甕生	甕	—	3.2	8.4	A B E G H I K	20	普通	にぶい橙	AM66G No.10	
4	甕生	甕	—	2.8	8.5	A E G H I J K	80	普通	にぶい橙	AM66G No.13	
5	土師器	壺	—	4.0	—	A E H I J K	5	良好	灰	AL66G No.2	163-1

全体の平面形は直線的な辺を持つ正方形である。方台部も同様で直線的な辺を持つ。

規模は北西—南東方向8.4m、北東—南西方向も同規模である。

陸橋部は4ヶ所あり、所謂四隅切れである。各周溝は直線的だが、幅広である。各周溝の長さは

北東溝から時計回りに6.93m、7.45m、2m弱、4.64mである。

北東溝は、最も広い部分で上場幅2.20m、下場幅1.84m、最も狭い部分で上場幅1.90m、下場幅1.40mを測る。断面形は逆台形である。深度は0.21～0.31mで、幅に比して浅い。南東溝は上場

幅1.52m、下場幅1.12m、最も狭い部分で上場幅1.30m、下場幅0.90mを測る。断面形は逆台形だが、方台部側がやや急である。深度は0.25～0.35mである。北西溝は、最も広い部分で上場幅1.72m、下場幅1.02m、最も狭い部分で上場幅1.50m、下場幅0.30mを測る。断面形は逆台形である。深度は0.27～0.30mである。

覆土は自然堆積である。暗黄褐色土ブロック、炭化物を含む黒褐色土、暗黄褐色土である。第3層は暗黄褐色土で地山由来の土層と考えられるが、Eベルトで三角堆積を示しており、方台部側からの流れ込みとすることはできない。壁面の崩落土であろうか。

遺物は弥生時代後期前半のもので、僅少である。南東溝と北西溝から集中して出土している。北西溝からは1・2が出土している。1の壺は口縁部が外れた状態で、床面から若干浮いて出土している。2の壺底部は確認面近くからの出土である。南東溝からは中層から3・4が出土している。

1の壺は胴部の一部を欠失するが、全形が明らかである。複合口縁で、上下端部に棒状の工具により刻み目が施される。外面全体に、ヘラナデ後ヘラ磨きが施される。頸部には上位に波状文と籐状文、その下位に波状文が3段施される。上位のものは8条1単位、右回転の籐状文施文後、上位に8条1単位、右回転の波状文が施されている。下位の波状文は同様の工具で、上から下に3段施されている。内面は剥離が著しい。全体の色調は白色に近い。砂粒を多く含んでいる。

5は壺の頸部である。6条1単位、欄楯直線文が2段以上施されている。2・3は壺の底部である。底面がヘラケズリに近い状態で平坦に仕上げられている。3・4は内面が全て剥離している。2の内面には煤が付着する。2・4は胎土に砂粒を多く含んでいる。

そのほかに壺、甕の破片が出土している。

### (3) 土器棺墓

本遺跡からは土器棺墓が2基検出されている。30m以上離れており、相互に独立した単独のものと考えられる。

#### 第1号土器棺墓 (第35・36図)

調査区のほぼ中央、A J-66グリッドに位置する。調査区の中で最も構構が密集した箇所である。第4号方形周溝墓の西コーナーに当たり、同時期の可能性もある。

全体の平面形は不整形である。規模は径80～90cmで、深さは24cmである。土器の埋納されている口縁部の方向を主軸方向とすると、N-131°Wになる。覆土は2層が粘土ブロックを多く含み、埋め戻しと考えられる。

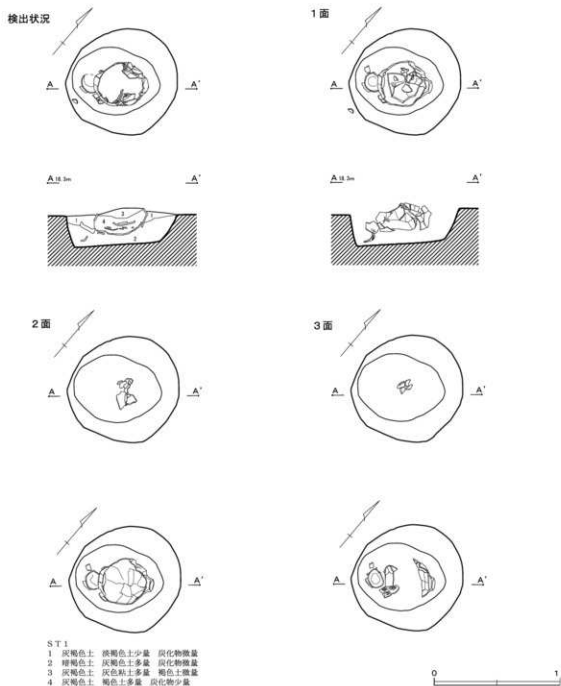
覆土中からは、埋葬に関連する遺物は出土しなかった。

土器棺は次の方法で埋納されている。

①まず、土壌内に第2層の暗褐色土を半ばまで入れる。②1の壺の口縁部を外し、それを横位に据え、更に横にした胴部の上半分を欠いている。③その後、他の壺の底部(3)で口縁部を塞ぎ、胴部は削り取った破片を裏返しにして他の壺(2)とともに蓋をしている。

1の壺は棺身に使用されたものである。縦長の胴部の上下を削り取っている。胴部最大径は33.0cmを測り、現状の器高でも34.8cmを測ることから相当大型になるものと考えられる。外面の調整は基本的に刷毛目で、上位は縦方向、中位以下は横方向である。内面も刷毛目が施され、その上位を斜めにナデあげている。器面の風化が進み、調整が見えない部分も多い。

2の壺は胴部の蓋に使用されていたものである。胴部下位の破片である。外面は赤彩される。底部が大きく、1と同様の器形になるものと考えられる。縦位のヘラ磨き後、中位に横位のナデが施される。内面は中位に横位の刷毛目が見られるほかは観察できない。



第35図 第1号土器棺墓

3の壺は蓋として使用されたものである。1・2に比して小型である。底部が大きく、平坦で器形としては同様のものになると考えられる。外面は胸部中位が横ナデ、下位が縦位の刷毛目もしくはヘラナデが下から上に施される。内面はナデが施される。底面はヘラケズリに近いヘラナデが施

される。2と胎土が同様で、1.5cm大の礫が多く含まれている。

#### 第2号土器棺墓 (第37～39図)

調査区の中央より北側の、A G-66グリッドに位置する。第7号方形須溝墓の方台部に位置する

が、本遺構の方が古く、直接の関係はないと考えられる。西側1.5mに第10号方形周溝墓があり、ほぼ同時期であることから何らかの関係がある可能性が高い。第4号溝跡とも重複するが、本遺構の確認面まで掘り込みが達していない。

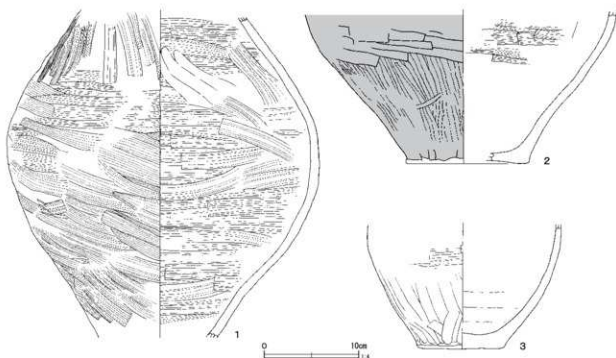
全体の平面形は不整な長楕円形である。土器の埋納されている口縁部の方向を主軸方向とすると、N-130°-Wになる。規模は径0.97×0.73mで、深さは27cmである。覆土は炭化物と灰色粘土を含む褐色土で自然堆積と考えられる。第3層は埋め戻しの所見が認められないが、土器の出土状況からは埋納する前に入れてあったものと考えられ、埋め戻しなのであろう。

覆土中からは、埋葬に関連する遺物は出土しなかった。

土器棺は次の方法で埋納されている。

①土壌の下位に第3層を入れる。②3を横位に土壌底に据え、横にした胴部の上半分を欠く。③遺体を入れる。④他の壺の胴部下半(1)で蓋をする、⑤合わせて口縁部にも他の壺の底部(2)で蓋をする。

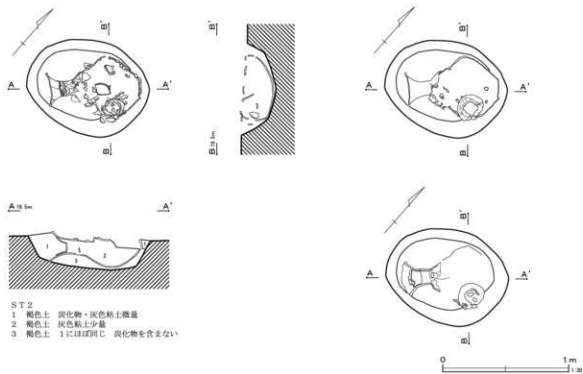
1の壺は大型で棺身として使用されたものである。器高70.5cm、最大径46.3cmにも及ぶ。胴部中位に穴があげられている。胴部中位に最大径を持ち、長胴気味である。なだらかに口縁部に移行し、長い頸部からラッパ状に開く口縁部に至る。口縁部は端部下端に粘土を貼付する幅の狭い複合口縁である。断面形はやや丸みを帯びる。端面に何らかの文様が施されている可能性もあるが、不明瞭である。端部上下に左方向から棒状工具による押



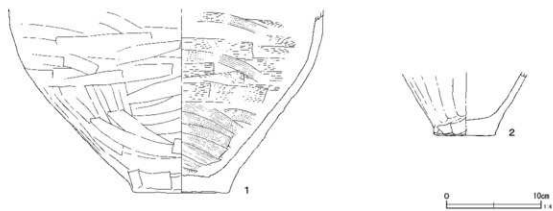
第36図 第1号土器棺墓出土遺物

第13表 第1号土器棺墓出土遺物観察表(第36図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	甕生	壺	—	34.8	—	H I L	90	普通	にぶい橙	No.1・4・15他	103-6
2	甕生	壺	—	16.2	12.9	E H L	70	やや不良	赤褐	外面赤彩 No.1・2・5・7・11・13・14	104-2
3	甕生	土器棺	—	13.2	8.2	C E G H I K L	70	普通	にぶい橙	No.27・28・31・35	104-1



第37图 第2号土器棺墓

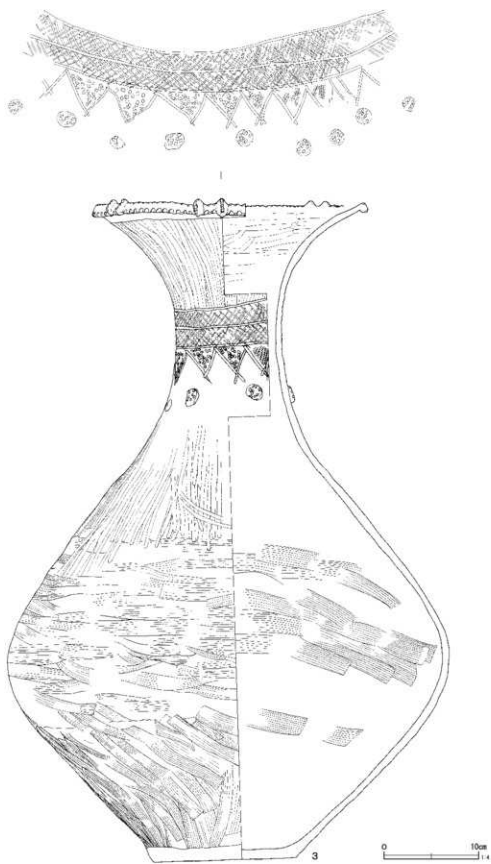


第38图 第2号土器棺墓出土物(1)

第14表 第2号土器棺墓出土物観察表(第38・39图)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	弥生	壺	—	19.5	10.1	D H I L	50	やや不良	にぶい橙	No.5・16	105-1
2	弥生	甕	—	6.8	6.6	I K L	90	不良	明赤褐	No.18	104-5
3	弥生	壺	28.4	70.5	15.0	C D E L	60	普通	にぶい橙	No.17	104-3





第39图 第2号土器棺墓出土遗物(2)

捺が施される。頸部には沈線区画の内部に細い沈線による格子目状の文様が施されている。更にその下位に9単位の鋸歯文を施文する。この鋸歯文の中には縄文が充填されるものと、丸い刺突が施されるものがある。鋸歯文の下位には上位と同様の円形の刺突を充填した径1.8cmの円形貼付文が8単位貼付されている。

胴部は横位のヘラナデ後斜め方向のヘラ磨きが施される。内面は平滑でヘラナデが施される。口縁部の内面には更に横位のヘラ磨きが加えられている。肩部と胴部に黒斑が多数認められる。色調は黄白色を呈する。優品である。

2は蓋として使用された胴部下位の破片である。復元最大径は33.3cmで、第1号土器棺の2と類似する個体である。底部が大きく、やはり胴部が縦長の器形になるものと考えられる。下半は縦位のヘラナデもしくは不明瞭な刷毛目、中位に横位の刷毛目もしくはヘラナデが施される。内面は中位に横位の刷毛目が見られるほかは観察できない。

3は栓として使用された甕の底部である。他の資料と同様で、底部は平坦である。内外面とも風化が著しく、調整はほとんど見えない。外面は縦位のヘラナデもしくはヘラ磨き、内面も同様の調整で見込みの部分は剥落している。底面はヘラケズリに近いヘラナデが施される。

#### (4) 溝跡

弥生時代の溝跡は第10・12・47号溝跡である。いずれも調査区(ほぼ中央、A J・A L-66グリッド付近)に分布している。特に第12・47号溝跡以南には住居跡が分布しておらず、区画溝の性格をもつ可能性がある。

#### 第10号溝跡(第40図)

調査区のほぼ中央、A J-66グリッドに位置する。第1・2号住居跡、第4号方形周溝墓と重複し、そのいずれよりも古い。

溝の軸方向はN-75°-Wである。他遺構との重複が著しいため検出された長さは6.04mにとどまる。幅0.6~0.9m、深さは7~9cmとごく浅い。覆土の様相は確認できなかった。

遺物は弥生土器と思われる細片が1点出土しているのみである。

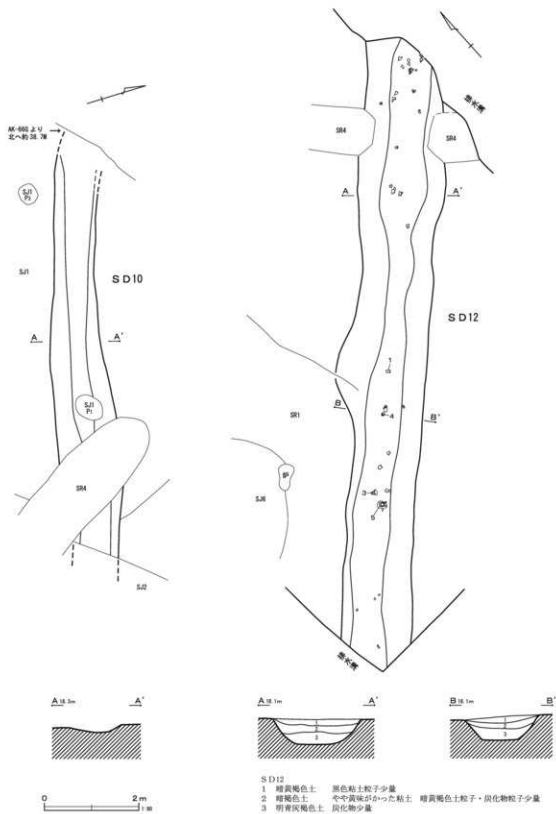
#### 第12号溝跡(第40・41図)

調査区のほぼ中央、A J・A K-66グリッドに位置する。第4・6号方形周溝墓と重複し、本遺構の方が古い。

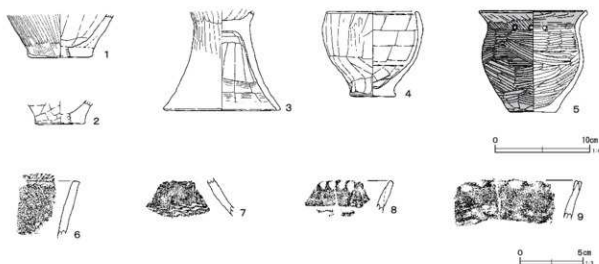
溝の軸方向はN-50°-Eである。調査区を斜めに横切る形になる。検出された長さは11.60mである。幅1.4~1m、深さは43~59cmで、東側の方が深い。覆土は最下層がグライ化しているが、暗褐色土・暗黄褐色土で構成され、自然堆積である。

遺物は弥生時代中期後半のもので、散在している。壺(6)は端面にL Rの縄文が施されるものである。胴部の破片(7)は、組紐状の原体により施文されるものである。底部周辺の破片(1)は外面に縦位のヘラ磨きが施される。作りが丁寧で、底面が平坦である。甕の口縁部(9)には交互押捺が施される。内外面に煤が付着する。底部はヘラナデが施され、底面は平坦である。高坏(3)は大きくラッパ状に開くもので、器壁が厚い。壺の底部に脚部を付けたような形態である。内外面とも風化が著しく、調整は部分的にしか確認できない。外面赤彩の可能性もある。鉢は頸部の有無がある。4は底部が突出するもので、胴部は凹凸が著しい。内外面ともヘラナデが施され、底面は平坦である。5は頸部があるので、対称位置に2個一対の径5mmの穿孔がある。内外面ともヘラ磨きが施され、底面は平坦である。

8は吉ヶ谷式の壺の口縁部である。端部外側に左方向から棒状工具による押捺が施される。混入の可能性が高い。



第40図 第10・12号溝跡



第41図 第12号溝跡出土遺物

第15表 第12号溝跡出土遺物観察表 (第41図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	弥生	壺	—	4.6	(6.0)	B E G I K	40	普通	にぶい・橙	AK66G No.16	
2	弥生	甕	—	2.5	(5.0)	D E H I	30	普通	にぶい・黄橙	外面刷—底部煤付着 AK66G	
3	弥生	高坏	—	10.6	(12.0)	A B C E I J K	80	普通	明赤褐	AK66G No.8	122-5
4	弥生	鉢	(9.2)	9.0	4.4	A C E G H I K	40	普通	にぶい・黄橙	No.14 AK66G No.13	122-6
5	弥生	鉢	11.2	10.7	4.9	A B E G H I K	90	普通	明褐色	赤彩 下半煤付着 No.6	122-4
6	弥生	壺	—	4.1	—	A B E H I J K	5	普通	明赤褐	AK66G	
7	弥生	壺	—	2.9	—	C E I J K	5	普通	灰黄褐		163-1
8	弥生	壺	—	2.5	—	A B C E G H I J	5	普通	にぶい・橙		163-1
9	弥生	甕	—	3.0	—	A D E H I	5	普通	黒褐		

2・9以外は、いずれの土器も胎土中に白色粒子を多く含んでいる。

#### 第47号溝跡 (第42・43図)

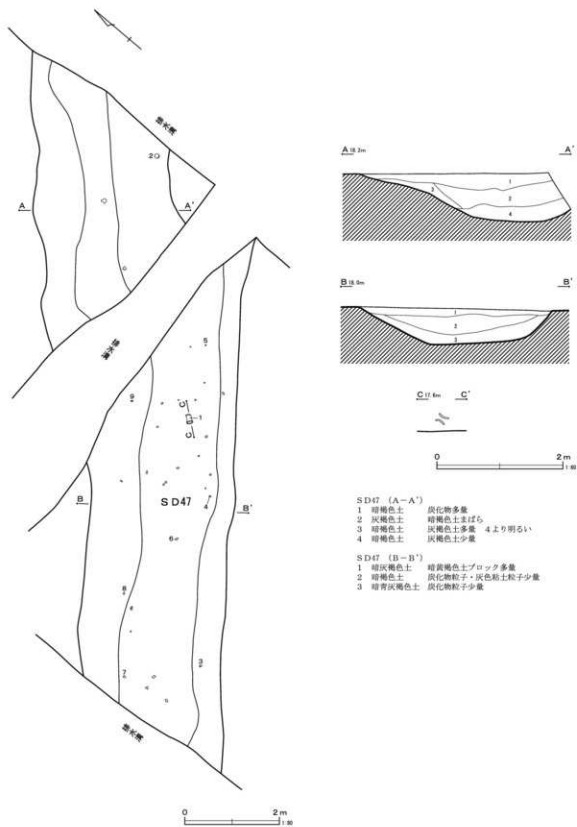
調査区の中央よりやや南側の、A K・A L-66グリッドに位置する。

溝の軸方向はN-49°-Eである。調査区を斜めに横切る形になる。検出された長さは12.94mである。幅3.0~4.3m、深さは46~80cmで、東側の方が深く、大規模である。覆土は排水溝の東側で4層、西側で3層に分層できる。自然堆積で、暗褐色土・灰褐色土で構成される。排水溝の東西で様相が異なり、西側がグライ化している傾向が強い。

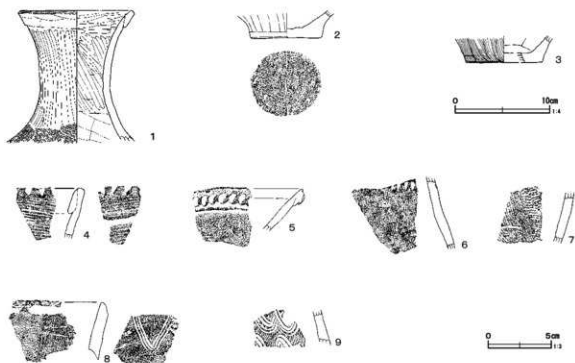
この遺構より南側からは弥生時代の遺構・遺物は検出されておらず、断面形はなだらかな台形だが、規模などから、環濠あるいは区画溝の可能性が考えられる。

遺物は弥生時代中期後半のもので、散在して3層を中心に出土している。

壺(1)は複合口縁で細長い器形のものである。口縁部端面にR Lの縄文が施される。肩部にもR Lの縄文が施される。2・3は底部で、2は底部外周に刷毛目、3はヘラナデが施される。4は内面端部に粘土が貼付され、複合部状に作られるものである。端部にはヘラ状工具による刻み目が左方向から施されている。内外面には横位の刷毛目が施される。5は端部に粘土が継ぎ足される形で



第42図 第47号清跡



第43図 第47号溝跡出土遺物

第16表 第47号溝跡出土遺物観察表（第43図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	甕生	壺	11.7	13.8	—	A E G I J K	90	良好	靑	No.31	147-1
2	甕生	甕	—	2.7	6.9	A E H I J K	90	良好	褐灰	No.1	
3	甕生	甕	—	2.8	(8.0)	A C E H I	5	普通	にぶい黄靑	No.26	
4	甕生	甕	—	3.9	—	A C E H I	5	良好	にぶい黄靑	No.16	163-2
5	甕生	壺	—	3.3	—	C E H I K	5	普通	赤	赤彩 No.4	163-2
6	甕生	壺	—	6.0	—	A E G H I	5	普通	褐灰	No.22	
7	甕生	壺	—	4.1	—	G H I J K	5	普通	にぶい赤褐	No.27	163-2
8	甕生	甕	—	4.6	—	A I J K	5	普通	灰褐	No.23	163-2
9	甕生	甕	—	2.8	—	A H I K	5	普通	黒褐	No.10	163-2

複合口縁となるものである。口縁部端面にL Rの縄文が施され、外側の端部には断面が丸い工具による左からの押捺が施される。内外面とも赤彩される。6は肩部の破片で、左方向からヘラ状工具による押捺が施されている。7は単節LRの縄文が施されるが不明瞭である。8は口縁部の破片だ

が、端部は欠損し、割れ口が壺口縁状になっている。外面に単節LRの細縄文によって山形文を施し、内面には3条1単位の山形文が施される。9は胴部の破片で、5条1単位の波状文が左回りに施される。波状文は太い工具で施され深い。白色粒子を多く含んでいる。

## 2. 古墳時代

### (1) 方形周溝墓

方形周溝墓は調査区の中心から北側にかけて3基検出されている。

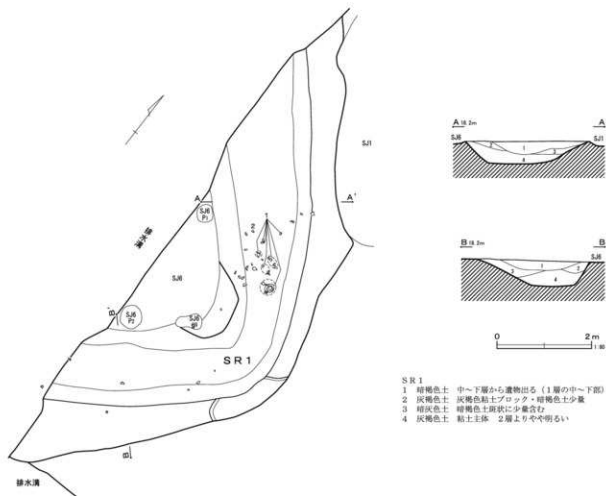
#### 第1号方形周溝墓 (第44・45図)

調査区のほぼ中央、A J・A K-66グリッドに位置する。調査区域外にかかり、遺構の南西側を検出したのみである。方台部からは第6号住居跡が検出されている。本遺構のほうが新しい。又第12号溝跡と重複するが、本遺構の方が新しい。

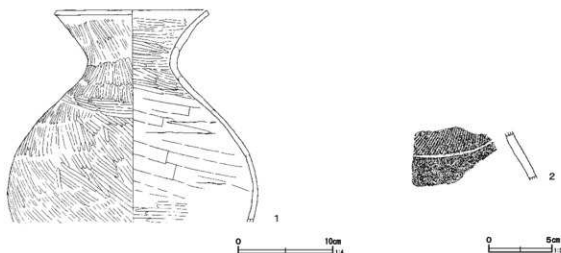
方台部は既に削平されており、盛土、埋葬施設は検出されなかった。

全体の平面形は直線的な辺を持つ隅丸方形である。

方台部はごく一部のみしか検出されていないため確実ではないが、同様の平面形を呈するものと考えられる。規模は現状で、北東溝4.32m、南東溝3.56mを測る。北東溝は幅広く、最も広い部分で上場幅2.84m、下場幅1.30m、最も狭い部分で上場幅2.05m、下場幅0.64mを測る。断面形は大略逆台形で、方台部側の立ち上がりが急で、外周側は緩やかに立ち上がる。深度は0.38~0.50mである。南東溝も同様に幅広く、最も広い部分で上場幅2.46m、下場幅1.0m、最も狭い部分で上場幅2.28m、下場幅0.72mを測る。断面形は大略逆台形で、方台部側の立ち上がりが急で、外周側は緩やかに立ち上がる。深度は0.38~0.50mである。



第44図 第1号方形周溝墓



第45図 第1号方形周溝墓出土遺物

第17表 第1号方形周溝墓出土遺物観察表(第45図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(15.8)	22.5	—	ABCEHIJK	45	普通	にぶい黄橙	No.4・5・9	107-1
2	土師器	壺	—	4.0	—	EHIK	5	普通	にぶい橙	No.6	163-1

覆土は、粘土ブロックを含む暗褐色土・暗灰色土である。特に方台部からの流れ込みと考えられる2・4層中には多量の粘土が含まれており、盛土の崩落土である可能性がある。

遺物は、北東溝上～中層にかけて多く出土した。時期的には弥生時代中期から古墳時代前期まで幅があり、壺・甕・台付甕・高坏の破片が出土している。図示したものは壺1点と、壺の胴部破片である。1の壺は口縁端部に面をもち、頸部が緩やかに括れるものである。2は単節LRの縄文を浅い沈線で区画している。胎土に長石と思われる白色粒子を多く含んでいる。

#### 第6号方形周溝墓(第46・47図)

調査区の中央からやや北寄りのAH・AI-66グリッドに位置する。東西コーナーが調査区域外にかかる。第7・8号住居跡、第5号方形周溝墓と重複し、そのいずれよりも新しい。

方台部は既に削平されており、盛り土、埋葬施設は検出されなかった。

全体の平面形は直線的な辺を持つ隅丸方形であ

る。方台部も同様の形態である。周溝は全周する。規模は、北西-南東方向8.80m、北東-南西方向9.0mを測る。北東溝、南西溝は幅が狭く、北西溝、南東溝は幅広である。また断面形はいずれも、方台部側の立ち上がりが急で、外周側は緩やかに立ち上がるものである。

北東溝は幅が狭く、最も広い部分で上場幅1.1m、下場幅0.64m、最も狭い部分で上場幅0.80m、下場幅0.20mを測る。深度は0.27～0.38mである。底面は平坦で、溝の南側と北コーナーが若干深くなる。北西溝は幅広で、最も広い部分で上場幅1.60m、下場幅0.86m、最も狭い部分で上場幅1.32m、下場幅0.38mを測る。深度は0.43～0.50mである。底面は平坦で、やはり北コーナーへ向かって深くなっている。南西溝は幅が狭く、最も広い部分で上場幅0.90m、下場幅0.54m、最も狭い部分で上場幅0.90m、下場幅0.26mを測る。深度は0.61～0.72mである。底面は平坦で、南コーナーの北側に最も深い部分がある。南東溝は幅広で、最も広い部分で上場幅1.38m、下場幅0.54m、最も狭い部分で上場幅0.90m、下場幅0.36mを測る。深



度は0.61～0.72mである。底面は平坦で、やはり南コーナーの手前に最も深い部分がある。

覆土は、灰褐色土を含む暗褐色土・褐色土で構成され、自然堆積である。特に方台部からの流れ込みと考えられる4層中には多量のブロックが含まれており、盛土の崩落土である可能性がある。

遺物は、覆土中から少量(73点)出土した。弥生時代後期前半の壺・甕・高坏等だが、いずれも風化した細片で実測できるものはない。これらの遺物は、本遺構に帰属しない可能性が高い。

#### 第7号方形周溝墓(第48・49図)

調査区北側のAF・AG・AH-66グリッドに位置する。遺構の東側が調査区域外にかかる。第3号住居跡、第10号方形周溝墓、第2号土器棺墓、第7号溝跡、第3号竪溝、第6号溝跡と重複し、第6号溝跡は本遺構より新しく、その他は古い。

方台部は既に削平されており、盛り土、埋葬施設は検出されなかった。

全体の平面形は直線的な辺を持つ隅丸方形である。方台部も同様の形態である。周溝は全周する。規模は、北西-南東方向11.60m、北東-南西方向9.60mを測り、今回検出された方形周溝墓で最大である。周溝は西溝がやや幅が狭い他は幅広くである。断面形はいずれも逆台形である。

北溝は、最も広い部分で上場幅2.54m、下場幅1.62m、最も狭い部分で上場幅1.70m、下場幅0.80mを測る。深度は0.73～0.86mである。底面は平坦で、北西コーナーへ向かって浅くなる。東端に溝中土壌がある。西溝は、最も広い部分で上場幅2.10m、下場幅1.20m、最も狭い部分で上場幅1.50m、下場幅0.80mを測る。深度は0.74～0.91mである。底面は平坦で、南西コーナーへ向かって深くなっている。南溝は、最も広い部分で上場幅2.84m、下場幅1.42m、最も狭い部分で上場幅2.64m、下場幅0.90mを測る。深度は0.88～1.00mである。底面は平坦で、東側へ向かって深くなっている。

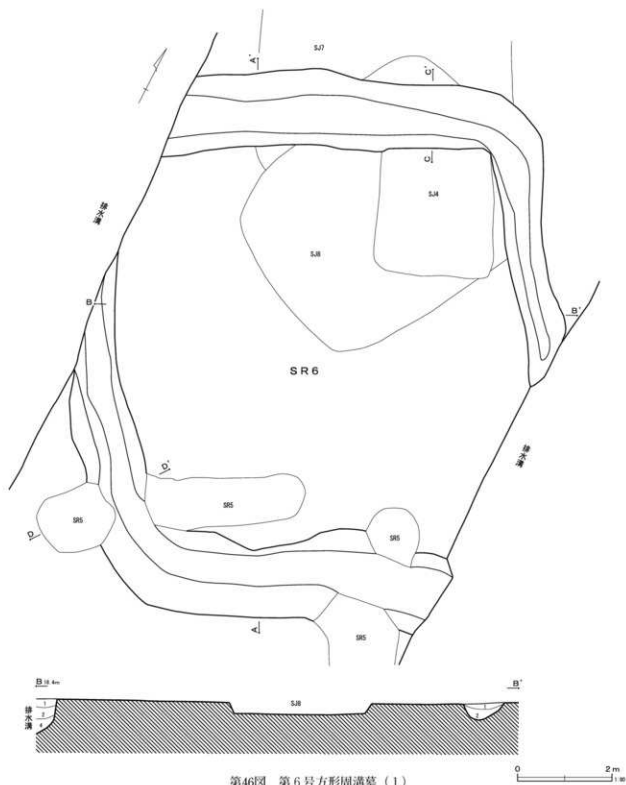
北溝に設けられた溝中土壌は周溝の軸方向に沿って設けられている。長軸1.1m×0.62mで、深さは20～30cmで、西側が一段浅くなっている。溝中土壌掘削の時点は明らかでないが、3層を切り込むことから、周溝埋没の途中で掘り込まれたものと考えられる。覆土は、オリブ褐色土・灰褐色土で、特に埋め戻しの痕跡は見られない。

覆土は、灰褐色土・砂を含む暗褐色土、褐色土で構成され、自然堆積である。特に方台部からの流れ込みと考えられる。6・7・11層中には多量の灰褐色粘土ブロックが含まれており、盛土の崩落土である可能性がある。

遺物は、北溝東側から破片の状態で出土している。西溝は北側に一定の間隔を置いて、南溝は南西コーナーと調査区際近くに分布が見られる。本遺構に帰属すると考えられる古埴時代前期の遺物は北溝に集中する。西溝、南溝のものには中期後半のものが多く混入する(第51図)。第3号住居跡、第10号方形周溝墓の遺物が壁面の崩落に伴ってもたらされたものであろう。

古埴時代前期の土器は、1が南西コーナーの上層から、2が西溝の上層から出土した以外は北溝東側からの出土である。壺・小型壺・台付甕・高坏が出土している。このうち、高坏は口縁部の小破片のみで図示できなかった。

1・2の壺は球形胴にやや長い外反する口縁部がつくものである。1は単口縁で、端面に面を持つ。器面の風化が著しく調整は不明である。2は端面外面に粘土を貼付することにより、複合部を作り出す複合口縁のものである。複合部は薄い。肩部にあまり鋭くない工具による文様の可能性があるヘラ描きが施されている。外面はヘラミガキ、内面は口縁部が刷毛目、胴部にヘラナゲが施される。3は畿内系二重口縁部の口縁部の破片である。外反する口縁部の下段のみで径1cmほどの円形の浮文が貼付されている。6・7の台付甕は、径が6～8cmの小型の脚台部である。8の外面には8



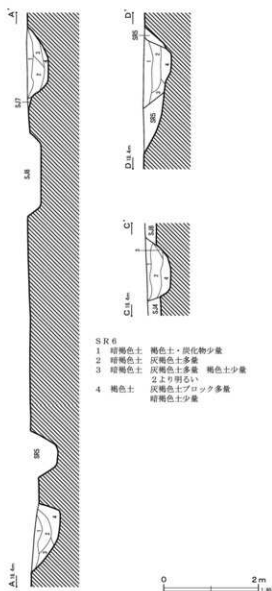
第46図 第6号方形周溝墓(1)

条1単位の左回転の平行沈線と波状文が上から下に施される。

弥生時代中期後半の土器は、西溝、南溝から出土している。前述のように第3号住居跡、第10号

方形須周溝墓に由来すると考えられる。西溝のものは上・中層、南のものは第3号住居跡の床面とほとんど差のない第2・3層上層からの出土である。

壺(10)は、縦長の胴部から直線的に開く口縁



第47図 第6号方形周溝墓(2)

部までの全形を知ることができるものである。口縁部端面に単節L.Rの縄文が施される。4は内面端部に粘土が貼付され、複合部状に作られるものである。口縁部端面に単節L.Rの縄文が施される。12は6条1単位、右回転の籐状文が施されるものである。器面の痛みが著しく相当程度剥離している。同一個体の胴部破片と考えられるものがあるが、想定される部位が離れており、復元実測できなかった。14は斜めの格子状に左下→右下の左回りに、ヘラにより施文されるものである。13は台付甕の脚台部である。甕の底部に脚部を付けたよ

うな形態である。胎土は砂粒が多い。15～17は甕の底部である。底面はヘラケズリに近いヘラナデが施され、平坦に仕上げられている。胴部の器肉が厚い。17の内面には煤が付着する。甕の口縁部(18)には交互押捺が施される。内面には煤が付着する。19の小型壺の肩部には径6mmほどの円形の浮文が貼付されている。20には7条1単位、右回転の籐状文が、21には5条1単位、左回転の波状文が施される。22～25は刷毛目状の工具によって山形文が施されるものである。いずれも器面の風化が著しい。いずれも外面に煤が付着し、胎土は砂粒が多い。

## (2) 畠跡

A区のAF～AK-66グリッドからは、畠跡が3箇所検出されている。これらの畠跡は住居跡より新しく、方形周溝墓の周溝より古いことが確認されており、出土遺物はほとんどないが、弥生時代後期から古墳時代前期のものと考えられる。

### 第1号畠跡(第52図)

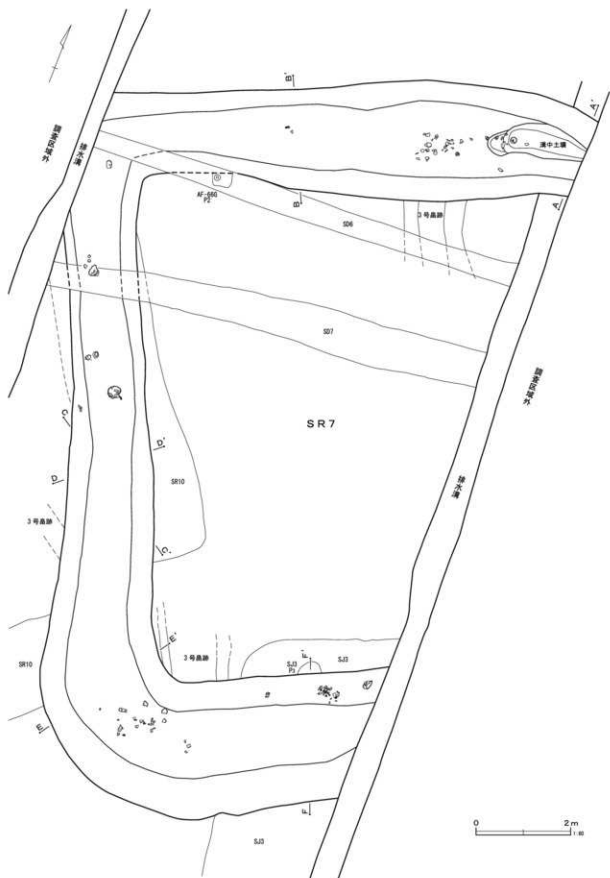
A1～AK-66グリッドに位置する。

弥生時代の第1・2・6号住居跡、第3・4号周溝墓、第1号土器棺墓、第10・12号溝跡より新しく、古墳時代前期の第1号方形周溝墓、第11号溝跡より古い。

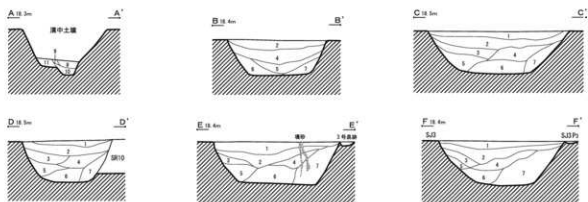
さく跡の走行方向は、N-40°-Wである。大きく、北東側の5.5～6.7mの短いさくの一群と、調査区外に連続する南西側の一群に分けられる。後者は更に、大略東西方向、大略南北方向のさく跡と交差しており、複数の畠跡の可能性がある。

各々の形態は、先端の丸い溝状を呈している。北東の一群の方が若干幅が狭く0.6～1.2m、南西側が幅1.0～2.0mである。深さはいずれも浅く、5～10cmほどである。

出土遺物は僅少(33点)で、壺・甕等の細片が出土した。いずれも風化が著しく、図示可能なも



第48図 第7号方形周溝墓(1)

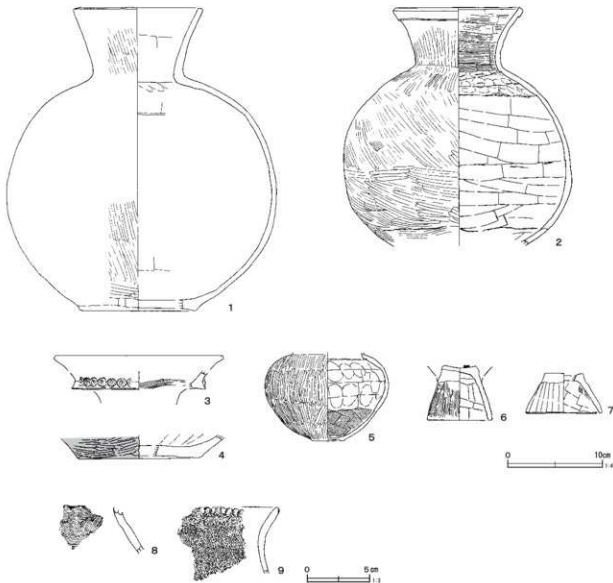


SR 7

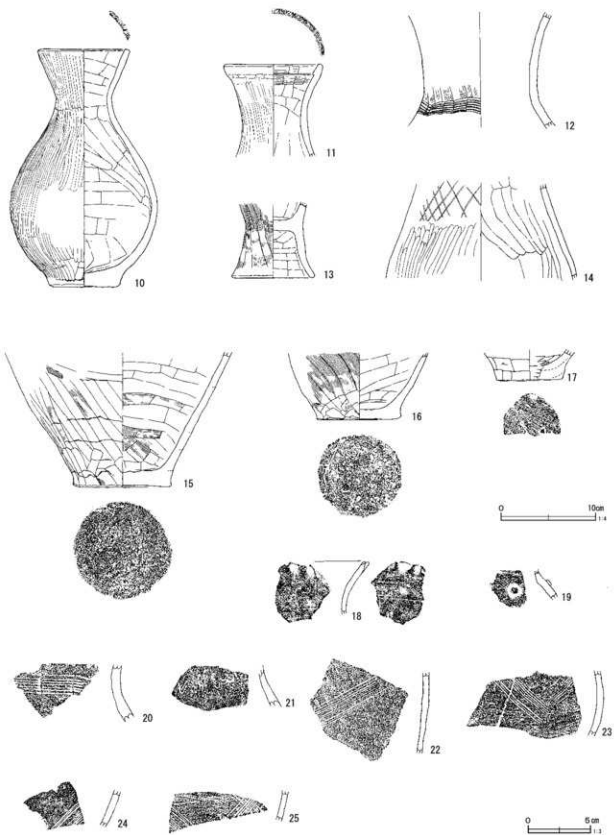
- |         |                      |           |                |
|---------|----------------------|-----------|----------------|
| 1 暗褐色土  | 砂粒少量                 | 8 オリーブ灰色土 | 砂少量、暗褐色土わずかに含む |
| 2 暗褐色土  | 灰色土少量 1より明るい         | 9 暗褐色土    | 暗褐色土・灰色土多量     |
| 3 暗褐色土  | 暗褐色土・砂粒・暗褐色土多量       | 10 暗褐色土   | 2より灰色粘土多い      |
| 4 暗褐色土  | 暗褐色粘土多量、褐色土少量 2より明るい | 11 褐色土    | 明褐色土・灰色粘土・砂粒多量 |
| 5 暗褐色土  | 明褐色土・暗褐色土・砂粒多量       |           |                |
| 6 灰暗褐色土 | 暗褐色粘土・砂粒・暗褐色土多量      |           |                |
| 7 明褐色土  | 暗褐色土多量 砂粒少量          |           |                |

第49図 第7号方形周溝墓(2)

0 2m  
1:10



第50図 第7号方形周溝墓出土遺物(1)



第51图 第7号方形周清墓出土遗物(2)

第18表 第7号方形周溝墓出土土物観察表 (第50・51図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	12.7	32.2	—	CDEHK	30	普通	浅黄橙	No.57・59	1075
2	土師器	壺	13.1	25.3	—	EGHIJK	70	普通	橙	No.6・45 西	1062
3	土師器	壺	—	1.8	—	A E H I J K	5	良好	明赤褐	No.37	163-1
4	土師器	壺	—	2.4	(12.4)	A E G H I J K	70	普通	にぶい橙	赤彩 北 AF66G No.1・2・77	
5	土師器	小型壺	—	9.2	3.2	A C E H I K	80	普通	赤灰(外)	にぶい赤褐(内) No.3	1076
6	土師器	台付甕	—	5.7	6.6	B C E G H I K	95	普通	橙	AF66G No.12	
7	土師器	台付甕	—	4.1	(8.0)	E H I	30	普通	にぶい橙	北	
8	土師器	甕	—	3.5	—	A B E G H I	5	普通	明赤褐	黒(内) AF66G No.10	
9	土師器	甕	—	5.3	—	A D E G J	5	普通	明赤褐	No.51	
10	弥生	壺	(8.7)	25.1	6.6	A C E I J K	70	普通	明赤色	No.55・57	1063
11	弥生	壺	10.0	9.7	—	A B E G I J K	90	普通	にぶい橙	No.52	1073
12	弥生	壺	—	12.4	—	A C E H I	10	普通	浅黄橙		1075
13	弥生	台付甕	—	8.0	(8.3)	E G I J K	85	普通	にぶい橙	No.5	108-1
14	弥生	壺	—	10.4	—	A C D E I	5	良好	赤褐	No.44	
15	弥生	壺	—	14.1	9.6	A D E H I K	75	普通	にぶい橙		1074
16	弥生	甕	—	7.0	8.4	A H I J K	50	普通	明赤褐	No.39・43	1082
17	弥生	甕	—	3.2	(6.1)	A E H I K	25	普通	赤褐	塚付着 西	
18	弥生	壺	—	4.3	—	A E I J K	5	普通	にぶい黄橙	内面塚付着 西	
19	弥生	小型壺	—	2.3	—	H I K	5	普通	にぶい黄橙		
20	弥生	壺	—	4.3	—	A D E F G K	5	普通	橙	西	163-1
21	弥生	甕	—	3.3	—	A B H I	5	普通	橙	西	
22	弥生	甕	—	6.4	—	A H I J K	5	良好	明赤褐		
23	弥生	甕	—	5.2	—	A E H I J K	5	良好	明赤褐		163-1
24	弥生	甕	—	3.0	—	A H I J K	5	良好	明赤褐	AG66G	
25	弥生	甕	—	2.4	—	A H I J K	5	良好	明赤褐		

のではない。

### 第2号畠跡 (第53図)

AH・AI—66グリッドに位置する。

弥生時代の第4号住居跡、第5号方形周溝墓より新しく、古墳時代前期の第6号方形周溝墓、第8・9号溝跡より古い。

さく跡の走行方向は、N-65°-Eである。大きく、西側に空隙地のある北側の5.2~7.4mの短いさくの一群と、調査区域外に連続する南側の一群に分けられる。

各々の形態は、先端の丸い溝状を呈している。全体に幅が狭く、幅0.3~0.4mほどである。深さはいずれも浅く、3~10cmほどである。覆土は黄褐色粘土ブロックを多く含む褐色土である。

出土遺物は僅少(6点)で、台付甕の胴部の破

片が出土したのみである。いずれも風化が著しく、図示可能なものはない。

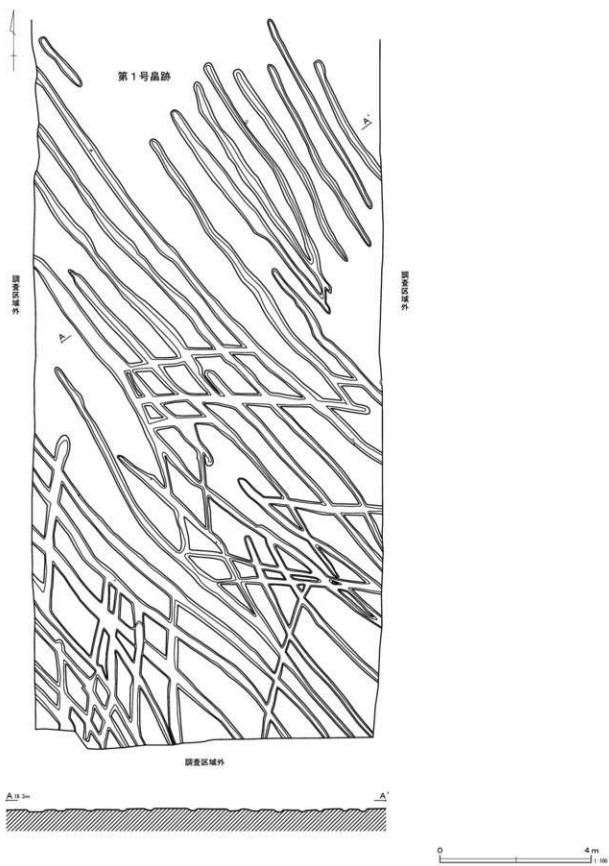
### 第3号畠跡 (第54図)

AF・AG—66グリッドに位置する。

弥生時代の第10号方形周溝墓、第2号土器棺墓、第7号溝跡より新しく、古墳時代前期の第7号方形周溝墓より古い。

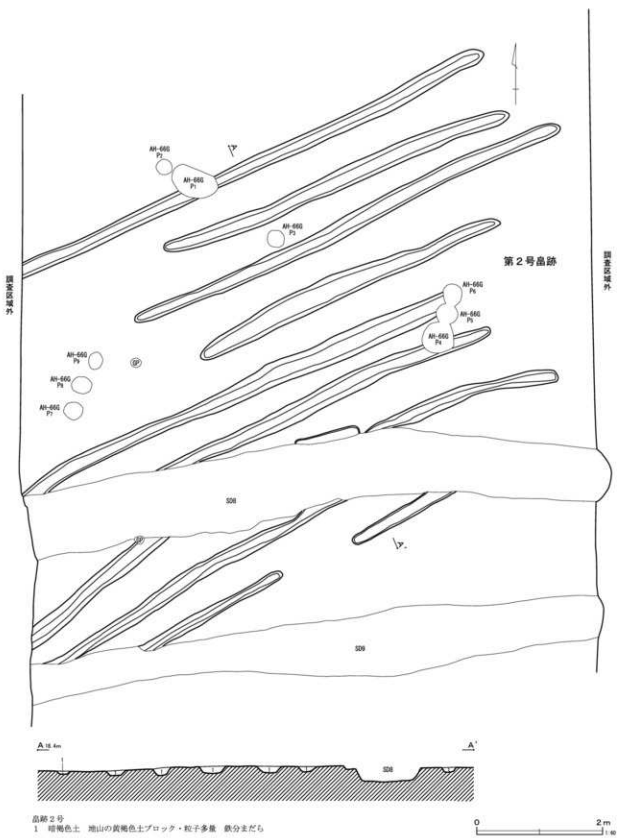
さく跡の走行方向は、N-30°-Wである。北側が途切れるものが多い。各々の形態は、先端の丸い溝状を呈している。全体に幅が狭く、幅0.25~0.45mほどである。深さはいずれも浅く、3~10cmほどである。

出土遺物は僅少(12点)で、壺・甕の口縁部、甕の胴部の破片が出土したのみである。いずれも風化が著しく、図示可能なものはない。

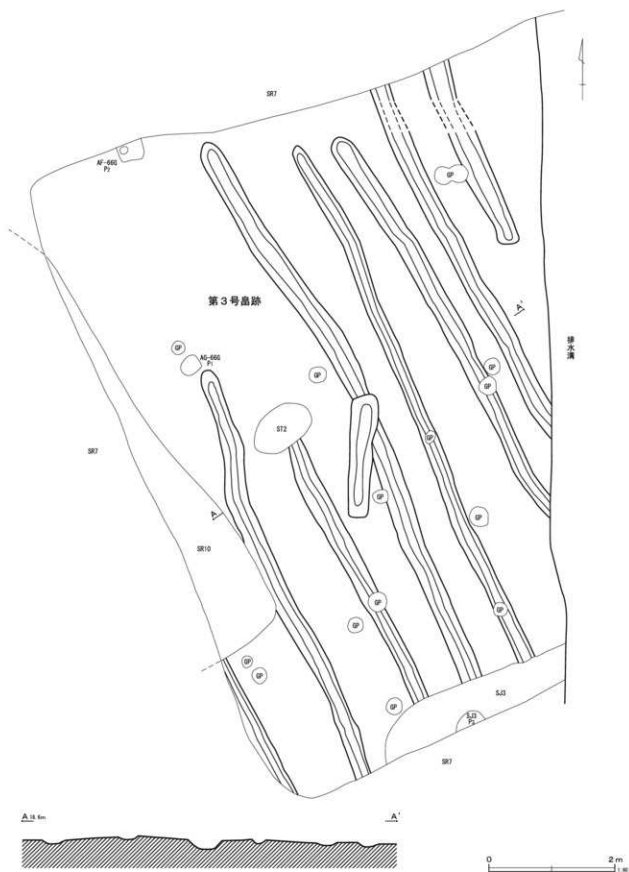


第52图 第1号高跡





第53図 第2号品跡



第54图 第3号高跡

### 3. 河川跡

A区からは、河川跡と考えられる大規模な溝跡が1箇所検出されている。

#### 第2号溝跡（第55～58図）

調査区の最も北側、AC～AF-66グリッドに位置する。第1・4号溝跡と重複する。これらの溝跡は、この流路跡が埋没した古墳時代前期以降のものである。

調査区を東西に横断し、B区の第3・36・48号溝跡とともに東へ向かって蛇行する河川跡の一部になると考えられる。台地の際へ向かって地山の標高が高くなり、この河川跡より南側には流路跡は検出されていない。

本流路跡は土層の状況と、出土遺物から弥生時代中期後半から後期前半の時期に流路としての機能が始まり、古墳時代前期にはほぼ埋没したと考えられる。

調査区を斜めに横断している。溝の軸方向はN-68°-Eである。幅は12.5m、深さは最深部で1.83mである。

覆土は自然堆積である。砂質の暗黄褐色土やそれがグライ化した暗青褐色土を底面の地山とし、黒褐色土、暗褐色土が覆土となる。第19層に木の葉を多量に含んだ層が認められるように、あまり流量は多くなかったと考えられる。第13・14層に弥生時代後期の、第9～12層を間層に挟んで、第6～8層に古墳時代前期の遺物を包含する。間層を挟んで第4層が古代の遺物の包含層となり、その時点には平地化していたと考えられる。

遺物はこの包含層を中心に出土しており、図示した遺物の分布も概ね包含層に対応している。北側の地山から自然木が頭を出すような形で出土している。製品と考えられるものは柱もしくは杭材と考えられるものが1点出土しているのみである。

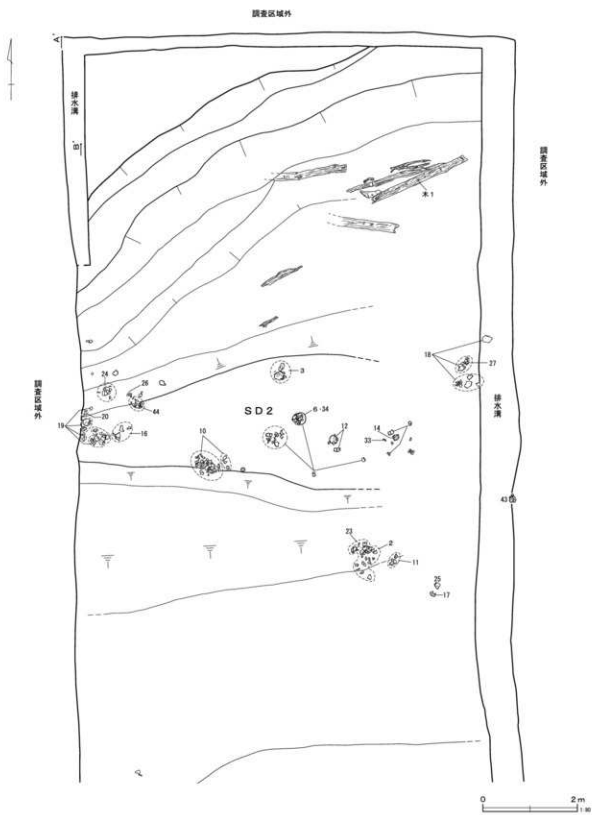
古墳時代前期の遺物は、壺・台付甕・甕・広口壺・高坏・鉢が出土している。

壺は複合口縁と直口縁のものがある。1はやや長めの胴部に短く外反する口縁部が付くものである。口縁部全体の器肉が厚く、複合部も断面形が四角形に近い。頸部は「く」の字を呈するがあまりくびれない。胴部外面は斜め方向の刷毛目が施され、下半にヘラナデが施されている。下位の方が器面の痛みが激しい。底面はヘラケズリに近いヘラナデである。2は短い口縁部で、中位から外反するものである。端部はごく僅かしか遺存していない。頸部はあまり括れておらず、緩やかに胴部に移行する。胴部外面及び口縁部内外面にヘラナデ後へラ磨きが施される。色調が白に近く特徴的である。3は外面が全体に一枚剥離し、最終段階で一枚全体に着せられていることが分かる。

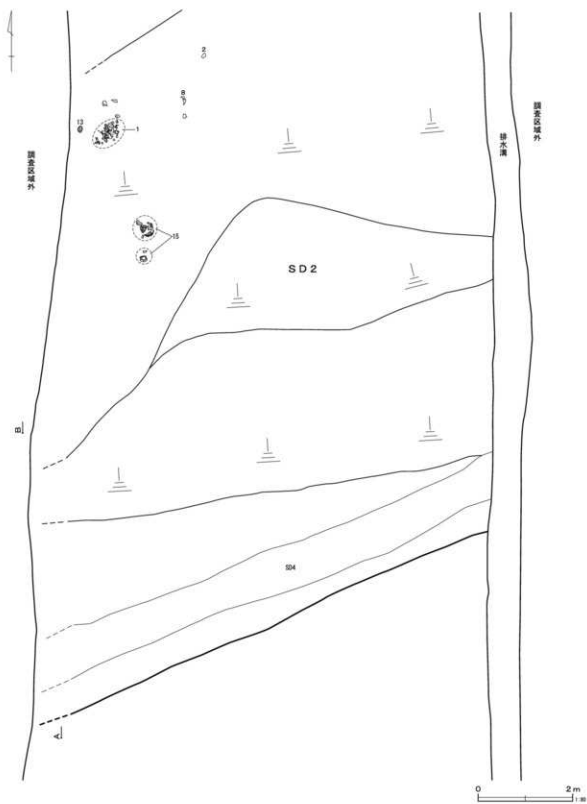
台付甕（5・6）は大小があり、胴部のやや上位に最大径を持つ球形胴で、短く立ち上がる口縁部が付くものである。頸部の括れは強くなく、立ち上がりの角度が浅い。端部は丸く収められており、胴部外面の刷毛目は横から斜め方向のもので、やや乱れている。胴部の下半は2次加熱による痛みが激しく、5の脚台部との接合部は復元して実測した。脚台部の接合はいずれもホソ接合である。脚台部はあまり大型のものは見られず、中・小型品が多い。7は色調が白く、特徴的である。

甕は端部に刻み目を持つものと持たないものがある。刻み目は左から右に木口状の工具を用いて行われている。いずれも浅めである。10は胴部のやや上位に最大径を持つ球形胴で、台付甕と同様の形態である。調整もほぼ同様で、木口ナデに近い細かい刷毛目である。胴部の下半は2次加熱による痛みが激しく、煤が付着する。底面はドーナツ状になっている。11は小型のもので、刷毛目の上に所々ヘラナデを加えている。内外面に煤が付着する。

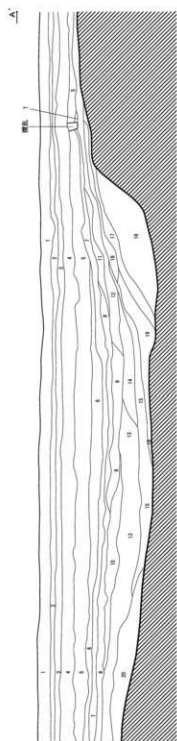
12は広口壺である。口縁部外周に薄い粘土を貼付し、複合部を形成する。外面の調整は口縁部



第55团 第2号溝跡 (1)



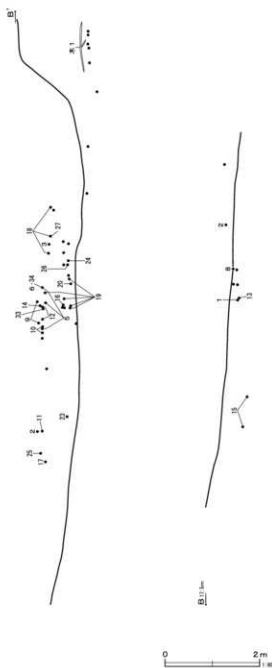
第56图 第2号沟迹 (2)



- SD2
- |    |        |                                   |
|----|--------|-----------------------------------|
| 1  | 耕作土    | 鉄分多量                              |
| 2  | 明褐色土   | 炭化物粒子少量                           |
| 3  | 明褐色土   | 炭化物粒子・炭土粒子少量                      |
| 4  | 黒褐色土   | 古代の包気層                            |
| 5  | 暗灰黄褐色土 | 鉄分まだら多量                           |
| 6  | 黒褐色土   | 古遺跡層包含層                           |
| 7  | 黒土     | 炭化物粒子少量 小遺跡層包含層                   |
| 8  | 黒褐色土   | 炭化物粒子微量 古遺跡層包含層                   |
| 9  | 暗褐色土   | 炭化物粒子微量                           |
| 10 | 暗褐色土   | 炭化物粒子微量                           |
| 11 | 暗褐色土   | 黄褐色砂ブロック少量                        |
| 12 | 黒褐色土   | 炭化物粒子少量                           |
| 13 | 黒褐色土   | やや青味のある黒褐色土粘質土層<br>下部部から発生後期の遺物出土 |
| 14 | 黒褐色粘土  | 発生後期包含層                           |
| 15 | 黒褐色粘土  | やや青味の強い黒褐色粘土                      |
| 16 | 暗黄褐色土  | 粘性強い                              |
| 17 | 明黄褐色土  | 粘性強い                              |
| 18 | 暗灰褐色土  | 地山 砂質層                            |
| 19 | 黒色粘質土  | 地山 木炭多量                           |
| 20 | 暗青褐色砂土 | 暗黄褐色砂ブロック多量 地山                    |

0 2m  
1:100

第57図 第2号溝跡(3)



第58図 第2号溝跡(4)

が刷毛目後へら磨き、胴部は内外面ともへらナデ後へら磨きである。底面はナデが加えられるのみである。器肉が全体に厚いのが特徴的である。

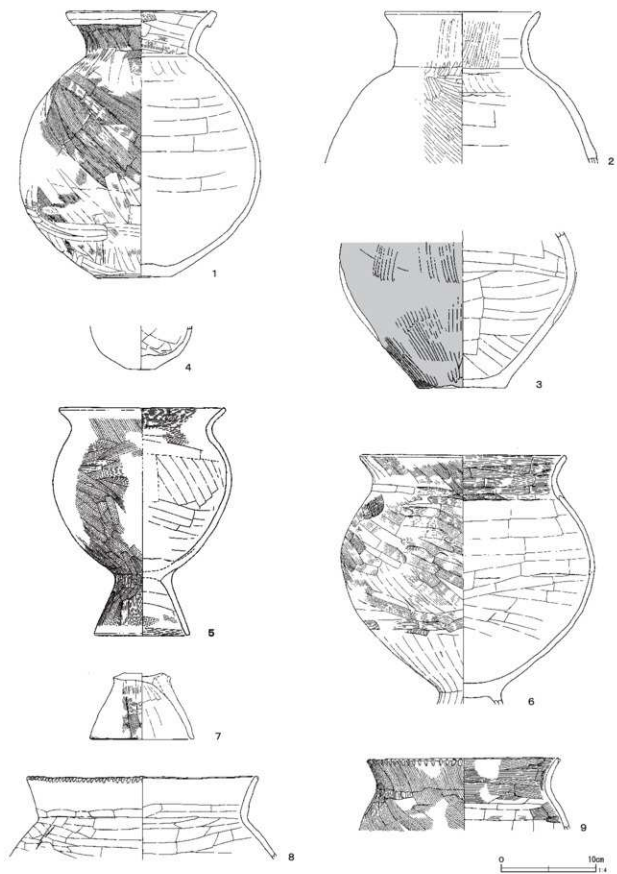
13は高坏である。端部は内凹気味で開かない。外側から径0.8cmの穿孔が施される。ホゾ接合である。坏部の内面は剥離しており、上から見ると臍状の凹みが明瞭である。胎土は精選される。

14は鉢である。底部は突出する。外面にへらナデ後へら磨きが施される。

弥生時代の土器は後期前半と考えられるものである。壺・甕・高坏が出土している。

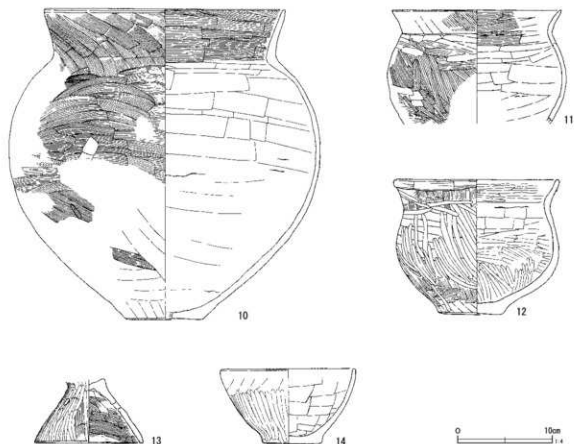
壺は複合口縁、単口縁のものがある。15は口縁端部の外周に粘土帯を貼付することにより複合部を作り出している。やや下位に最大径を持つ胴部から頸部は直立気味に立ち上がり、緩やかに開くものである。胴部外面全体に縦方向のへら磨きが施され、頸部には7条1単位の右回転の籐状文が3段、上位から下位にかけて施される。内面は口縁部が横位のへら磨き、胴部が木口ナデである。大部分は暗くしているが、内外面とも赤彩されている。16は口縁端部の外周に粘土帯を貼付することにより複合部を作り出し、それを摘むことにより断面が三角形になっている。幅広に作り出された端面には2条1単位の右回転の波状文が2単位施される。端部の刻み目は波状文の工具を用いたもので、左方向から施されている。内外面にへら磨きが施される。白色の色調が特徴的である。17は単口縁で、端部に刷毛目工具による左方向からの押捺が施される。

甕は大型のものと小型のものがある。18は口縁部に交互押捺を施されるもので、同一個体と考えられる胴部破片が多くあるが、接点がなく、風化が著しいことから復元実測できなかったものである。口縁部の調整は不明である。胴部は内外面に幅広の工具によるへら磨きが施される。19は小型のものである。頸部が緩やかに括れる砲弾形である。口縁端部に浅い刻み目が上方から施される。



第59图 第2号清跡出土遺物(1)



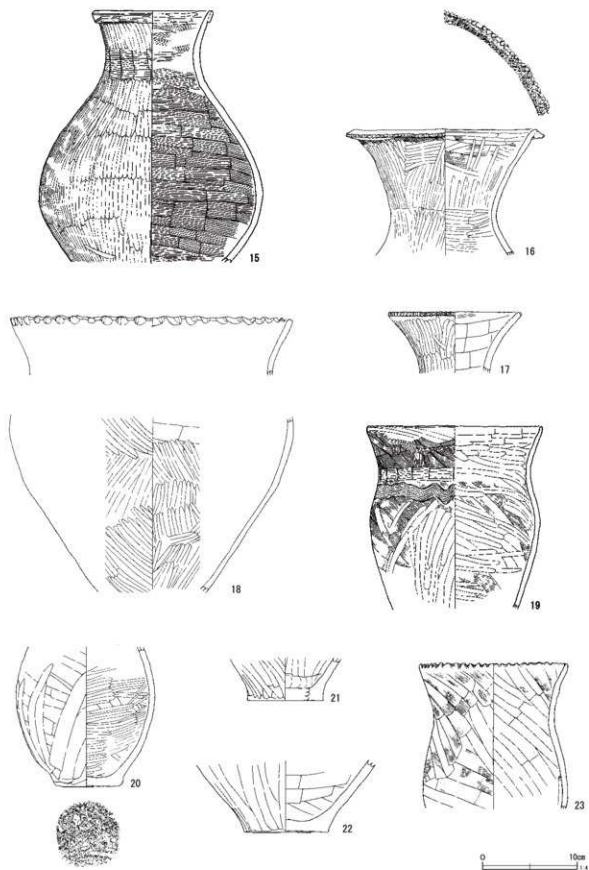


第60図 第2号溝跡出土遺物(2)

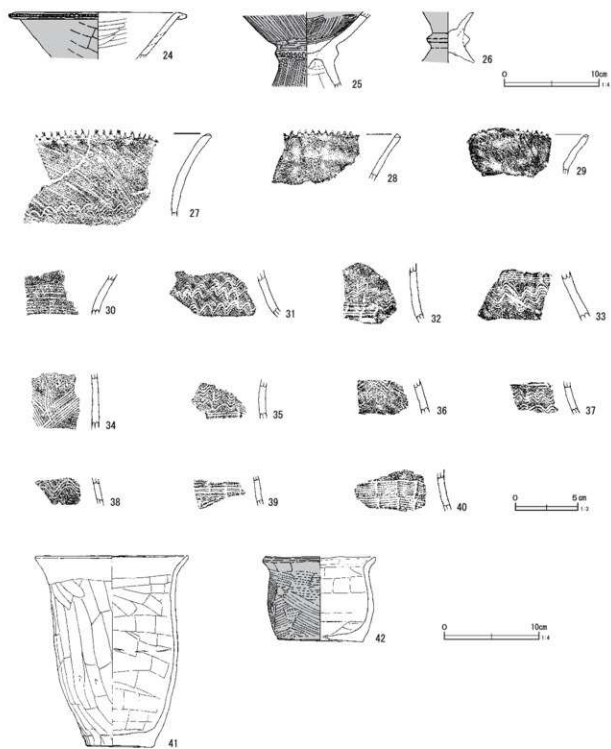
全体の調整はヘラナデ後刷毛目を加え、下位にはヘラ磨きが施される。内面は、口縁部はヘラナデ、胴部は木口ナデ後粗い横位のヘラ磨きが施される。頸部には上位に簾状文、下位に波状文が施される。上位の簾状文は9条1単位、右回転である。波状文は簾状文と同様の工具で、左回転である。内外面は赤変し、煤やコゲが付着している。20は縦長の胴部で底部がやや突出する。外面は上から下にヘラケズリに近いヘラナデが施される。内面には横位のヘラ磨きが施されている。底面はヘラナデが施され、杓状の圧痕が見られる。21・22の底部は、底面がヘラケズリに近い状態で平坦に仕上げられている。21は胴部積み上げの際の開劣が目立つ。22は胎土が細かく、ザラついている。23は口縁部端部に上面から断面形の丸い杓状工具により右上から押捺が施される。内外面とも木口ナデによって仕上げられており、無文である。

24～26は高坏である。24は口縁端部の外周に粘土帯を貼付することにより複合部を作り出し、それを摘むことにより断面が三角形になっている。端部の刻み目はヘラ状の工具を用いたもので、左方向から施されている。外面はヘラナデ、内面はヘラ磨きが施される。外面は赤彩され、内面は煤けている。25は接合部の外周に断面三角形の粘土帯を貼付し、それに左方向からの刻み目が施されている。ホソ接合で、脚部の天井に膺状の突起が明瞭である。外面、坏部内面が赤彩される。26は内外面全体が剥離している。坏部も外れた状態である。外面にわずかに赤彩の痕跡が残る。

27～40は甕の破片である。27～29の口縁部には刻み目が上方から施される。内外面ともヘラナデが施される。27の頸部には、4条1単位、右回転の波状文が施される。その他の破片の施文方向はいずれも右回転である。30・40には簾状文のみ



第61图 第2号满跡出土遗物(3)



第62図 第2号溝跡出土遺物(4)

が認められる。30は5条1単位、40は6条1単位の簾状文が2段以上施される。31・38には波状文のみが認められる。31は3条1単位で2段、38は4条1単位で1段である。32・33・35～37は

波状文と簾状文が上下に組み合わせられるものである。32・35は5条1単位で、上位に波状文、下位に簾状文となるものである。33・37・39は32・35と上下が逆で上段に簾状文、下位に波状文が施さ



第63図 第2号溝跡出土木製品(1)

れる。33は6条、37は4条、39は5条以上を1単位とする。34は2条1単位、右回転の波状文が2段以上、下位に刷毛目状の工具によって山形文が描かれている。36・38は4条1単位、左回転の波状文が施される。

41・42は帰属時期が不明なものである。41は小型の甕である。大きな平底で、外面は縦方向のヘラケズリに近いヘラナデ、内面はヘラナデが施される。42も同様に大きな平底で、ごく短い口縁部が付く。外面はヘラナデ後ヘラ磨きが施される。この両個体は胎土や調整からは古墳時代前期のものと考えられるが、器形が特異で、出土状況も不明であるため位置づけが難しいため、分けて掲載した。

木製品は径10～30cmの自然木がほとんどである。北側の壁面に刺さった状態のものが多く、弥生時代中期に調査で検出された形態の流路跡が形成される以前の河川の流下によりもたらされたものと考えられる。北東側の一画のもののみは、堅治いから出土し、弥生時代中期以降のものと考えられる。

1点のみ北側から梯子が出土している。残存長133.0cm、最大幅9.5cm、最も厚い部分で厚さ2.6cmを測る。傷みが激しく、製品の表面は残っていない。足掛け部の突起が2箇所認められる。間隔は約42cmである。上位の部分の厚さは5.5cm、下位の部分の厚さは6.0cmになる。樹種はモミ属、丸木である。

第19表 第2号清跡出土遺物観察表(第59~62図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	15.0	28.3	7.8	A E H I K	80	普通	にぶい・橙	No.27	111-1
2	土師器	壺 (16.1)	16.0	—	—	A C E H I K	50	普通	にぶい・黄橙	No.14	112-6
3	土師器	壺	—	16.6	9.3	A C D E H I	70	不良	にぶい・橙	赤彩 No.19	114-1
4	土師器	小型壺	—	4.6	3.0	A E G H I	60	不良	浅黄橙	—	—
5	土師器	台付甕	17.2	24.0	9.6	D E G	40	普通	にぶい・黄橙	内面口縁~胴部煤付着 No.15-18-20	112-1, 2, 3
6	土師器	台付甕	21.3	26.4	—	C E G H I J K	85	普通	にぶい・褐	外面下部煤付着 No.18	112-4
7	土師器	台付甕	—	7.0	10.8	A B D E H	20	普通	灰白	—	—
8	土師器	甕 (24.1)	8.8	—	—	A C E H I K	20	普通	にぶい・黄橙	No.22	—
9	土師器	甕 (19.9)	7.6	—	—	A B E H I K	25	普通	にぶい・黄橙	外面煤付着 No.6・7	—
10	土師器	甕 (25.2)	33.0	(8.0)	—	E G H K	30	普通	淡橙	内外面煤付着 No.30・31	111-2
11	土師器	甕 (17.8)	12.0	—	—	A C E H I K	20	普通	にぶい・黄橙	内外面煤付着 No.13	—
12	土師器	広口壺	17.3	14.2	6.6	A D E G H I	60	普通	橙	No.16・17	112-5
13	土師器	高坏	—	6.7	11.3	A C E H I J K	95	良好	灰黄褐	No.28	113-4
14	土師器	鉢	14.2	7.8	6.2	C E G H I	80	普通	にぶい・橙	No.5	114-3
15	弥生	壺	12.4	26.7	—	A B C D F G H J	90	良好	にぶい・黄橙	赤彩 No.32・33	111-3
16	弥生	壺	19.0	13.4	—	A C H I K	90	やや不良	灰白	No.41	113-1
17	弥生	壺 (13.6)	6.5	—	—	A B C E H I K	35	普通	橙	No.12	113-2
18	弥生	甕 (29.6)	24.2	—	—	A B E G H I J K	25	普通	にぶい・褐	内外面とも煤付着 No.2・3・4	163-2
19	弥生	甕 (18.2)	19.5	—	—	A E I K	30	良好	黑褐	外面赤変煤付着 No.43	—
20	弥生	甕	—	14.7	6.5	A C E H I	50	普通	にぶい・赤褐	内面全体煤 No.46・47	114-2
21	弥生	甕	—	4.5	7.9	A D E H I K	30	普通	にぶい・褐	内外面胴~底部煤付着	—
22	弥生	甕	—	7.6	9.0	A D E G H	60	普通	にぶい・橙	—	113-7
23	弥生	甕	15.3	15.3	—	A E I K	70	普通	灰褐	外面一部赤変 No.36	110-4
24	弥生	高坏 (17.0)	5.0	—	—	C E I K	30	良好	にぶい・橙	外面赤彩 No.48	113-6
25	弥生	高坏	—	8.0	—	A H I K	60	普通	にぶい・橙	赤彩 No.11	113-3
26	弥生	高坏	—	5.4	—	A C D E H I	50	普通	にぶい・赤褐	赤彩 No.39	—
27	弥生	甕	—	6.5	—	A C E H I J K	5	普通	にぶい・橙	内外面煤付着	163-2
28	弥生	甕	—	3.7	—	A C E H I K	5	普通	にぶい・赤褐	内外面煤付着	—
29	弥生	甕	—	3.2	—	A C E I K	5	普通	にぶい・黄橙	—	163-2
30	弥生	甕	—	3.2	—	D E G I K	5	普通	にぶい・黄橙	—	—
31	弥生	甕	—	3.8	—	A E I K	5	普通	にぶい・黄褐	外面煤付着	163-2
32	弥生	甕	—	4.6	—	A C E H I K	5	普通	にぶい・褐	内面煤付着	163-2
33	弥生	甕	—	4.1	—	A C E H I K	5	普通	にぶい・黄橙	No.8	163-2
34	弥生	甕	—	4.5	—	A C E H I J K	5	普通	灰黄褐	内外面煤付着 No.18	163-2
35	弥生	甕	—	3.1	—	A E H I K	5	普通	褐	外面煤付着	—
36	弥生	甕	—	2.8	—	A E I K	5	普通	にぶい・黄褐	内外面煤付着	—
37	弥生	甕	—	2.6	—	A C E H I K	5	普通	にぶい・橙	—	—
38	弥生	甕	—	2.2	—	A H I K L	5	普通	にぶい・黄橙	—	—
39	弥生	甕	—	2.4	—	A H I K	5	普通	にぶい・褐	—	—
40	弥生	壺	—	3.3	—	A C E I K	5	普通	にぶい・橙	内面赤彩	—
41	土師器	甕 (15.9)	20.2	7.0	—	E H I K	85	普通	灰褐	No.40	110-5
42	土師器	鉢	11.6	8.9	8.8	C E H I	80	普通	にぶい・黄橙	赤彩 No.10	113-5

## 4. 古代以降の遺構と遺物

### (1) 溝跡

A区からは溝跡が23条検出されている。大きくAKグリッドを境に南北に分布が分かれる。

1-(3)で述べたように、3条が弥生時代のものである。遺物から古代と考えられるものは、第4・6号溝跡のみで、その他は不明である。

#### 第1号溝跡 (第64図)

調査区の北側、AC・AD-66グリッドに位置する。河川跡 (第2号溝跡) の埋没土に掘り込まれていた。

軸方向はN-67°-Eで、調査区を横断している。規模は幅0.5~0.64mで、深さは10~20cmである。覆土は自然堆積である。炭化物黄褐色土を含み粘性が高い。

遺物は古墳時代前期の壺・甕の破片が出土したが、図示可能なものはない。

#### 第4号溝跡 (第64・65図)

調査区の北側、AF-66グリッドに位置する。第5号溝跡が南1mに平行して位置している。

軸方向はN-65°-Eで、調査区を横断している。調査区内で9.70mを検出した。規模は幅0.74~0.98mで、深さは36~47cmである。黄褐色土と暗褐色土が互層になっており、埋め戻しの可能性がある。

遺物は、上層から須恵器の甕胴部破片、鉢の胴部破片が出土している。両者とも南北企窯跡産である。1は鉢で、把手の可能性のある剥離痕が見られる。外面はタタキ目を丁寧にナデ消している。内面には無文当て具痕が見られる。2は外面平行タタキ後ナデ。内面には無文当て具痕が見られる。

#### 第5号溝跡 (第64図)

調査区の北側、AF-66グリッドに位置する。第4号溝跡が北1mに平行して位置している。

軸方向はN-65°-Wで、調査区を横断している。調査区内で7.42mを検出した。規模は幅0.3~0.4mで、深さは4~5cmで、ごく浅い。覆土は観察できなかった。遺物は出土していない。

#### 第6号溝跡 (第66・67図)

調査区の北側、AF-66グリッドに位置する。第7号溝跡が南2mを平行する。第7・10号方形周溝墓、第3号畠跡と重複し、本遺構が新しい。

軸方向はN-85°-Wで、調査区を横断している。調査区内で9.24mを検出した。規模は幅0.36~0.54mで、深さは15~21cmである。覆土は自然堆積である。

遺物は溝底から蹄鉄と須恵器甕の破片が出土した。蹄鉄(1)は約半分が残存している。残存長11.5cm、厚さ6mm前後である。全体に錆が著しく、遺存状態はよくない。方形の透孔が3箇所確認できた。上部の2箇所は長辺5mm前後、先端に近い1箇所は3mm前後と小さい。須恵器甕(2)は南北企窯跡群のものである。

#### 第7号溝跡 (第66図)

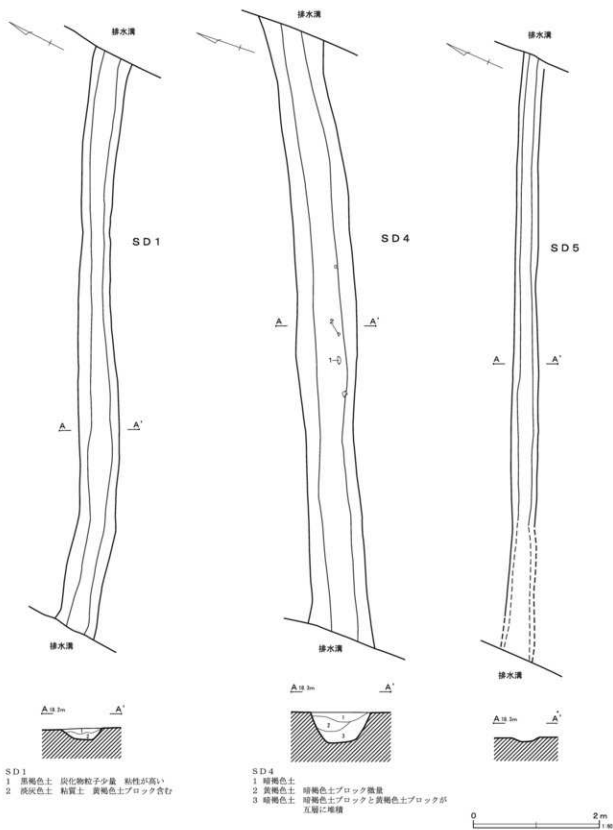
調査区のほぼ中央、AG-66グリッドに位置する。第6号溝跡が南2mを平行する。第7・10号方形周溝墓、第3号畠跡と重複し、本遺構が新しい。

溝の軸方向はN-84°-Wで、調査区を横断している。調査区内で9.26mを検出した。幅0.5~0.9m、深さは18~25cmである。覆土は炭化物を含む自然堆積である。

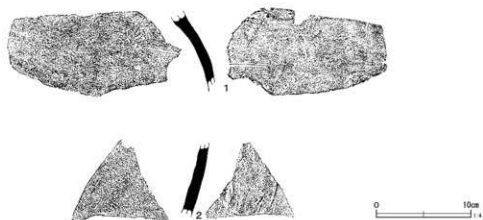
遺物は土師器と思われる細片が出土しているのみである。

#### 第8号溝跡 (第66図)

調査区のほぼ中央、AI-66グリッドに位置す



第64図 第1・4・5号溝跡



第65図 第4号溝跡出土遺物

第20表 第4号溝跡出土遺物観察表（第65図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	鉢	—	6.5	—	H I J K	—	普通	灰白	南比企産 No.3	
2	須恵器	甕	—	5.6	—	H I J	—	普通	灰	南比企産 No.2	

る。第6号方形周溝墓、第2号冢跡と重複し、本遺構が新しい。

軸方向はN-13°-E～N-5°-Eで、調査区を横断している。調査区内で9.08mを検出した。規模は幅0.88～1.08mで、深さは17～24cmである。覆土は焼土を若干含むが、自然堆積である。

遺物は古墳時代前期の甕の破片が出土したが、図示可能なものはない。

#### 第9号溝跡（第68図）

調査区のほぼ中央、A I-66グリッドに位置する。第5・6号方形周溝墓、第2号冢跡と重複し、本遺構が新しい。

軸方向はN-7°-Eで、調査区域を横断している。調査区内で9.06mを検出した。規模は幅0.48～1.08mで、深さは6～17cmで、ごく浅い。覆土は自然堆積である。

遺物は壺や甕と考えられる破片が出土している。風化が著しく、図示可能なものはない。

#### 第11号溝跡（第68図）

調査区のほぼ中央、A J-66グリッドに位置する。大部分が調査区域外にかかり、検出できたのは北側の一部のみである。第4号方形周溝墓と重複し、本遺構が新しい。

軸方向はN-23°-Wで、検出できた長さは1.50mである。幅0.80m、深さ0.59mを測る。

遺物は壺と考えられる破片が出土している。風化が著しく、図示可能なものはない。

#### 第38号溝跡（第68図）

調査区のほぼ中央、A K・A L-66グリッドに位置する。第47号溝跡と重複し、本遺構が新しい。

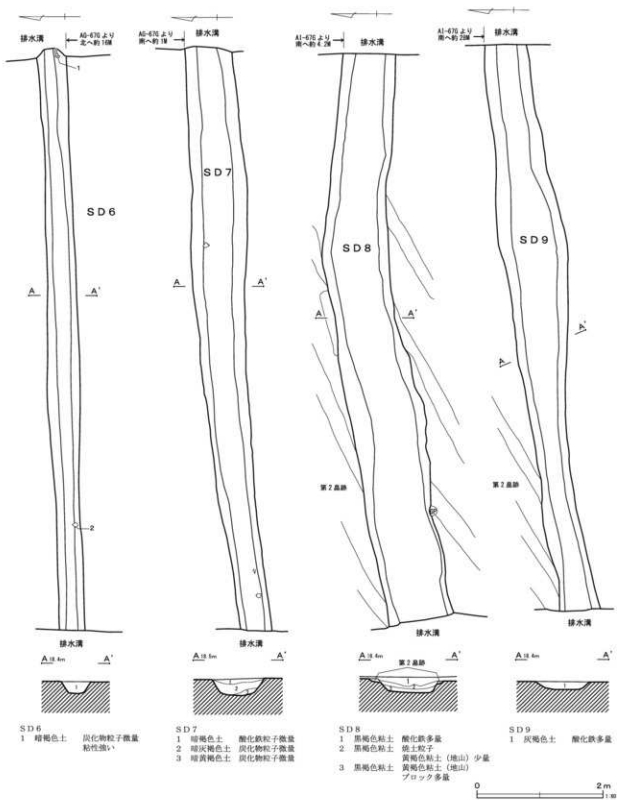
軸方向はN-63°-E～N-54°-Eで、調査区を斜めに横断している。調査区内で10.0mを検出した。規模は幅0.20～0.28m、深さは6～11cmである。

覆土は自然堆積である。遺物は出土していない。

#### 第39号溝跡（第68図）

調査区の中央よりやや南側の、A M-66グリッドに位置する。第11号方形周溝墓、第40号溝跡と





第66図 第6・7・8・9号溝跡

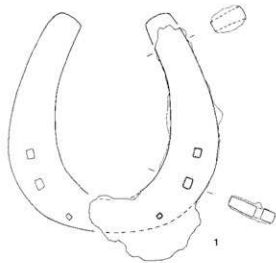
重複し、本遺構の方が新しい。

軸方向はN-58°-E~N-64°-Eで、調査区を横断している。調査区域内で9.46mを検出した。規模は0.24~0.62mで、深さは6~9cmで、ごく浅い。覆土は粘性が強く、自然堆積である。遺物は土師器の小破片が出土している。

#### 第40号溝跡 (第68図)

調査区の中央よりやや南側の、AM-66グリッドに位置する。第11号方形周溝墓、第39号溝跡と重複し、前者より新しく、後者より古い。

軸方向はN-85°-E~N-70°-Eで、第39号



第67図 第6号溝跡出土遺物

第21表 第6号溝跡出土遺物観察表 (第67図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	鉄製品	蹄鉄								No.1	
2	須恵器	甕	-	4.2	-	DEIK	-	普通	灰	南比企産 No.1	

溝跡と重複する箇所までで、4.64mを検出した。規模は幅0.34~0.40m、深さは7~10cmで、ごく浅い。覆土は炭化物を含む。自然堆積である。遺物は出土していない。

#### 第41号溝跡 (第68図)

調査区南側の、AN-66グリッドに位置する。第42号溝跡から分岐している。新旧は不明である。

軸方向はN-66°-Eで、第42号溝跡と重複する箇所までで4.60mを検出した。規模は幅0.42~0.52m、深さは3~13cmで、ごく浅い。覆土は炭化物を含む。自然堆積である。遺物は出土していない。

#### 第42号溝跡 (第68図)

調査区南側の、AN-66グリッドに位置する。途中から第41号溝跡が分岐し、また合流している。新旧は不明である。

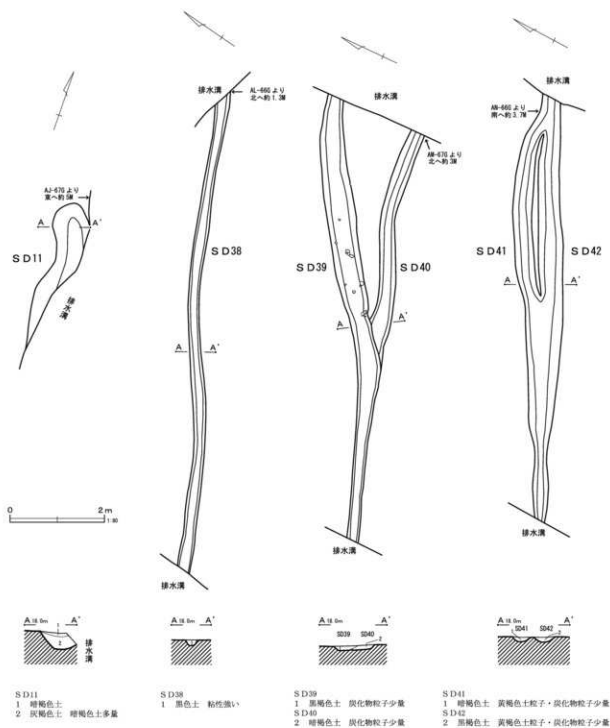
軸方向はN-62°-Eで、調査区を斜めに横断している。調査区域内で9.0mを検出した。規模は幅0.24~0.70m、深さは5~15cmで浅い。覆土は炭化物を含む。自然堆積である。

遺物は弥生時代の壺胴部と考えられる破片が出土している。図示可能なものはない。

#### 第43号溝跡 (第68図)

調査区南側の、AN・AO-66グリッドに位置する。第21号土壇と重複し、それより新しい。

軸方向はN-81°-Eで、調査区を横断し、調査区内で7.26mを検出した。規模は幅0.68~0.82m、深さは21~31cmである。覆土は炭化物を多く含む。自然堆積である。遺物は出土していない。

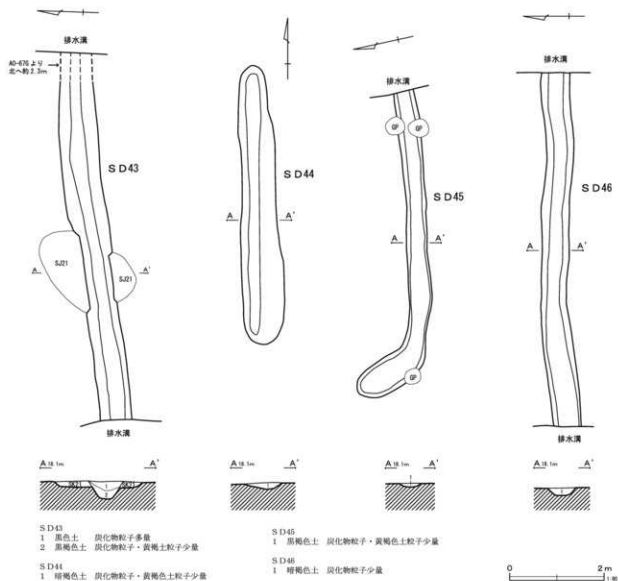


第68図 第11・38・39・40・41・42号溝跡

第44号溝跡 (第68図)

調査区南側の、A O-66グリッドに位置する。  
軸方向は南北方向である。規模は、長さ5.84m、

幅0.60～0.90m、深さ7～12cmである。覆土は炭  
化物を含む。自然堆積である。遺物は出土してい  
ない。



#### 第45号溝跡 (第69図)

調査区南側の、A O・A P-66グリッドに位置する。東側の調査区域外から東西に伸び、平面形は先端が屈曲している。軸方向はN-80°-WからN-25°-Wに曲る。調査区域内で7.08mを検出した。規模は幅0.40~0.70m、深さは5cmで、ごく浅い。覆土は炭化物を若干含む。自然堆積である。遺物は出土していない。

#### 第46号溝跡 (第69図)

調査区南側の、A P-66グリッドに位置する。平行する第43号溝跡とは15mほど離れている。軸方向は東西方向で、調査区を横断している。調査区域内で7.50mを検出した。規模は幅0.50~0.62m、深さは6~20cmである。覆土は自然堆積である。炭化物を若干含む。遺物は出土していない。

## (2) 土壌

A区からは11基の土壌が検出されている。A Nグリッドより南側に分布が集中する。いずれも遺物は出土しておらず、時期は不明である。覆土にはいずれも炭化物を含んでいる。

### 第9号土壌 (第70図)

A Q-66グリッドに位置する。東側に第10号土壌が並んでいる。軸方向はN-85°-Eで、楕円形である。規模は長軸0.65m、短軸0.53mで、深さは26cmである。覆土は第10号土壌と同様である。単層で粘性が強い。

### 第10号土壌 (第70図)

A Q-66グリッドに位置する。西側に第9号土壌が並んでいる。軸方向はN-85°-Eで、不整形である。規模は、径0.60m、深さは16cmである。覆土は第9号土壌と同様である。単層で粘性が強い。

### 第13号土壌 (第70図)

A O・A P-66グリッドに位置する。東側に第14号土壌が並んでいる。軸方向はN-3°-Eで、不整形である。規模は径0.54m、深さは10cmである。覆土は単層である。

### 第14号土壌 (第70図)

A O・A P-66グリッドに位置する。西側に第13号土壌が並んでいる。軸方向はN-87°-Wで、不整形楕円形である。規模は長軸0.87m、短軸0.70mで、深さは12cmである。覆土は単層である。

### 第15号土壌 (第70図)

A O・A P-66グリッドに位置する。軸方向は南北方向で、円形である。規模は径0.60mで、深さは0.20mである。覆土は自然堆積である。

### 第16号土壌 (第70図)

A O-66グリッドに位置する。軸方向は東西方向で、楕円形である。規模は長軸1.02m、短軸0.56mで、深さは15cmである。覆土は自然堆積である。

### 第17号土壌 (第70図)

A O-66グリッドに位置する。軸方向はN-50°-Eで、楕円形である。規模は長軸0.59m、短軸0.42mで、深さは17cmである。覆土は自然堆積である。

### 第18号土壌 (第70図)

A O-66グリッドに位置する。軸方向は東西方向で、楕円形である。西側が一段深くなっている。規模は長軸1.20m、短軸0.66mで、深さは20cmである。覆土は自然堆積である。

### 第19号土壌 (第70図)

A O-66グリッドに位置する。軸方向はN-45°-Wで、不整形楕円形である。規模は長軸0.86m、短軸0.42mで、深さは13cmである。覆土は単層である。

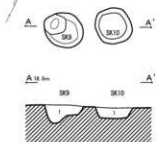
### 第20号土壌 (第70図)

A N-66グリッドに位置する。軸方向はN-80°-Wで、楕円形である。規模は長軸1.28m、短軸0.80mで、深さは12cmである。覆土は自然堆積である。

### 第21号土壌 (第70図)

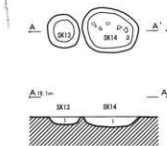
A N・A O-66グリッドに位置する。第43号溝跡と重複し、本遺構が古い。軸方向はN-24°-Eで、楕円形である。規模は長軸2.18m、短軸1.40mで、深さは10cmである。覆土は単層である。

第9・10号土壤



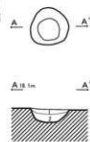
SK9・10  
1 黑褐色土 暗黄褐色土粒子少量 粘性强い

第13・14号土壤



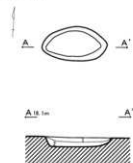
SK13  
1 黑褐色土 炭化物粒子少量  
SK14  
1 暗褐色土 炭化物粒子少量

第15号土壤



SK15  
1 暗褐色土 炭化物粒子少量  
2 黑褐色土 炭化物粒子少量

第16号土壤



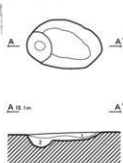
SK16  
1 暗褐色土 炭化物粒子少量  
2 暗褐色土 黑褐色土粒子少量

第17号土壤



SK17  
1 黑褐色土 炭化物粒子少量  
2 暗褐色土 黑褐色土粒子少量

第18号土壤



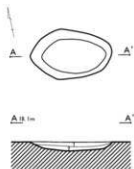
SK18  
1 黑褐色土 炭化物粒子少量  
2 暗褐色土 炭化物粒子少量

第19号土壤



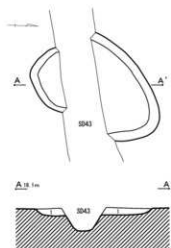
SK19  
1 黑褐色土 炭化物粒子少量

第20号土壤



SK20  
1 黑褐色土 炭化物粒子少量  
2 暗褐色土 黑褐色土粒子少量

第21号土壤



SK21  
1 暗褐色土 黑褐色土粒子・炭化物粒子少量

0 2m  
1:100

第70图 第9・10・13~21号土壤

### (3) ビット

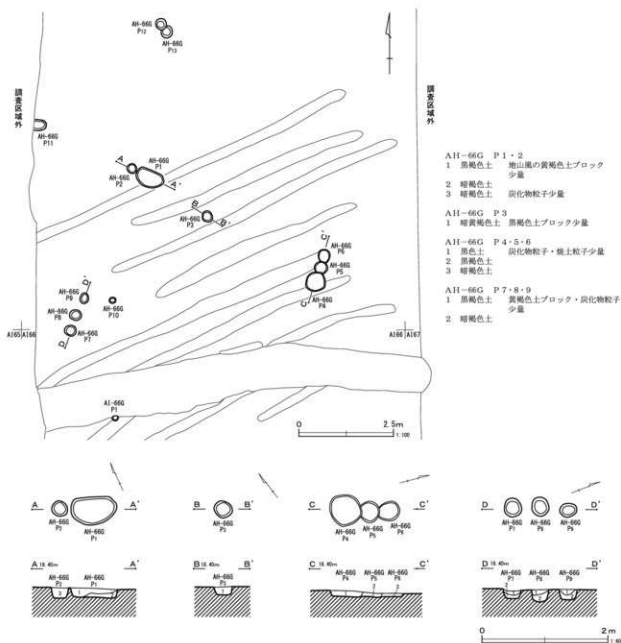
A区からは、単独のビットが75基検出された。(第71～75図) 調査区中央のAG・AH・AI・AK-66グリッド、調査区南側のAN・AO・AP・AQ-66グリッドを中心に分布する。数基程度のまとまりをもって分布している箇所が多い。規模は径0.12～0.55mほどで幅があり、深さは4～27cmで全体的に浅めである。覆土は、調査の都合上、ほとんどのものが観察できなかった。暗褐色土、黒褐色土で、炭化物を若干含むものが多い。柱痕等が認められるものはない。

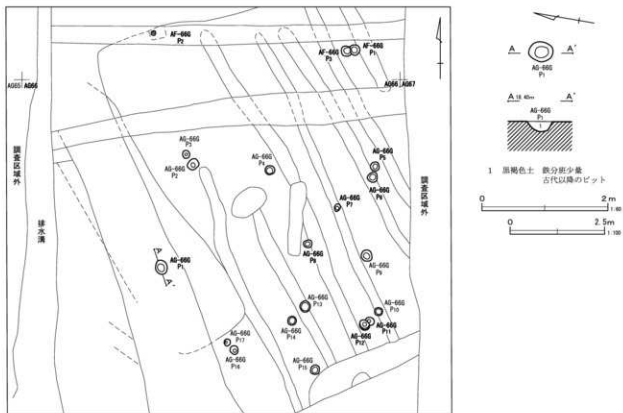
遺物は、土師器や須恵器の小片が出土しているのみである。

遺物は、土師器や須恵器の小片が出土しているのみである。

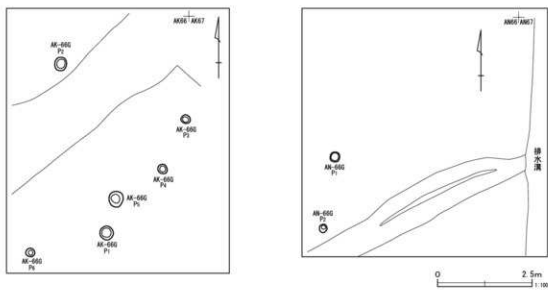
#### ビット出土遺物 (第76図)

A F-66グリッドビット2からは重ねられた状態の須恵器の完形の環が2点出土している。両者とも法量、器形とも非常に良く似ており、地鎮な



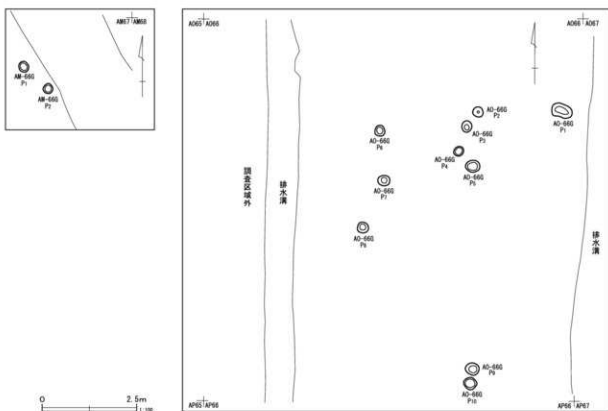


第72図 グリッドピット (2)



第73図 グリッドピット (3)



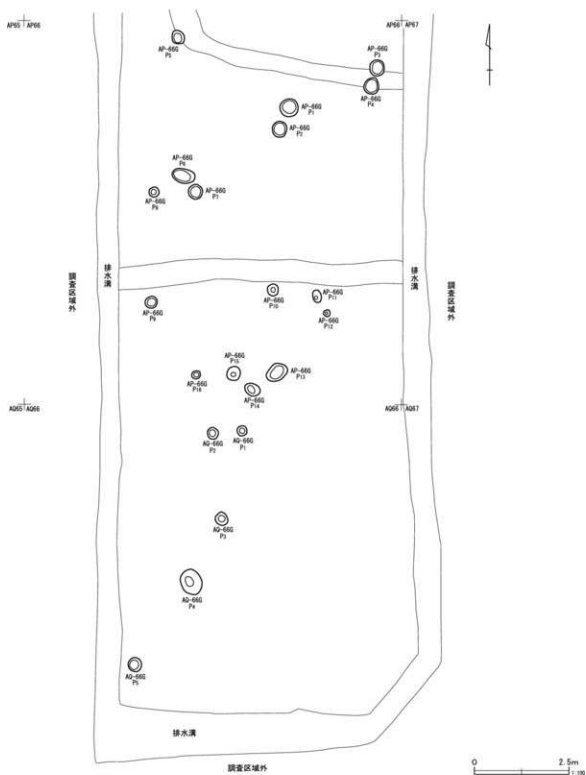


第74図 グリッドピット (4)

第22表 ピット一覧表 (1) (第71～74図) (単位: m)

グリッド	番号	埋土	長軸	短軸	深さ	出土遺物	備考
AF-66	1	—	0.40	0.35	0.16	—	
	2	—	0.12	0.12	0.14	環2点	
	3	—	0.30	0.30	0.13	—	
AG-66	1	黒褐色	0.40	0.35	0.16	—	
	2	—	0.33	0.33	0.25	—	
	3	—	0.31	0.31	0.27	—	
	4	—	0.38	0.35	0.25	—	
	5	—	0.37	0.35	0.18	—	
	6	—	0.39	0.31	0.17	—	
	7	—	0.21	0.16	0.07	—	
	8	—	0.25	0.21	0.22	—	
	9	—	0.31	0.30	0.17	—	
	10	—	0.23	0.22	0.10	—	
	11	—	0.25	[0.15]	0.12	—	
	12	—	0.30	0.25	0.20	—	
	13	—	0.32	0.30	0.20	—	
	14	—	0.24	0.24	0.26	—	
15	—	0.26	0.25	0.17	—		
16	—	0.25	0.23	0.16	—		
17	—	0.17	0.17	0.25	—		
AH-66	1	黒褐色	0.76	0.45	0.14	—	
	2	暗褐色	0.24	0.25	0.17	—	
	3	暗黄褐色	0.40	0.37	0.13	—	

グリッド	番号	埋土	長軸	短軸	深さ	出土遺物	備考	
	4	黒	0.50	0.50	0.06	—		
	5	黒褐色	0.35	0.35	0.04	—		
	6	暗褐色	[0.35]	0.30	0.04	—		
	7	黒褐色	0.30	0.29	0.14	—		
	8	黒褐色	0.42	0.31	0.16	—		
	9	黒褐色	0.29	0.22	0.16	—		
	10	—	0.17	0.15	0.15	—		
	11	—	0.36	0.30	0.10	—		
	12	—	0.32	0.28	0.43	—		
	13	—	0.26	0.24	0.48	—		
	AI-66	1	—	0.15	[0.12]	0.11	—	
	AK-66	1	—	0.35	0.35	0.43	—	
		2	—	0.46	0.31	0.21	—	
3		—	0.24	0.20	0.25	—		
4		—	0.23	0.23	0.52	—		
5		—	0.40	0.36	0.46	—		
6		—	0.22	0.21	0.22	—		
AM-66	1	—	0.27	0.23	0.28	—		
	2	—	0.25	0.25	0.30	—		
AN-66	1	—	0.25	0.25	0.08	—		
	2	—	0.22	0.20	0.11	—		
AO-66	1	—	0.55	0.37	0.14	—		
	2	—	0.27	0.25	0.11	—		



第75図 グリッドピット (5)

第23表 ピット一覧表 (2) (第74図)

(単位: m)

グリッド	番号	埋土	長軸	短軸	深さ	出土遺物	備考
AO-66	3	—	0.30	0.27	0.12	—	
	4	—	0.25	0.22	0.11	—	
	5	—	0.35	0.31	0.09	—	
	6	—	0.27	0.25	0.14	—	

グリッド	番号	埋土	長軸	短軸	深さ	出土遺物	備考
	7	—	0.30	0.25	0.09	—	
	8	—	0.28	0.27	0.13	—	
	9	—	0.35	0.31	0.12	—	
	10	—	0.34	0.31	0.10	—	

第24表 ビット一覧表(3) (第75図) (単位:m)

グリッド	番号	埋土	長軸	短軸	深さ	出土遺物	備考
AP66	1	—	0.47	0.46	0.14	—	
	2	—	0.41	0.38	0.12	—	
	3	—	0.41	0.38	0.12	—	
	4	—	0.42	0.36	0.13	—	
	5	—	0.39	0.31	0.18	—	
	6	—	0.60	0.39	0.10	—	
	7	—	0.49	0.47	0.10	—	
	8	—	0.25	0.25	0.18	—	
	9	—	0.32	0.32	0.09	—	
	10	—	0.30	0.28	0.28	—	
	11	—	0.32	0.21	0.16	—	

グリッド	番号	埋土	長軸	短軸	深さ	出土遺物	備考
	12	—	0.17	0.16	0.05	—	
	13	—	0.55	0.41	0.27	—	
	14	—	0.40	0.30	0.07	—	
	15	—	0.39	0.25	0.25	—	
	16	—	0.20	0.20	0.08	—	
AQ-66	1	—	0.27	0.25	0.10	—	
	2	—	0.31	0.30	0.05	—	
	3	—	0.35	0.32	0.22	—	
	4	—	0.67	0.53	0.27	—	
	5	—	0.35	0.35	0.13	—	



第76図 グリッドビット出土遺物

第25表 グリッドビット出土遺物観察表 (第76図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	11.7	3.9	5.5	H I J	100	普通	灰	南比企産 底面縁糸切り AF66G P2 №2	
2	須恵器	坏	12.2	3.8	5.5	E H I J	75	普通	灰	南比企産 AF66G	

どに使用したものと推定される。

1は完形、2は完形に近いものである。いずれ

も白色針状物質を含み南比企産である。9世紀前

半のものと考えられる。底面は回転糸切りである。

## V B区の遺構と遺物

### 1. 縄文時代

第77図1～3は中期後半の加曽利EⅢ式である。

1は口縁部の破片である。内湾気味に立ち上がる形態の深鉢形土器である。口縁部に1条の沈線が巡り、沈線以下に単節R Lの縄文を施す。2は深鉢形土器の胴部破片である。2条の隆帯で曲線的なモチーフを配し、単節R Lの縄文を施す。3は深鉢形土器の胴部破片である。沈線間に縄文を施した懸垂文が垂下する。縄文は摩滅して不明瞭である。

4～7は後期前葉の堀之内1式である。4は外反気味に立ち上がる形態の深鉢形土器である。口縁部に1条の沈線が巡る。5は浅鉢形土器の突起部の破片である。漏斗状の突起を付す。口縁部が内傾する形態で、波状口縁を呈するものと思われる。口縁部には曲線の沈線文を施す。6は沈線文を施した深鉢形土器の胴部破片である。称名寺式の系統を引く、曲線的なモチーフを施す。7は櫛歯状工具による文様を縦位に施した深鉢形土器の

胴部破片である。

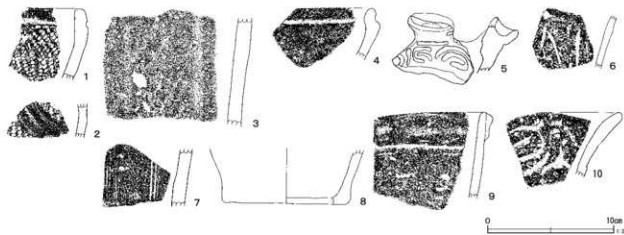
8は深鉢形土器の底部の破片である。後期の土器と思われる。

9は後期中葉の加曽利B式土器である。窪みを施した紐線が口縁部に巡る。紐線以下は無文と思われる。

10は晩期中葉の安行3 d式である。三叉入組文を施す。深鉢形もしくは鉢形土器と思われる。

(新屋雅明)

出土位置、層位について付言する。1・2が第2号溝跡、10が第3号溝跡K-66グリッド出土である以外は、いずれも第36号溝跡からの出土である。平面的にはQ・R・S・U・V-66グリッドの遺構の南側からの出土である。3がS-66グリッド砂利層、4がQ-66グリッド上層、5がU-66グリッド下層、6がR-66グリッド砂利層、7がU-66グリッド、8・9がV-66グリッド出土である。



第77図 B区出土の縄文土器

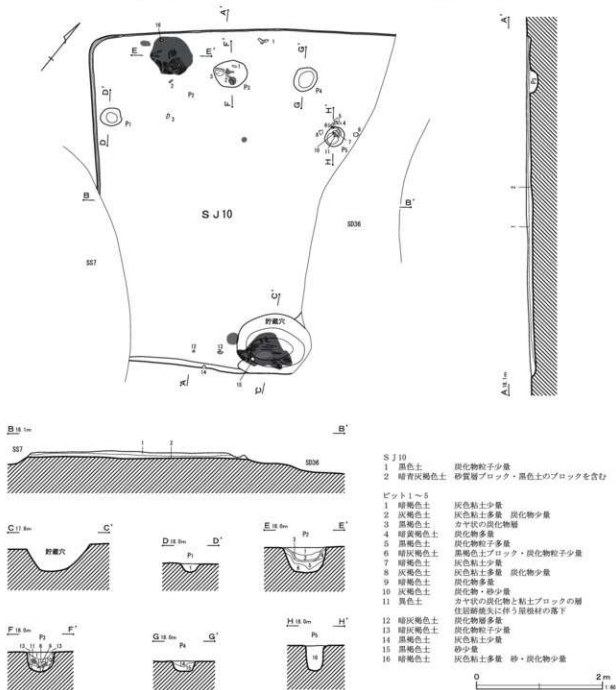
## 2. 古墳時代

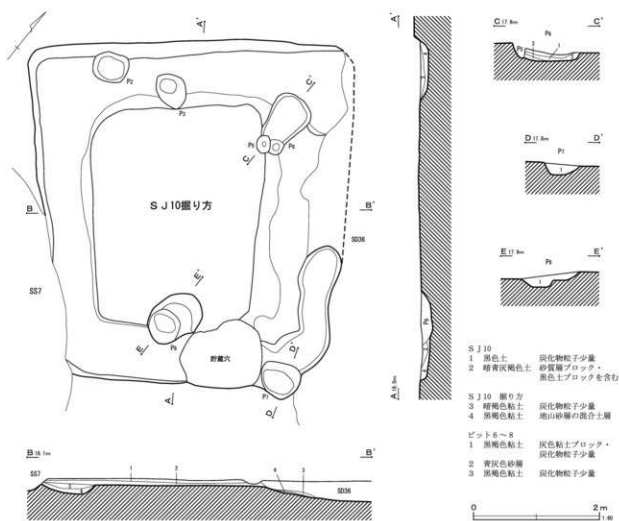
### (1) 古墳時代前期の住居跡

古墳時代の竪穴住居跡はA区の流路跡（第2号溝跡）より北側のみ、本事業のB・C区、第3次調査の調査区に分布する。B区からは36軒が検出されている。前期が30軒、中期が4軒、後期が2軒である。3条の河川跡（第3・36・48号溝跡）以外の全ての箇所に見られる。

### 第10号住居跡（第78～80図）

調査区の南側、Y-66グリッドに位置する。第7号古墳跡と重複する。遺構の東側が第36号溝跡により壊されているが、本遺構の廃絶後に第36号溝跡の南岸が当初より更に南下した結果と考えられる。第16・19号住居跡が西側3mにある。





第79図 第10号住居跡(2)

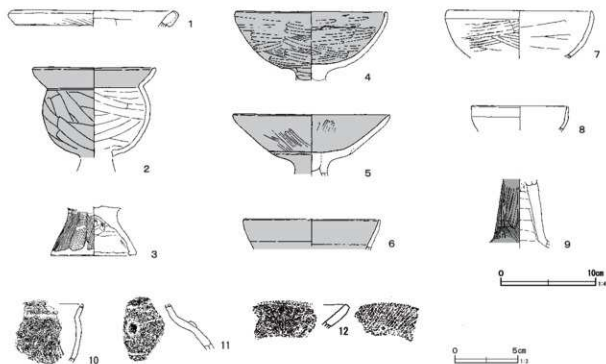
平面形は整った方形である。主軸はN-57°-Wを指す。規模は長軸5.33m、短軸は現状で4.54mを測る。深さは15cmほどで浅い。覆土は自然堆積である。

床面にはカヤ状の炭化物が多く分布し、焼失家屋である可能性が高い。柱材等の炭化材が検出されなかったことから、構造材を取り去った後に火災にあったものと考えられる。

施設は貯蔵穴、柱穴を検出した。カ跡はピットのいずれかが該当する可能性もあるが、覆土の様相が奇のものではないことから特定していない。貯蔵穴は南壁沿いの中央寄りに設けられていた。長径1.18m、短径0.96m、深さ30cmである。覆土は確認できなかった。検出前に床面同様の炭化物

の分布が認められたことから、埋め戻された可能性はある。柱穴は遺構の北側の壁沿いを中心に5本検出された。いずれもやや不整形な円形もしくは楕円形である。径35~65cm、深さ15~40cmを測る。柱はいずれも引き抜かれている。覆土は柱痕と考えられるものではなく、自然堆積と考えられる。この内P 2・3のみは、中・下層にカヤ状の炭化物を多量に含んでおり、ピットが埋没を始めた段階で流れ込んだものと考えられる。P 3は位置的にはカ跡と考えられるが、こうした土層の状況から相応しくないと考えられる。

貼床は明瞭でないが第2層が該当する可能性がある。掘り方は幅0.5~1.1m、深さ15cmで、東側が確實ではないが、周溝状に全周していたと考え



第80図 第10号住居跡出土遺物

第26表 第10号住居跡出土遺物観察表 (第80図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(17.1)	1.7	—	A E H I K	5	普通	にぶい・橙	SK3	
2	土師器	脚付鉢	12.9	9.4	—	C E G H I K	85	普通	褐灰	外面全面 内面口縁部赤彩 SK2 №3	93-1
3	土師器	台付甕	—	5.2	8.9	A B C E H I K	95	普通	灰黄褐	内面煤付着 SK5	93-4
4	土師器	高坏	(15.8)	7.2	—	A C D	40	普通	黒褐	赤彩 №4・5曲	93-2
5	土師器	高坏	16.4	6.5	—	A B C E G H I K	80	普通	橙	赤彩 №1	93-3
6	土師器	埴	(14.2)	3.2	—	A E H I K	15	普通	にぶい・橙	内外面赤彩 SK10 SK3	
7	土師器	坏	(14.9)	5.0	—	C D E H	10	普通	明赤褐	系譜不明 (非北武蔵型) №9	
8	土師器	坏	(10.0)	2.6	—	C H I J K	5	普通	赤褐	南北産産 統比産産型か SK2 №2	
9	土師器	高坏	—	7.2	—	A C E H I K	80	普通	にぶい・褐	赤彩 №15	
10	土師器	甕	—	4.6	—	C H I J K	5	普通	にぶい・褐		
11	土師器	壺	—	3.6	—	A B C E H I K	5	普通	橙	ボタン貼付あり	164-1
12	土師器	壺	—	1.9	—	B E H I J	5	普通	橙	格子状のヘラ描文 SK2	164-1

られる。埋め土は地山の砂や炭化物を含む粘土である。この埋め土を外した状態で、P6～P8を検出した。長径0.65～1.05mで、深さ10～15cmである。覆土は掘り方の埋め土と同様のもので、ピットとしての機能があったわけではなく、掘りムラに近いものであった可能性がある。

遺物は少量で、古墳時代前期の壺・小型壺・台付甕・高坏・鉢が出土した。2は脚付鉢で、内外面ともヘラナデ後赤彩される。3の台付甕の脚台

部は器高が低く小型になっている。4・5の高坏はホノ接合のよく分かるものである。内外面とも赤彩される。9の高坏は柱状を呈するものである。11の小型壺は肩部に径8mmほどのボタン状の貼付が見られる。12の壺は口縁部の外面にごく細いヘラ描きの山形文、内面に格子状のヘラ描きが施されるものである。11・12は弥生時代のものである可能性がある。

### 第11号住居跡 (第81・82図)

調査区の南端、A B-66・67グリッドに位置する。他の住居跡からやや離れた位置にあり、最も近い第12号住居跡とも9 mほど離れている。遺構の東側が調査区域外にかかり、北側が日河川跡により削られ、西側は第2号古墳跡と重複する。

重複が著しいため、遺構の南東辺と南西辺を除いた外周を削られたような形でしか検出できなかった。

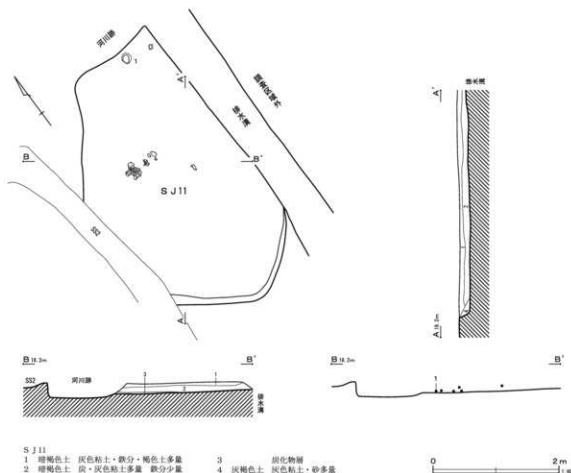
平面形は、遺存している箇所から隅丸方形と考えられる。主軸はN-36°-Eを指す。規模は残存している範囲で長軸4.50 m、短軸3.20 mを測る。深さは21 cmほどで浅い。覆土は自然堆積である。床面にはカヤ状の炭化物が一枚分布している。貯蔵穴、柱穴等の施設は検出できなかった。

遺物は少量(73点)で、古墳時代前期の壺・小型壺・台付甕・高坏が出土した。2の台付甕は小型だが成形、調整とも丁寧に行われている。口縁部は「く」の字状に接合され、端部は面を持つ。胴部の刷毛目が斜め方向で、頸部の括れが強いことから比較的新しい時期のものと考えられる。

### 第12号住居跡 (第83-87図)

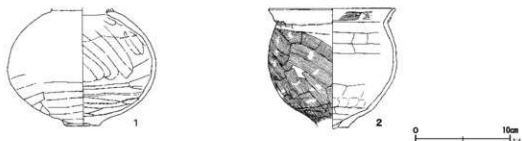
調査区の南側、A A-66グリッドに位置する。第6号古墳跡の墳丘区画内に位置する。北側1 mに第13号住居跡が、北西側2 mに第14号住居跡がある。

平面形は整った正方形である。主軸は北を基準にするとN-57°-Wを指す。規模は長軸、短軸とも3.5 mを測る。深さは39 cmで深い。覆土は自



第81図 第11号住居跡





第82図 第11号住居跡出土遺物

第27表 第11号住居跡出土遺物観察表 (第82図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	—	12.4	3.5	E G I K	70	普通	浅黄橙	内外面煤付着 No1	93-6
2	土師器	台付甕	(13.0)	12.6	—	A C E H I K	65	普通	にぶい橙		93-5

然堆積だが、上層に褐色色土、砂利が多く、半ばまで埋没した段階で最終的に洪水で埋没したものと考えられる。また床面に第1次堆積土の黄褐色土流入後に、その上面に炭化物が分布していた。

施設は壁周溝、柱穴を検出した。壁周溝は北壁東側、北東コーナーから東壁、南壁に認められ、幅0.1~0.16m、深さ7~10cmを測る。柱穴は2本で、いずれもやや不整な円形である。P1は径37cm、深さ22cm、P2は径26cm、深さ25cmを測る。柱痕は認められなかった。覆土は粘土を多く含む暗灰褐色土である。

掘り方は幅0.4~0.6m、深さ10~20cmで、周溝状に全周している。東側から径25cm、深さ15cmのビット状の掘り込みと長径0.78m、短径0.3m、深さ20cmの土塊状の掘り込みが認められた。特に何らかの機能を有するものとは思われない。埋め土は砂、粘土を多く含む褐色土である。

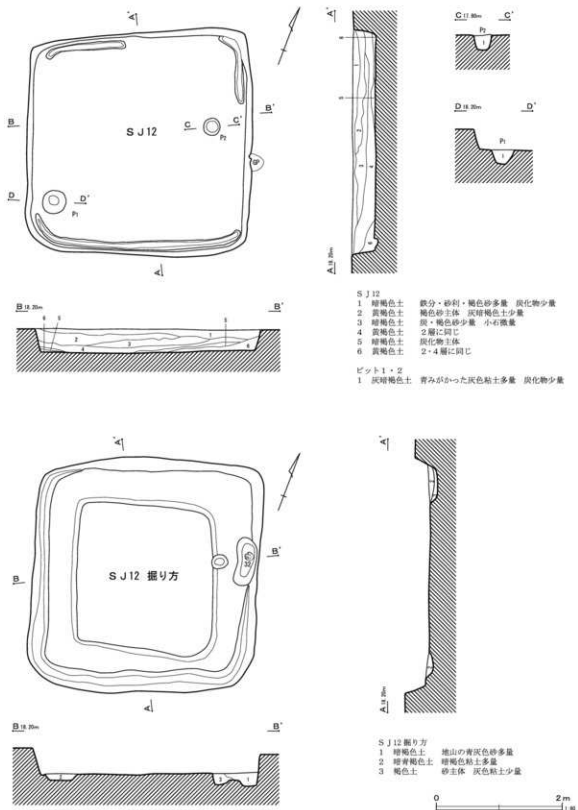
遺物は多く、古墳時代前期の壺・小型壺・台付甕・高坏・器台・鉢・甕・ミニチュア、弥生時代中期の壺・甕が出土した。床面よりやや浮いた状態で多く出土しており、本来本遺構に帰属するものではなく、一括して廃棄されたものである可能性が高い。中・小型品以外は大部分が破片であることも示唆的である。

1~6は壺である。口縁部の外周に粘土帯を貼

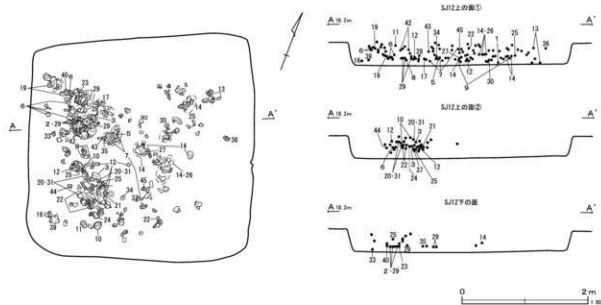
付することにより複合部を作り出す複合口縁のもの、二重口縁のものがある。1の口縁端部には工具による当たりが見られる。複合部は厚めである。3は口縁端部、下半の段の部分に明瞭な面を作り出す。内外面とも非常に丁寧なヘラ磨きが施される。色調も黄白色に近く胎土も精選されている。5は直線的で複合部も薄く、甕の可能性もある。6は肩部に径5mmほどの粘土の粒の貼付が見られる。

7~9・11・12は小型壺である。全体的に器面の風化が著しく、傷んでいる。調整が不明瞭な部分が多い。9は厚めの底部で、内面に指頭瓦痕が多く残る。12は頸部があまり括れず、大きめの平底のものである。外面全体に煤が付着する。13・14の台付甕は胴部が長めになるものである。器面の傷みが著しい。10は口縁部が短く、鉢状を呈しているが、体部の作りは小型壺と同様のものである。

15はS字状口縁台付甕である。口縁部は分厚く、模倣が崩れている。16~21は台付甕の脚台部である。いずれもホソ接合と考えられるが、19・21は断面形が箱形を呈し、異なる可能性もある。17は上部から充填した粘土の痕跡が明瞭に認められる。20の脚台部端部外周には粘土が貼付され、複合口縁状になっている。21は小型である。28は口縁部



第83図 第12号住居跡(1)



第84図 第12号住居跡(2)

が長めで大型になると思われる。口唇部に左方向からの浅い刷毛目工具による押捺が施される。31～33は高坏である。31の脚部は細い横方向のヘラ磨きが施されている。33は小型だが非常に丁寧に作られ、ヘラ磨きも細かく光沢がある。34～38は器台である。36・38は脚部が細い。37は径が大きく、台付甕の脚部状で、上総地方の影響を受けているものである。10・39～41は鉢である。39は底部が突出する。40・41は法量、調整が非常に近いものである。42・43は甕である。42は鉢形の、43は広口壺形のものである。いずれも単孔である。44は手握ねである。指ナデの痕跡が明瞭である。45・46はミニチュアである。45はヘラナデ、46は刷毛目によって仕上げられている。47～49は弥生土器である。47は波状口縁を呈する。48は2条一単位、左回りの波状文が口縁端部と、複合部外面、その下位の3箇所に施される。49は4条一単位、左回りの波状文が施される。口唇部に内側から浅い押捺が施される。50は貝床穴痕泥岩である。長さ3.2cm、幅2.5cm、厚さ1.8cmを測る。

#### 第13号住居跡(第88・89図)

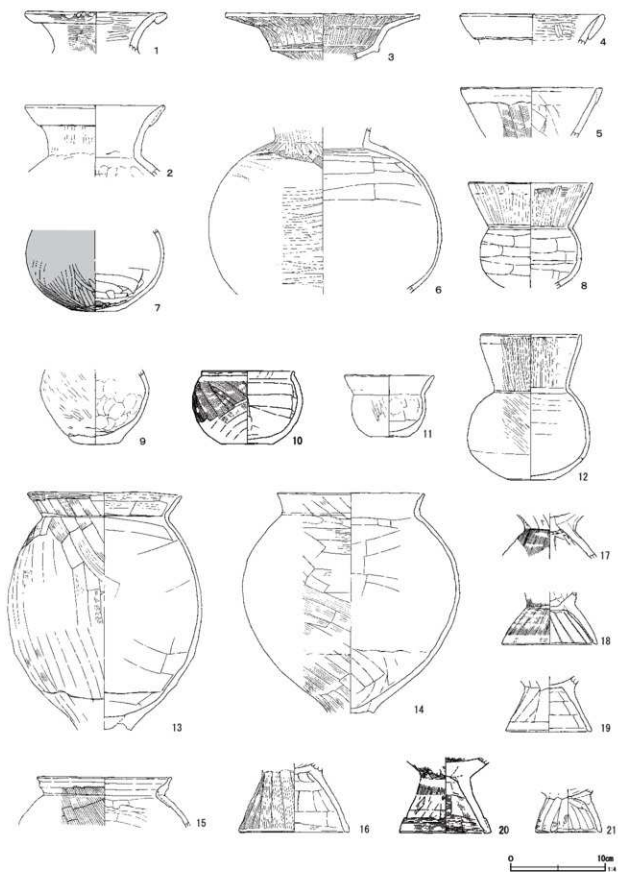
調査区の南側、Z-66グリッドに位置する。第6号古墳跡の墳丘区画内に位置する。南側1mに第12号住居跡が、南西側2mに第14号住居跡がある。

第6号古墳跡に遺構の北側を壊されているが、平面形は方形と考えられる。主軸は北を基準にするとN-17°-Wを指す。規模は長軸4.13m、短軸3.88mを測る。深さは35cmで深い。覆土は自然堆積だが、下層に褐色砂が多く、埋没段階の当初に洪水を受けているものと考えられる。また床面に炭化物が分布していた。

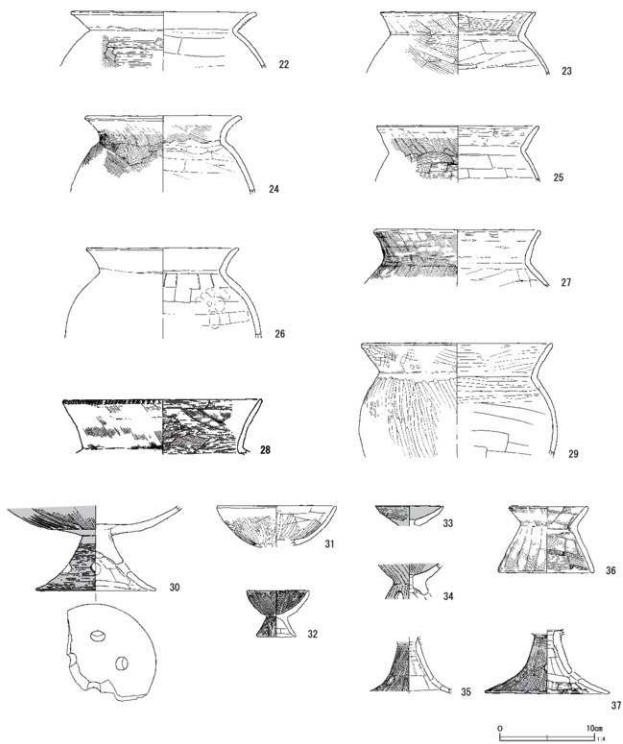
施設はイサ跡を検出した。長軸36cm、短軸25cm、深さ5cmを測る。炉床面はあまり焼けていない。

掘り方は幅0.3～1.0m、深さ10～15cmで、本来は周溝状に全周しているものと思われる。埋め土は炭化物、粘土を多く含む暗青灰色粘土である。

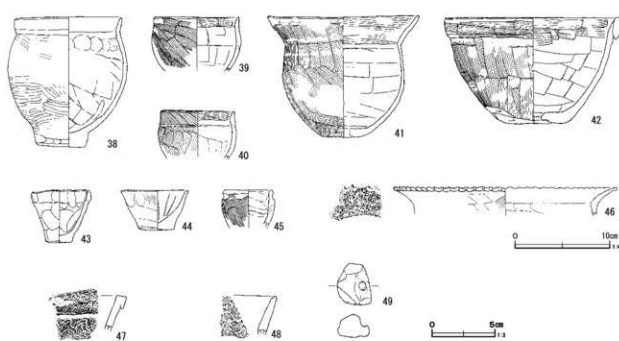
遺物は多く、古墳時代前期の壺・台付甕・高坏・ミニチュアが出土した。中～上層から多く出土しており、第1次堆積土流入後に流れ込んだも



第85图 第12号住居跡出土遺物(1)



第86图 第12号住居跡出土遺物(2)



第87図 第12号住居跡出土遺物(3)

第28表 第12号住居跡出土遺物観察表(1)(第85・86図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(14.7)	4.4	—	ACDEHIJ	25	普通	にぶい・黄橙	No.24	
2	土師器	壺	(14.4)	7.5	—	ACEGHIJ	40	普通	橙	No.163	94-7
3	土師器	壺	20.4	4.9	—	ACEHIK	70	普通	にぶい・黄橙	No.51・138	94-6
4	土師器	壺	(14.9)	3.2	—	AEGHIK	10	良好	褐		
5	土師器	壺	(14.9)	5.2	—	ACEHIJKL	10	普通	明黄褐	No.44	
6	土師器	壺	—	17.7	—	ACEHIJ	25	良好	橙	最大径24.5cm No.69・145	
7	土師器	壺	—	8.7	4.9	ACEHI	50	普通	にぶい・橙	赤彩 No.86	
8	土師器	小型壺	(13.0)	11.2	—	ACEHIK	30	普通	にぶい・橙	下端部に煤付着 No.130	
9	土師器	小型壺	—	7.9	4.8	ACDEHJ	60	普通	にぶい・橙	No.22・33	
10	土師器	小型壺	(9.6)	7.7	5.3	ACEIK	50	普通	にぶい・黄橙	No.97・122	96-4
11	土師器	埴	(9.3)	6.4	4.0	ACEHIK	60	普通	にぶい・橙	No.99	96-3
12	土師器	埴	10.4	15.4	5.0	BCEHIK	70	普通	にぶい・橙	外面全体に煤付着 No.34・120他	95-6
13	土師器	台付甕	16.2	25.1	—	CDEH	80	普通	橙	内外面煤付着 No.60	93-7
14	土師器	台付甕	15.5	23.2	—	BCEGIJ	30	普通	にぶい・赤橙	赤変 煤付着 No.33・167他	94-2
15	土師器	台付甕	(14.0)	5.3	—	BCK	20	普通	にぶい・褐		164-1
16	土師器	台付甕	—	7.3	11.6	ABCEHIK	100	普通	橙	No.102	95-5
17	土師器	台付甕	—	4.8	—	ACDHIK	30	普通	にぶい・赤褐	外面全体に煤付着 No.50	
18	土師器	台付甕	—	5.6	9.9	ABCEHIJ	95	普通	にぶい・黄橙	No.114	95-4
19	土師器	台付甕	—	5.8	9.0	CEGHIK	85	普通	にぶい・橙	No.64・70	96-6
20	土師器	台付甕	—	7.9	9.5	ACEHIJ	35	普通	橙	No.124	96-2
21	土師器	台付甕	—	4.6	7.0	ACDEI	80	普通	赤褐	No.118	96-5
22	土師器	甕	(19.2)	5.9	—	ACEHI	50	普通	褐灰	内外面煤付着 No.76・133	
23	土師器	甕	(16.1)	6.6	—	ACEGIJ	20	普通	にぶい・赤褐	No.159	
24	土師器	甕	(16.0)	8.3	—	ACEH	25	良好	浅黄橙	外面煤付着 No.111	
25	土師器	甕	17.0	5.9	—	ACDEHIJ	80	普通	灰褐	内外面煤付着 No.119・169他	
26	土師器	甕	(15.9)	9.6	—	BCEHIK	20	普通	橙	No.27	
27	土師器	甕	(17.3)	6.0	—	ACEH	20	普通	にぶい・黄橙	No.32	
28	土師器	甕	(21.1)	5.8	—	AEHIJK	20	普通	橙	内外面煤付着 No.49	164-1

第29表 第12号住居跡出土遺物観察表(2) (第86・87図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
29	土師器	甕	20.0	12.0	—	A C D E I	50	普通	にぶい赤褐	No.60・146他	94-3
30	土師器	高坏	—	8.9 (12.6)	—	E H I J K	65	普通	橙	外面赤彩 No.109・117他	
31	土師器	高坏	12.5	4.3	—	A C E H I K	95	普通	にぶい黄		94-5
32	土師器	高坏	6.4	4.9	4.0	A C H I	95	良好	にぶい黄	赤彩 No.161	95-1
33	土師器	器台	7.1	2.1	—	A C E G H I J	100	良好	橙	赤彩 No.96	
34	土師器	器台	—	3.8	—	A C E I J K	70	良好	明赤褐	赤彩 No.164	95-3
35	土師器	器台	—	5.9	—	C D E H I	70	普通	赤	赤彩 No.16	
36	土師器	器台	8.1	7.0	9.9	B E H	100	良好	橙	No.140	94-1
37	土師器	器台	—	6.8 (13.0)	—	A E I J	25	普通	赤	赤彩	
38	土師器	鉢	11.1	13.7	4.8	A C E H I K	90	普通	にぶい黄	内外面煤付着 No.101	94-1
39	土師器	鉢	(9.0)	13.8	—	A C E H I J	20	普通	橙	No.156	
40	土師器	鉢	(7.5)	5.7	—	A C D E H I	20	普通	にぶい赤褐		96-1
41	土師器	甕	(16.0)	12.8	4.1	C D E G H	70	良好	浅黄橙	外面煤付着 No.52・53	
42	土師器	甕	18.3	11.2	6.3	C E G H	80	普通	浅黄橙	No.42	94-4
43	土師器	手捏ね	5.8	5.5	2.4	C D E G H I K	100	普通	にぶい黄	No.105	95-2
44	土師器	ミニチュア	(7.0)	4.2	3.7	C E G H I J	70	良好	浅黄橙	No.81	
45	土師器	ミニチュア	(5.0)	4.0	—	A C E H I J K	20	普通	にぶい黄		164-1
46	弥生	甕 (23.5)	3.0	—	—	A B C E I K	5	普通	にぶい黄	波状口縁	
47	弥生	甕	—	2.8	—	C E I J	5	普通	褐灰		164-1
48	弥生	甕	—	3.0	—	E H I J K	5	普通	にぶい黄	掘り方	164-1
49	その他	貝殻(前殻)踏	—	—	—	—	—	—	橙	10.1g	

のと考えられる。

1・2は複合口縁の甕である。口縁部の外周に粘土帯を貼付することにより複合部を作り出すので複合部が薄く、長い。2の外面には線刻が施されており、浮文状の意匠と考えられる。複合部の上下端部に、左方向からの浅い刷毛目工具による押捺が施される。3は台付甕である。端部の内面が折り返し状になっている。4〜9は甕である。6は左方向からの押捺が施され、弥生時代のものである可能性がある。12のミニチュアは外面に刷毛目、内面にヘラナデが施される。

#### 第14号住居跡 (第90・91図)

調査区の南側、Z・A A-66グリッドに位置する。第6号古墳跡の墳丘区画内に位置する。南側1 mに第12号住居跡が、東側1 mに第13号住居跡がある。

旧流路跡、第6号古墳跡と遺構の西側を壊され

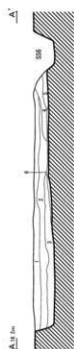
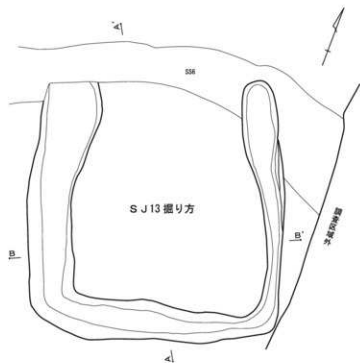
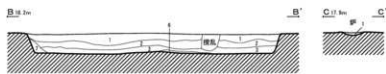
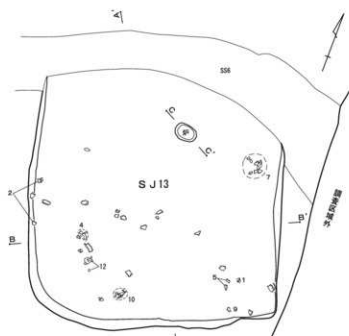
ているが、平面形はやや西側が開く方形と考えられる。主軸はN-57°-Wを指す。規模は長軸方向が残存している範囲で2.97 m、短軸2.90 mを測る。深さは34 cmで深い。覆土は自然堆積である。また床面に炭化物が分布していた。

施設は炉跡を2箇所検出した。炉跡Aは長軸65 cm、短軸55 cm、深さ10 cmを測る。炉跡Bは長軸53 cm、短軸35 cm、深さ13 cmを測る。炉跡はあまり焼けていない。

柱穴は2箇所確認した。P 1は長軸25 cm、短軸13 cm、深さ14 cm、P 2は径23 cm、深さ16 cmを測る。柱痕は認められなかった。

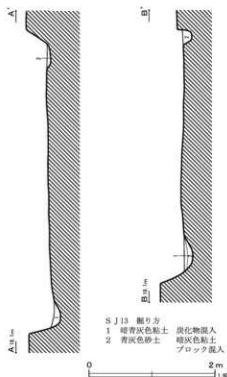
掘り方は確認できなかった。

遺物は少量で、遺構の南側の土層からまとまって出土した。弥生時代後期前半の甕・高坏、古墳時代前期の甕・台付甕の細片が出土したのみである。図示しえたものは8を除き、弥生時代のものである。



- S J 13
- |        |                    |
|--------|--------------------|
| 1 赤褐色土 | 酸化鉄多量 灰色粘土・炭化物少量   |
| 2 灰褐色土 | 灰色粘土多量 炭化物少量       |
| 3 灰褐色土 | 灰色粘土多量 褐色砂多量 炭化物少量 |
| 4 灰褐色土 | 3層に同じ 炭化物が3層より多量   |
| 5 褐色土  | 褐色砂・灰色粘土多量         |
| 6 炭化物層 | 炭化物に石灰質            |
| 7 暗褐色土 | 灰色粘土多量             |

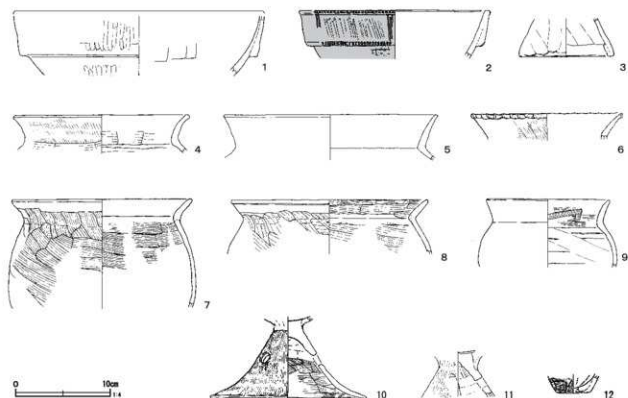
- 炉跡
- |        |          |
|--------|----------|
| 1 赤褐色土 | 炭化物 焼土多量 |
|--------|----------|



- S J 13 掘り方
- |          |                 |
|----------|-----------------|
| 1 暗青灰色粘土 | 炭化物混入           |
| 2 青灰色砂土  | 暗灰色粘土<br>ブロック混入 |

第88図 第13号住居跡





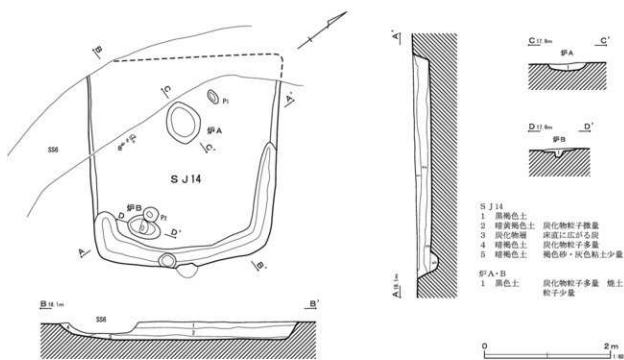
第89図 第13号住居跡出土遺物

第30表 第13号住居跡出土遺物観察表 (第89図)

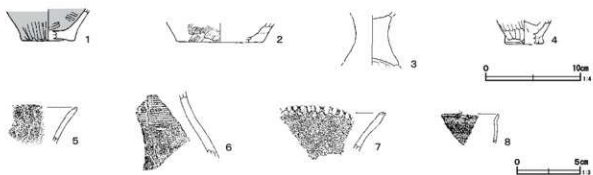
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	—	6.3	—	ABEHI	15	普通	橙	No.21	
2	土師器	壺 (19.9)	5.1	—	—	ACEHI	5	普通	明赤褐	赤彩 No.8・11	164-1
3	土師器	台付甕	—	4.1 (10.0)	—	CEGH	20	普通	にぶい黄橙		
4	土師器	甕 (18.1)	4.1	—	—	ACEGI	15	普通	にぶい黄橙	内面煤付着 No.6	
5	土師器	甕 (22.2)	4.8	—	—	ACDEHIJ	10	普通	にぶい橙	No.20	
6	土師器	甕 (15.9)	2.8	—	—	ABCEHI	10	普通	橙		164-1
7	土師器	甕 (18.8)	11.4	—	—	CEIK	20	普通	暗褐	No.25	
8	土師器	甕 (20.6)	5.7	—	—	ABCEHI	15	普通	黒褐	内外面煤付着	
9	土師器	甕 (12.9)	7.1	—	—	ACDEHIJ	30	普通	橙	No.22	
10	土師器	高坏	—	8.6 (16.4)	—	ACDEHIJ	50	普通	橙	No.1	97-1
11	土師器	高坏	—	4.9	—	ACEHIJK	60	普通	にぶい褐		
12	土師器	ミニチュア	—	2.0 (3.5)	—	ACEHK	40	普通	橙	No.3	

1・2は壺・甕の底部で、底面はヘラケズリに近いヘラナデで平坦に仕上げられている。4はミニチュアである。胴部はヘラ磨き、胴部下半はヘラケズリに近いヘラナデである。5～7は甕の口縁部、頸部の破片である。5は3条1単位、左回

りの波状文が施される。口唇部に内側から浅い甲捺が施される。6は8条1単位、右回りの籐状文が2段施される。7は口唇部に内側から浅い甲捺が施される。8は土師器の甕である。



第90図 第14号住居跡



第91図 第14号住居跡出土遺物

第31表 第14号住居跡出土遺物観察表 (第91図)

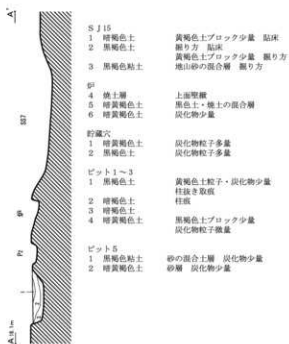
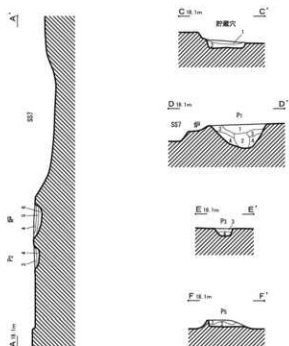
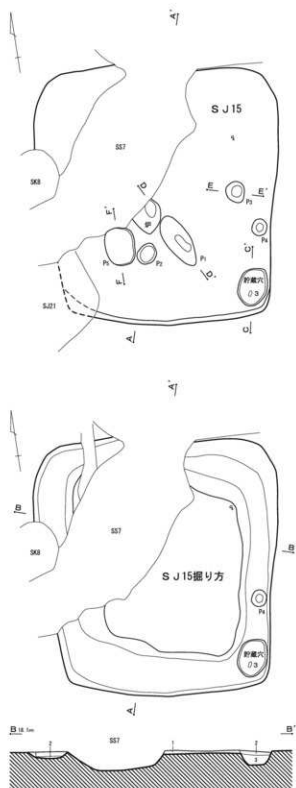
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	弥生	壺	—	3.4	(5.5)	C D E F H	30	普通	にぶい椀	赤彩	
2	弥生	甕	—	2.0	(9.1)	A C E H I K	15	普通	にぶい椀	内外面煤付着	
3	土師器	高坏	—	5.3	—	C D E G H I	80	普通	椀	外面煤付着	
4	土師器	ミニチュア	—	2.5	(3.8)	A C D E H	25	普通	にぶい椀		
5	弥生	壺	—	2.9	—	A C I	5	普通	灰褐		164-1
6	弥生	壺	—	5.5	—	A C E H I K	5	普通	にぶい赤褐		164-1
7	土師器	甕	—	3.1	—	A C E G H I	5	普通	灰褐	外面煤付着	
8	土師器	椀	—	2.3	—	A C E H I K	5	普通	浅黄橙	No.6	

第15号住居跡 (第92・93図)

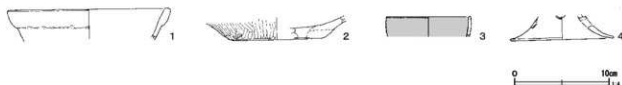
調査区の南側、Z-66グリッドに位置する。第7号古墳跡、第8号土壇と重複し、いずれよりも

古い。第21号住居跡との新旧は不明である。

平面形は隅丸方形である。床面は既に削平されており、カギ跡と柱穴、掘り方を検出した。規模は



第92図 第15号住居跡



第93図 第15号住居跡出土遺物

第32表 第15号住居跡出土遺物観察表 (第93図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(17.1)	3.3	—	C E G H I	10	普通	にぶい黄橙		
2	土師器	壺	—	2.3	9.4	B C E H I	20	普通	橙		
3	土師器	小型壺	(8.8)	2.2	—	A C I	15	普通	にぶい橙	赤彩 SKI	
4	土師器	器台	—	2.5	(11.0)	B C E H I	20	普通	橙		

長軸4.1m、短軸3.88mを測る。深さは27cmで深い。覆土は確認できなかった。

施設は茅葺、貯蔵穴、ピットを検出した。茅葺は第7号古墳跡と重複しており、遺存している範囲で長軸45cm、短軸40cm、深さ5cmを測る。茅床面はあまり焼けていない。貯蔵穴は南東コーナーの壁沿いに設けられていた。長径0.65m、短径0.45m、深さ13cmである。覆土は炭化物を多く含む。ピットは5基で、P1とP5が楕円形、その他はやや不整な円形である。径25~90cm、深さ42~54cmを測る。柱穴と考えられるものはP1のみである。覆土は第1層が柱引き抜き後の堆積層、2層が柱痕、3・4層が掘り方の埋め土と考えられる。

掘り方は幅0.5~0.9m、深さ10~20cmで、周溝状に全周している。埋め土は黄褐色粘土や地山の砂を含む。

遺物は少なく、床面から散在して出土した。古墳時代前期の壺・台付甕・小型壺・高坏が出土した。また混入で埴輪が出土している。3は小型壺の口縁端部である。

#### 第16号住居跡 (第94・95図)

調査区の南側、Y-65グリッドに位置する。遺構の西側の大部分は調査区域外になる。第7号古墳跡、第5号高跡と重複し、前者より古く後者よ

り新しい。遺構の4分の1ほどの各辺2mほどしか検出できなかった。

平面形は隅丸方形と推定される。覆土は自然堆積である。調査ではほとんど掘り込みを検出できなかったが、調査区域外の法面で確認された断面から、深さは27cmあったことが明らかになった。覆土は自然堆積である。

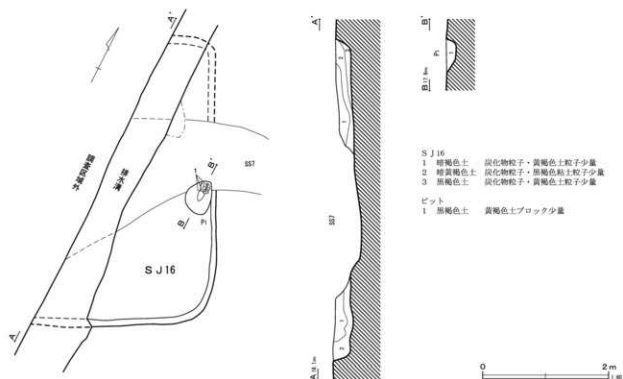
床面からは、東壁際にP1を検出したのみである。規模は長径0.50m、短径0.39m、深さ15cmである。ピット内から1の壺が出土した。

掘り方は検出されなかった。

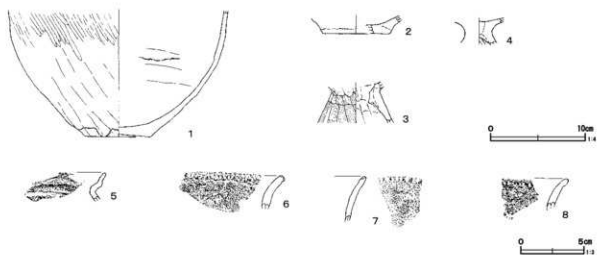
遺物は少なく、覆土中から散在して、古墳時代前期の壺・台付甕・高坏が出土した。1の壺は外面が2次加熱により傷み、調整はほとんど不明である。5はS字状口縁台付甕である。口縁部はやや薄くなっている。内面に若干面を持つ。6~8は弥生土器の可能性のあるものである。6は端部に上下両側から、7は内側に上から、8は端部に浅い刻み目が入れられている。

#### 第18号住居跡 (第96・97図)

調査区の南側、X-65グリッドに位置する。遺構の北東側2分の1は、第10号住居跡の項でも述べたように、第36号溝跡により壊されているが、本遺構の廃絶後に第36号溝跡の南岸が当初より更に南下した結果と考えられる。西壁の中央に第16



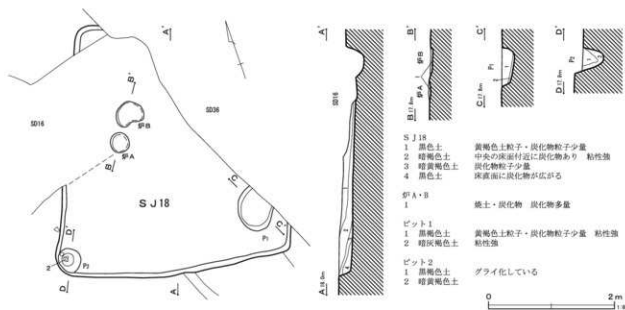
第94図 第16号住居跡



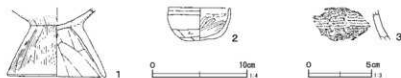
第95図 第16号住居跡出土遺物

第33表 第16号住居跡出土遺物観察表 (第95図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	—	13.3	7.0	A C D E G H	30	普通	橙	内外面煤付着 P1 No.1・2他	
2	土師器	壺	—	2.0	(7.0)	A C E H I K	20	普通	にぶい・褐		
3	土師器	台付甕	—	4.3	—	A C E H I K	30	普通	にぶい・黄橙	外面に黒炭あり	
4	土師器	高坏	—	2.8	—	A C E G I K	70	普通	にぶい・橙		
5	土師器	台付甕	—	2.3	—	A C E H I K	5	普通	にぶい・褐	S字	
6	土師器	甕	—	2.7	—	A C E H K	5	普通	にぶい・黄橙		
7	土師器	甕	—	3.6	—	A I K	5	普通	にぶい・橙		
8	土師器	甕	—	2.5	—	C E H I	5	普通	にぶい・橙		



第96図 第18号住居跡



第97図 第18号住居跡出土遺物

第34表 第18号住居跡出土遺物観察表 (第97図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	台付甕	—	7.3	10.0	A C E G H I	30	普通	浅黄橙	脚部天井部に埋付着	97-5
2	土師器	ミニチュア	6.3	3.5	—	A B C E H I K	100	普通	にぶい橙	P2 No.1	97-4
3	土師器	甕	—	2.4	—	A C E I K	5	普通	灰黄褐	P1	

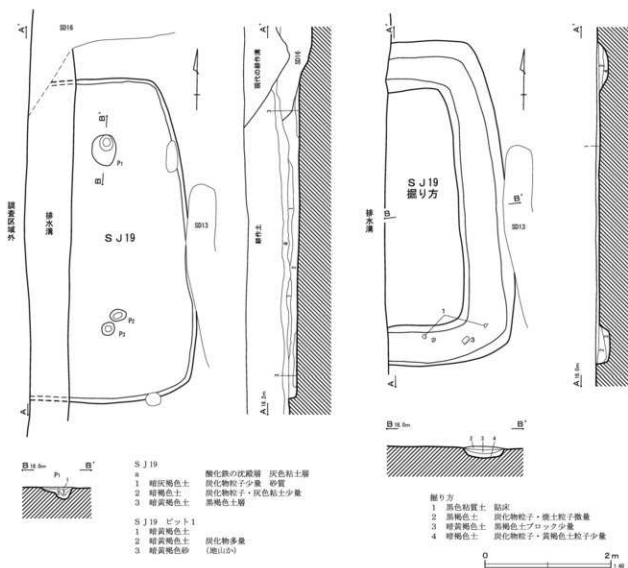
号溝跡が重複し、本遺構が古い。南側は第5号溝跡と重複し、本遺構が新しい。

平面形は南側がやや歪んだ方形である。主軸はN-20°-Eを指す。規模は長軸3.97m、短軸3.62m、深さ20cmを測る。覆土は自然堆積である。また床面に炭化物が分布していた。

施設はが跡2箇所、ピット2箇所を検出した。が跡Aは南側が凹んだ径40cmの不整形円形で、掘り込みはほとんどなく、が跡面の焼土によりが跡と判断したものである。が跡Bは径30cmの円形で、同様にが跡面の焼土によりが跡と判断したものである。ピットは南東、南西の各コーナーから検出

した。P1は楕円形で、現状で長径65cm、短径57cm、深さ17cmを測る。P2はやや不整形な円形で、径36cm、深さ32cmを測る。両者とも柱穴とは判断しがたい。掘り方は検出されなかった。

遺物は少なく、覆土中から散在して、古墳時代前期の壺・台付甕・ミニチュア・弥生土器等が出土した。2のミニチュアは風化が著しく、調整はほとんど見えない。外面にもヘラ磨きが施された可能性がある。色調は黄白色に近い。3は弥生時代後期前半の甕である。5条1単位、右回りの縞状文が施される。



第98図 第19号住居跡

### 第19号住居跡 (第98・99図)

調査区南側、X・Y-65グリッドに位置する。遺構の西側は、調査区域外にかかる。第13・16号溝跡と重複し、本遺構が古い。

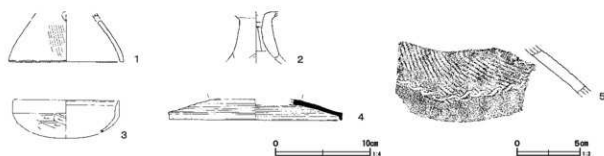
平面形は南側がやや胴の張る隅丸方形である。主軸はN-11°-Wを指す。規模は長軸5.10m、短軸1.87mを測る。深さは6cmで、浅い。覆土は自然堆積で、第1層は砂質である。

施設はピット3箇所を検出した。その位置から、柱穴と考えられる。P1は不整な楕円形で、長径50cm、短径38cm、深さ18cmを測る。覆土は第2層

が柱痕である。P2・3はやや不整な円形で、各々長径25、22cm、深さ10cmを測る。覆土は確認できなかったため確実ではないが、建て替えの可能性がある。

床面全体に黒色粘土による貼床が施されていた。掘り方は幅0.65~0.75m、深さ18cmで、周溝状に全周している。埋め土は褐色土と黄褐色土の互層になっていた。

遺物は少なく、覆土中から散在して、古墳時代前期の壺・台付甕・高坏・器台が、上層から古墳時代後期、奈良時代の遺物が出土した。高坏・器



第99図 第19号住居跡出土遺物

第35表 第19号住居跡出土遺物観察表 (第99図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	高環	—	5.0	12.0	ACEHI	10	普通	にぶい黄緑	No.1・4	
2	土師器	器台	—	5.5	—	ACEHIK	40	普通	橙		
3	土師器	杯	(11.0)	3.4	—	DEJ	5	良好	黒	無彩か 緋比企型環	
4	須恵器	蓋	(18.0)	2.3	—	EHIJK	15	普通	灰褐	南北企産	
5	弥生	壺	—	4.0	—	ACEIK	5	普通	にぶい黄緑	No.3	164-1

台は相当風化が進んでおり、調整は不明である。5の壺は単節RLが施され、下端はS字状結節によって画される。胎土は粗くザラついている。3の杯は7世紀中葉、4の蓋は8世紀前半のものと考えられる。

#### 第20号住居跡 (第100～104図)

調査区のほぼ中央、O・P-66・67グリッドに位置する。古墳時代中期の第17号住居跡が北側2mにある。遺構の東側が調査区域外にかかり、第36号溝跡の北東側の岸に壊される形になっている。直下の第36号溝跡から大量に土器が出土しており、本遺構に由来する可能性が高い。この状況は第10・18号住居跡と同様の第36号溝跡の岸辺の移動によるものと考えられる。

平面形は隅丸方形である。主軸は北を基準にすると、N-57°-Eを指す。規模は残存している範囲で、長軸6.7m、短軸5.6m、深さ36cmを測る。覆土は自然堆積である。

床面からは何らの施設も検出できなかった。

遺物は多く、床面直上から出土しており、一括して廃棄されたものである可能性が高い。古墳時

代前期の壺・小型壺・台付甕・高環・器台・鉢・甌・ミニチュア、弥生時代の壺・甕が出土した。古墳時代前期のものは完形形の壺が多いのが特徴である。

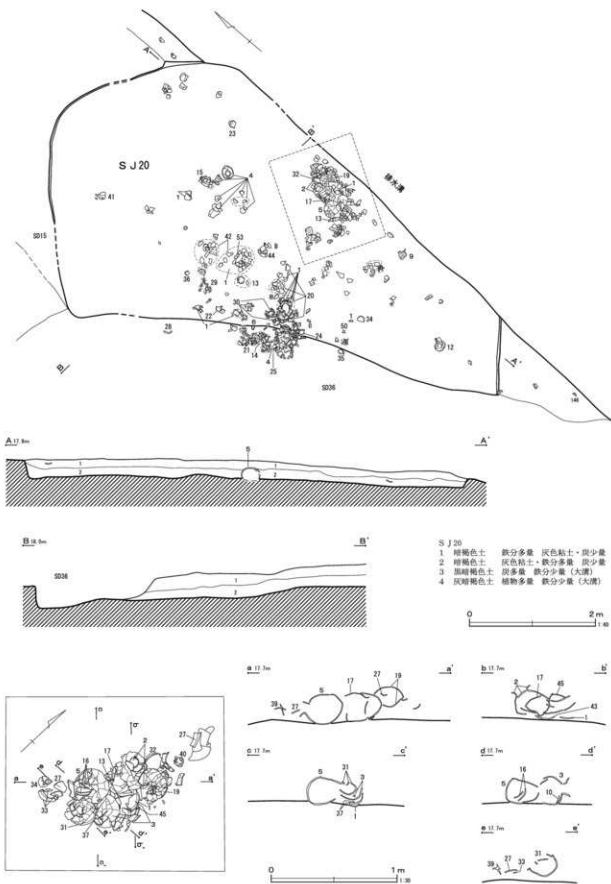
1～11は壺である。1～5は完形あるいはそれに近いものである。1～4は器形、法量とも近似している。複合口縁のものや単口縁のものがあり、2・5は頸部に断面三角形の突帯を貼付する。7は端部に粘土帯を足すことによって複合部を作り出す。8は棒状浮文を貼付しているが、破片で風化が著しいため単位等是不明である。

12～14は小型壺である。12・13は全体的に器面の風化が著しく、傷んでいる。調整が不明瞭な部分が多い。14は肩部に径5mmほどの粘土の粒が貼付されている。

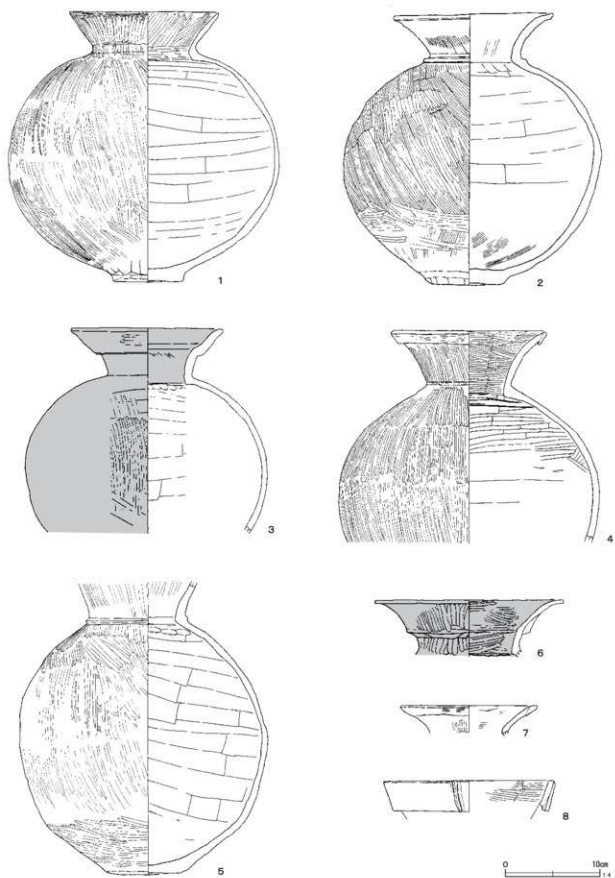
15・21～23は台付甕である。15は口縁部の粘土の積み上げ痕を残し、指頭痕が明瞭である。脚台部はいずれもホソ接合である。

17～20・24～30は甕である。29は口唇部に左方向からの浅い刷毛目工具による押捺が施される。30は直線的な口縁部で、端部に明瞭な面を作り出している。31・32は底部が遺存している甕である。

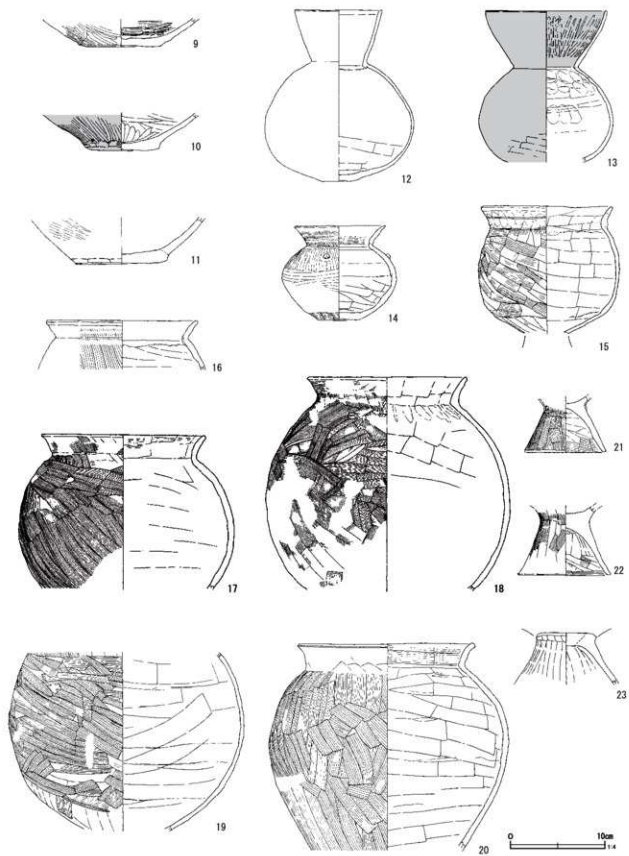




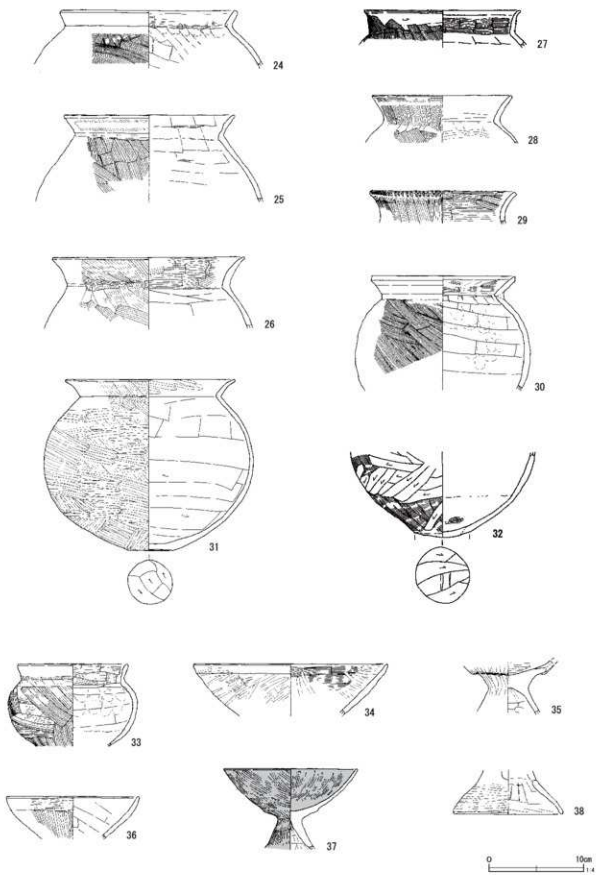
第100图 第20号住居跡



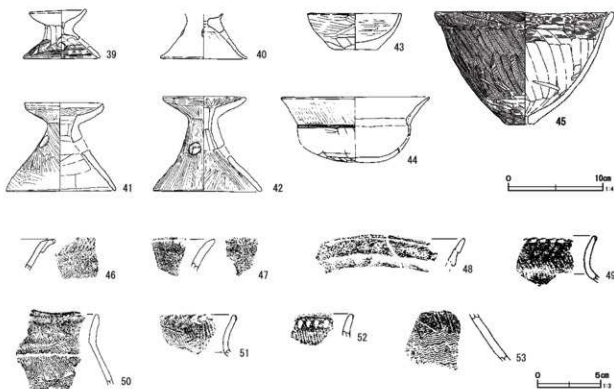
第101图 第20号住居跡出土遺物(1)



第102图 第20号住居跡出土遺物(2)



第103图 第20号住居跡出土遺物(3)



第104図 第20号住居跡出土遺物(4)

第36表 第20号住居跡出土遺物観察表(1)(第101・102図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	15.6	28.7	7.1	ACEHIK	60	普通	灰白	No.26	100-1
2	土師器	壺	16.8	28.9	7.2	ACEI	80	普通	灰白	No.98・99	102-1
3	土師器	壺	16.0	21.6	—	ACDEHJ	80	普通	橙	赤彩 外面煤付着 No.117	99-3
4	土師器	壺	16.0	22.3	—	ACEHIK	50	普通	にぶい・橙	No.16・171他	100-4
5	土師器	壺	—	31.1	7.2	ACEGHIL	60	普通	橙	No.116	101-4
6	土師器	壺 (19.7)	6.0	—	ABCDEFGH	15	普通	にぶい・橙	赤彩 No.186		
7	土師器	壺 (14.2)	2.9	—	ACDEHI	15	普通	にぶい・黄橙			
8	土師器	壺 (17.4)	3.3	—	ACDEHIJ	15	普通	浅黄	内面に若干の赤彩 No.33		
9	土師器	壺	—	3.0	7.3	ACDEHIL	75	普通	にぶい・赤褐	外面黒斑あり No.51	
10	土師器	壺	—	4.1	5.7	ACDEH	70	普通	明赤褐	赤彩 No.194	
11	土師器	壺	—	4.9	8.6	ACEGHIKL	60	普通	にぶい・橙		
12	土師器	小型壺 (9.2)	18.2	3.4	BEHIK	85	普通	にぶい・橙	No.55	101-5	
13	土師器	小型壺 (12.6)	16.1	—	ACEHIK	35	普通	橙	赤彩 No.24・193他	98-6	
14	土師器	小型壺 (9.5)	9.9	4.2	CDEHIJ	65	普通	にぶい・黄橙	No.167	98-5	
15	土師器	台付甕	13.6	13.5	—	ACEHIK	70	普通	灰黄褐	内外面煤付着 No.11	101-3
16	土師器	甕 (15.6)	5.2	—	ACEHIJK	25	普通	灰黄褐	外面煤付着 No.191		
17	土師器	甕	17.0	16.3	—	ACEGIJ	90	普通	浅黄橙	外面煤付着 No.101	100-6
18	土師器	甕	16.8	22.4	—	ACEHIK	80	良好	にぶい・黄橙	No.176	101-1
19	土師器	甕	—	18.9	—	ACEI	60	良好	灰白	煤付着 No.91	101-6
20	土師器	甕	18.4	21.8	—	ACEHIK	40	普通	浅黄	煤付着 No.32・34他	101-2
21	土師器	台付甕	—	5.9	8.4	ACEHIJK	95	良好	にぶい・橙	内外面煤付着 No.166	98-4
22	土師器	台付甕	—	7.4	(9.7)	ABCDEHIK	75	普通	にぶい・橙	No.131	
23	土師器	台付甕	—	5.5	—	ACEIK	70	普通	にぶい・黄橙	No.7	

第37表 第20号住居跡出土遺物観察表(2)(第103・104図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
24	土師器	甕	(18.0)	6.1	—	ACEHIJK	20	普通	灰黄褐色	No177	
25	土師器	甕	(17.8)	9.2	—	ACHIJ	30	普通	にぶい黄褐色	No183 S D36 P66G No160	
26	土師器	甕	(20.1)	7.6	—	ACEHIJK	15	良好	にぶい橙	No34	
27	土師器	甕	16.3	3.9	—	ABCEHIK	70	良好	にぶい黄褐色	外面煤で黒変 No92・119	
28	土師器	甕	(14.8)	5.0	—	ABCEHIK	20	普通	にぶい橙	外面煤付着 No125	
29	土師器	甕	(15.0)	3.4	—	ACEHIJK	50	普通	にぶい橙		
30	土師器	甕	14.9	12.1	—	ACEHIK	40	普通	にぶい橙	外面煤付着 No134・135他	1002
31	土師器	甕	(17.6)	18.0	4.6	ACDEH	70	普通	にぶい橙	No118	1005
32	土師器	甕	—	9.0	5.8	ABCEGHJK	40	普通	にぶい橙	煤付着 No95	
33	土師器	甕	11.4	8.7	—	ACEHIJK	70	普通	にぶい橙	内外面煤付着 No120・125他	1003
34	土師器	高坏	(20.4)	5.5	—	ACEGHJKL	20	普通	にぶい橙	No139	
35	土師器	高坏	—	5.5	—	BCDEGHJK	70	普通	にぶい橙	No142	
36	土師器	高坏	(13.9)	4.5	—	ABCDEHIJ	15	普通	橙	No121	
37	土師器	高坏	(14.0)	8.5	—	ACEHI	75	普通	にぶい橙	赤彩 No195	987
38	土師器	高坏	—	4.6	(11.2)	BCEH	30	普通	橙	No184	
39	土師器	器台	5.9	5.1	8.0	ACEHI	90	普通	にぶい黄褐色	No190	994
40	土師器	器台	—	4.8	(9.0)	ABCDEGH	35	普通	橙	No93	
41	土師器	器台	8.1	9.3	11.3	ACEHIJK	90	普通	橙	No5	99-1
42	土師器	器台	8.5	10.0	11.2	ACEHIJ	90	良好	にぶい黄褐色	No22・23	99-2
43	土師器	埴	(9.6)	3.8	4.6	ABCEHIK	70	普通	にぶい黄褐色	底面周辺黒変 No111	983
44	土師器	鉢	15.5	6.8	—	ABCEHIK	70	普通	にぶい橙	No25	98-1
45	土師器	瓶	18.5	11.9	2.9	ACEIL	90	普通	にぶい橙	No103	98-2
46	土師器	壺	—	2.4	—	ACEGHJ	5	普通	浅黄褐色	内面に赤彩痕か	
47	土師器	小型壺	—	2.6	—	HIK	5	普通	にぶい黄褐色		
48	土師器	甕	—	2.2	—	EHIJK	5	普通	にぶい黄褐色		
49	土師器	甕	—	3.8	—	ABCDEHIJK	5	普通	にぶい橙		
50	土師器	甕	—	5.6	—	CEIK	5	普通	橙	No24・137	
51	土師器	甕	—	3.3	—	ACEHIK	5	普通	にぶい橙	内面煤付着	
52	土師器	甕	—	1.9	—	EHI	5	普通	にぶい橙	外面煤付着	
53	甕	甕	—	3.7	—	CHI	5	普通	にぶい黄褐色	No129	

31は平底で非常に丁寧に仕上げられている。32は丸底である。内面から粘土を充填して底部としている。底面はヘラケズリにより仕上げられている。33は小型のものである。34～38は高坏である。34・35は器面が荒れており、ヘラ磨きもまばらで仕上がりが悪い。逆に37は非常に丁寧に作られ、細い丁寧にヘラ磨きが施されている。39～42は器台である。39・40は小型で低平なものである。39は外面が被熱している。41・42は脚端部が開かない。42は接合部が細く、柱状に近い。43・44は鉢である。44は口縁部と底部のみのものである。45は非常に細かい刷毛目が施されている。単孔であ

る。46は複合部の上面に単節R.Lの縄文が施される。47は端部に6条1単位の内回りの波状文が施される。48は吉ヶ谷系の壺の口縁部で粘土の積み上げ痕を明瞭に残す。49～51・52は口唇部に左方向からの浅い刷毛目工具による押捺が施される。53は8条1単位、左回りの波状文が2段施される。

#### 第21号住居跡(第105図)

調査区の南側、Z-65・66グリッドに位置する。第7号古墳跡、第8号土壇と重複し、いずれよりも古い。東コーナーが第15号住居跡と重複するが、新田は不明である。

竖穴の掘り込みは検出できず、貼床を確認したのみである。

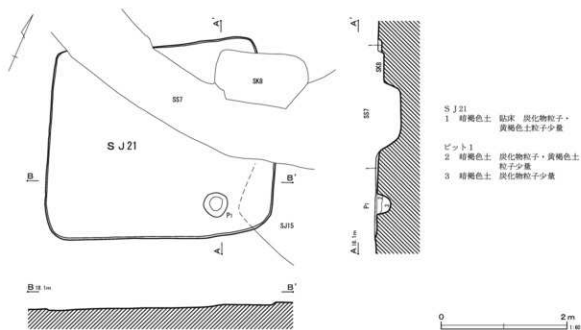
平面形は隅丸方形である。主軸は長軸方向を基準にすると、N-68°-Eを指す。規模は、長軸3.60m、短軸2.98mを測る。

床面からはピット1基を検出した。P1は径36

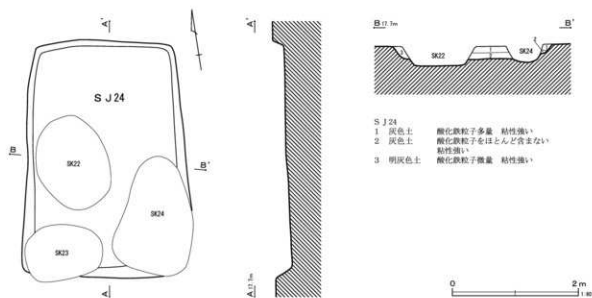
cm、深さ23cmを測る。覆土は自然堆積である。

貼床は、炭化物を含む暗褐色土である。掘り方は検出されなかった。

遺物は僅少で、貼床から、古墳時代前期の壺・甕の破片が出土している。図示可能なものはなかった。



第105図 第21号住居跡

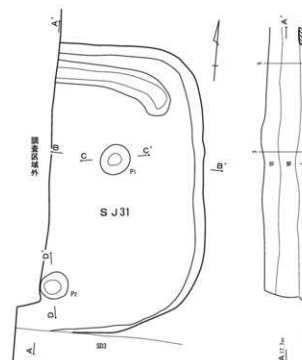


第106図 第24号住居跡

### 第24号住居跡 (第106図)

調査区の北側、J-65グリッドに位置する。グリッドの西側は住居跡が集中した箇所、その内の1軒になる。第30・33号住居跡と重複し、両遺構完掘後にその下から検出された。加えて第22～24号土塊、第51号溝跡が重複するが、本遺構の方が古い。

平面形は長方形である。主軸は長軸を基準にすると、N-9°-Eを指す。規模は残存している

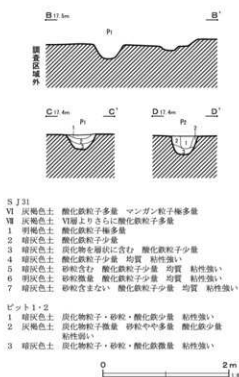


範囲で、長軸3.75m、短軸2.60m、深さ20cmを測る。覆土は自然堆積である。

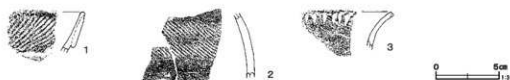
床面からは何らの施設も検出できなかった。遺物は出土していない。

### 第31号住居跡 (第107・108図)

調査区の北側、J・K-65グリッドに位置する。グリッドの西側は住居跡が集中した箇所、その内の1軒になる。第24・33号住居跡が北東側2m



第107図 第31号住居跡



第108図 第31号住居跡出土遺物

第38表 第31号住居跡出土遺物観察表 (第108図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	弥生	壺	—	3.2	—	ACEH I J	5	普通	浅黄橙	赤彩	
2	弥生	壺	—	5.1	—	ACEH I J	5	普通	にぶい橙	赤彩	
3	弥生	甕	—	3.0	—	ACH I J K	5	普通	にぶい橙	内外面煤付着	



にある。遺構の南側が第3号溝跡と重複するが、新旧関係ではなく、第10・18号住居跡と同様に第3号溝跡の北岸が北側に広がった結果と考えられる。

平面形は隅丸方形である。主軸は北を基準にすると、N-6°-Wである。規模は残存している範囲で、南北4.56m、東西2.54m、深さ40cmを測り深い。覆土は自然堆積である。

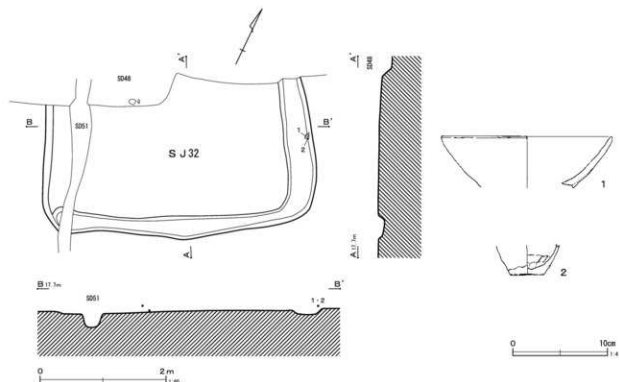
施設は壁周溝、柱穴を検出した。壁周溝は北壁沿いに認められ、幅0.35m、深さ30cmを測る。ピットは2箇所、P2が柱穴である。いずれもやや不整な円形である。P1は径45~47cm、深さ23cm、P2は径43~45cm、深さ28cmを測る。柱が引き抜かれているかは不明である。柱痕は明瞭で、底面に達していない。第1層が柱痕、第2・3層が掘り方の埋め土である。P1は柱は当たってい

ないが同様の土層堆積を示すことから、柱穴の可能性はある。

床面全体に貼床（第5層）が施されていた。遺物は僅少で、古墳時代前期の壺・台付甕・甕・高坏、吉ヶ谷系の甕の小破片が出土した。図示したものは壺の口縁部・胴部、甕の口縁部のみである。1は複合部が薄く、長めの壺である。複合部の外面に単節LRの縄文が施されている。2の甕の口縁部は、端部に浅い左方向からの押捺が施される。

#### 第32号住居跡（第109図）

調査区の北側、I・J-65グリッドに位置する。グリッドの西側は住居跡が集中した箇所、その内の1軒になる。第30号住居跡と重複し、完備後



第109図 第32号住居跡・出土遺物

第39表 第32号住居跡出土遺物観察表（第109図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	高坏	(17.7)	5.4	—	A B C E H I K	15	普通	橙	No.3	
2	土師器	ミニチュア	—	3.1	3.6	A B C E H I J	70	普通	灰黄褐	底部付近に煤付着 No.3	

にその下から検出された。加えて第51号溝跡が重複するが、本遺構の方が古い。また遺構の北側が第48号溝跡と重複し、壊されているが、新旧関係ではなく、第10・18・31号住居跡と同様に第48号溝跡の岸辺が南側に広がった結果と考えられる。この部分で、第25・26号土壌が重複し、後者より古く、前者との新旧は不明である。

平面形は隅丸方形である。主軸は北を基準にすると、 $N-27^{\circ}-W$ である。規模は残存している範囲で、東西2.64m、南北4.56m、深さ3cmを測る。覆土は観察できなかった。

施設は壁周溝を検出した。東壁から南壁沿いに認められ、幅0.23~0.45m、深さ5cmを測る。

遺物は僅少で、古墳時代前期の高坏・ミニチュアの破片が出土した。1の高坏は器面の風化が著しく、調整は不明である。2のミニチュアは器面の風化が著しいが、内面に指痕が良く見られる。底面はヘラ切り状になっており平坦である。外面に一部煤が付着している。

### 第33号住居跡 (第110・111区)

調査区の北側、J-65・66グリッドに位置する。グリッドの西側は住居跡が集中した箇所であり、その内の1軒になる。第30・34号住居跡と重複し、完掘後にその下から検出された。第24号住居跡とも重複するが、本遺構が新しい。加えて第24号土壌、第51号溝跡が重複し、本遺構の方が古い。

平面形はやや歪んだ隅丸方形である。主軸は長軸を基準にすると、 $N-81^{\circ}-E$ である。規模は長軸3.38m、短軸3.14m、深さ17cmを測る。覆土は自然堆積である。

施設は、貯蔵穴、壁周溝、ピットを検出した。貯蔵穴は南東コーナーの壁沿いに設けられていた。長径0.62m、短径0.50m、深さ20cmである。覆土は炭化物を含む暗灰褐色土である。壁周溝は東壁から南壁沿いに認められ、幅0.23~0.45m、深さ5cmを測る。ピットは4基で、位置関係からいず

れもが柱穴と考えられるが、P3は覆土が異なっており確実ではない。P3が楕円形、その他はやや不整な円形である。P1が径32cm、深さ40cm、P2が長軸27cm、短軸22cm、深さ42cm、P3が長軸21cm、短軸14cm、深さ6cm、P4が径20cm、深さ8cmを測る。覆土は第1・2層が引き抜き後の堆積層、第3層が柱痕、第4層が掘り方の埋め土と考えられる。

遺物は少量で、古墳時代前期の壺・小型壺・甕・高坏の小破片が出土した。2は甕の口縁部で、横ナデにより上半が縮み上げられている。東海地方等の地域の模倣と考えられるが、シャープさが全くなく崩れた様相である。3の台付甕はホゾ接合の臍状の粘土が外れた状態である。

### 第38号住居跡 (第112~115区)

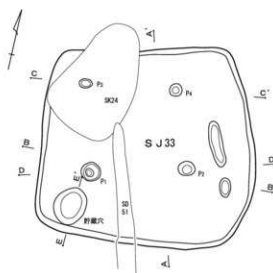
調査区の北側、I・J-66グリッドに位置する。第51号住居跡が東側に接して、第30・32号住居跡が西側1.5m、第46号住居跡が南側3mにある。

平面形は隅丸長方形である。主軸は、 $N-9^{\circ}-W$ である。規模は主軸方向6.51m、短軸5.36m、深さ38cmを測る。覆土は自然堆積である。また床面に炭化物・炭化材が薄く全体に広がっていた(第3層)。

施設は炉跡、貯蔵穴、ピット6箇所を検出した。炉跡は径41cm、深さ5cmの不整な隅丸方形で、よく焼けている。

貯蔵穴は長軸74cm、短軸71cm、深さ15cmの円形である。覆土は炭化物を含む灰褐色土で、自然堆積である。

ピットはいずれもやや不整な円形である。P1・2・5~7は径が大きく、柱穴と考えられる。径47~52cm、深さ28~50cmである。柱はいずれも引き抜かれている。覆土は1~3層が引き抜き後の堆積層、第4層が柱痕、第5層が掘り方の埋め土と考えられる。P3・4・8は径が小さく、径



第33号住居跡

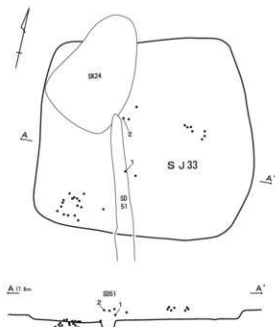
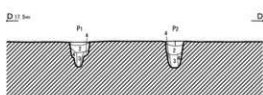
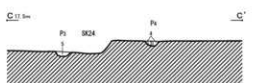
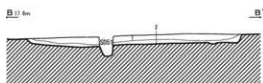
- 1 埴灰褐色土 炭化物や中量 粘性強い
- 2 灰褐色土 炭化物微量 粘性強い

群蔵穴

- 1 埴灰褐色土 炭化物・酸化鉄粒子少量 粘性強い
- 2 埴灰褐色土 炭化物・酸化鉄粒子微量 粘性強い
- 3 埴灰褐色土 炭化物微量 砂粒を含む

ピット1～4

- 1 埴灰褐色土 炭化物・酸化鉄粒子含む 粘性やや強い
- 2 埴灰土 炭化物・酸化鉄少量 粘性強い
- 3 埴灰土 柱底 炭化物少量 酸化鉄微量 粘性強い
- 4 灰色土 炭化物多量 酸化鉄微量 粘性強い
- 5 灰色土 炭化物微量 粘性やや強い



第110図 第33号住居跡

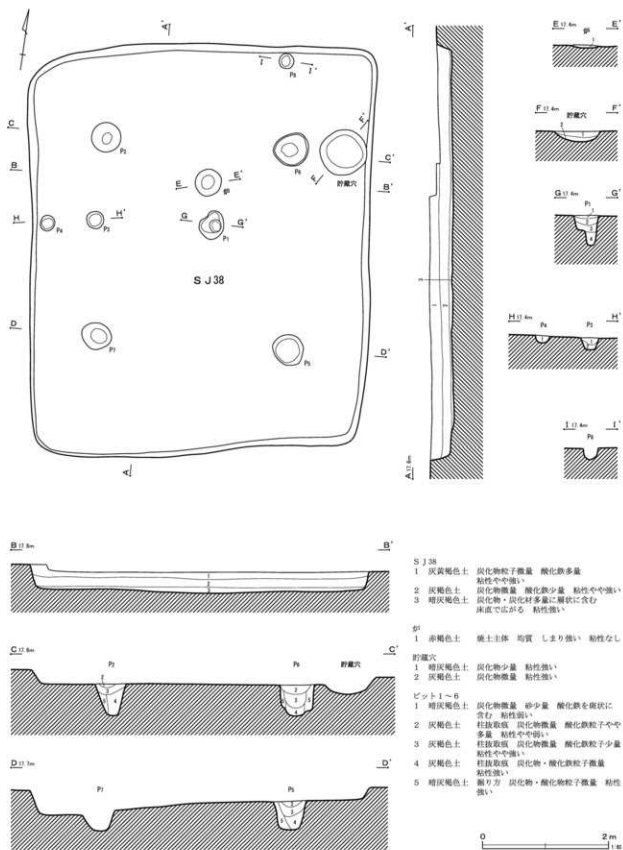


第111図 第33号住居跡出土遺物



第40表 第33号住居跡出土遺物調査表 (第111図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	(17.0)	3.9	—	A B E K	15	普通	にぶい・黄橙	内外面煤付着 No.12	
2	土師器	甕	(20.5)	3.8	—	A B C E H J	5	普通	にぶい・褐	No.9	
3	土師器	台付甕	—	4.8	(7.0)	A C D E I K	15	普通	にぶい・褐		



- S J 38
- 1 灰黄褐色土 炭化物粒子微量 酸化鉄多量 粘性中~強い
  - 2 灰褐色土 炭化物微量 酸化鉄少量 粘性中~強い
  - 3 暗灰褐色土 炭化物・炭化材多量に層状に含む 床面で広がる 粘性強い

- S<sup>1</sup>
- 1 赤褐色土 凝土主体 均質 しまり強い 粘性なし

- 貯蔵穴
- 1 暗灰褐色土 炭化物少量 粘性強い
  - 2 灰褐色土 炭化物微量 粘性強い

ピット 1~6

- 1 暗灰褐色土 炭化物微量 砂少量 酸化鉄を塊状に含む 粘性弱い
- 2 灰褐色土 粒状鉄屑 炭化物微量 酸化鉄粒子や中量 粘性中~強い
- 3 灰褐色土 粒状鉄屑 炭化物微量 酸化鉄粒子少量 粘性中~強い
- 4 灰褐色土 粒状鉄屑 炭化物・酸化鉄粒子微量 粘性強い
- 5 暗灰褐色土 凝り方 炭化物・酸化鉄粒子微量 粘性強い

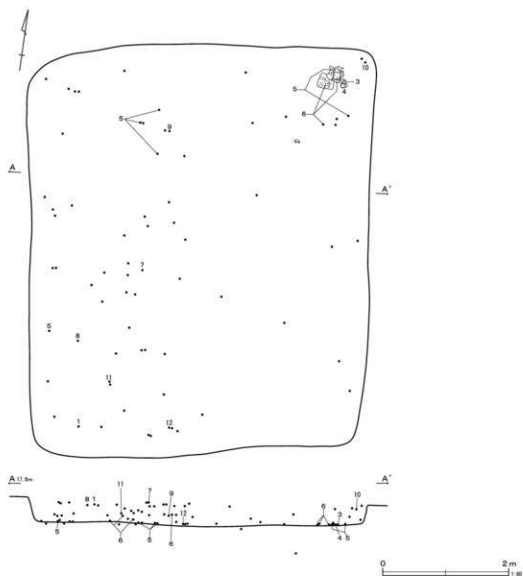
第112図 第38号住居跡(1)

22~26cm、深さ11~20cmを測る。覆土は柱穴と同様である。

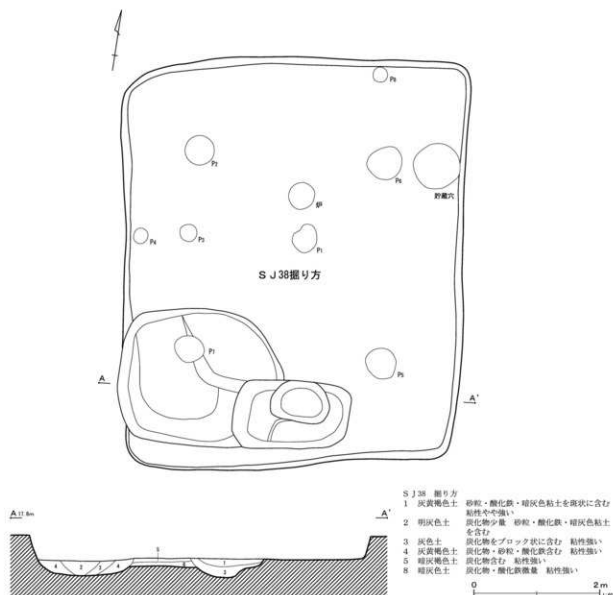
掘り方は遺構の南壁沿いに検出された。床面からの深さ14cm、確認面からの深さ52cmで、土壌状になっている。埋め土は炭化物を含む灰色土や灰黄褐色土である。

遺物は古墳時代前期の壺・甕・高環・鉢の破片がやや多く出土している。平面的には遺構の西側にやや偏る傾向が見られる。床面近くから出土するものと、中層より上位から出土するものがある。

台付甕（5・6）はやや胴部が長くなるもので、口縁部は端部が外反する。胴部の刷毛目は斜め方向中心のものである。脚台部は小型である。刻み目のある甕は、逆に口縁部が短く直線的である。7は口縁部が部分的にしか残存しておらず、残存している刻み目のみを図化した。11・12は吉ヶ谷系の壺で、粘土の積み上げ痕を残すものである。13は口唇部に左方向から、工具の小口を用いて刻み目を施す。



第113図 第38号住居跡（2）



第114図 第38号住居跡(3)

#### 第40号住居跡(第116図)

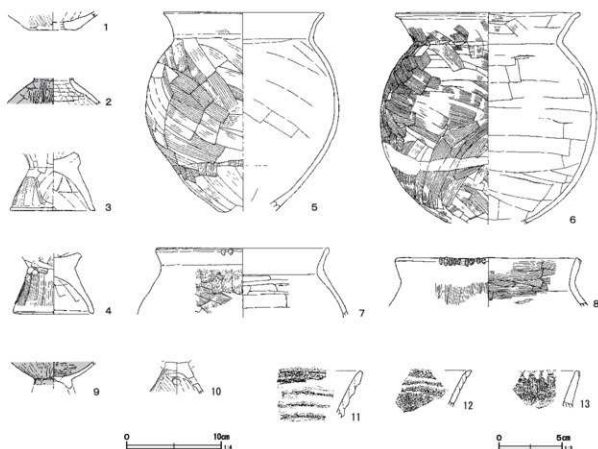
調査区のほぼ中央、J・K-66グリッドに位置する。第46・47号住居跡が東側1mにある。遺構の南側が第3号溝跡と重複するが、新日関係ではなく、第31号住居跡と同様に第3号溝跡の北岸が北側に広がった結果と考えられる。

遺構全体の北側の一部のみを検出した。床面は既に削平されており、壁周溝を検出したのみであ

る。規模は残存している部分で、長軸4.20m、短軸1.03mを測る。平面形は円形に近く、更に測る可能性が考えられる。

施設は壁周溝、ピットを検出した。壁周溝は壁沿いに認められ、幅0.35~0.40m、深さ10cmを測る。ピットは長軸30cm、短軸30cm、深さ6cmを測る。覆土は確認できなかった。

遺物は出土していない。



第115図 第38号住居跡出土遺物

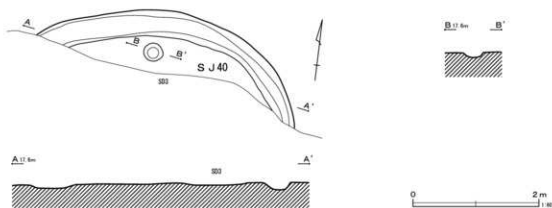
第41表 第38号住居跡出土遺物観察表 (第115図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版	
1	土師器	壺	—	1.9	(4.8)	ACHJKL	30	普通	にぶい黄橙	No25		
2	土師器	小型壺	—	2.9	—	CEHIJ	25	普通	明赤褐	外面赤彩		
3	土師器	台付甕	—	6.2	8.8	ACDEHK	90	普通	橙	No76		
4	土師器	台付甕	—	6.4	7.9	ACDEHK	90	普通	にぶい黄褐	内面煤付着	No75	103-3
5	土師器	台付甕	16.8	21.0	—	ACDEHJ	60	普通	にぶい橙	No42・73他	103-2	
6	土師器	台付甕	19.4	22.5	—	ACDEHK	50	普通	灰白	No74・77他	103-4	
7	土師器	甕	(18.0)	7.4	—	ACEHIK	15	普通	にぶい橙	外面煤付着	No12	
8	土師器	甕	(18.9)	5.1	—	ACDEGH	10	普通	橙	内外面煤付着	No7	
9	土師器	高坏	—	2.9	—	ACEHIK	20	普通	にぶい黄橙	赤彩	No46	
10	土師器	高坏	—	3.4	—	ABCEHIJ	30	普通	橙	No70		
11	土師器	壺	—	3.7	—	ABEHIK	5	普通	橙	赤彩	No21	
12	土師器	壺	—	2.9	—	ACEHIK	5	普通	橙	赤彩	No28	
13	土師器	甕	—	2.9	—	CEHIJK	5	普通	にぶい橙	外面煤付着		

第51号住居跡 (第117図)

調査区の北側、I-66グリッドに位置する。遺構の東側は調査区域外にかかる。西側に第38号住居跡が接している。南側4.5mに第46号住居跡がある。

平面形は西壁が歪んだ方形である。主軸は、N-80°-Wである。規模は東側が調査区域外になっているが、検出した範囲で、主軸方向3.26m、短軸3.47m、深さ37cmを測る。覆土は4層に分層できる。自然堆積である。炭化物を含む灰黄褐色



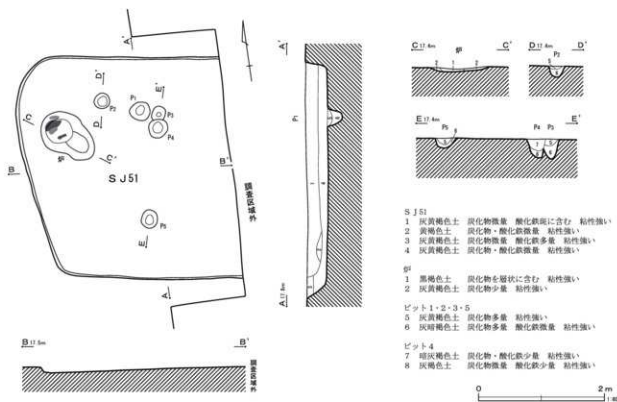
第116図 第40号住居跡

土、黄褐色土で粘性が強い。

施設はガ跡、ピット5基を検出した。ガ跡は遺構の西壁寄り、中央よりやや北側に位置し、長軸90cm、短軸65cm、深さ5cmでピット2基がつながったような形をしている。覆土は炭化物を多く含む。火床面はあまり焼けていない。

5基のピットは、いずれもやや不整な円形である。径25～34cm、深さ14～30cmを測る。覆土は、P4以外、炭化物を多く含んでいる。位置的にはP2が主柱穴に該当するが、規模、覆土とも他のピットと大差なく特定には至らない。

遺物は出土していない。



第117図 第51号住居跡

- S J 51
- 1 灰黄褐色土 炭化物微量 酸化鉄量に含む 粘性強い
  - 2 黄褐色土 炭化物・酸化鉄微量 粘性強い
  - 3 灰黄褐色土 炭化物微量 酸化鉄多量 粘性強い
  - 4 灰黄褐色土 炭化物・酸化鉄微量 粘性強い

- P1
- 1 黒褐色土 炭化物も層化に含む 粘性強い
  - 2 灰黄褐色土 炭化物少量 粘性強い

- ピット1・2・3・5
- 3 灰黄褐色土 炭化物多量 粘性強い
  - 6 灰暗褐色土 炭化物多量 酸化鉄微量 粘性強い

- ピット4
- 7 暗灰褐色土 炭化物・酸化鉄少量 粘性強い
  - 8 灰褐色土 炭化物微量 酸化鉄少量 粘性強い



## (2) 古墳時代中期・後期の住居跡

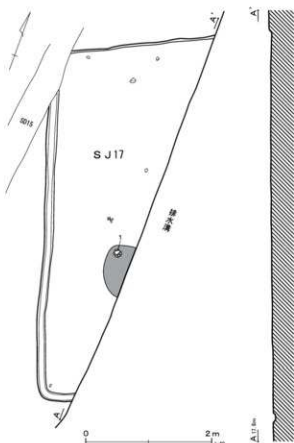
### 第17号住居跡 (第118・119区)

調査区のおも中央、N・O-66グリッドに位置する。遺構の東側のほとんどが調査区域外にかかる。第15号溝跡と重複し、本遺構の方が古い。古墳時代前期の第20号住居跡が南側約2mにある。西側1mに第36号溝跡の岸辺がある。ほぼ床面近くまで削平されていた。

残存している範囲から、平面形は方形と考えられる。主軸方向は北を基準とするとN-24°-Wである。規模は北西-南東方向5.52m、直交方向2.50m、短軸は検出された範囲で2.54m、深さ3cmを測る。覆土は確認できなかった。

施設、貼床は検出できなかった。

遺物は床面から散在して出土した。古墳時代後期(7世紀)のものである。所謂北武蔵型の長胴甕とその破片が大部分である。5の高坏は古墳時代前期のもので混入と考えられる。



第118区 第17号住居跡

### 第25号住居跡 (第120・121区)

調査区の北側、J-66グリッドに位置する。前期の第46号住居跡に東側が、中期の第34号住居跡に西コーナーが接する状態で検出された。後期の第47号住居跡も第46号住居跡にほぼ重複することから同様の位置関係にあると思われる。

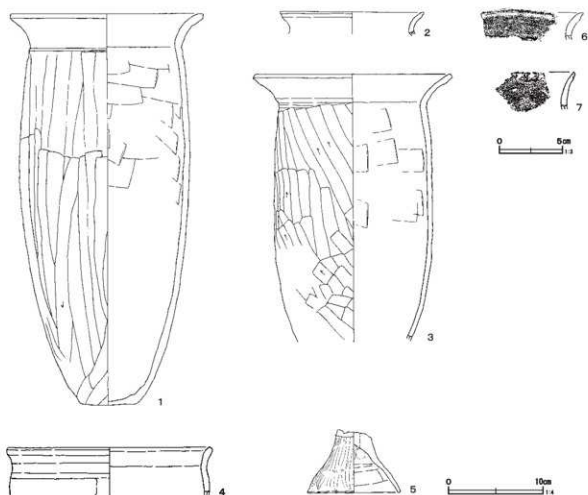
平面形は方形である。主軸方向はS-26°-Eである。規模は主軸方向3.04m、直交方向2.94m、深さ10cmを測る。覆土は自然堆積だが、第2・3層は炭化物を多く含んでおり、特徴的である。

カマドは南カマドである。煙道は検出した範囲では突出せず、壁の内部に収まっている。天井部は崩落している。袖は長さ40cm、基底部で幅20cmを測る。粘土を芯にして貼り付けにより作られている。燃焼部は皿状の掘り方を持ち、火床面はあまり発達していない。西側の袖の下にもビット状の掘り方P2 長軸30cm、短軸27cm、深さ18cmがある。

施設としては、壁周溝、貯蔵穴、ビット2基を検出した。

壁周溝は北壁にのみ認められた。幅17cm、深さ6cmである。貯蔵穴はカマドに向かって右側から検出した。径74cmの大きな円形である。深さは16cmを測る。覆土は自然堆積で、炭化物を含んでいる。ビットはカマドの左右から検出された。P1は径28cm、深さ17cmの円形、P3は長軸31cm、短軸27cm 深さ34cmの不整形円形である。覆土は自然堆積である。位置的にP3は柱穴の可能性があるが確実ではない。貼床等は検出できなかった。

遺物は古墳時代後期のもので、床面近くのものと同層から散在して出土するものがある。新田があるが、床面近くから出土した北武蔵型坏(1)が年代を示すものと考えられる。7世紀中葉である。1・2は内外面とも赤彩される。



第119図 第17号住居跡出土遺物

第42表 第17号住居跡出土遺物観察表 (第119図)

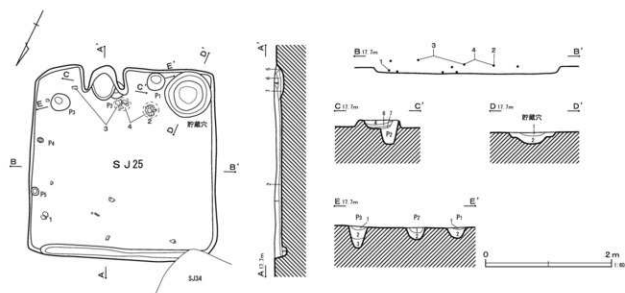
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	(20.1)	41.5	5.8	C E H I K	70	普通	にぶい椀	No.6	97-2
2	土師器	甕	(15.0)	2.4	—	A C H I K	20	普通	にぶい椀		
3	土師器	甕	(20.5)	28.3	—	A C D E H K	30	普通	にぶい椀		
4	土師器	鉢	(21.2)	5.2	—	C E I K	5	普通	黒		
5	土師器	台付甕	—	6.1	9.6	A C E H I K	75	普通	にぶい椀		97-3
6	土師器	甕	—	2.1	—	E H I K	5	普通	にぶい椀	外面襷付着	
7	土師器	甕	—	3.0	—	A C E G H I K	5	普通	にぶい椀	外面襷付着	

### 第30号住居跡 (第122・123図)

調査区北側、I-65、J-65・66グリッドに位置する。前期の第24・32・33号住居跡と重複する。位置的には重複関係にある南東側の第34号住居跡は、出土遺物からは本遺構より新しいと考えられるが、直接の前後関係は確認できなかった。また

第22・23・24・27・35号土壇、第32・51号溝跡が重複し、35号土壇より新しく、その他のものより古い。

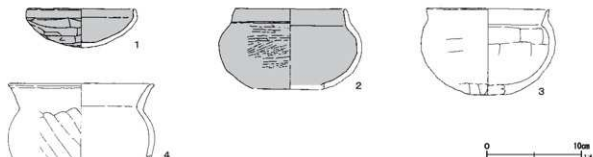
平面形は東側が歪む長方形である。主軸方向はS-70°-Wである。規模は主軸方向6.36m、直交方向4.94m、深さ10cmを測る。床面近くまで削平



- S.J.25  
 1 灰色土 炭化物微量 酸化鉄多量  
 2 灰色土 炭化物 (5mm以下) 酸化鉄多量  
 3 暗褐色土 炭化物多量 1・2層に比べ粘性強い  
 カマド  
 4 赤褐色土 天井面薄土 粘土主体 炭化物 (5mm以下) 含む しまり強い  
 5 暗褐色土 天井面薄土 粘土・炭化物多量 灰色土含む しまりやや弱い  
 6 灰黄褐色土 流入土 地山ブロック主体層 炭化物微量 粘性強い  
 7 暗黄褐色土 掘り方 炭化物多量 しまりやや弱い

- 貯蔵穴  
 1 暗黄褐色土 炭化物粒子少量 酸化鉄多量 粘性やや弱い  
 2 暗黄褐色土 炭化物粒子多量 酸化鉄微量 粘性やや強い  
 ビット1〜3  
 1 暗灰色土 炭化物粒子少量 酸化鉄粒子微量 粘性やや強い  
 2 暗灰色土 炭化物粒子少量 酸化鉄粒子微量 粘性やや強い  
 3 暗灰色土 炭化物粒子少量 酸化鉄粒子微量

第120図 第25号住居跡



第121図 第25号住居跡出土遺物

第43表 第25号住居跡出土遺物観察表 (第121図)

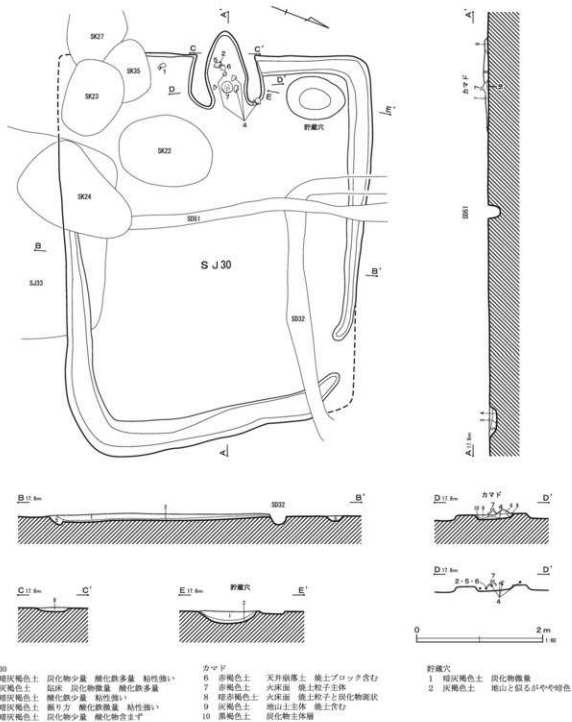
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(11.2)	4.1	—	ACEHIK	35	普通	明赤褐	北武蔵型坏 赤彩 No.6	102-3
2	土師器	鉢	11.6	8.4	—	ACDHIK	40	普通	にぶい黄橙	内外面赤彩 No.1	
3	土師器	鉢	(12.8)	9.1	(3.9)	ACDEHJ	30	普通	にぶい橙	資母多 No.2・3	
4	土師器	甕	(15.0)	8.0	—	ACGHIK	15	普通	明赤褐	No.1・2	

されており、覆土の状況は最下層のみしか知ることができなかったが、自然堆積と考えられる。

カマドは西カマドである。煙道は壁面から40cmほど突出している。天井部は崩落している。袖は長さ80cm、基底部で幅30〜40cmを測る。粘土を芯

にして貼り付けにより作られている。燃焼部は床面とほぼ同じ高さで、火床面はあまり発達していない。

施設としては、カマドに向かって右側から貯蔵穴を検出した。長軸94cm、短軸67cm、深さ19cmの



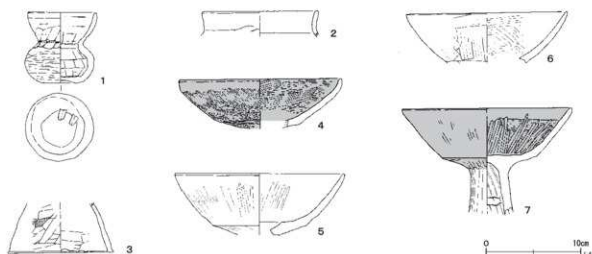
第122図 第30号住居跡

楕円形である。覆土は自然堆積である。

遺構の南側では灰褐色土による貼床を確認した。

遺物はカマドを中心に中期の遺物が出土している。3の台付甕は混入の可能性が高い。1の埴

底部には底面の外周側に一面に砂が付着し、2本の棒状の凹みが見られる。製作中に付着し、剥がす際に用いられた工具痕と考えられる。高坏が多く、7の脚部は直線的な柱状である。



第123図 第30号住居跡出土遺物

第44表 第30号住居跡出土遺物観察表 (第123図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	埴	7.0	7.4	3.5	ACEHI	90	普通	橙	No.8	102-7
2	土師器	甑	(12.0)	2.8	—	ACEHIJKL	15	普通	にぶい黄橙	No.6	
3	土師器	白付甕	—	5.3	(11.1)	EHIK	15	普通	にぶい黄橙	一括	
4	土師器	高杯	17.1	5.2	—	ABCEGHIK	75	普通	にぶい橙	赤彩 No.1・2・3・5	102-5
5	土師器	高杯	(17.8)	6.5	—	ABCDEHIK	30	普通	にぶい橙	No.6	
6	土師器	高杯	16.9	5.3	—	ABCEHIJ	20	良好	にぶい赤褐	No.6	
7	土師器	高杯	17.8	11.2	—	ACEHIK	100	良好	浅黄橙	赤彩 No.4	102-6

### 第34号住居跡 (第124・125図)

調査区の北側、J-65・66グリッドに位置する。前期の第33号住居跡と重複する。位置的には重複関係にある北西側の第30号住居跡は、出土物からは本遺構より古いと考えられるが、直接の前後関係は確認できなかった。また後期の第25号住居跡が南東コーナーと重複している。

床面近くまで削平されており、遺構の南側、西側は検出できなかった。平面形はやや胴の張る隅丸方形と考えられる。主軸は北を基準とするとN-2°-Wを指す。規模は二辺を検出できなかったことから確実でないが、現状で長軸3.60m、短軸3.13mを測る。覆土の状況は確認できなかった。

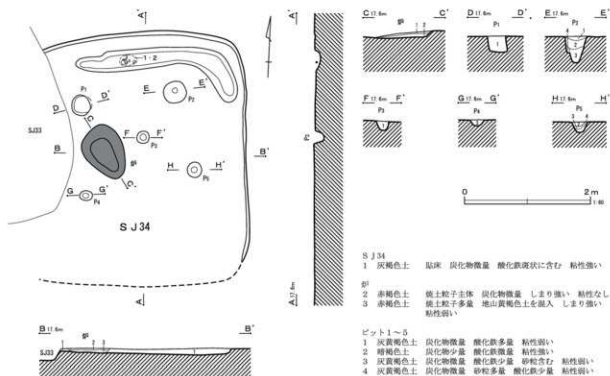
施設は炉跡、壁周溝、ビット5基を検出した。炉跡は不整な楕円形で、長軸88cm、短軸63cm、深さ4cmである。第2層が火床面と考えられ、よく

焼けている。壁周溝は北壁から東壁の北側にかけて認められた。幅22~37cm、深さ7cmである。ビットは遺構の中央から検出された。長径19~30cm、深さ9~41cmを測る。覆土は自然堆積と考えられる。P2は長軸36cm、短軸35cm、深さ41cmと規模が大きく、断面形から柱穴である可能性が高い。その他は不明である。

遺構の南側で、灰褐色土による貼床を確認した。遺物は壁周溝から出土した。2の甕は胴部がやや張る長胴になると考えられる。

### 第46号住居跡 (第126・128図)

調査区の北側、J-66・67グリッドに位置する。遺構の東側は調査区域外にかかる。遺構の南側が中期の第47号住居跡と重複する。後期の第25号住居跡と西壁が接している。北側約3mに第38号住居跡が、西側約2mに第34号住居跡がある。



第124図 第34号住居跡

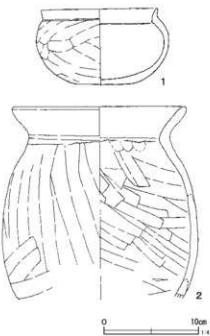
平面形は長方形である。主軸は、 $N-69^{\circ}-E$ である。規模は東側が調査区域外になっているが、検出した範囲で、主軸方向5.42m、短軸4.84m、深さ67cmを測る。覆土は自然堆積である。

施設はガ跡、ピット11基を検出した。ガ跡は径1.0m、深さ5cmの不整形である。火床面は良く焼けている。

11基のピットは、いずれもやや不整形な円形である。径24～43cm、深さ14～26cmを測る。覆土は自然堆積である。位置的にはP1・2、P7・8、P9・10が主柱穴に該当するが、規模、覆土とも他のピットと大差なく特定には至らない。

床面に貼床等は施されていない。

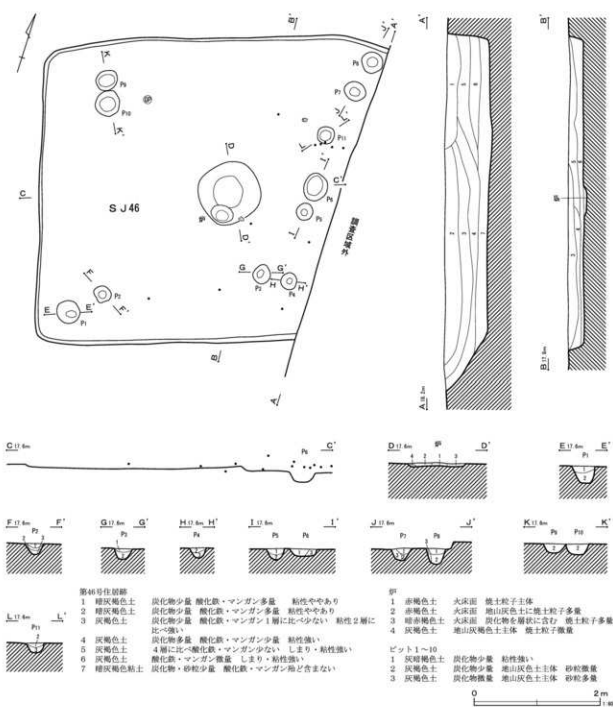
遺物は僅少で、古墳時代前期の壺・甕・台付甕の細片が覆土中から出土したのみである。図示可能なものはなかった。



第125図 第34号住居跡出土遺物

第45表 第34号住居跡出土遺物観察表 (第125図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	短頸壺	12.0	8.0	—	A H I J K	80	普通	橙	器面全体に摩耗 J69G No.1	103-1
2	土師器	甕	(18.0)	20.4	—	C E H I K	30	普通	にぶい黄橙	J69G No.1	

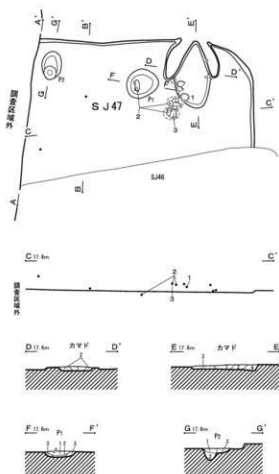


第126図 第46号住居跡

### 第47号住居跡 (第127・128図)

調査区のほぼ中央、J・K-66・67グリッドに位置する。遺構の東側は調査区域外にかかる。前期の第46号住居跡が北側に重複する。本来は本遺構の方が新しいことから遺構の全容を知ることができるはずだが、第46号住居跡を先に掘削してしまったため、完掘跡には掘り込みがやや深く、しっかりしていた第46号住居跡の状況のみが残ることになってしまった。第25号住居跡が本来は西側に接しているものと考えられる。

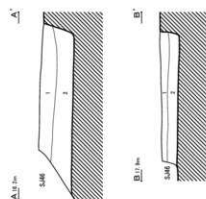
平面形は方形である。主軸方向はS-10°-Wである。規模は二辺を検出できなかったことから確実でないが、現状で主軸方向2.16m、直交方向3.60m、深さ48cmを測る。覆土は自然堆積である。



西側へ向けて確認面を削平したため、西側は遺構の残存状況が悪い。

カマドは南カマドである。煙道は検出した範囲では突出せず、壁の内部に収まっている。天井部の状況は不明である。袖は「ハ」の字状に開き、左側が長さ80cm、基底幅28cm、右側が長さ70cm、基底幅22cmを測る。粘土を芯にして貼り付けにより作られている。燃焼部は床面とほぼ高さが等しく、焼土は多いが火床面はあまり発達していない。

施設はカマドの左側からビット2を検出した。いずれもやや不整な楕円形である。P1は長軸52cm、短軸44cm、深さ8cm、P2は長軸44cm、短軸30cm、深さ4cmを測る。覆土には炭化物、砂を多



- S J 47  
1 炭褐色土 燻灰質・マンガン質少量 しまり・粘性強い  
2 炭褐色土 燻灰質少量 しまり・粘性強い

- カマド  
1 赤褐色土 火床面 焼土粒主体 しまり・粘性弱い  
2 赤褐色土 火床面 地山灰色土ブロック混入 粘性やや強い  
3 赤褐色土 焼土粒多量 地山灰色土ブロック主体 粘性強い  
4 炭褐色土 3層に比べ焼土粒が少ない

- ビット1  
1 炭褐色土 炭化物少量 粘性強い  
2 暗炭褐色土 炭化物多量 粘性強い  
3 炭褐色土 砂粒多量 炭化物少量 粘性弱い

- ビット2  
1 暗炭褐色土 炭化物少量 粘性強い  
2 暗炭褐色土 砂粒多量 炭化物少量 粘性強い  
3 暗炭褐色土 炭化物少量 砂粒多量 粘性強い



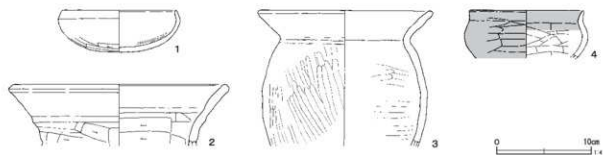
第127図 第47号住居跡



く含む。埋め戻しではないと考えられる。

掘り方は軸径38cm、深さ48cmで、周溝状に全周している。埋め土は灰色粘土や炭化物を含む。貼床は検出されなかった。

遺物は僅少で、カマドの手前とP1から中期、後期の環・壺・甕・高環・鉢の破片が出土した。1の環、2の甕は後期以降のものと考えられる。



第128図 第46・47号住居跡出土遺物

第46表 第46・47号住居跡出土遺物観察表 (第128図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	環	11.8	4.4	—	ACEGHI	80	不良	にぶい橙	北武蔵型環 No.4	103-5
2	土師器	甕	(22.0)	6.4	—	ABCEHIK	30	普通	橙	No.1	
3	土師器	甕	(18.0)	14.3	—	ABCEIK	20	普通	明褐色	No.2	
4	土師器	壺	(11.9)	5.1	—	ACHIK	20	普通	にぶい赤彩		

### (3) 土壌

B区からは古墳時代と考えられる土壌が調査区の北側を中心に分布している。楕円形もしくは長楕円形のものも多く、長軸1.5～2.0m、短軸0.6～1.2mの規模のものが多い。深さは15～30cm前後である。

#### 第23号土壌 (第129・130図)

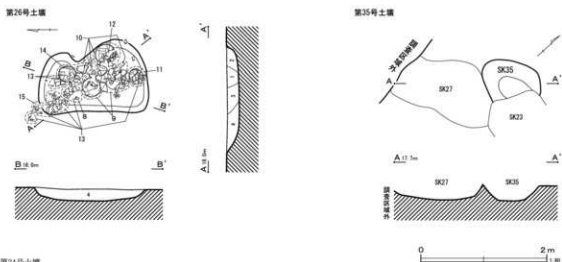
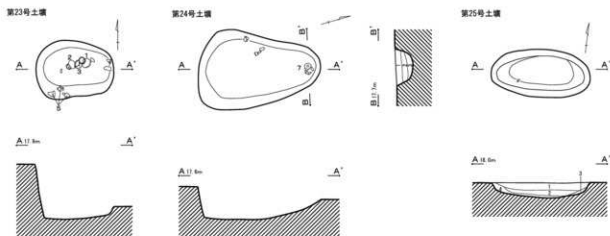
調査区の北側、J-65グリッドに位置する。最も遺構が密集する箇所第24・30号住居跡、第27・35号土壌と重複し、第24号住居跡、第35号土壌より本遺構が新しく、第27号土壌より古い。軸方向はN-90°-Wで、不整な楕円形である。規模は長軸1.23m、短軸0.87mである。深さは82cmあり深い。

遺物は中期の甕・小型壺・鉢・高環が、底面か

らまとまって出土している(1～6)。5以外は赤彩されている。1～3は完形に近いものである。1は小型壺で甕模倣のものである。やや粗いヘラ磨きが施されている。2の小型壺は全体にヘラナデが施されるものである。底部はドーナツ状を呈している。3の鉢は外面に丁寧なヘラ磨きが施されている。4は高環の接合部である。5の甕はやや長胴気味になると思われる。器面の風化が著しい。図示した以外に甕の破片が出土している。

#### 第24号土壌 (第129・130図)

調査区の北側、J-65グリッドに位置する。最も遺構が密集する箇所第24・30・33号住居跡、第51号溝跡と重複する。覆土が確認できず、具体的な新旧は不明だが、遺物から住居跡より新しく、



- 第24号土溝  
 1 灰色土 炭化物少量 粘性強い  
 2 灰色土 酸化鉄少量 粘性強い  
 3 暗灰色土 均質な暗灰色土 粘性強い

- 第25号土溝  
 1 褐色土 褐色酸化鉄粒子・マンガン粒多量 炭化物少量 しまり・粘性強い  
 2 灰褐色土 地山ブロック主体 褐色酸化鉄粒子多量  
 3 明灰褐色土 地山土主体 褐色酸化鉄粒子少量  
 4 灰褐色土 地山灰土主体 褐色酸化鉄粒子3層より少量 粘性強い

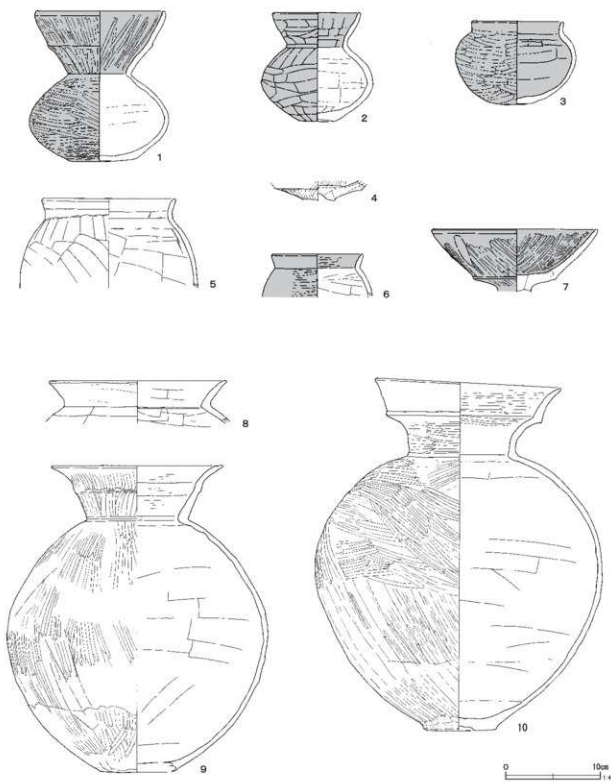
- 第26号土溝  
 1 明褐色土 白色粘土主体 炭化物含む  
 2 灰褐色土 酸化鉄・マンガン多量 炭化材片含む  
 3 灰褐色土 酸化鉄・マンガン少量 炭化材片含む  
 4 灰褐色土 炭化物微量 酸化鉄・マンガン少量

第129図 第23・24・25・26・35号土溝

溝跡よりも古いと考えられる。軸方向はN-17°-Eで、不整な楕円形である。規模は長軸1.92m、短軸1.26mである。深さは50cmで深い。図示した高環の他に甕の破片が出土している。7の高環は器内が厚く、ヘラ磨きが施され、内外面赤彩される。

### 第25号土溝 (第129・130図)

調査区の北側、I-65グリッドに位置する。第48号溝跡の南岸の斜面に位置している。位置的には第32号住居跡と重複しているが、住居跡が削られてしまっているため新旧は不明である。軸方向はN-89°-Eで、長楕円形である。規模は長軸1.57m、短軸0.76mで、深さは23cmである。覆土

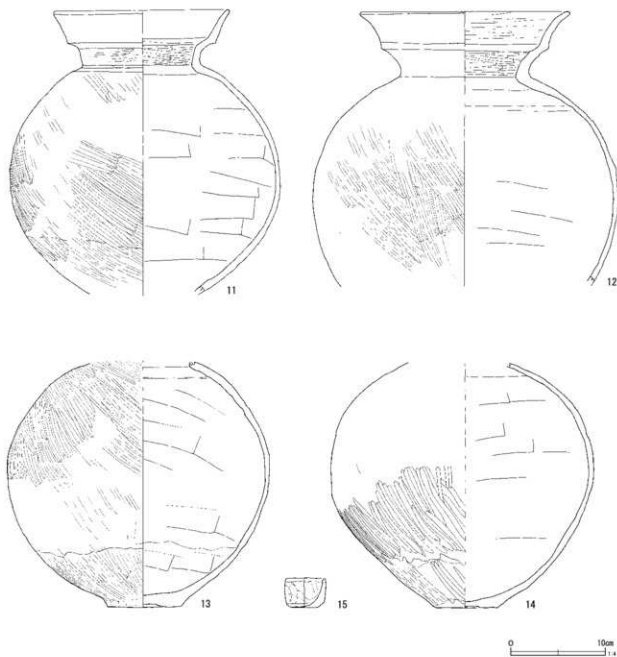


第130図 第23・24・26号土城出土遺物

は、灰褐色土を主体とする自然堆積である。  
前期の台付甕の破片が出土している。

**第26号土城** (第129～131図)

調査区の北側、I-65グリッドに位置する。第  
25号土城同様に、第48号溝跡の南岸の斜面に位置



第131図 第26号土坑出土遺物

している。位置的には第32号住居跡と重複しており、住居跡が削られてしまっているため直接の新旧は不明だが、出土遺物から本遺構のほうが新しいと考えられる。また第51号溝跡と重複し、本遺構が古い。軸方向はN-5°-Wで、東側が2箇所突出している不整な方形である。規模は長軸1.72m、短軸1.15mで、深さは0.18mである。覆土は灰褐色土を主体とする自然堆積と考えられる。

底面から中期の壺・甕・ミニチュアがまとめて出土している(8~15)。

壺はいずれも二重口縁で、全形が丸めるものである。やや長めの球形胴で、口縁部の括れが弱く、直立気味に立ち上がり、口縁部は大きく開く。外面の調整は、ヘラナデ後ヘラ磨きが施されるが、器面の風化が著しく、全体を観察できるものはなかった。内面の調整は口縁部がヘラナデ後ヘラ磨

第47表 第23・24・26号土塚跡出土遺物観察表(第130・131図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	小型壺	13.4	15.8	5.0	A C E I J	90	普通	にぶい橙	赤彩 SK23 No.7	1085
2	土師器	小型壺	9.1	11.5	3.7	A C E I J	90	良好	にぶい黄橙	赤彩 SK23 No.5	
3	土師器	小型壺	(9.5)	8.7	2.6	A C E H I J K	85	普通	にぶい橙	赤彩 SK23	1086
4	土師器	高坏	—	2.2	—	A B C E H I K	45	普通	にぶい褐	SK23	
5	土師器	甕	(13.8)	9.5	—	A C E H I J K L	30	普通	にぶい橙	外面全体煤付着 SK23 No.1・2・3	1087
6	土師器	鉢	(9.5)	4.4	—	A C E I J	20	普通	黒褐	赤彩 SK23	
7	土師器	高坏	(17.3)	6.6	—	A C E I H	45	普通	暗赤褐	赤彩 SK24 No.1	
8	土師器	甕	(18.4)	4.5	—	C E H I K	10	普通	にぶい橙	SK26 No.12	1094
9	土師器	壺	17.8	32.4	7.6	A C E H J K	40	良好	浅黄橙	SK26 No.7	
10	土師器	壺	(19.5)	36.8	7.3	A C D E H J	70	普通	浅黄橙	SK26 No.1・4・5・11	1091
11	土師器	壺	18.5	30.0	—	C D E H J	50	普通	橙	SK26 No.11	1093
12	土師器	壺	21.9	29.0	—	A C E H J K	30	普通	浅黄橙	SK26 No.4	1092
13	土師器	壺	—	25.8	8.0	A C D E H J	90	普通	浅黄橙	SK26 No.12・13・15・16・18・19	1101
14	土師器	壺	—	26.0	6.3	A C D E H K	70	普通	灰白	SK26 No.1	1102
15	土師器	手捏ね	3.9	3.1	2.8	A C E I J	90	普通	にぶい黄橙	黒斑あり SK26 No.15	1103

き、胴部がヘラナデである。胴部は平滑に仕上げられている。10の底面はドーナツ状である。11・13は胎土が密でなく混和剤が多く露出する。15は手捏ねで、指頭痕を多く残し、煤が付着する。

#### 第35号土塚(第129・130図)

調査区の北側、J-65グリッドに位置する。第

30号住居跡、第23・27号土塚と重複し、出土遺物からそのいずれよりも古いと考えられる。軸方向はN-62°-Eで、不整な楕円形である。規模は重複が著しいため、確認できた範囲で、長軸0.97m、短軸0.68m、深さ25cmである。覆土の状況は確認できなかった。

前期の高坏の破片が出土している。

#### (4) 畝跡

B区のY・Z-65・66グリッドからは、畝跡が1箇所検出されている。これらの畝跡は住居跡より新しく、方形周溝墓の周溝より古いことが確認されており、出土遺物はほとんどないが、弥生時代後期から古墳時代前期のものと考えられる。

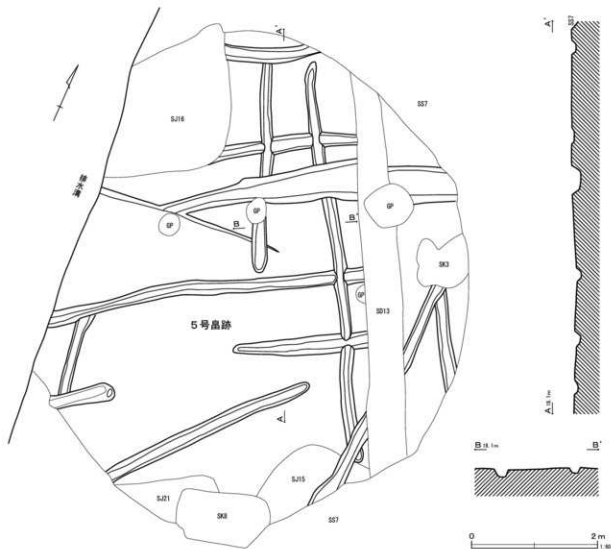
#### 第5号畝跡 (第132図)

Y・Z-65・66グリッドに位置する。第7号古墳跡の墳丘内に取まっており、第16号住居跡より古いと考えられることから、古墳時代初頭あるいはそれ以前と考えられる。さく跡の方向が2方向認められることから、複数の畝跡の可能性がある。

さく跡の走行方向は、 $N-62^{\circ}-E$ のもので、それに直交するものである。東西方向のものは0.9~2.0m間隔、南北方向のものは1.0、1.4m間隔で、一定していない。

各々の形態は、先端の丸い溝状を呈している。東西方向のものは幅0.2~0.3mで中央付近に幅1.0mほどのものがある。南北方向のものも幅20~30cmである。深さはいずれも浅く、5~15cmほどである。覆土は確認できなかった。

出土遺物は僅少(12点)で、前期の壺・甕・台付甕等の細片が出土した。いずれも風化が著しく、図示可能なものはない。



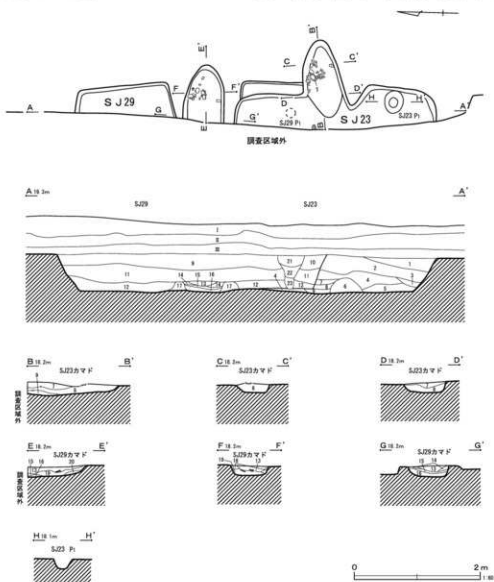
第132図 第5号畝跡

### 3. 古代以降の遺構と遺物

#### (1) 住居跡

##### 第23号住居跡 (第133・134図)

調査区の北側、J-65グリッドの最も遺構が密集する箇所に位置する。遺構の西側の大部分が調査区域外



##### 第23・29号住居跡

###### 表土

- I 暗褐色土 表土 粘性や中強い しまり弱い
- II 明灰褐色土 酸化鉄・マンガン粒子少量
- III 灰褐色土 酸化鉄・マンガン粒子極少量 IIより明るい

##### 第23号住居跡

- 1 暗灰褐色土 酸化鉄粒子・マンガン粒子微量 粘性強い
- 2 暗灰褐色土 酸化鉄粒子少量 マンガン粒子極少量 粘性や中強い
- 3 暗灰褐色土 酸化鉄粒子多量 マンガン粒子少量 粘性強い
- 4 暗灰褐色土 酸化鉄粒子やや多量 マンガン粒子微量 粘性や中強い
- 5 灰褐色土 酸化鉄粒子やや多量 マンガン粒子微量 粘性や中強い
- 6 灰褐色土 粘土質土

##### カマド

- 7 暗褐色土 炭化物粒子少量 粘性強い
- 8 暗褐色土 カマド扉道の埋積層か、炭化物粒子多量
- 9 赤褐色土 灰床面 炭化物・粘土が凝状に形成されている

##### 第29号住居跡

- 10 暗灰褐色土 酸化鉄粒子・マンガン粒子少量 粘性強い
- 11 灰褐色土 I層土直下 マンガン粒子多量 粘性や中強い
- 12 灰褐色土 酸化鉄粒子極少量 マンガン粒子少量 粘性や中強い

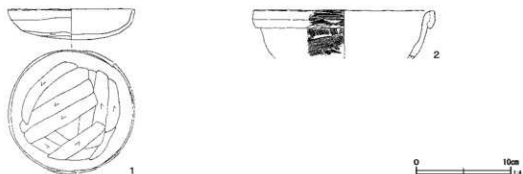
##### 土マド

- 13 灰褐色土 粘土をブロック状に含む 粘性強い 天井崩落土
- 14 灰褐色土 Iより粘土ブロック多量 炭化物含む
- 15 暗褐色土 粘土粒子・炭化物多量 しまり弱い 粘性強い
- 16 灰褐色土 I層に広部
- 17 褐色土 粘土粒子を塊状に含む 粘土 粘性強い
- 18 赤褐色土 ブロック状の粘土 壁崩落土
- 19 赤褐色土 粘土土層褐色土が凝状になる しまり強い
- 20 暗褐色土 粘土粒子・炭化物粒子多量 しまり 粘性強い 埋積部

##### ピット

- 21 明灰褐色土 マンガン粒子微量 粘性強い
- 22 暗灰褐色土 マンガン粒子多量
- 23 暗褐色土 酸化鉄粒子多量

第133図 第23・29号住居跡



第134図 第23・29号住居跡出土遺物

第48表 第23・29号住居跡出土遺物観察表 (第134図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	環	(13.1)	3.2	—	A C H I K	90	普通	にぶい橙	北武蔵型環 No.2	102-2
2	土師器	広口壺	(18.9)	5.1	—	A C E H I K	10	普通	にぶい黄橙		

査区域外にかかる。第29号住居跡と重複し、本遺構の方が古い。また、古墳時代中期の第30号住居跡と重複する。

平面形は全体が不明なため明らかでないが、隅丸方形になると考えられる。主軸方向はN-85°-Eである。規模は検出できた範囲で、主軸方向が0.70m、直交方向3.20m、深さは確認面からは10cm、法面で60cmを測る。覆土は自然堆積である。

カマドは東カマドである。煙道は、壁からおおよそ90cmほど突出している。天井部の状況は不明である。袖は左側が重複のため検出されていない。右側の袖は短く、40cmほどの長さで、基底部の幅45cmを測る。粘土を芯にして貼り付けにより作られている。燃焼部は床面とほぼ高さが等しく、よく焼けている。

カマドの右側からピットを1基検出した。不整な円形で、長軸36cm、短軸30cm、深さ14cmを測る。覆土は確認できなかった。貼床は検出されなかった。

遺物は僅少で、カマドから奈良時代の土師器環・甕の破片が出土した。図示可能なものは環1点のみである。1は北武蔵型環である。浅く、口

縁部と底部の間に広く無調整の箇所が見られる。底面はヘラケズリである。

#### 第29号住居跡 (第133・134図)

調査区の北側、I-65グリッドの最も遺構が密集する箇所位置する。遺構の西側の大部分が調査区域外にかかる。第23号住居跡と重複し、本遺構の方が新しい。また、古墳時代中期の第30号住居跡と重複する。

平面形は全体が不明なため明らかでないが、方形になると考えられる。主軸方向はN-86°-Eである。規模は検出できた範囲で、主軸方向が0.90m、直交方向3.70m、深さは確認面からは10cm、法面で60cmを測る。覆土は自然堆積である。

カマドは東カマドである。煙道は、壁からおおよそ20cmほど突出している。天井部は崩落している。袖は調査区域外にかかり、長さ70cm以上、基底部の幅35~45cmを測る。粘土を芯にして貼り付けにより作られている。燃焼部は床面とほぼ高さが等しく、よく焼けている。貼床は検出されなかった。

遺物は僅少で、カマドを中心に土師器環・甕の破片が出土した。図示可能なものは古墳時代前期の広口壺1点のみである。混入と考えられる。



## (2) 溝跡

### 第13号溝跡 (第135図)

調査区の南側、X-65、Y-65・66、Z-66グリッドに位置する。第7号墳と重複し、本遺構の方が新しい。

溝の軸方向は、北側N-9°-W、南側N-29°-Wである。検出された長さは14.32mにとどまる。幅0.76m、深さは12cmとごく浅い。溝底のレベルは北側が低い。覆土の様相は確認できなかった。

遺物は土師器の台付甕が出土しているのみである。

### 第15号溝跡 (第135図)

調査区のほぼ中央、M・N・O・P-66グリッドに位置する。第17・20号住居跡と重複し、そのいずれよりも新しい。南側は第36号溝跡に流れ込むと考えられるが、第20号住居跡があるため判断としない。

溝の軸方向はN-4°-Eである。検出された長さは21.50m、幅2.25m、深さは35cmで、大型である。覆土は暗褐色土の単層である。

### 第16号溝跡 (第136・137図)

調査区の南側、X・Y-65、X-66グリッドに位置する。第18号住居跡、第36号溝跡と重複し、前者より新しく、後者との関係は不明である。その形態から第36号溝跡を意識したもので、同時存在した可能性も考えられる。

溝の軸方向はN-80°-Eである。西側は不整な方形、東側は南北がテラス状になり、中央が幅1m以上の溝状になる。長さ5.4m、最大幅1.6m、深さは32cmである。覆土は礫を多く含む黒褐色土

の単層である。

遺物は古墳時代の須恵器器台・坏、江戸時代の香炉・土鍾が出土している。1・3は高坏形器台の脚部と考えられるものである。1は3条1単位の沈線区画内に櫛歯波状文と三角形の透穴を千鳥状に配置する。焼成はやや甘く、産地は不明である。3は中央に強い波状文が認められ、その上下に波状文が施され、それらを切る形で長方形の透穴が開けられている。2は坏の底部で内面に灰がかかる。底面は回転ヘラケズリで、鳩山窯跡産。8世紀後半と考えられる。4は瀬戸美濃産の香炉で17世紀前半のものである。5は土鍾である。長さ8.8cm、復元径4.0cm、孔径1.0cmである。外面は指ナデで凹凸が著しい。

### 第17号溝跡 (第138図)

調査区の南側、W-65グリッドに位置する。第35・36号溝跡と重複し、そのいずれよりも新しい。溝の軸方向はN-85°-Eである。西側が幅3.1mと広く、東側が幅0.8mと細くなる。長さ3.1m、深さは19cmとごく浅い。覆土は自然堆積で、砂、炭化物を含む暗褐色土、黄褐色土である。

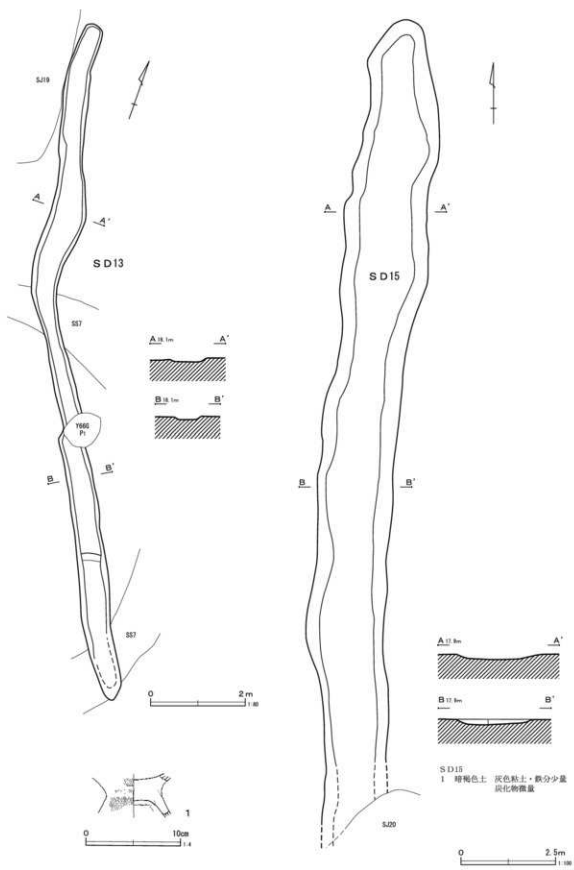
### 第35号溝跡 (第138図)

調査区の南側、W-65グリッドに位置する。西側法面に沿って検出され、遺構の東側が部分的に検出されたのみである。第17号溝跡、第6号土壇と重複し、前者より古く、後者との前後関係は不明である。

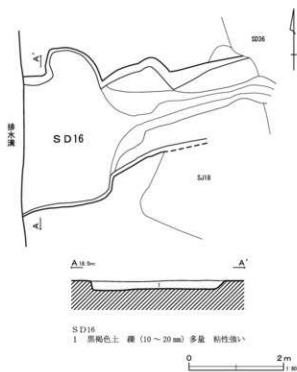
溝の軸方向は調査区のラインに沿っているため、南北方向としておく。検出された長さは11.3mにとどまる。幅は0.82m、深さは25cmである。覆土の様相は確認できなかった。

第49表 第13号溝跡出土遺物観察表 (第135図)

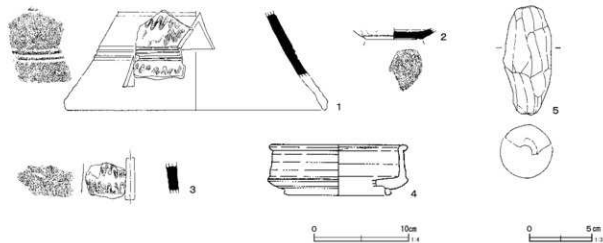
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	台付甕	—	4.6	—	CDEGHIJ	30	普通	灰褐色	内面復付着	



第135图 第13·15号沟迹·第13号沟迹出土遗物



第136図 第16号溝跡



第137図 第16号溝跡出土遺物

第50表 第16号溝跡出土遺物観察表 (第137図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	器台	—	7.2	—	D I	5	良好	暗灰	非陶色産 非東山産 産地不明	122-2
2	須恵器	環	—	1.2	6.0	E H I K	25	良好	灰白	内面降灰 ロクロ右回転 鳩山か	
3	須恵器	器台	—	3.3	—	D I	5	普通	暗灰	SD16No.2と同一個体	122-3
4	陶器	香炉?	(13.9)	5.3	—	D E H	10	良好	灰白	瀬戸美濃	
5	土製品	土埴	8.8	4.0	1.0	D J K	50	普通	灰白	57.4g	167-1

第51表 第51号溝跡出土遺物観察表 (第138図)

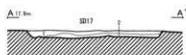
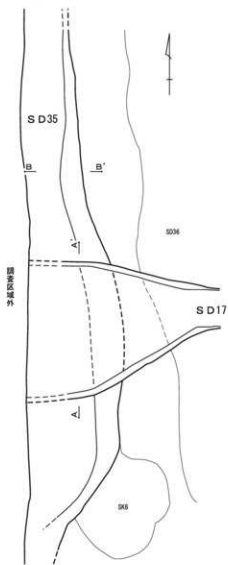
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	14.1	13.8	2.4	A C E H I	50	普通	にぶい橙	外面煤付着	161-6

### 第51号溝跡 (第138図)

調査区の北側、I・J・K-65グリッドに位置する。第24・30・32・33号住居跡、第24・26号土壌と重複し、そのいずれよりも新しい。溝の軸方向はN-17°-Wで、丁度第48号溝跡と第3号溝跡をつなぐ位置にある。検出された長さは全長14.60m、第24号土壌以北7.20m、第24号土壌以南5.90mである。幅17~32.3cm、深さは30~45cmで北から南へ深くなっている。覆土の様相は確認できなかった。

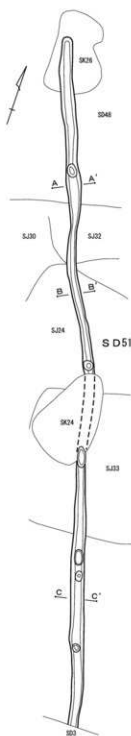
遺物は古墳時代前期の甕が出土している。1は古墳時代前期の甕である。所謂5の字状口縁甕の模倣品である。口縁部は内外面とも横ナデが強く施される。胴部の外面はヘラケズリに近いヘラナデの後、ヘラ磨きを加えている可能性があるが不明瞭である。内面はヘラナデで、非常に平滑に仕上げられており、逆に在地の様相を呈している。内外面は全体に風化が著しい。

第17-55号沟渠



SD17  
1 棕褐色土 砂粒多量  
2 暗黄褐色土 炭化物粒子少量

第51号沟渠



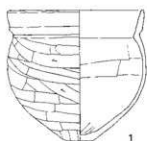
A-A'



B-B'



C-C'



0 2m

0 10cm

第138图 第17·35·51号沟渠·第51号沟渠出土遗物

### (3) 土壌

#### 第1号土壌 (第139図)

調査区の南側、AA-66グリッドに位置する。軸方向はN-12°-Wで、不整な円形である。規模は長軸1.48m、短軸1.42m、深さは57cmで深い。覆土は砂、砂利を多く含む灰褐色土を主体とする自然堆積と考えられる。洪水等による埋没が考えられる。遺物は出土していない。

#### 第2号土壌 (第139図)

調査区の南側、Y-Z-66グリッドに位置する。第36号溝跡の南岸から検出された。新旧は不明である。軸方向はN-5°-Wで、不整長方形である。規模は長軸2.18m、短軸1.36m、深さは7cmである。覆土は確認できなかった。遺物は出土していない。

#### 第3号土壌 (第139図)

調査区の南側、Y-66グリッドに位置する。第7号墳、第5号冢跡と重複する。新旧は不明である。南北方向の土壌の西側にもう一つ土壌が付く形態である。軸方向はN-20°-Eである。規模は東西0.90m、南北0.60m、深さは7cmである。西側の掘り込みの部分が若干深い。覆土は確認できなかった。遺物は出土していない。

#### 第6号土壌 (第139図)

調査区の南側、W-X-65グリッドに位置する。第36号溝跡の南岸に当たる。第35号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。軸方向はN-37°-Eで、不整な楕円形である。規模は長軸2.14m、短軸1.05m、深さは24cmである。覆土は間層に砂層を含む自然堆積である。遺物は出土していない。

#### 第7号土壌 (第139図)

調査区の南側、Z-66グリッドに位置する。第6号墳と重複するが、新旧関係は不明である。軸方向はN-74°-Wで、不整な長方形である。規模は長軸2.50m、短軸1.62m、深さは15cmである。覆土は暗褐色土を主体とする自然堆積である。遺物は出土していない。

#### 第8号土壌 (第139図)

調査区の南側、Z-66グリッドに位置する。第21号住居跡、第6号墳と重複し、両者より新しい。軸方向はN-18°-Wで、長方形である。規模は長軸1.46m、短軸は重複のため現状で0.78mを測る。深さは40cmである。覆土は砂を含む自然堆積である。遺物は出土していない。

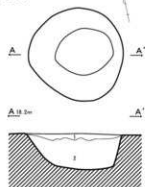
#### 第22号土壌 (第139図)

J-65グリッドに位置する。最も遺構が密集する箇所第24・30号住居跡と重複し、両者より新しい。軸方向はN-19°-Wで、楕円形である。規模は長軸1.50m、短軸1.15m、深さ30cmである。覆土は、暗灰色土を主体とする自然堆積である。遺物は出土していない。

#### 第27号土壌 (第139図)

調査区の北側、J-65グリッドに位置する。遺構の西側が調査区域外にかかる。第30号住居跡、第23・35号土壌と重複し、そのいずれよりも新しい。軸方向はN-68°-Eで、平面形は不整な楕円形である。規模は、検出された範囲で、長軸1.53m、短軸0.93m、深さは26cmである。覆土は自然堆積で、炭化物を含む明灰色土である。遺物は出土していない。

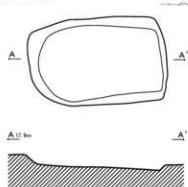
第1号土坑



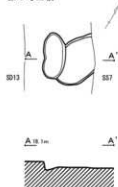
SK 1

- 1 緑褐色土 砂少量 炭化物わずか 2層との層理面に炭化物集積
- 2 灰褐色土 砂利・鉄分多量 灰色粘土少量

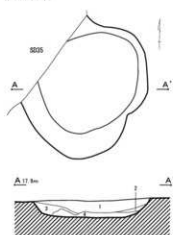
第2号土坑



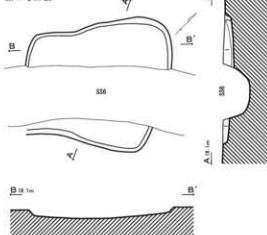
第3号土坑



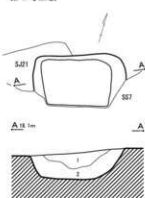
第6号土坑



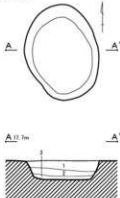
第7号土坑



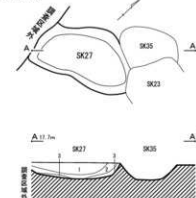
第8号土坑



第22号土坑



第27号土坑



SK 6

- 1 緑褐色土 炭化物粒子少量 粘性強
- 2 暗褐色土 粘性強
- 3 砂層
- 4 暗褐色土 炭化物粒子多量

SK 7

- 1 暗褐色土 マンガン粒子多量
- 2 暗褐色土 黑色粘土ブロック少量

SK 8

- 1 暗褐色粘土 砂質ブロック少量
- 2 暗褐色粘土 黄褐色土ブロック少量

SK 22

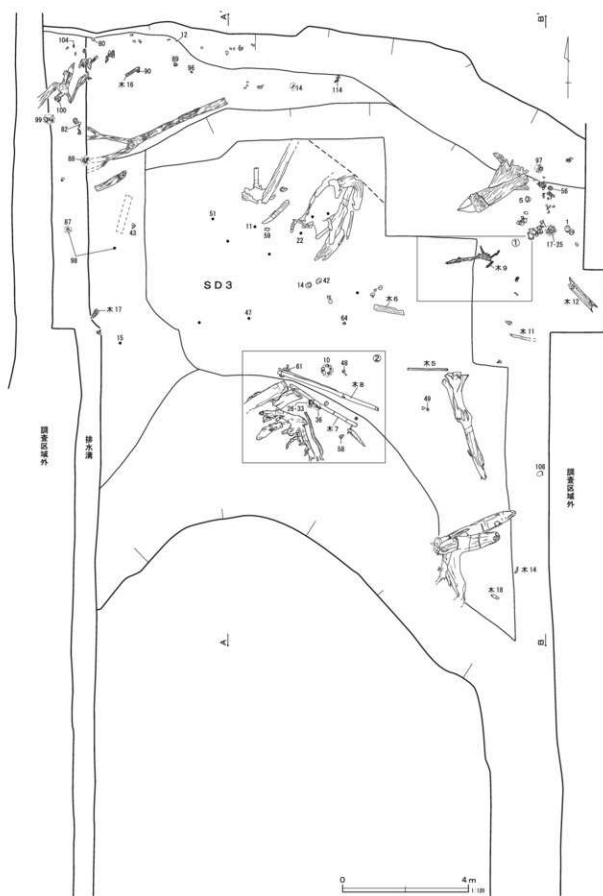
- 1 緑灰色土 緑灰色土と黄褐色土を混に含む 粘性強
- 2 緑灰色土 1層より緑灰色土多量 粘性強い
- 3 暗赤褐色土 緑灰色土主体 炭化した砂粒多量 粘性弱

SK 27

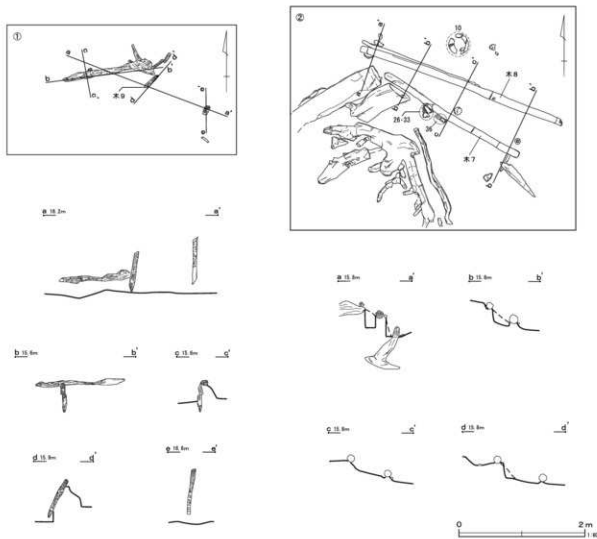
- 1 明灰色土 炭化物少量 炭化物混に含む 粘性強い
- 2 明灰色土 炭化物微量 炭化物混に含む 粘性強い
- 3 明灰色土 埋山土と近い 粘性ややあり

0 2 m 1/40

第139図 第1・2・3・6・7・8・22・27号土坑



第140图 第3号清跡 (1)



第141図 第3号溝跡(2)

#### 4. 河川跡

##### (1) 第3号溝跡(第140～154図)

調査区の北側、K・L-65・66グリッドに位置する。第20・31号住居跡、第51号溝跡が北岸にあるが、新田というより、その遺構が造られた時期より後に、川岸が北側に後退したために現在のような景観が形成されたものと考えられる。安全のため矢板を法面にかけながらの調査であったため断面の状況を確認することができなかった。

規模は、幅160～180m、深さ2.40mである。南北両岸ともテラス状の緩斜面があり、北岸から約4m、南岸から約3mの箇所から角度を持って溝

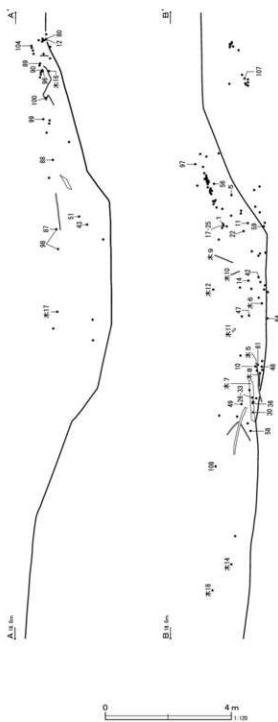
底に至る。

溝底や壁面からは多くの自然木と木製品が認められた。大径木が多く、一部をサンプリング用に採取した。

南北の溝底際には横木を流路と平行に据え、それを斜面に打ち込んだ杭で留めた形の施設と思われる木組みが検出された。

北岸の施設1は横木が外れた状態であった。約1m間隔に杭が3本打たれ、本来それに2mの横木が組み合わせてあったものと考えられる。3本とも9の杭とほぼ同様の、長さで50～70cmのもの





第142図 第3号溝跡(3)

である。

南岸の施設2は、埋没している自然木の根と約1m間隔に打たれた杭2本を支点に、7・8は約50cmの間隔で並べられており、約20cmの段差がある。両施設の性格を示すような遺物は出土していないが、その配置から水場遺構の可能性が高いと考えられる。

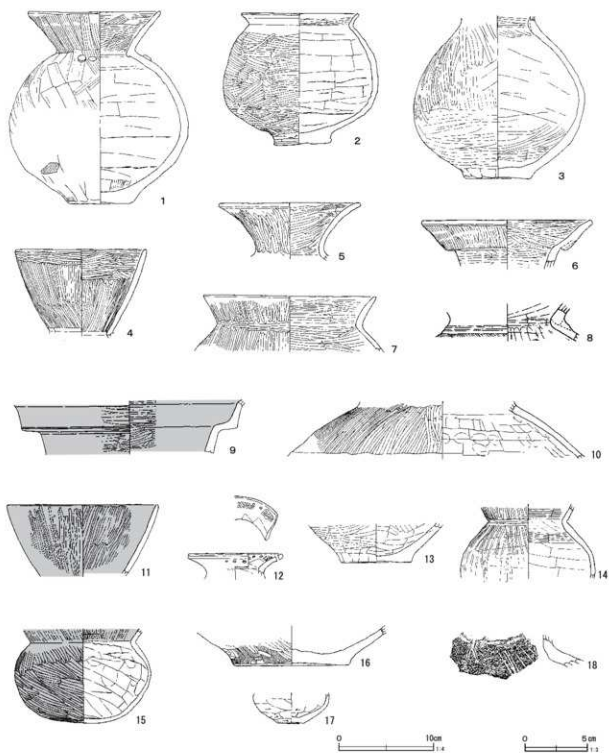
土器、木製品は、おおまかに下層と上層に分かれて出土した。前者は古墳時代前期のものを中心とし、後者は古墳時代中期から奈良・平安時代を中心とする。北岸上層のテラスからは後述する祭祀跡が検出されている。

遺物は古墳時代前期の壺・小型壺・埴・台付甕・甕・高坏・器台・鉢・甕が大量に出土している。1～10・13・16は壺である。1の壺は、球形胴に直線的な口縁部が付くものである。端部は丸く収められている。肩部の浮文は9mm前後の円形のボタン状のもので、2個1単位で3箇所貼付されている。器外面は木口ナデ後へラ磨きが施される。器面の風化が進み、へラ磨きはほとんど見えない。胴部外面は一枚薄く粘土が着せられており、剥れた箇所から下地の刷毛目が見えている。底面は中央がやや凹み、砂が一面に付着している。

2の口壺は胴部下半に最大径があり、底部が突出するものである。口縁部は端部に面を持ち、横ナデが施される。胴部外面は刷毛目後横位の丁寧なへラ磨きが施される。底面はナデが施される。外面に煤が付着する。

3の壺胴部は球形胴で底部が突出する。内外面にへラ磨きが施されるものである。外面のへラ磨きは、下から上の順に3段階施される。内面はへラナデにより非常に平滑に仕上げられている。内面の下半に施されたへラ磨きは、外面とは異なる細い工具を用いたものようである。焼成が非常に良く、硬質である。

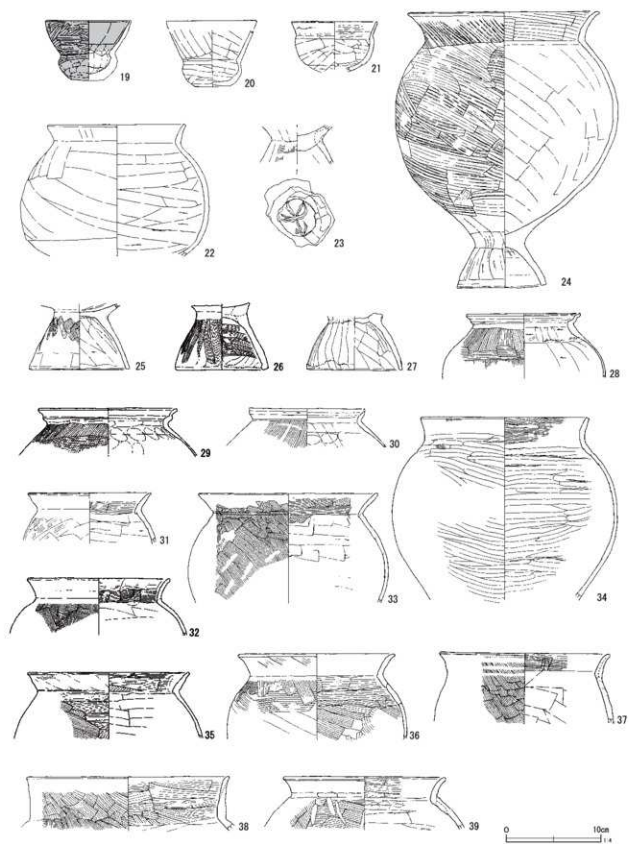
5・6・7・9は壺の口縁部である。6は複合口縁、9は二重口縁、5・7は単口縁である。6



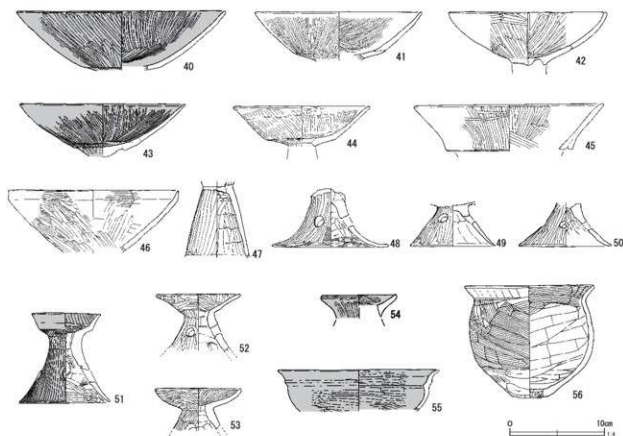
第143図 第3号溝跡出土遺物(1)

は複合部が外反するもので、丁寧な作りで、焼成の良いものである。一部に赤彩のような痕跡が見えるが明瞭ではない。9は大型のもので上下を欠失している。色調は黄白色で、内外面赤彩される。

7は器形としては甕だが、内外面に密にヘラミガキが施され、赤彩されていることから壺に含めた。8は頸部の破片で、突帯が貼付され、外面には強くヨコナデが施される。胎土が密で、質感が異なる。



第144图 第3号清跡出土物(2)



第145図 第3号溝跡出土遺物(3)

ることから搬入品である可能性もある。

10は壺の肩部の破片で、相当大型になるものと思われる。18の肩部外面には刃物のようなもので縦方向の線刻が施される。文様であろうか。

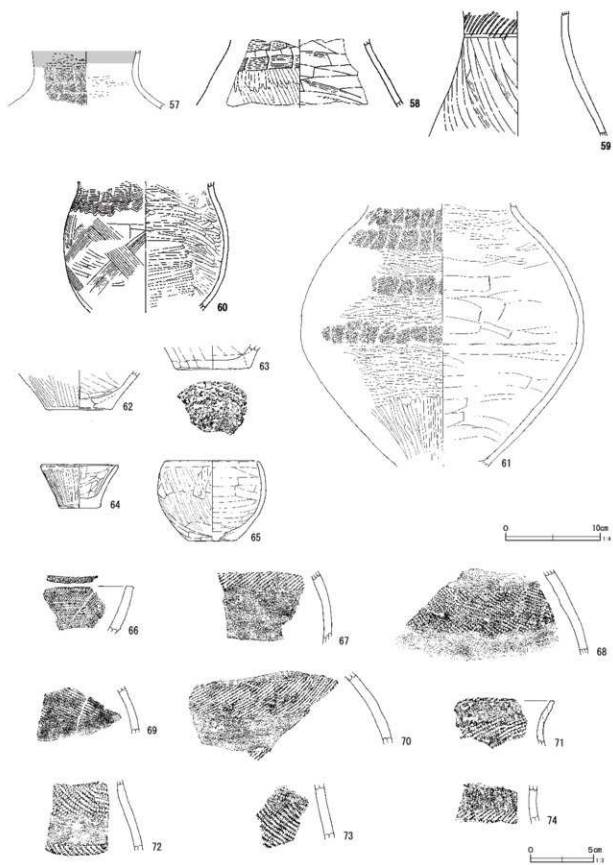
13・16は底部である。突出しており、底面は若干ドーナツ状を呈する。16の内面には炭化物が分厚く付着している。

4・11・12・14・15は小型壺である。4・11は口縁部である。内湾知味に長く立ち上がるもので密にヘラ磨きが施される。特に4は非常に丁寧な作りである。12は短い直口縁に穿孔が施されるものである。外面は3孔、内面は1つの孔を粘土を貼って塞いでおり、2孔になっている。端面には凹線状の明瞭な面があり、内面には不明瞭だが3条以上が1単位となる右回りの波状文が施されている。東海系のもと考えられる。14・15は胴部である。15は丁寧に調整が施されており、丸底で

底面まで赤彩される。

19・20は埴である。口縁部が長く体部が小さい。底面は大きな平底である。21は小型の碗である。22の甕はヘラナデによって仕上げられており、下半の粘土の接合箇所段になっている。23は台付甕の接合部である。下から脚台部を見ると大きく割れたホソ接合の跡が見える。

24の台付甕はやや長めの胴部に、短く外反する口縁部が付くものである。脚台部は小さめである。斜め方向の刷毛目が丁寧に施されている。器形のバランス、焼成が良く、硬質である。25～27は台付甕の脚台部である。いずれも小型で器高が低いものである。28～30はS字状口縁台付甕である。29は口縁部の形態のしっかりしたもので、頸部内面も、ヘラナデにより平坦に直して仕上げられ胴部内面の上方には指面痕が多く見られる。器面も薄く仕上げられており、刷毛目も楕円状である。



第146图 第3号清跨出土物(4)

胎土も精選され、焼成も非常に良く、良く模倣されている。28・30は口縁部が潰れ、厚くなっている。胴部外面の刷毛目はやはり櫛歯状である。

31～39は甕の胴部上半である。いずれも口縁部は短く、頸部が「く」の字に外反する。34は口縁部の屈曲が弱く、端部に面を持つものである。内外面とも胴部全面に幅の広い工具によりヘラ磨き様のヘラナデが施される。外面と内面の胴部下半に煤がべったり付着する。31は粘土が精選され、焼成が良く、硬質である。38は口縁部が長くなるもので、厚く直立する。相当大型になると考えられる。外面の刷毛目原体に複数の種類があるのが窺える。焼成は非常に良い。39は短く厚い口縁部が外反するものである。粘土が一枚被せてあり、下地の刷毛目が所々に見える。外面の一部にヘラ磨きが施される。

40～44・46は高坏である。いずれも内彎気味に大きく開く坏部で、下半に稜を持つものである。いずれもホゾ接合である。46の端部は直立気味に掘み上げ、口縁部外周に面を持つ。48～50は高坏である。低平な脚部のものである。51～54は器台である。破片が多く不明瞭だが小さな器受部に大きく開く脚部が付くものと思われる。51は脚部の小さなものである。55は所謂S字鉢である。全面に横位のヘラ磨きが施され、赤彩される。56は瓶である。内側から単孔が開けられている。

57～65は弥生土器である。弥生時代後期前半のものである。57～59は壺である。57は頸部の破片で単節L Rの縄文が3段施される。上位は赤彩され、横位のヘラ磨きが施される。内面も横位のヘラ磨きが施される。58は8条1単位の右回りの簾状文が離れて2段施される。簾状文はストロークが長めで2.5cmほどである。59は細長いプロボーションのものである。頸部にヘラ状の鋭い沈線により斜めの文様が施されている。断面形が丸い太めの沈線によって区画され、胴部は下地に刷毛目が施され、その上にヘラケズリに近いヘラナデを

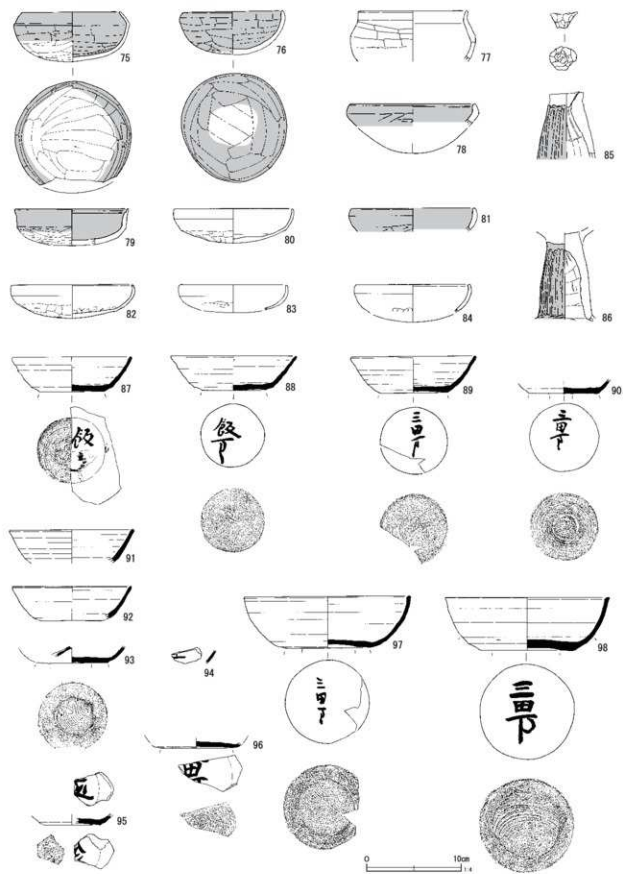
施している。60の甕は口縁部、底部が欠損している。外面全体に櫛歯文が施される。頸部上位に7条を1単位とする右回りの簾状文が2段、下→上の順に施される。所謂2進止めで、2～2.5cm、1.5～1.8cmの単位が交互に施されている。下段の波状文は、やはり7条を1単位とする右回りのものでピッチは細かいが部分的に乱れが見られる。胴部には櫛歯状工具による縦羽状文が2周施され、菱形の文様になっている。内面はヘラ磨きが施され、非常に平滑に仕上げられている。外面全体に煤が付着し、色調は真っ黒である。

61の壺は、上下3段に文様帯が見られるもので、単節L Rの縄文が肩部から胴部の中位まで、肩部に2段、下位のもの1段施されている。縄文は無区画で、文様帯の間にはヘラ磨きが施される。内面はヘラナデにより平滑に仕上げられている。

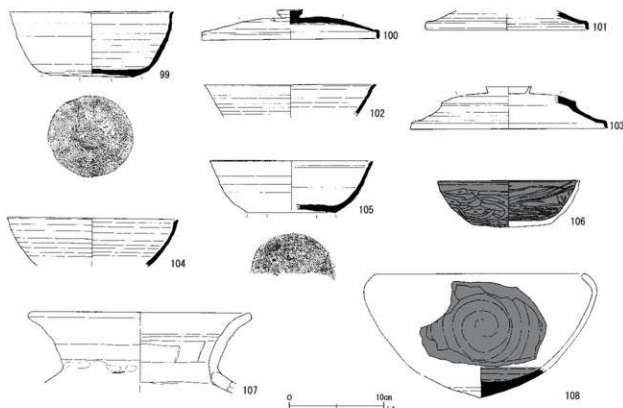
62・63は底部である。いずれも底部が平坦で、底部から直線的に胴部にいたるものである。62は外面にヘラ磨きが施され壺と考えられる。いずれの胎土も粒子が細かく、粒子が手に付くような感触がある。63の底面には靱の圧痕が見られる。

64・65は鉢である。いずれも底部は平坦で、突出しない。64は丁寧な縦位のヘラ磨きが施され、焼成が良く硬質である。

66～74は縄文が施文される壺である。66～70は節が細いものである。66は面のある口唇部に単節L R、外面に単節L R、S字状結節、R Lの羽状縄文が施され、その上にココナデが施されている。内面はヘラ磨きが施される。複合口縁の複合部の可能性がある。67～70は肩部から胴部上位のものである。外面に67は単節L R、68は単節R Lが3段、69は単節R L、70は単節L Rの縄文が2段施される。いずれも無区画である。71～74は節の太いものである。吉ヶ谷式、あるいは吉ヶ谷系の可能性が高い。71は口縁部の粘土の積み上げ痕が顕著に認められるもので、指頭圧痕が明瞭である。下位に単節L Rの縄文が施される。72は単節R L



第147图 第3号满踏出土遗物(5)



第148図 第3号溝跡出土遺物(6)

が上下に2段、73は単節R L、74は単節L Rの縄文が施される。72の文様の間はへら磨きが施され、赤彩される。

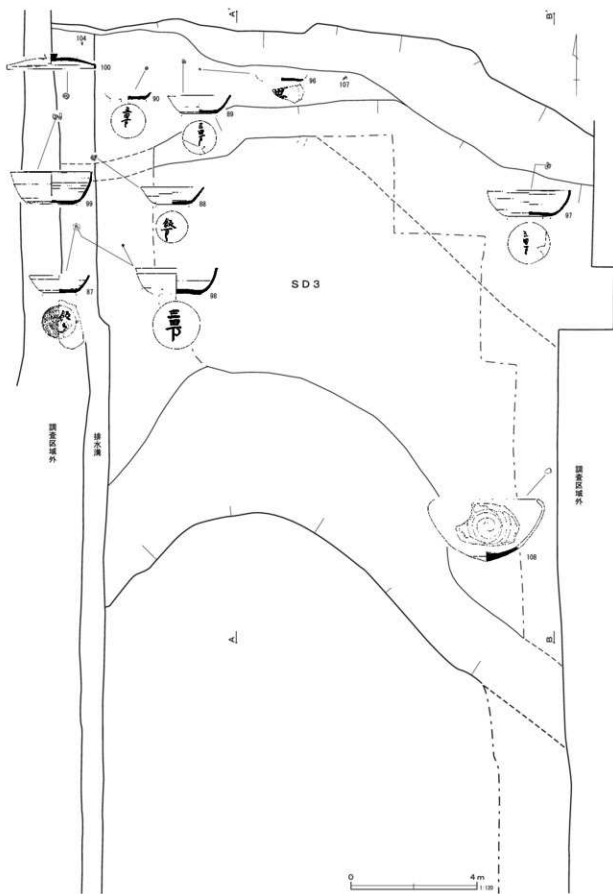
第147・148図75～108は古墳時代中期から奈良・平安時代の土器を一括した。75～78・81は鬼高期初頭の坏である。75は坏身模倣坏。底部外面を除き赤彩される。器面平滑。下層出土。76・81は丸椀タイプ、78は口唇部が小さく内彎する。いずれも北側テラス出土。76は底部外面を除き赤彩される。底部は弱いケズリ後ナデか。77は鉢で、和泉期～鬼高期初頭前後と推定される。器面は荒れており、赤彩の有無は不明。外面に煤状の黒色有機物付着。79は純比企型坏。口唇部内面に沈線が巡り、口縁部下はヨコナデによる弱い稜が作り出される。赤彩。

80・82～84は北武蔵型坏である。いずれも北側テラス付近のK-65グリッドから出土した。やや扁平な丸底形態で、8世紀前半～中葉頃のものとして推定される。85・86は土師器高坏の脚部片である。

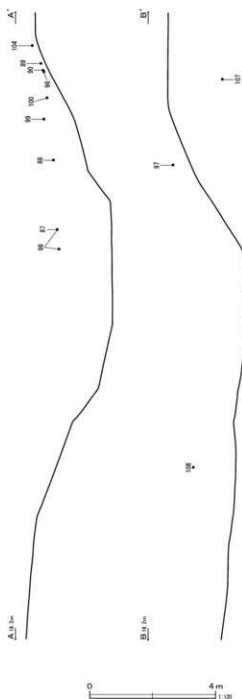
85は坏部接合部の脛が外れた状態で遺存していた。和泉期の所産であろう。

87～96は須恵器坏である。87～90は底部全面回転ヘラケズリ調整。南比企産でほぼ同巧である。87の見込み部は使用による摩滅が認められる。底部外面には濃い墨痕が残るが、墨で潰れた部分があり、字形は判読できない。「飯万呂」の可能性があろうか。第3号溝跡西端部上層から出土した。88は底部に「飯万呂」の墨書が残る。内面見込み部は使用による摩滅が認められる。第3号溝跡西端部上層出土。89は底部外面「三田万呂」の墨書がある。内面見込み部は摩滅している。90は回転ヘラケズリ調整で、中心部に僅かに糸切り痕を残す。底部外面「三田万呂」の墨書。93・94は体部側面に墨書されるが、字形は不明。93は底部回転糸切り後周辺部回転ヘラケズリ調整。95は底部回転糸切り後無調整。底部内外面に墨書されている。おそらく同一文字と思われるが、判読できない。上層出土。96は底部全面回転ヘラケズリ、底部墨





第149图 第2号祭祀跡 (1)



第150図 第2号祭祀跡(2)

書は「三田万呂」と推定される。

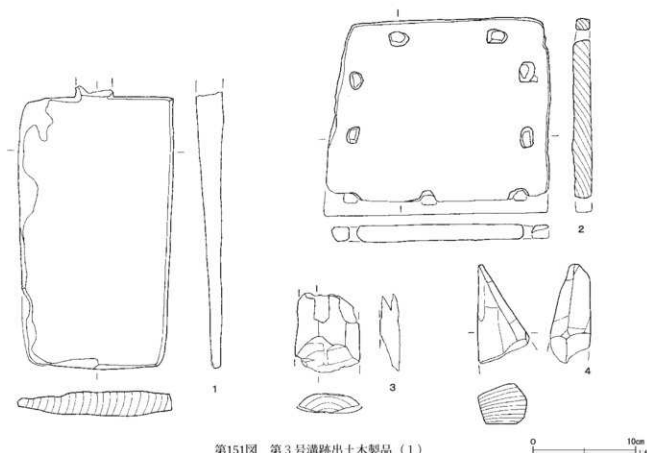
97～99・102・104・105は須恵器無台碗。97は底部周辺、98は体部下端・底部周辺回転ヘラズリ調整される。いずれも底部には「三田万呂」と記された墨書が残る。但し、明らかに異筆である。99は深椀風、105は口縁内面に沈線が巡る。

100・101・103は須恵器蓋である。103は稜碗の蓋である。108は須恵器鉄鉢形底部破片である。内面には黒色の皮膜(漆)が薄く塗布されている。106は土師器無台碗。外面ヘラケズリ後ミガキ、内面粗いヘラミガキ調整。口唇部内面強い沈線が巡る。内外面黒色処理されている。8世紀初頭前半の所産であろう。在地産。107は土師器壺である。口縁部中位に段の痕跡がある。鬼高明加面前後の所産であろう。

#### 第2号祭祀跡(第149図)

第3号溝跡北岸テラス(緩斜面)を中心に、墨書土器がまとまって出土した。第36号溝跡北岸の状況とも類似するため、同様の祭祀跡の可能性を想定し、第36号溝跡の墨書土器を含む土器群を第1号祭祀跡、第3号溝跡北岸を調査中、3点の墨書土器が岸から約1.2m河川内に入った緩斜面から、東西に並ぶ状況で出土した。西から第147図90・89・96である。いずれも底部外面に「三田万呂」と記されていた。3点とも破片であり、原位置を保っているとは必ずしも言えないが、大きく動いたとも思われない。原位置を復元するならば、北岸の岸辺となろう。北岸の東端付近からも底部に「三田万呂」と記された須恵器無台碗が出土した(第147図97)。岸から約1.4m河川内に入った位置であり、前述の3点の墨書土器と同一文字であり、出土状態も類似する。96と97の間は約11.4mあるが、北岸調査前の冠水で表土が崩落した部分に相当する。可能性としては列状に墨書土器を含む土器群が並んでいたことも十分想定されるが、残念ながら明確にはできなかった。

調査区西端付近の北岸に寄った溝内からは「飯



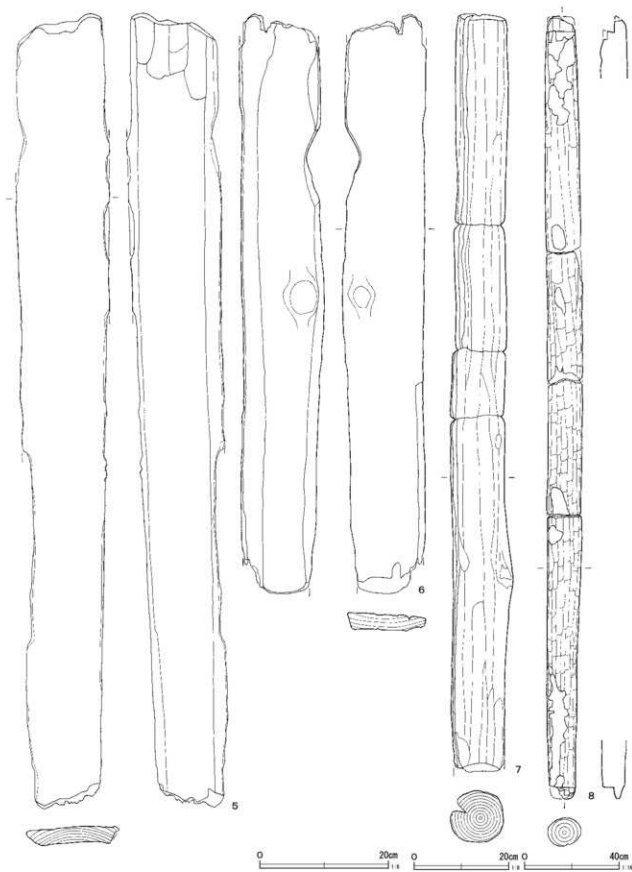
第151図 第3号溝跡出土木製品(1)

万呂」と記した須恵器環(88)、字形不明「飯万呂?」の墨書土器(87)、「三田万呂」と記した須恵器無台碗(98)の他、墨書はないものの須恵器無台碗(99)と蓋(100)が出土した。これらの土器群も墨書土器の共通性や出土位置から本来岸辺に並べられたものが河川内に転落した可能性がある。須恵器は全て南比企産の供膳器(環・無台碗・碗蓋)で占められ、環は形態や法量は比較的近く、鳩山窯跡群編年に照らせば、8世紀中葉～後半(HⅢ期後半～HⅣ期)にまとまる一群であろう。但し、土器には使用痕が認められ、一定の使用期間を考慮する必要がある。詳細な筆跡鑑定はできないが、達筆な一群(88～90・97)と稚拙な一群(98)には分かれ、前者は「万呂」や「三」の書き方からⅠ類(88・90・97)とⅡ類(89)の2類型に分けることができようか。98をⅢ類とすると3群、少なくとも二人または三人の手によって書かれた文字と判断される。

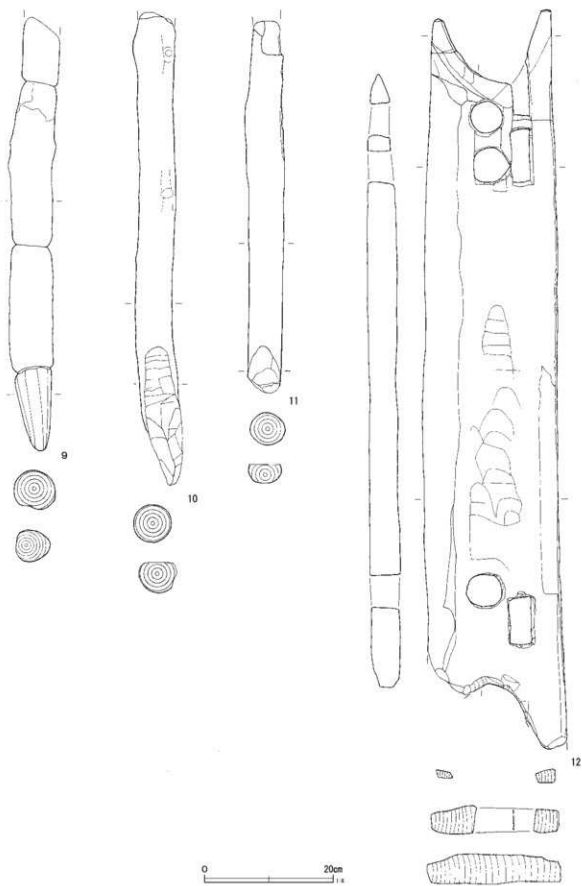
「飯万呂」、「三田万呂」はおそらく人名と考えてよいであろう。祭祀形態は不明ながら、人名を記した墨書土器を含む供膳器を河川岸辺に並べた行為を含む祭祀が行われたと考えられる。時期的には須恵器編年と使用痕を考慮しても8世紀中葉～後半頃と考えられるが、一回性のものなのか、数年、あるいは複数回の祭祀の累積を反映したものなのかは不明である。第3号溝跡からは内面に漆の付着した鉄鉢形須恵器(108)が出土しているが、祭祀土器群からは離れた南岸付近から出土したため、関連性は不明である。また、北岸からは北武藏型環が2点(80・82)出土している。須恵器よりも若干古相を示し、祭祀に伴うか否か不明である。

#### 木製品

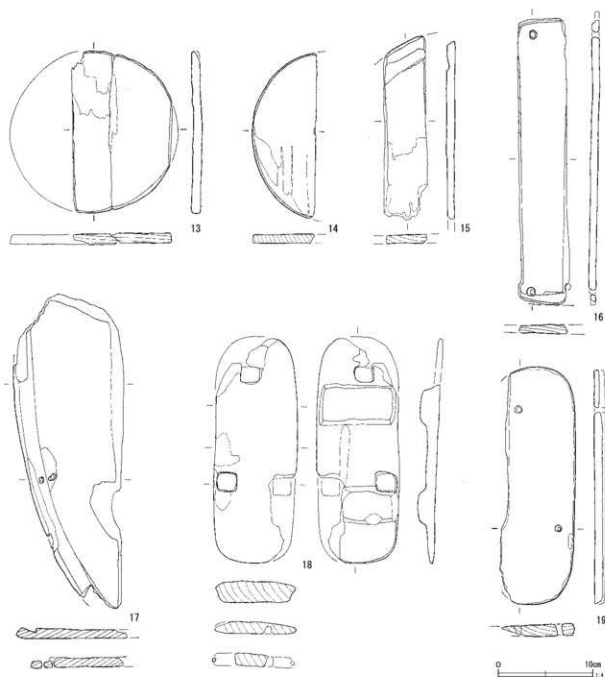
第3号溝跡からは自然木、木製品が46点出土している。古墳時代のものと中世のものがある。古墳時代のものは、農具と建築材である。1は



第152图 第3号洞跡出土木製品(2)



第153图 第3号清涧出土木制品(3)



第154図 第3号溝跡出土木製品（4）

一木簡である。柄から先と側縁部の約半分を欠失している。残存長26.8cm、幅14.6cm、厚さ2.4cmである。肩部が直線的に水平に作られている角肩型のものである。肩部から刃部にかけて厚みを減じ、断面形が三角形になる。木取りは柾目、樹種はイチイガシである。

2は由柄鍔の障泥板である。方形で、下部の側

縁部を欠失している。残存長17.7cm、幅21.6cm、厚さ1.7cmである。厚い板状である。1.5~2.0cmの不整な方形の装着孔が上部に2孔、側縁部に3孔、下部に3孔開けられている。木取りは追柾目、樹種はモミ属である。

3は材のチップである。上部は欠失するが下部には鉄斧による破断痕が明瞭に残り、部材から削

り取られた一部と考えられる。木取りは板目、樹種はウコギ属である。

4は板状の製品の先端部と考えられるものである。製品の種類は不明である。残存長9.7cm、幅5.1cm、厚さ3.9cmである。板材の側縁部を斜めに削り出している。側縁部は多角形となっている。木取りは柾目、樹種はイチイガシである。

5・6は板材である。両者とも端部を欠失している。5は残存長127.5cm、幅14.9cm、厚さ2.6cmである。表裏面とも丁寧に仕上げられている。側縁部が薄く仕上げられており、組み合わせて使用されたものと考えられる。芯持丸木のみかん割り材である。樹種はコナラ属アカガシ亜属である。6は残存長93.3cm、幅13.5cm、厚さ3.0cmである。大きな節が特徴である。側縁部が丸く凹ませてあり、柱と組み合わせたものと考えられる。木取りは板目、樹種はモミ属である。

7・8は柱材である。南岸の施設2の構造材として転用して用いられていた。いずれも両端を欠失している。残存長161.2cm、径は10.9～11.3cmである。芯持丸木で、樹種はコナラ属アカガシ亜属である。8は両端に脛が切られるものである。残存長334.0cm、径は12.0～15.0cmである。工具痕が鮮明に残る。脛は長手方向の継ぎ手の可能性がある。芯持丸木で、樹種はサカキである。

9～11は杭である。9・10は上端を欠失し、11は両端を欠失している。9は残存長77.0cm、径は5.3～7.2cmである。先端を多角形に削られている。芯持丸木で、樹種はコナラ属アカガシ亜属である。北岸の施設1の構造材である。10は残存長77.0cm、径は5.3～7.2cmである。片側が大きく斜めに削られ、更に先端が斜めに削られる。芯持丸木で、樹種はコナラ属アカガシ亜属である。11は残存長58.0cm、径は5.0～5.6cmである。片側が大きく斜めに削られ、更に先端が斜めに削られる。先端は短く、丸みを帯びている。皮付きの芯持丸木で、樹種はクワ属である。

12は屏の欄である。観音開きの屏に使用されたものと考えられる。向かって右側になる辺付を嵌め込む部分が欠損している。屏当たり等は認められない。残存長117.9cm、幅21.1cm、厚さ4.7cmである。左側の屏軸孔と方立を受ける脛孔が各2箇所認められるが、開け直した要因は不明である。屏側の方が斜めに削られている。屏軸孔は径5.2～6.0cmで、回転による磨耗が進んでいる。方立の脛孔は長さ7.7～8.3cm、幅2.5～3.3cmである。幅の中央が最も厚みがある。また丁度両屏が閉じる部分の手前がドーム状に削られている。表面は部分的だが工具痕が認められる。木取りは柾目、樹種はイチイガシである。

13～17・19は出物の底板である。13～16は円形のものである。13は径17.2cm、14は径17.4cm、15は残存長19.5cm、推定径42.0cm、16は残存長30.3cm、推定径30.3cmである。厚さは0.9～1.2cmである。13・14は側板を乗せる溝がなく、底部に嵌め込む形のものである。15・16は側縁部に溝・段が掘り込まれている。16は円形の綴じ孔が2孔認められる。全て木取りは板目である。樹種は13がヒノキで、それ以外はスギである。17・19は楕円形のものである。17は残存長32.8cm、幅11.7cm、厚さ1.1cmである。側縁部に幅1.5cmの段が掘り込まれている。木取りは板目、樹種はスギである。側板の表裏と思われる箇所に円形の綴じ孔が2孔認められる。19は残存長25.0cm、幅7.8cm、厚さ1.3cmである。円形の綴じ孔が2箇所認められる。

18は一木作りの連櫓下駄である。前部と右後部は欠損している。前壺が右に寄ることから右足用と考えられる。平面形は隅丸方形である。残存長23.9cm、幅8.8cm、厚さ1.3cm、高さ2.4cmである。中心部が厚く、前後左右に厚みを減じている。特に前後は際立って薄い。壺形は2cm前後の大きさの方形である。隅の角は減っていて丸くなっている。木取りは板目、樹種はスギである。

第52表 第3号溝跡出土遺物観察表(1)(第143~145図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	13.8	20.2	6.4	ACEHI	80	普通	浅黄橙	R66G No152 K66G	114-4
2	土師器	壺	(12.2)	13.8	5.8	ACEGHJJ	90	普通	黄橙	外面煤付着 K66G No153	114-5
3	土師器	壺	—	17.1	6.6	ACDEHJ	70	良好	淡橙	K66G No147	115-1
4	土師器	小型壺	(13.7)	9.3	—	CEHIJK	35	良好	橙	内面煤付着 L66G 下層	
5	土師器	壺	(14.3)	6.0	—	AEHJK	20	良好	黄灰	K66G 下層	
6	土師器	壺	(17.6)	5.2	—	ACEHIJK	25	良好	にぶい黄橙	下層	164-2
7	土師器	壺	(18.1)	5.9	—	ADEHIK	15	良好	黄灰	K66G	
8	土師器	甕	—	3.7	—	ACEHIK	20	良好	にぶい橙	西下層	
9	土師器	壺	—	5.6	—	AHEI	5	普通	にぶい黄橙	赤彩 西下層	
10	土師器	壺	—	6.0	—	ABCDEHIK	75	普通	にぶい黄橙	L66G No109 下層 K66G	114-6
11	土師器	埴	(15.8)	7.5	—	ABDEH	25	良好	赤	赤彩 K65G 下層/上層	
12	土師器	小型壺	9.7	2.5	—	ACHIK	5	普通	にぶい黄橙	K66G 下層	164-2
13	土師器	壺	—	4.1	7.4	AHEI	85	良好	明黄橙	下層	
14	土師器	小型壺	—	7.8	—	ACEHIJK	25	普通	橙		
15	土師器	小型壺	—	9.9	—	AEHJK	80	普通	にぶい黄橙	赤彩 No6	115-2
16	土師器	甕	—	4.2	12.0	CEIK	80	普通	にぶい黄褐	内面炭化物付着 K66G No166	
17	土師器	小型壺	—	3.2	2.6	ABCDEHIK	80	普通	灰黄	No12	
18	土師器	壺	—	2.5	—	ACEHIJK	5	普通	にぶい黄橙	赤彩 K65G No107	164-2
19	土師器	埴	9.0	6.4	3.3	ACHJK	70	普通	にぶい黄橙	赤彩 西下層	115-3
20	土師器	埴	—	5.9	3.6	ACEHIJ	30	良好	黄橙	西下層	
21	土師器	埴	(9.0)	5.4	—	ACEGHJJ	30	良好	明赤褐	K66G 下層	
22	土師器	台付壺	14.3	14.0	—	BCDJ	80	普通	にぶい黄橙	外面 口縁内面全体煤付着 K66G No151	115-4
23	土師器	台付甕	—	4.2	—	ACEHI	55	普通	橙	K66G 下層	
24	土師器	台付甕	19.6	29.3	8.9	ACDEHJ	90	良好	にぶい橙	内外面煤付着 R66G	115-5
25	土師器	台付甕	—	6.9	(10.5)	ACEHIJ	50	普通	灰褐	No13	
26	土師器	台付甕	—	7.0	9.2	ACEHIK	95	普通	にぶい褐	L66G No112	116-3
27	土師器	台付甕	—	6.0	(10.0)	ACEHI	30	普通	浅黄	K66G No151	
28	土師器	台付甕	(11.8)	6.9	—	ACEIK	20	普通	灰白	L66G No116	116-1
29	土師器	台付甕	(14.4)	5.1	—	ACHIK	20	良好	褐	外面煤付着 東下層	116-4
30	土師器	台付甕	(12.2)	4.0	—	ACE	20	良好	にぶい黄橙	外面煤付着 西下層	
31	土師器	甕	(12.8)	5.4	—	ACEIJK	25	良好	にぶい黄橙	No7	
32	土師器	甕	(14.8)	6.0	—	ACEIJK	20	良好	黑褐	外面煤付着 K66G 下層	
33	土師器	甕	(18.8)	11.6	—	ACEIK	20	良好	褐灰	外面煤付着 L66G No116	
34	土師器	甕	(17.2)	19.3	—	CEHIK	20	普通	にぶい橙	煤付着 K66G	116-2
35	土師器	甕	(17.0)	7.0	—	ACDEHJ	15	良好	にぶい橙	K65+66G 下層	
36	土師器	甕	(16.1)	9.1	—	ACEHIK	30	良好	にぶい橙	内外面全体煤付着 K66G 下層	115-6
37	土師器	甕	(17.7)	7.4	—	ACEHIJK	10	良好	灰褐	L66G 下層 外面煤付着	
38	土師器	甕	(21.2)	5.8	—	ABCEHIJ	25	良好	橙	L66G No115	
39	土師器	甕	(16.9)	5.6	—	ACEHI	15	良好	褐	東下層	
40	土師器	高坏	(21.9)	6.3	—	ABCEHIJ	20	良好	橙	赤彩 西下層	
41	土師器	高坏	(17.6)	5.2	—	ACEHIJK	25	良好	灰黄褐	外面一面煤付着 K66G L66G	
42	土師器	高坏	(16.6)	5.6	—	ACEI	20	良好	橙	西下層	116-5
43	土師器	高坏	17.4	5.6	—	ACEHIJ	65	普通	明赤褐	赤彩 K66G No165	
44	土師器	高坏	14.3	4.3	—	ACEHIK	50	普通	橙	K65G No130	
45	土師器	壺	(19.6)	4.8	—	AEGHIK	10	普通	黄灰	砂利層	
46	土師器	高坏	(18.0)	6.6	—	ABEHIK	25	良好	灰黄	K66G	
47	土師器	高坏	—	8.1	—	ACEHIK	90	普通	にぶい橙	No14 砂利層	
48	土師器	高坏	—	6.2	12.2	ADHIK	40	普通	にぶい黄橙	L66G No108	
49	土師器	高坏	—	4.6	8.8	ACEHIJK	80	普通	黑褐	L66G No105	116-7



第53表 第3号溝跡出土遺物観察表(2) (第145~147図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
50	土師器	高坏	—	4.5	9.5	ACEGHJK	100	普通	にぶい・黄橙	西下層	1166
51	土師器	器台	7.1	9.4	9.5	CEGIJK	90	良好	にぶい・赤褐	赤彩 №5	117-1
52	土師器	器台	8.6	6.2	—	ACEGHJK	70	良好	浅黄		117-2
53	土師器	器台	8.9	4.4	—	LI	60	普通	にぶい・黄橙	L66G	117-4
54	土師器	器台	(7.7)	2.3	—	AEHJK	40	普通	明褐	赤彩 西下層	
55	土師器	鉢	(17.0)	4.4	—	ACEHIK	15	普通	にぶい・褐	赤彩 砂利層	
56	土師器	甗	13.5	11.9	3.8	ABEHJK	90	普通	にぶい・橙	K66G №134	117-3
57	弥生	壺	—	6.3	—	EGL	5	普通	にぶい・黄橙	赤彩 下層	
58	弥生	壺	—	7.2	—	ACEHIK	20	普通	にぶい・橙	L66G №113	164-2
59	弥生	壺	—	13.4	—	ACEHK	20	普通	にぶい・橙	K66G №167	164-2
60	弥生	甗	—	13.6	—	ACE	20	普通	暗灰	外面煤付着 L66G 下層	
61	弥生	壺	—	28.0	—	CEIL	20	普通	にぶい・黄橙	№110 西下層	
62	弥生	壺	—	4.1	(6.9)	ABCEHIK	30	普通	にぶい・黄橙	K66G	
63	弥生	甗	—	2.5	(7.5)	ABEHJK	20	良好	にぶい・黄橙	K66G 下層	
64	弥生	鉢	(8.0)	4.6	3.9	ACEHIK	65	良好	明褐	内面煤付着 K66G №162	117-5
65	弥生	鉢	(9.7)	8.5	(5.1)	CEHIK	40	普通	にぶい・橙	№15	
66	弥生	壺	—	3.7	—	CEHIJK	5	普通	にぶい・橙	L66G 下層	
67	弥生	壺	—	5.5	—	ACEHIJK	5	普通	にぶい・黄橙	K66G 下層	
68	弥生	壺	—	6.7	—	ACEHIK	5	普通	にぶい・褐	L66G 下層	164-2
69	弥生	壺	—	3.7	—	ADEHIJK	5	普通	にぶい・橙	赤彩 J65G №101	164-2
70	弥生	壺	—	5.7	—	AEHJK	5	普通	灰黄褐	K66G 下層	
71	弥生	壺	—	3.6	—	DEHI	5	普通	黒褐	L66G 下層	164-2
72	弥生	壺	—	5.6	—	AEJK	5	普通	にぶい・黄橙	赤彩 西下層	164-2
73	弥生	壺	—	4.5	—	ACEIK	5	普通	にぶい・橙	K66G 下層	
74	弥生	壺	—	3.1	—	AEHJK	5	普通	にぶい・褐	L66G 下層	
75	土師器	坏	10.3	5.2	—	ACEHIK	70	良好	橙	赤彩 下層西	117-6
76	土師器	坏	11.5	4.5	—	ACEHIK	95	良好	明褐灰	赤彩 K66G 下層	117-7
77	土師器	鉢	(11.4)	5.4	—	ACEHI	40	普通	にぶい・橙	外面煤付着 下層	
78	土師器	坏	(13.0)	2.4	—	BCEHI	10	普通	にぶい・黄橙	赤彩 テラス	
79	土師器	坏	(11.8)	3.8	—	AEHJK	20	良好	赤褐	赤彩 K66G 殿下部 純比金型坏	
80	土師器	坏	12.4	3.7	—	CDI	60	普通	淡褐	K65G №126 北武藏型坏	120-1
81	土師器	坏	(13.0)	2.5	—	AHIJK	10	普通	赤	赤彩 テラス	
82	土師器	坏	12.7	3.6	—	CI	80	普通	淡褐	K65G №123 北武藏型坏	
83	土師器	坏	(11.2)	2.7	—	ACIK	15	普通	にぶい・黄橙	K65G 上層 北武藏型坏	
84	土師器	坏	(12.0)	3.0	—	CHI	15	普通	灰黄褐	K65G 上層 北武藏型坏	
85	土師器	高坏	—	7.0	—	AEHJK	40	普通	にぶい・橙	K65G 上層 赤彩	
86	土師器	高坏	—	9.4	—	AETK	90	良好	にぶい・黄橙	赤彩 西下層	
87	須恵器	坏	(12.4)	3.7	7.9	IJ	30	良好	暗灰	K55G №127 南比企産 既外面磨書「飯五呂」+	120-1
88	須恵器	坏	13.2	3.6	6.7	DIJ	65	普通	灰色	K55G №125 南比企産 既外面磨書「飯五呂」	118-1
89	須恵器	坏	(13.0)	3.8	7.1	DIJ	50	普通	明灰	K55G №110 南比企産 既外面磨書「三田五呂」	119-1
90	須恵器	坏	—	1.5	7.3	IJ	70	普通	明灰	K55G №111 南比企産 既外面磨書「三田五呂」	121-4
91	須恵器	坏	(13.0)	3.5	—	AIJJK	15	普通	灰	K65G 上層 南比企産	
92	須恵器	坏	(12.5)	3.5	—	EIJJK	10	良好	灰	J65G 南比企産	
93	須恵器	坏	—	1.8	8.5	IJ	60	良好	紫灰	K65G 上層 南比企産 体部に不明磨書	121-5
94	須恵器	坏	—	1.4	—	IJ	5	普通	灰	南比企産 体部に不明磨書	120-7
95	須恵器	坏	—	1.2	(6.0)	IJ	20	普通	灰	K55G 上層 南比企産 既外面に磨書「見」+	121-2-3
96	須恵器	坏	—	0.7	7.6	IJ	10	良好	青灰	K55G №109 南比企産 既外面磨書「三田五呂」+	120-8
97	須恵器	無台碗	(17.4)	5.4	8.9	DIJ	45	普通	明灰	K55G №119 南比企産 既外面磨書「三田五呂」	119-4
98	須恵器	無台碗	(17.2)	5.6	10.0	IJ	50	良好	灰	K55G №127 南比企産 既外面磨書「三田五呂」	118-4

第54表 第3号溝跡出土遺物観察表(3)(第148図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
99	須恵器	無台埴	17.1	7.0	8.6	G J	90	普通	灰白	K6G №121 南北金産 深緑 程度感あり	120-4
100	須恵器	蓋	18.6	3.2	—	I J	90	普通	暗青灰	K6SG №120 南北金産 極蓋	120-3
101	須恵器	蓋	(17.0)	2.0	—	E I J K	10	良好	青灰	J6SG 南北金産	
102	須恵器	無台埴	(18.0)	3.5	—	E I J	5	良好	灰	K6SG 上層 南北金産	
103	須恵器	蓋	(20.8)	3.6	—	I J	20	普通	暗青灰	J6SG 南北金産 佐波理焼飯極蓋	
104	須恵器	埴	(18.0)	5.1	—	C E I J	10	良好	灰	K6SG 上層 K6SG №113 南北金産	
105	須恵器	無台埴	17.1	5.5	9.2	I J K	90	良好	暗灰	L6SG №101 南北金産	120-6
106	土師器	無台埴	16.9	5.0	8.2	H I J	100	普通	黒	K6SG №122 全面黒色処理在地産	120-5
107	土師器	壺	(23.0)	8.4	—	A E H I K	20	普通	にぶい靑	K66G №114	
108	須恵器	鉢形	—	3.2	—	I J	80	良好	褐色	L66G №104 内面に黒漆塗 南北金産	121-6-7

## (2) 第36号溝跡 (第155～218図)

調査区のほぼ中央、M-W-66・66、X-Z-66グリッドに位置する。河川跡であるため単純に他遺構との前後関係は記述できない。重複する各々の遺構の項で述べたが、住居跡等の遺構が機能していた後に岸辺が移動したために現在の遺構の景観が形成されたものと考えられる。蛇行した河川を調査区が斜めに切り取った形になっていると考えられる。この河川跡は第3次調査では検出されておらず、調査区の間およそ10mを北側に蛇行し、第48号溝跡と合流するものと考えられる。部分的なため軸方向を掴むのは困難だが、南岸を基準とするとN-45°-Wになる。調査区と河川跡は前述のような状況であるため川幅も判然としないが30m以上になるものと考えられる。調査で検出された長さは130mあまりである。深さは北側が深く3.2m、南側が浅く2.1mになる。

断面形は安全確保のため法面を切ったため明確にできた箇所は少ないが、概ね逆台形状になるものと思われる。

覆土は第3・4層が古代・中世の包含層、第5・6層が古代の河床の砂礫層、第7～9層が古墳時代後期の包含層、第10・11層が古墳時代前期の包含層、第13・14層が古墳時代前期の砂礫層である。古墳時代前期の包含層が最も厚く堆積している。この各時代の包含層の間の砂礫層を境にして、P-66グリッド杭付近より北側の北岸は、古墳時代前期、古墳時代後期、古代の岸辺の変遷が

確認された。それより南側では古墳時代前期の土器が集中しているが、古代の遺物もそれらのすぐ上付近から出土しており、岸辺が一定の範囲であったことが分かる。この近辺の古代の岸辺からは後述する祭祀跡が検出された(第1号祭祀跡)。

遺物は土器・木製品が大量に出土している。土器は弥生時代中期・後期、古墳時代前期・中期・後期、奈良・平安時代、中世のものがあり、流路跡の時期をよく示していると言えるだろう。溝底や壁面からは多くの自然木が認められた。大径木が多く、一部をサンプリング用に採取した。

ここでは、まず古墳時代前期の様相について述べる。古墳時代前期の土器は最も多く出土している。破片類が多い。器種としては壺・広口壺・小型壺・埴・台付埴・台付甕・甕・高坏・小型高坏・器台・鉢・瓶・蓋・ミニチュア・手捏ねがある。

古墳時代前期の包含層を中心に、覆土中から散在して出土している傾向が強い。

P-66グリッドの丁度第20号住居跡の下に位置する部分からは、大量の土器集中と農具、樹皮巻きといった木製品の集中が見られた。土器はそのほとんどが台付甕、甕である。それに加えて少数の高坏、器台を含む。壺を含まないのが特徴的である。木製品もこれらの土器とほぼ同一の層位から出土している。特に未成品と考えられる膝柄や樹皮巻きは、本遺跡における木製品の製作を物語るものである。

またこれらの上にも大量に土器が集中していた。やはり土器はそのほとんどが白付甕・甕で、それに加えて少数の高坏・器台・壺を含んでいる。これらとともに古代・中世段階と考えられる木製品類が出土しており、前述のように岸辺が一定の範囲にあったことを示すものと考えられる。

加えて第3号溝跡でも見られた溝底際に横木を流路と平行に据え、それを斜面に打ち込んだ杭で止めた施設が検出された。1.6mの比較的短い横木を中心とするものを施設1、南側の5.2mの横木を中心とするものを施設2と呼称する。

北側の施設1は北西-南東方向に1.5m間隔で打ち込まれた杭に1.6mの横木が組み合わせてあったものと考えられる。杭は概ね1mのものであった。

南側の施設2は、30-60cm間隔で、4単位の横木がほぼ水平に並べられている。直接これを留めるような杭は検出されていない。代表的な横木の長さは西から5.22m、2.58m、2.52m、0.78mである。

両施設の性格を示すような遺物は出土していないが、木製品73・74の籠や集中するその他の木製品との関係が考えられる。

#### 古墳時代前期の土器

次に出土土器について各説する。1-57は壺である。1-3の壺は、球形胴に、頸部から直立し、中段から外反する短めの口縁部が付くものである。全形が知れるものは1のみである。器肉が厚く、重量感がある。胴部は6段の粘土帯が積まれている。3はやはり器肉が厚く、丁寧な横位のヘラ磨きが施される。4・5は径が30cm近い大型のものである。口縁端部の外側、やや下位に断面三角形の粘土帯を貼付して、複合部を作り出すものである。6は大廓式の模倣品である。口縁部中段から二重口縁状に立ち上げ、断面三角形の粘土帯を貼付することにより大きな複合部を作り出すので、内面に段が見られ、端部内面に幅3cm前後の突帯

が貼付されている。複合部の外面には3本1単位で6箇所の棒状浮文が貼付されている。内外面とも調整は基本的に刷毛目である。粘土は在地のものである。7もやはり口縁端部の外側、やや下位に断面三角形の粘土帯を貼付して、複合部を作り出すものである。器面の傷みが著しく調整はほとんど見えない。8・9は二重口縁のもので、13もその可能性が高い。8の複合部外面に横位の、その他は縦位のヘラ磨きが施される。10-14は複合口縁のものである。口縁端部から外側に粘土帯を貼付することにより複合部を作り出すので、内面に緩い段が見られる。11の口縁部は長めである。14は胎土が緻密で重量感があり、丁寧に作られている。17は受口状の口縁部になるもので、外反する口縁部の上位を直立気味に立ち上げている。調整はヘラナデで、上位はヨコナデが加えられる。15・16・18は短い直口縁のもので、甕形の器形である。法量は中・小型である。外面にヘラ磨きが施される。

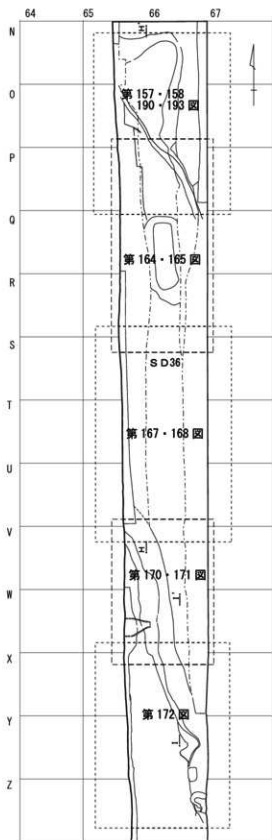
19-22は単口縁のものである。19・22は短めで外反し、20・21は長めで直線的である。19は端部の外周に若干粘土が足され、幅広い端部を作り出している。23は古ヶ谷式の壺の口縁部である。複合部の下端に浮文が貼付される。

24は端部を欠き、相当大型のものと考えられる。

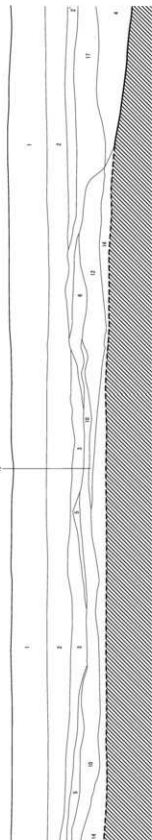
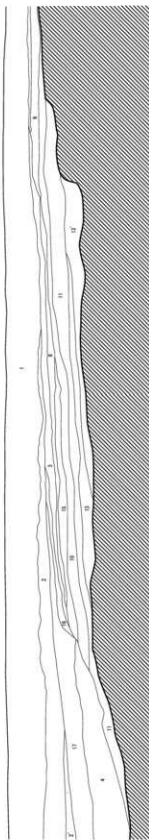
25-29は、頸部から胴部上半のものである。25は胴部横位のヘラ磨き後、頸部から縦位の刷毛目が施され、下端に木口状の工具により刻み目が押捺される。

30は球形胴で、内面はヘラナデにより平滑に仕上げられている。31は中型のもので、やや扁平な胴部から屈曲の強い頸部に至るものである。内面はヘラナデにより平滑に仕上げられている。底面は上げ底気味になっている。

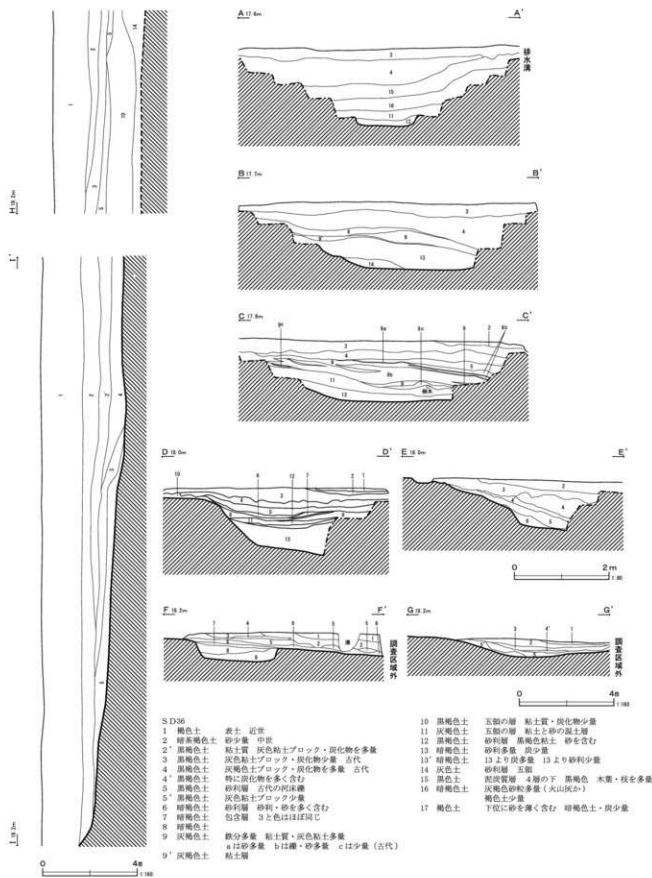
32-39は胴部下半から底部にかけてのものである。32は遺存している部分の最大径が43.0cmの極大型のものである。外面のヘラ磨きは細かく光沢



1/1



第155图 第36号沟迹 (1)



第156図 第36号清跡(2)

がある。33はやや長胴気味である。器内は薄いが器面に凹凸が目立ち、底部外周の調整も乱れており、あまり丁寧な仕上げとは言い難い。35は見込み部分に、内面に粘土が着せられている縞目が見えぬものである。刷毛目調整の見込み部分に粘土が着せられ、ヘラナデが施されているのがよく分かる。36はヘラ磨きが非常に密で、内面も平滑に整えられており、焼成も良く丁寧に作られている。39は内面に赤彩が施されるもので、壺ではなく、大きな鉢のようなものである可能性もある。

40～44は底部である。底部はいずれも突出する。37・40・43は底面に木葉痕が残るものである。42の底面にはヘラナデが施されている。41・44の底面は無調整である。非掲載の遺物には底部が大量にあり、おおよそ底径が3つに分けられ、規格化されているのが分かる。

45～47は壺の口縁部である。45は二重口縁で、段の部分にヘラ状工具による右方向からの刻み目が施される。46は複合口縁になると考えられるもので、5条1単位のヘラ状工具による縦位の沈線が施され、赤彩される。47は複合口縁で端部の外面に左方向からの刷毛目工具による押捺が施されている。弥生後期に遡る可能性がある。48～57は壺肩部から胴部中位にかけての破片である。48～55は縄文が施文される壺である。48は細縄文による単節L・R、R・Lの羽状縄文が施されるもので、下端を細い工具による沈線で区画されている。

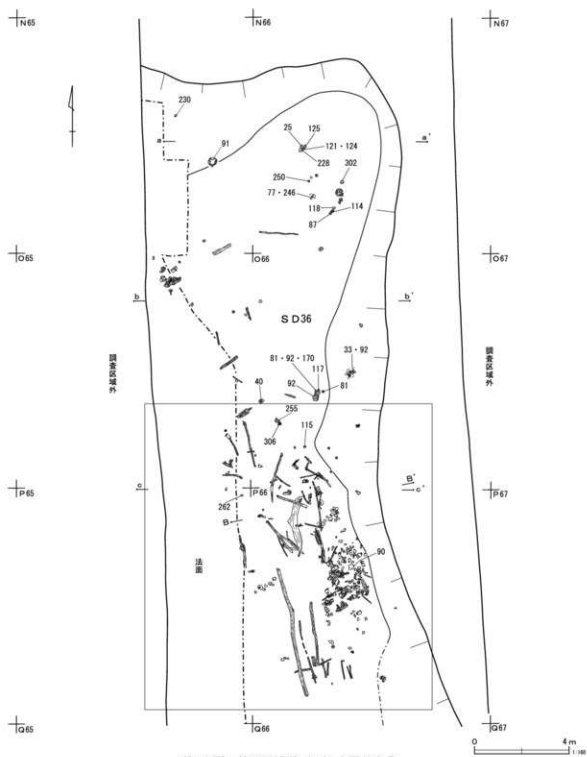
49・55は細縄文による単節R・L、L・Rの羽状縄文が施されるものである。55の縄文は捺糸である。

50～52は大塚式の搬入品の破片である。いずれも胎土に白色のバミスを多く含み石英、砂粒を含むものである。焼成は軟質で、色調は浅黄橙色を呈し、焼成は軟質である。50・51は単節L・R、S字状結節、単節R・L、S字状結節の羽状縄文の構成をとるものである。52はS字状結節の上に、竹管状の工具による円形の刺突が施されるものである。内面の調整は上位が指オサエ、下位が刷毛目

になっており、大塚式独特のものである。

53・54は節の太いもので、吉ヶ谷式、あるいは吉ヶ谷系の可能性が高い。53は単節L・Rの縄文が上下に2段、73は単節L・Rの縄文が3段施される。53の文様帯の間、54の文様の下位はヘラ磨きが施される。両者とも内面に煤が付着する。56は先の尖った工具により、斜めの文様が施される。57は刷毛目が羽状に施されるもので、この上に部分的にヘラ磨きを加えられている。58は広口壺である。頸部の屈曲は強い。

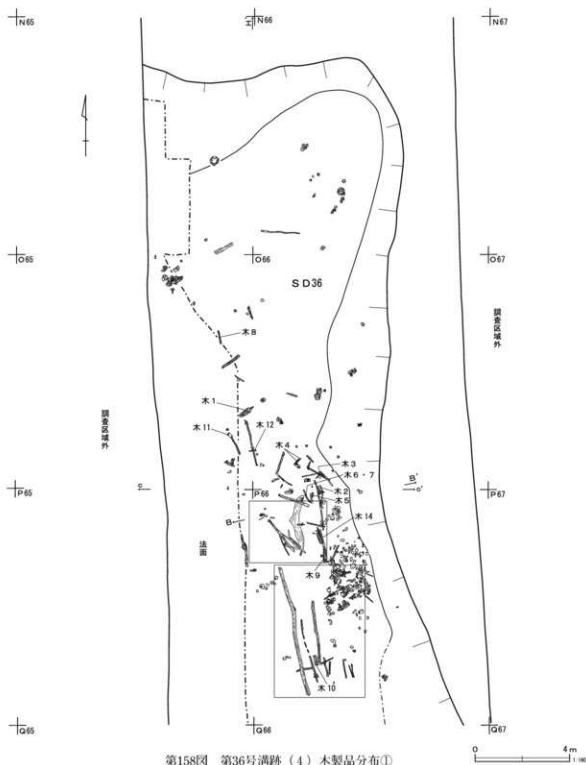
59～76は小型壺である。59・60は直線的で長い口縁部に球形胴のものである。口径が胴部最大径と等しいか大きくなるもので、器高も口縁部と胴部がほぼ等しい。60は口縁部の垂みが大きく、口が曲がっている。口唇部は面を持たず尖り気味に丸く取められている。ヘラ磨きはやや粗いが底面のほぼ直近まで磨いている。底面は無調整である。60は底部が分厚い。61～64は口縁部が短い球形胴のものである。いずれも口縁端部が外反して尖り気味になるものである。61・62は底部が大きく、63・64は小さめである。61は口縁部がやや肥厚し、複合口縁風になっている。61は平底だが丸底に近く、62は浅いドーナツ状になっている。63は器内が厚く丸みが強い。64は肩部にごく小さなボタン状の貼付が施されている。2箇所確認しているが、径が7mmのものと3mmのものがあり、定型化しているものではないようである。65～68は口縁部である。65は内筒気味に長く立ち上がるもので中に近いものと思われる。67は長く外反するもので、端部外周に面を持つ。細頸壺に近いものであろうか。65は甕に近い器形になると考えられる。69・70は端部を欠くものである。所謂瓢壺になる可能性が高い。69は器内が厚くやや大型で、70は器内が薄くやや小型になるものである。71・72は胴部上半の破片である。71は中位に外側から内側に径5mmの穿孔が施される。72は頸部の括れが強いものである。73～75は胴部である。73はやや大型で



第157図 第36号溝跡(3) 土器分布①

器内の厚いものである。全体に風化が進んでいる。74は丸底である。底面まで赤彩される。外面の風化が進み、剥落している部分が多い。76は口縁部の破片である。小型壺ではない可能性もあるが、厚さと推定される径から小型壺としたものである。

径5mmの穿孔が外側から施されている。77は台付埴である。埴としては頸部の屈曲が弱く、刷毛目が残り、成形、調整とも粗いものである。接合部は太く、ホゾ接合である。脚台部分は低平で、端部近くで急に器内が厚くなる。径1cmの大き目の穿



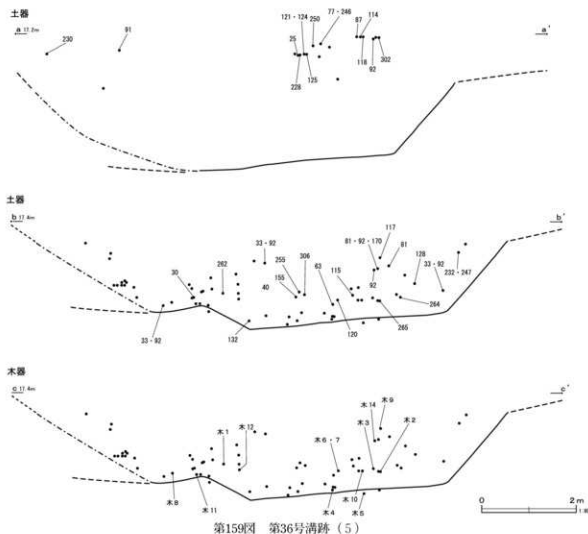
第158図 第36号遺跡(4) 木製品分布①

孔が外側から施されている。

78~135は台付甕である。大中小があり、更に大と中の間にもう一つの大きさがあると考えられる。口縁部はほとんどのものが丸く取められる。器形は球形胴にやや長く伸びる「く」の字状口縁

のもので、それに加えて胴部がやや長めになるものがある。脚台部との接合はホソ接合による。脚台部は、径に対して器高がやや低めの低平なものになっている。また、胴部の内面がヘラナデ、木口ナデによって非常に平滑に仕上げられているの





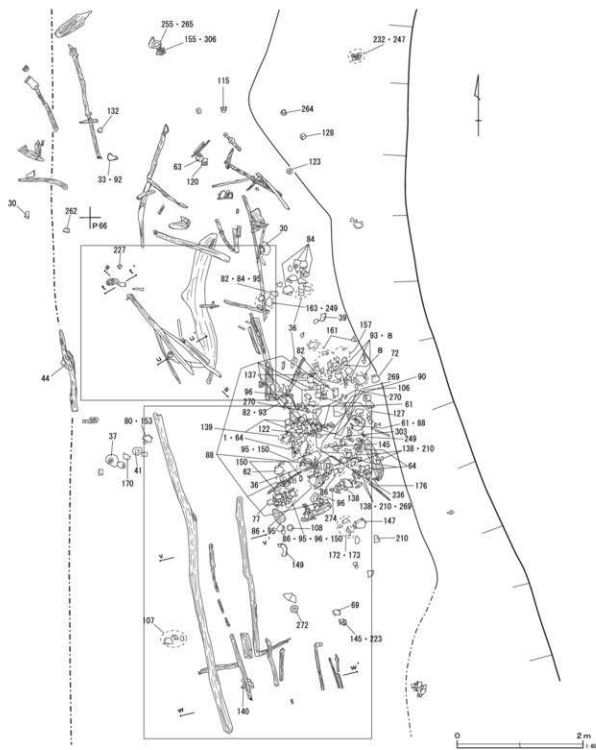
が特徴である。

欠損しているものが多く、全形の知れるものはわずかに4個体にとどまる。78は大型のもので、頭部の屈曲が鋭く、脚台部は大きめである。全体の調整は木コナデで、器面の痛みが激しく、全体に煤が付着する。79は小型のもので胴部に対して脚台部が大きく、脚台部のみ他の個体とほぼ同じ大きさである。80・81は胴部がやや長めのものである。80は縦方向の刷毛目を主体とし、脚台部は小さめである。81はホソ接合の部分で外れており、製作工程が良く分かるため別に図示した。出脛になる胴部から突出した脛の部分と、脛孔になる脚台部の各々に細かなヘラナデが施されている。

82～88は口縁部から脚台部の接合部までの様相が明らかかなものである。82・83は、口唇部に左方

向からの刷毛目工具による刻み目が施されるものである。83の胴部下段には、明瞭な接合単位の段が認められる。85は台付甕としては最も小型の部類の一つである。全体にヘラナデが施される。86は接合部の脛が外れている。刷毛目は横位の規則的なものである。87・88は逆に、脛の部分までが残っている。脛の外周にはナデが施されている。87の口縁部の刻み目は、左方向からのヘラ状工具によるものである。胴部内面には縦位の部分的なヘラ磨きが施されている。88の胴部下段には、明瞭な接合単位の開裂痕が認められる。

89～92は接合部の上位までの様相が知られるものである。外面の調整は、92が横位を中心とする以外、縦もしくは斜めの刷毛目である。93は作り、焼成が良好なもので、粘土も精選されている。

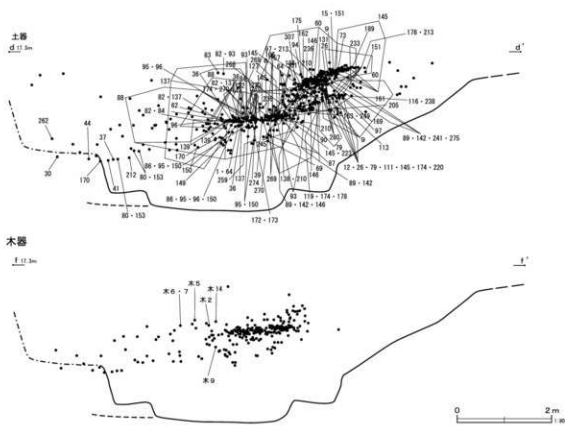
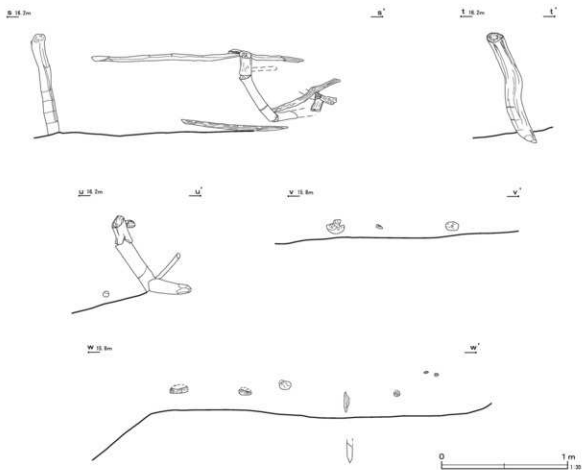


第160図 第36号溝跡(6)遺物分布拡大図①

外面の調整は木目の細かな単位までが拾えるような状態である。94は口縁部、脚台部端を欠くものである。胴部は縦長で縦方向の木口ナデが施されている。内面はヘラ磨き状で非常に平滑である。95~97は胴部の上位を欠くものである。95は下

位に一周粘土が剥落し、下地の刷毛目が見えている部分がある。97は胴のみが外れているもので、接合部の内面のナデ調整が見えている。

98~104は接合部の破片である。98・99は胴の部分の破片である。99は脚台部側がほとんど剥落



している。100は臍の部分のみである。全体にヘラナデによって凹凸を付け、脚台部との付きを良くするための工夫と考えられる。こうした破片類の存在は、本遺跡において土器製作を行っていた可能性を示している。101は臍が外れた状態である。102は大型のものである。蓋をしたままの状態の脚台部に、無理やり胴部を乗せて臍に入れたような状態で外面にバリ状の段差と脚台部側の内面に大きな粘土のみみ出しがみられる。104は胴部側から見ると臍の部分が大きく凹んでいる。大型の製品と考えられる。全面ヘラナデで調整され、器肉が薄く、やや特異な感を受ける。

105～132は脚台部である。大小が認められるが、概ね径に対して器高が低いもので、やや新しい様相を示している。

いずれもホソ接合で、接合部に剥離が見られるものも多く見られる。110は脚台部内面の凹凸が著しい。112は外面にヘラ磨きが若干施されている。115は臍を嵌め込んだ後に粘土を充填しており、脚台部側から見るとその部分が大きく盛り上がって見える。117は接合部外面に現状で見られる上に一枚貼付されていたようで、その剥離痕が見られる。123は胴部側がきれいに剥離している。端部は内面に若干折り返されている。125は臍の部分が抜け落ち下地の刷毛目が見えている。132は小型のもので、接合部外周に貼付されている粘土が剥離して下地の刷毛目が見えている。

133～135はS字状口縁台付甕である。いずれも口縁部のみの破片である。単純に外反するのみで模様が崩れている。133・135は下半のヨコナデの下地に斜めの刷毛目が見られる。133はその上に胴部の刷毛目が施される。

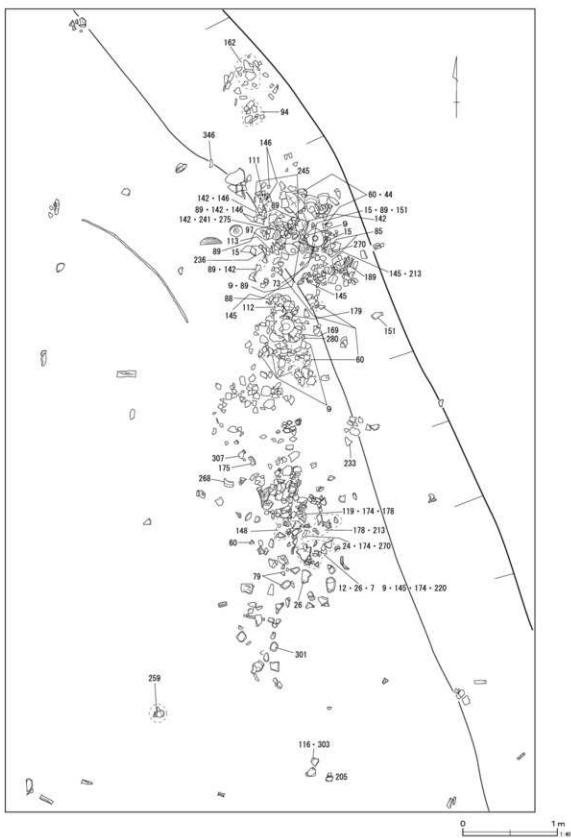
136～138は全形の知れる甕である。136・137は口縁部、胴部は台付甕同様で、球形臍に頸部が「く」の字状、直線的な口縁部のものである。いずれも内面は丁寧に平滑に仕上げられている。136は底部外周がヘラケズリに近いヘラナデ、底

面は無調整である。焼成が非常に良く、硬質である。137は底部が分厚く、底面はヘラナデが施される。136は、持ち上げると手に煤が付着するほど分厚く煤が付着するものである。138は前二者よりは小さく、壺に近いものである。全体にヘラナデが施されている。やはり内面は非常に平滑に仕上げられている。

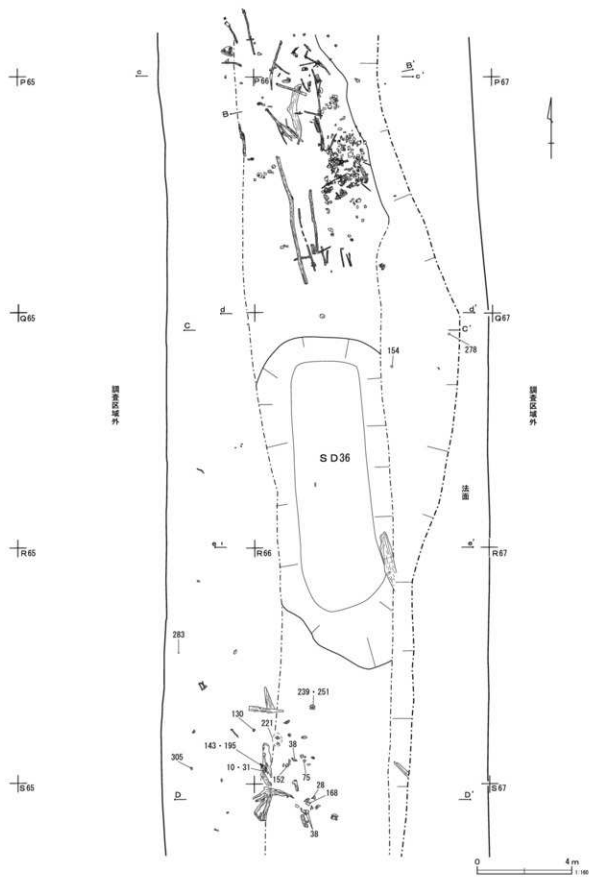
139～170は甕の胴部上半である。口縁部は短く、直線的なものと端部が更に外反するものがある。外面は斜め方向の刷毛目、内面は横位の刷毛目後横ナデが施される。端部は丸く収められている。頸部は基本的に「く」の字に屈曲し、内面に稜を持つ。胴部は球形臍、もしくはそれよりやや長いものと考えられる。外面の調整はほとんどのものが縦位、もしくは斜位の刷毛目もしくはヘラナデである。152はタタキが施されている。内面の調整はヘラナデもしくは木コナデで、上位に指頭圧痕が残るものがある。非常に平滑に仕上げられており、特徴的である。

140は端部のみが面を持つもので、他地域の土器の模倣品の可能性がある。端部に面取りがあるのみで、その他は他の甕と同様であり系譜は不明である。152の胴部は斜位の刷毛目後幅2cm前後の単位のタタキが施される。下位は更にその上にケズリに近い木コナデが施されている。160・166の頸部内面は接合痕が段になっている。162の外面のヘラナデは単位が細く、ヘラ磨き状になっている。164・167は端部に面を持つものである。168は口縁部が長いもので外面にはヘラナデが施される。170は器肉が厚く、口縁部が長いものである。頸部の屈曲も強い。端部には下から上方向に棒状の工具による押捺が施されている。

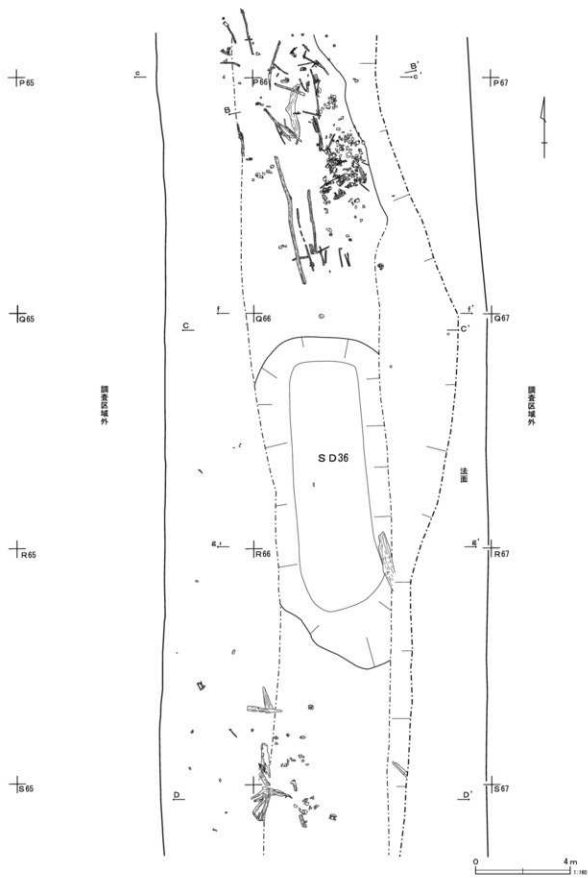
171～180は口縁部である。器形、調整等は前段と同様である。171～173は短く直線的な口縁部端部に、左方向からの刷毛目工具による押捺が施されている。175はやや小型で器肉が分厚い。内面に開裂痕が多く、それをナデつけるように細かく刷



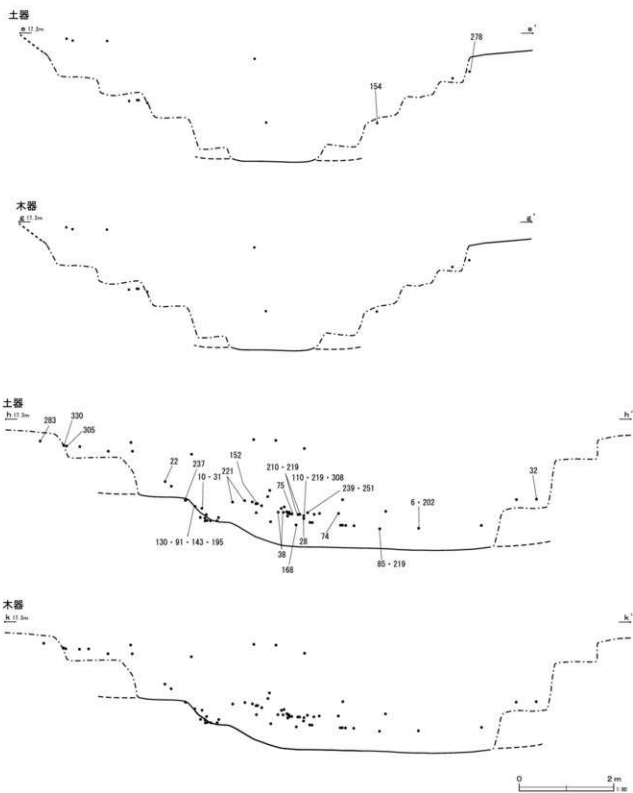
第163图 第36号沟跡(9)遺物分布拡大図④



第164图 第36号清跡 (10) 土器分布②

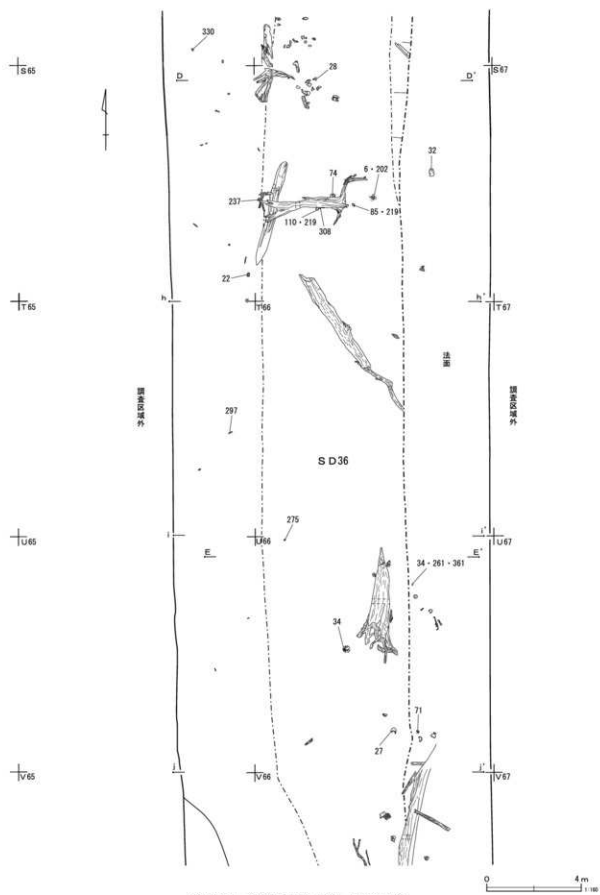


第165图 第36号遗迹 (11) 木製品分布②

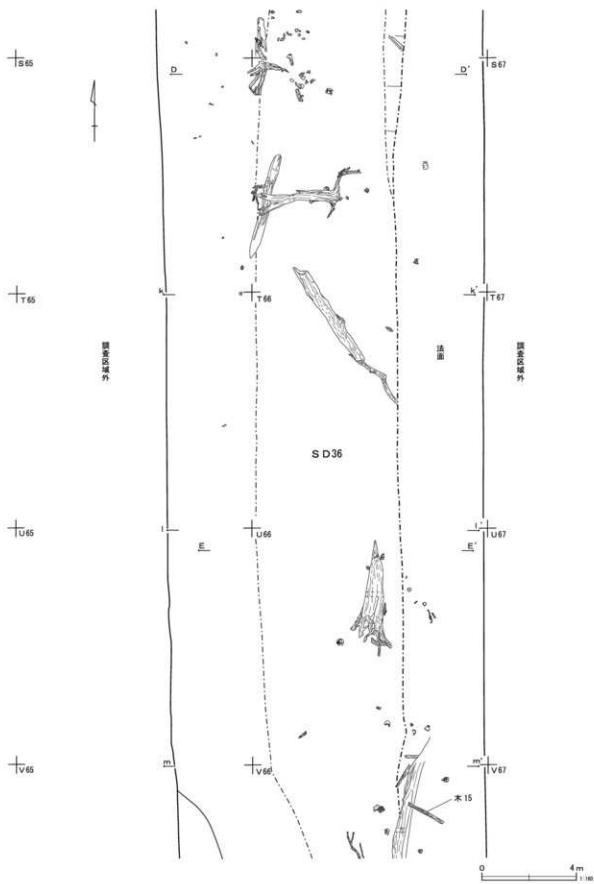


第166图 第36号沟跡 (12)

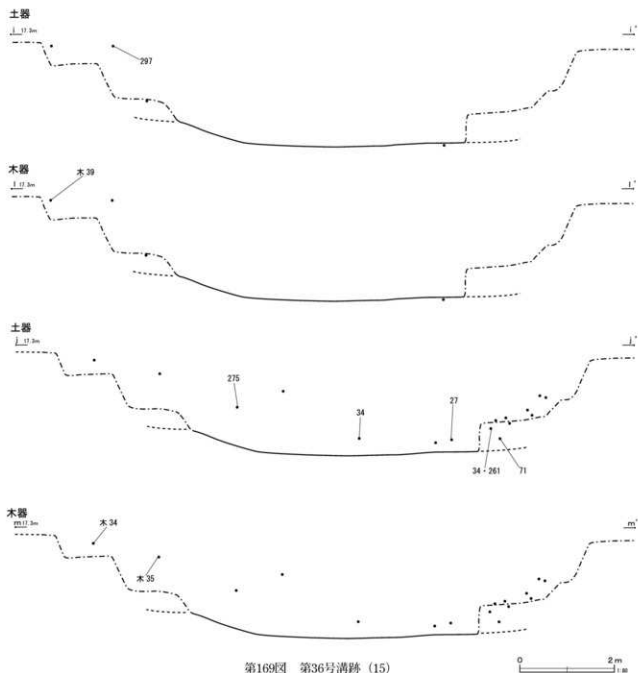




第167图 第36号清跡(13) 土器分布③



第168图 第36号沟迹 (14) 木製品分布③



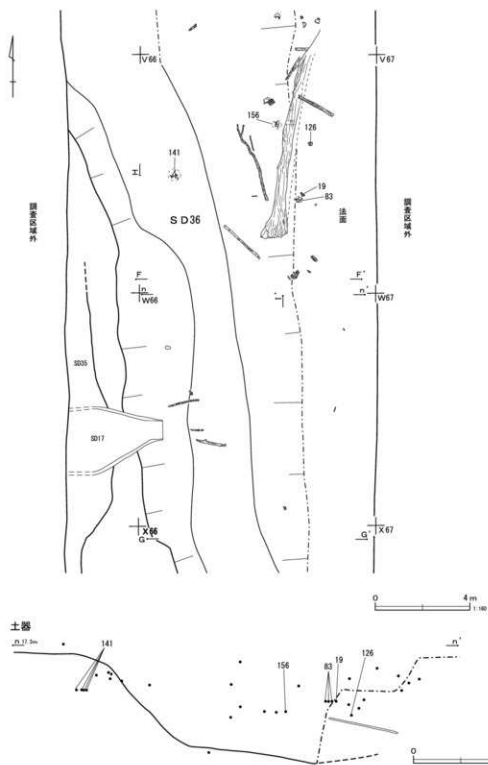
第169図 第36号溝跡 (15)

毛目を入れている。177は外面にヘラ磨きが施され、端部に広めの面を持つ。181・183は小型のものである。182は中段、頸部に面を持ち、内面に横位のヘラ磨きが施されるもので、壺の可能性もある。184は受口状で端部は内傾する面を持ち、非常に丁寧に作られている。所謂「5」の字状口縁の模倣品である。185は小型で更に薄く、同様の模倣品と考えられる。

186～191は口縁部で、端部に刻み目が施される

ものである。186・188は面を持つものである。186・189は刷毛目工具により右下から、187はヘラ状工具により右側から、188は刷毛目工具により左下から、190は棒状の工具により左下から、191はヘラ状工具により左側から刻み目が施される。192・193は粗い縄文が施されるもので、吉ヶ谷系と考えられ、単節RLが2段以上施される。

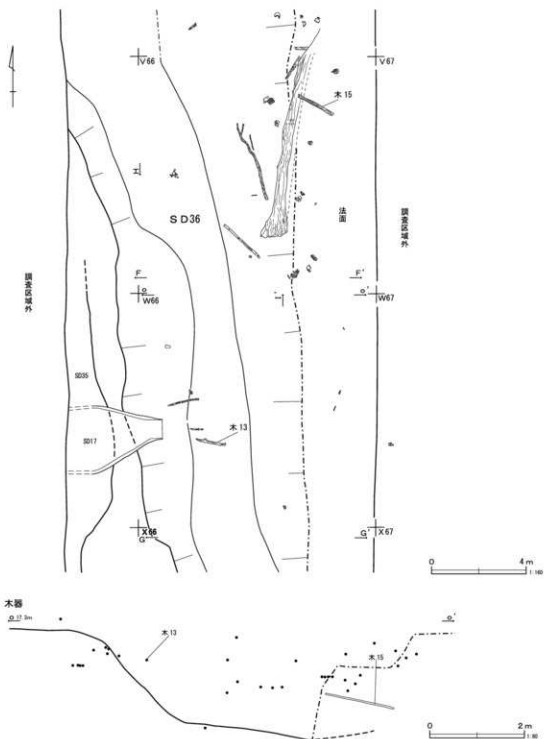
194～208は弥生時代後期と考えられるものである。頸部から肩部にかけて櫛描文が施される。



第170図 第36号溝跡 (16) 土器分布④

194～197は籐状文が施されるものである。194は6条以上、195は4条が2段、196は7条、197は4条以上が1単位の右回りのものである。文様以外の部分は、195・197が刷毛目後ヘラナデ、それ以外はヘラナデである。198～203・205は上位に籐状文、下位に波状文が施されるものである。

198は4条1単位、右回りのもので、下位の波状文は7段施文されている。上→下の順に施文される。199は4条1単位、右回りのもので、上位の籐状文、下位の波状文とも2段施される。200は上位の籐状文が2段以上、下位の波状文が1段施される。8条1単位、右回りのものである。201

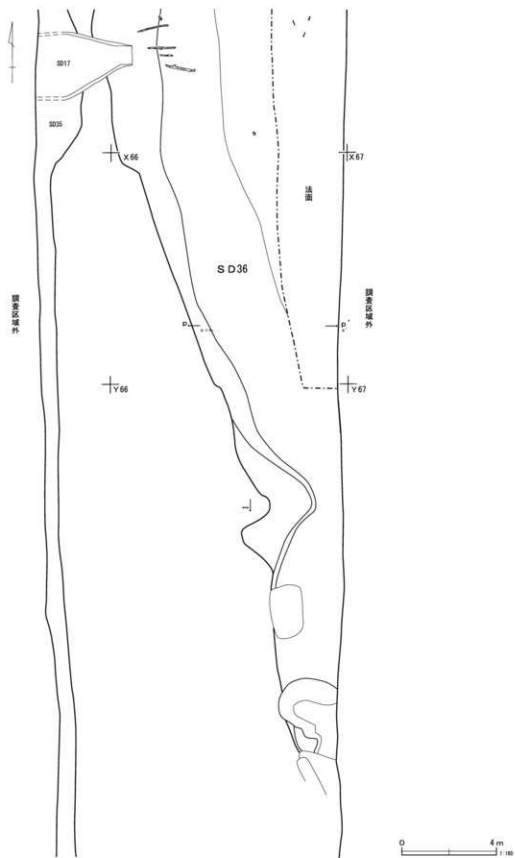


第171図 第36号遺跡 (17) 木製品分布④

は簾状文、波状文とも6条1単位、右回りのものである。202・203は簾状文、波状文とも5条1単位、右回りのものである。205は上位の簾状文が7条、下位の波状文は3条のみしか確認できない。204・206～208は波状文のみが施されるものであ

る。204が4条1単位のを3段以上、206・207が3条1単位のを2段以上、208は振幅、スパンの長いもので1条のみしか確認できない。

209～243は高坏である。209～222は坏部である。大きく直線的に開く坏部のものと、内灣するもの



木器

距 17.3m



第172河 第36号沟跡 (18) 遺物分布

がある。前者は更に大中小に分けられる。209～212は大型のものである。209は端部が内傾し、4条の凹線状になっている。211は端部が外側に広げられておき、やはり内傾する面を持つ。213・216は中型のものである。213は刷毛目後縦位のヘラ磨きが施されるもので、磨きは粗い。214・215・217・218・220は小型のものである。217は口縁部が立ち気味である。調整は刷毛目とヘラナデで、他の個体とは印象が異なる。218は内面にごく細い棒状工具により施文された細かなヘラ磨きが見込み部分に施される。胴接合の胴の部分で欠失する。220・222は更に小さく、坏部の形態は異なるが、小型高坏に近いものと考えられる。220の柱状部の内面には絞りが認められる。219は内傾するウィングラス状の坏部である。口縁部外面には、装飾的に4段の粘土組織み上げ痕が認められる。吉ヶ谷系と考えられる。内面に煤が付着している。

221・223～227は坏部と柱状部の接合部である。いずれもホソ接合である。221は柱状部の内面が剥離し、粘土を充填していた可能性がある。224は、坏部側から胴に挿入した粘土が大きく盛り上がっている。器受部と脚部の粘土が異なり、器受部は焼成が良く、硬質だが、脚部は溶けている。225は太い柱状になっており異質で、他系統の模倣品である可能性がある。接合部外面が剥離しており、下地の刷毛目が見えている状態である。227は透孔が上半のみだが6箇所認められるものである。焼成が良く、硬質である。

228～239は脚部である。直線的で「ハ」の字状のものと裾が大きく開くものがある。229は横位の密なヘラ磨きが施されるものである。230～232、236～239は3孔の透孔が開けられている。穿孔は径1cm程度で外側からである。233・234は裾部の破片である。233は器面が荒れており、台付甕のような器肌である。234は小型である。235は裾部の径が4cmほどでミニチュアにしても良い個体で

ある。236～239は、裾が大きく開くものである。236は坏部と脚部がきれいに外れている。238は特に大きく脚部が開き、小型高坏の可能性が高い。239は小型高坏で、外面に所謂バレス文様が施されている。ハの字状の刷毛目工具による刺突文と平行沈線が交互に配される。沈線は外側が5条、内側が7条である。破断面が磨耗しており、あるいは道具として再利用されたのであろうか。

240・241はホソ接合の胴の部分である。外面が多角形になるように調整されている。内外面とも風化しており、ナデのみが認識できる。

242は坏部の破片である。209同様に端部が内傾し、3条の凹線状になっている。非常に丁寧に磨かれ、光沢があり、硬質である。243は外面にヘラ状工具により放射状の文様が施されるものである。

244～254は器台である。いずれもホソ接合である。246・250を除いて、浅い直線的な器受部を持つものである。脚部はハの字に開き、端部は広がらない。251は大型の可能性が高い。244は風化が著しく調整は不明である。246は器受部の口縁部の部分は横位のヘラ磨き、それ以外は斜めのヘラ磨きが施される。247の透穴は上下に配されており、千鳥状になっている。250は口縁部と体部が明瞭なものである。254は口縁部と体部の境目の段の部分にヘラ状工具による刻み目が施されている。

255～267は鉢である。255～257は、扁平な体部に短い口縁部が付くものである。257は所謂屈曲口縁鉢である。255は歪みが著しく、上から見ると楕円形になっている。256・257は非常に細かな横位のヘラ磨きが施されるもので、光沢があり、赤彩される。焼成は良好で硬質である。258は小型のものである。風化が進み調整は不明瞭である。259は口縁部が長いもので、中位に段が付けられている。風化が進み調整は不明瞭である。260は体部がやや直立するもので、器形としては258と

同様である。器内は薄い。262・263・265は体部、口縁部とも大きく開くものである。265はやや大型で丁寧に作られている。266も一面に細かなヘラ磨きが施されるもので、硬質である。261・264・267は頸部のないものである。261は口縁端面が内傾している。264は刷毛目調整で底部がやや突出している。267は口縁端面に薄いヘラ状工具により左方向から刻み目が施される。

268～271は甕で、いずれも単孔である。268・270は複合口縁である。268は複合部外面に指頭痕が目立つ。体部も幅の広いヘラ磨きである。269は端部のみ折り返すものである。体部の調整はヘラ磨きである。

272は蓋である。掴み部が太い棒状になっている。

273～281はミニチュアである。273は体部の破片で、ヘラ磨きが施される。下端に外側から径3mmの穿孔が施される。274・275・277・279は壺形のもので、274は簡略化された薄い複合口縁になっている。外面は刷毛目、内面はヘラナデが施される。275の外面は木口ナデ後ナデが加えられる。内面は指ナデである。277は体部は横位のヘラ磨き、内面はヘラナデである。298は風化が著しいが内外面ともヘラナデと考えられる。

276・279・280は鉢形のものである。276は外面は指ナデだが、内面にヘラ磨きが施される。279は丁寧な作りで、外面ヘラナデ後磨かれている可能性がある。外面は赤彩される。280は手捏ねで指ナデのみによって調整される。

281は台付甕である。外面は刷毛目後ナデが加えられている。内面はナデである。

282は小破片のため確実ではないが、手埴りと考えられるものである。鉢部の口縁部の破片である。かなり風化しており、調整は不明である。

283～294は土鐘である。法量、胎土、残存率、色調、重量は観察表に示した。口径の欄に長さ、器高の欄に孔径を示した。いずれもかなり風化し

ており、ナデ調整と考えられるがほとんど見えない。283～287、289～294は第213図の浮子と伴出しているものである。第198図に示したように両者でセットとなっており、一つの網を廃棄した可能性が考えられる。孔径が0.3～0.4cmで、長さ3～4cm、重量も7.9～10.5gとまとまっており、同時製作と使用が考えられる。

288は大型、286は土玉である。

296は貝塚穴痕泥岩である。長さ2.9cm、幅1.9cm、厚さ1.8cm、重量4.0gで、にぶい橙色である。

297・298は砥石である。297はよく使い込まれており、四面全てが使用面である。自然面は側面のみである。長さ17.0cm、幅2.9cm、厚さ2.8cm、重量241.09gを測る。凝灰岩製である。表面全体に酸化鉄が付着する。色調は灰白色である。298はよく使い込まれており、刃痕がある部分は全て使用面である。自然面は側面が一面と下端のみである。長さ19.3cm、幅4.4cm、厚さ4.8cm、重量490.0gを測る。凝灰岩製である。表面全体に酸化鉄が付着し、にぶい赤褐色(5YR5/4)を呈しているが、本来は灰白色(10Y8/1)である。

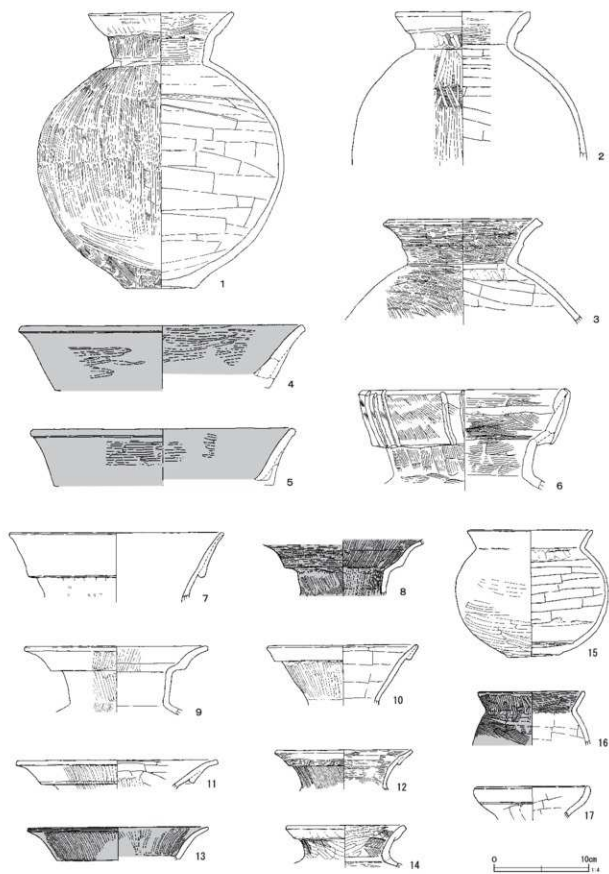
#### 古墳時代中・後期の土器 (第191・203図)

P-66グリッドより北側の岸は前期の入り江状の形状から埋没が進み、直線的な岸の形状になっている(第190図)。この岸に沿って古墳時代中・後期の遺物が出土している。299～314は古墳時代中・後期の和泉式、鬼高式土器である。概ね高環は和泉式の前弁、鉢・椀類は後半、杯・甕類は鬼高式に当たる。いずれも上層からの出土である。

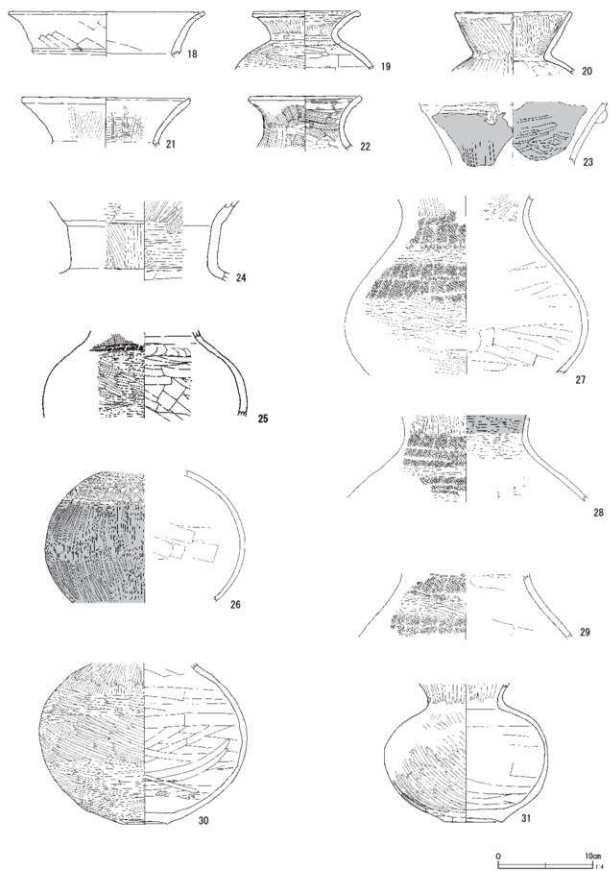
299・300は和泉式の杯である。299は内罅するもので、外面はヘラケズリ、内面は横位のヘラ磨きが施される。300は径が大きく、内罅気味に開き、内外面にヘラナデが施される。301・302は椀で体部が厚く、外面はヘラナデ後横位のヘラ磨きが施される。301は器面の痛みが激しく、ヘラ磨きがほとんど見えない。

303は同一個体と考えられる杯と脚部だが、

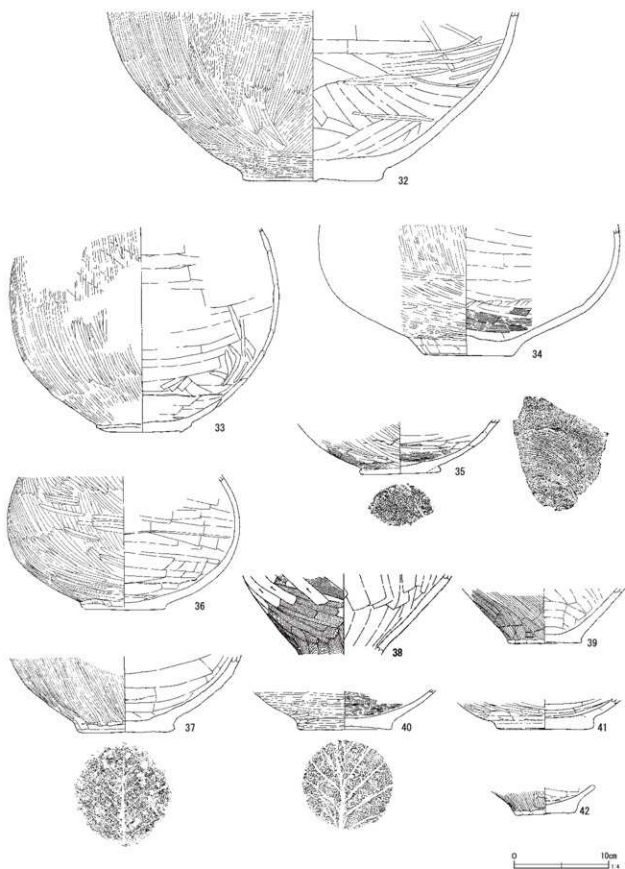




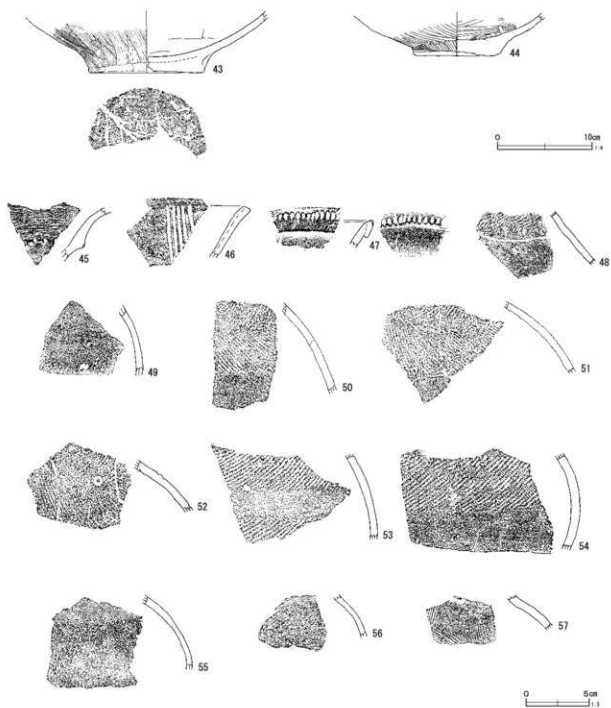
第173图 第36号满桥出土物(1)



第174图 第36号满跡出土遺物(2)



第175图 第36号清跨出土遗物(3)



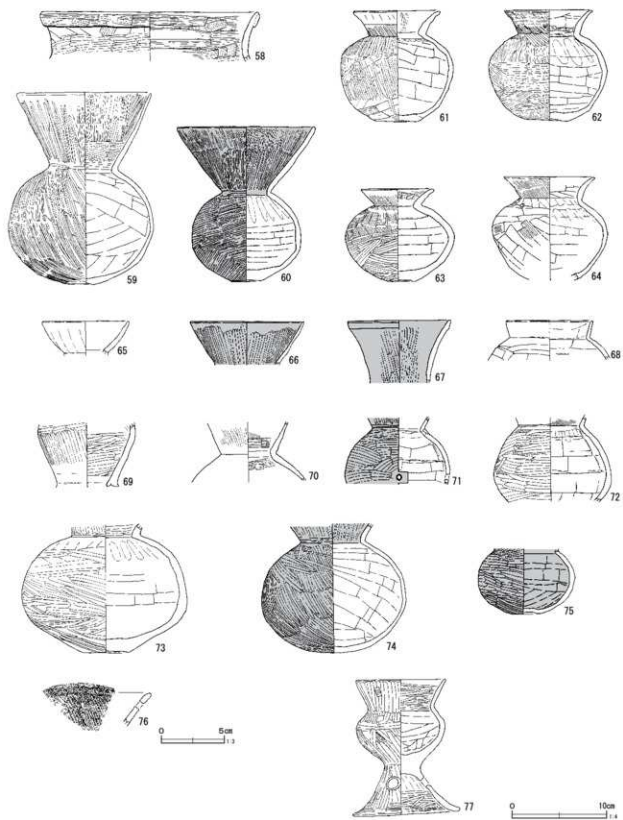
第176図 第36号溝跡出土遺物（4）

接点が無いため分けて実測したものである。大きく開く坏部に有段の脚部を持つもので相当の大型品になるものと思われる。坏部の調整はヘラナデ、脚部の調整はヘラ磨きである。脚部の内面にはヘラケズリが施されている。内外面赤彩される。

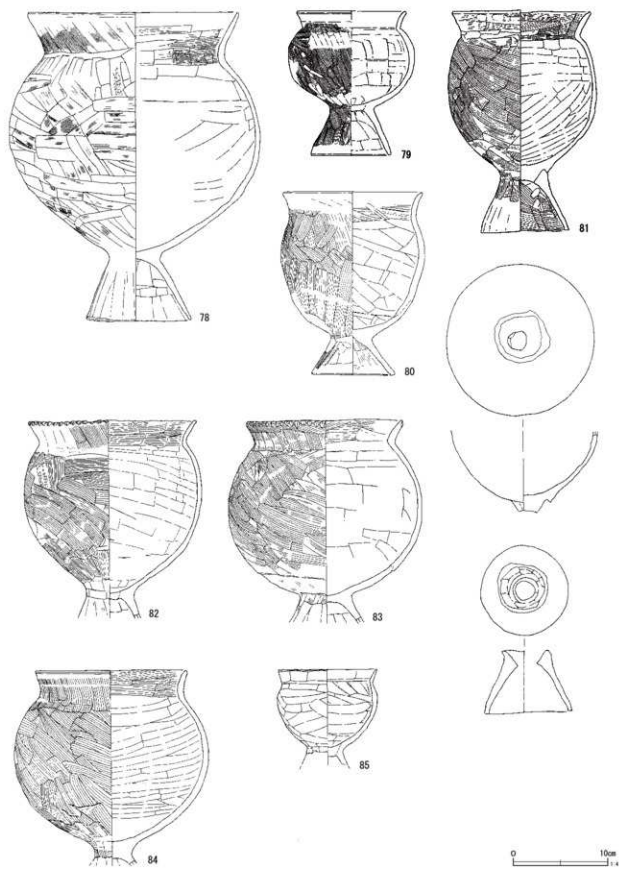
304～308は高坏の脚部である。304は内面に顕

著に絞り目が認められる。305は上半が中実のもので、内面の下半に刷毛目が施される。細身で前期に遡る可能性がある。306～308は中膨らみのもので、内面に粘土の積み上げ痕が顕著に見られ、縦方向の指ナデが施される。

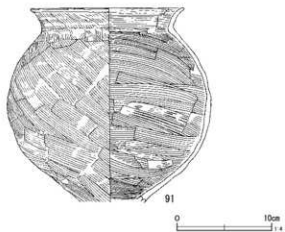
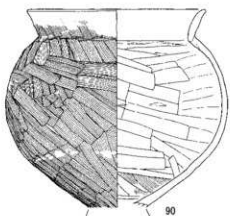
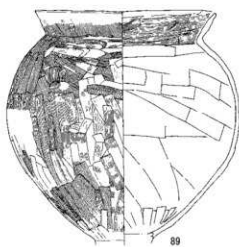
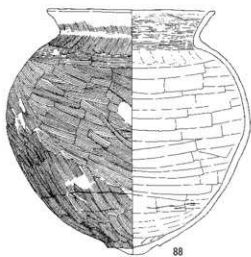
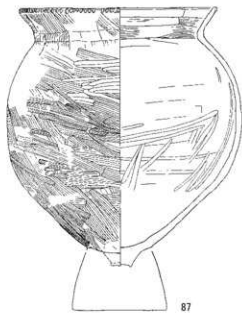
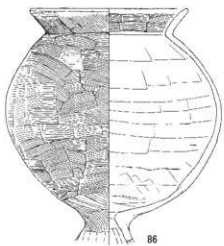
309・310は鬼高式の長甕である。口縁部は横ナ



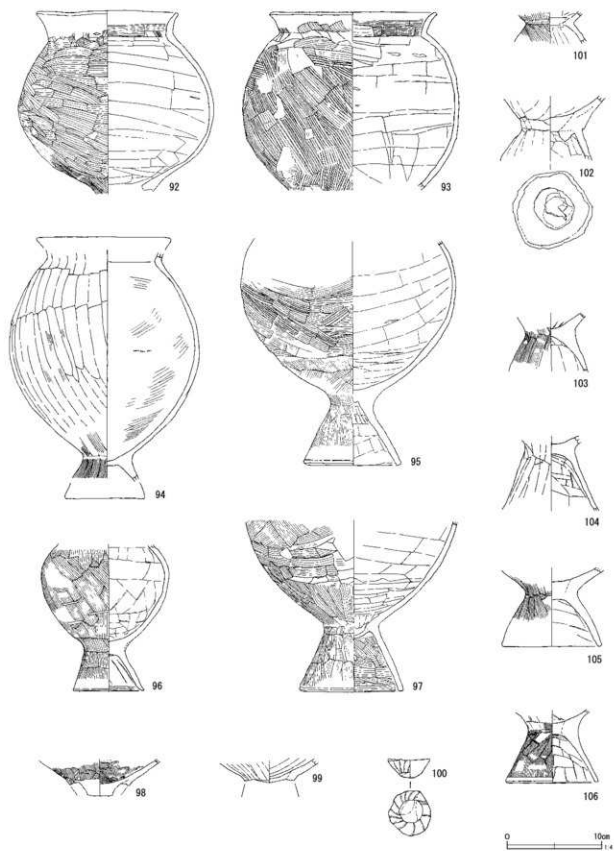
第177图 第36号清涧出土物(5)



第178图 第36号满踪出土遗物(6)

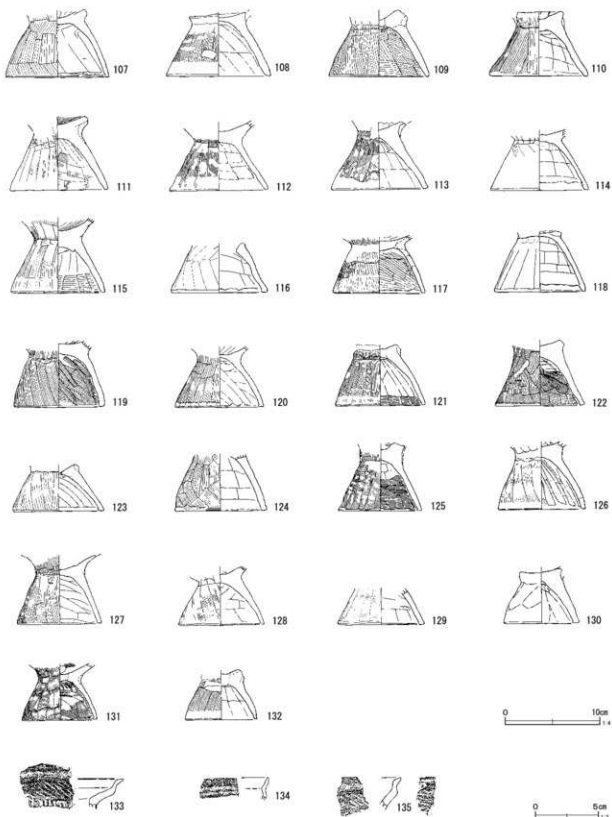


第179图 第36号清跨出土物(7)

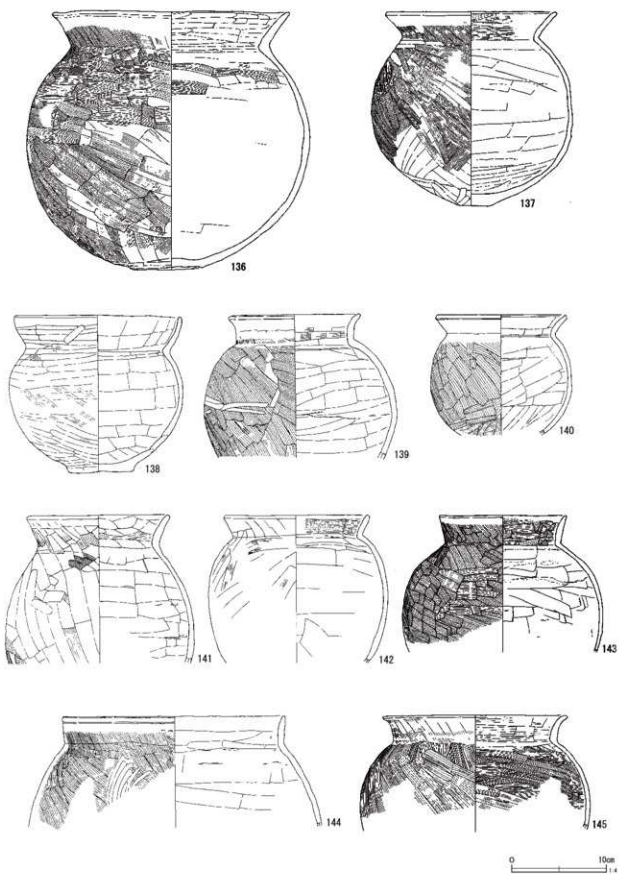


第180图 第36号满踪出土遗物(8)

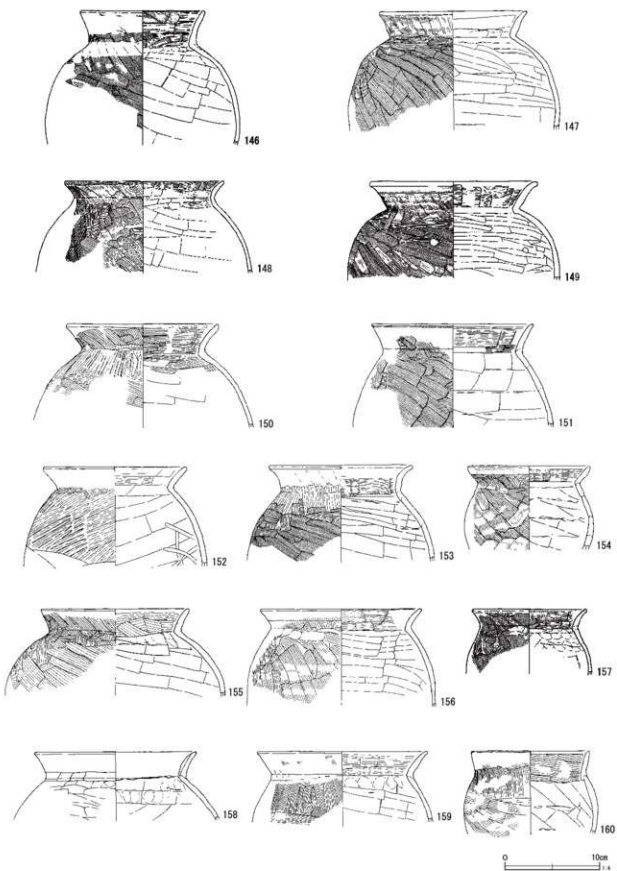




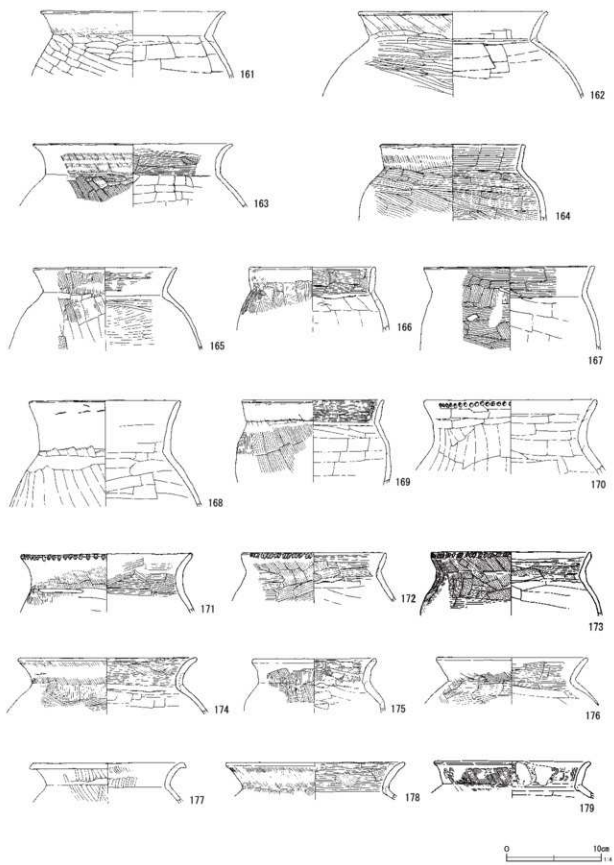
第181图 第36号清涧出土物(9)



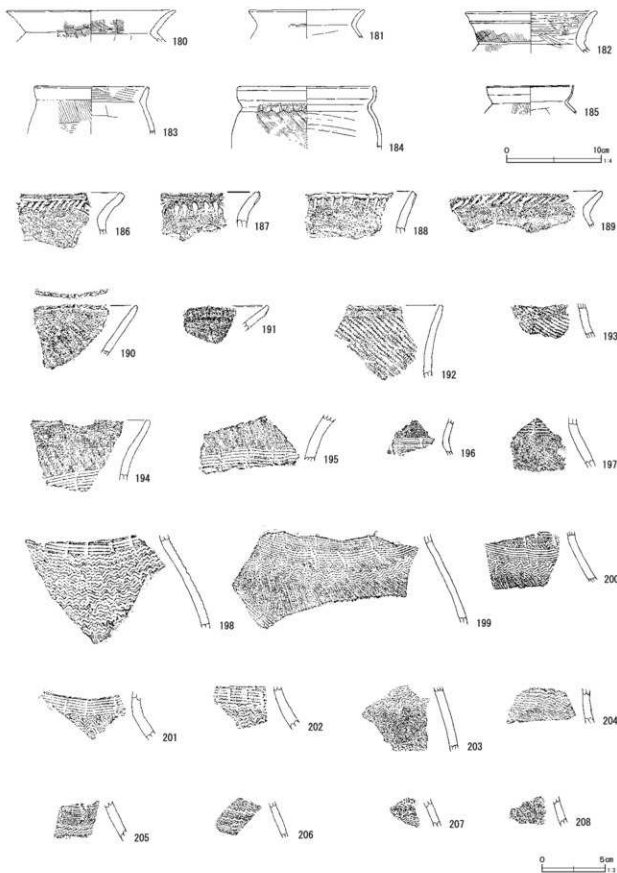
第182图 第36号满踪出土遗物 (10)



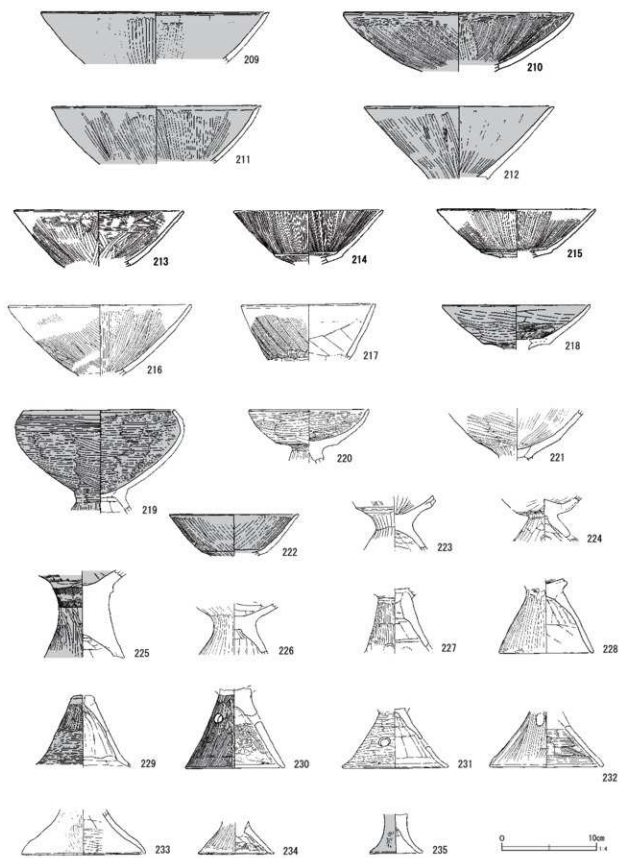
第183团 第36号满踏出土物 (11)



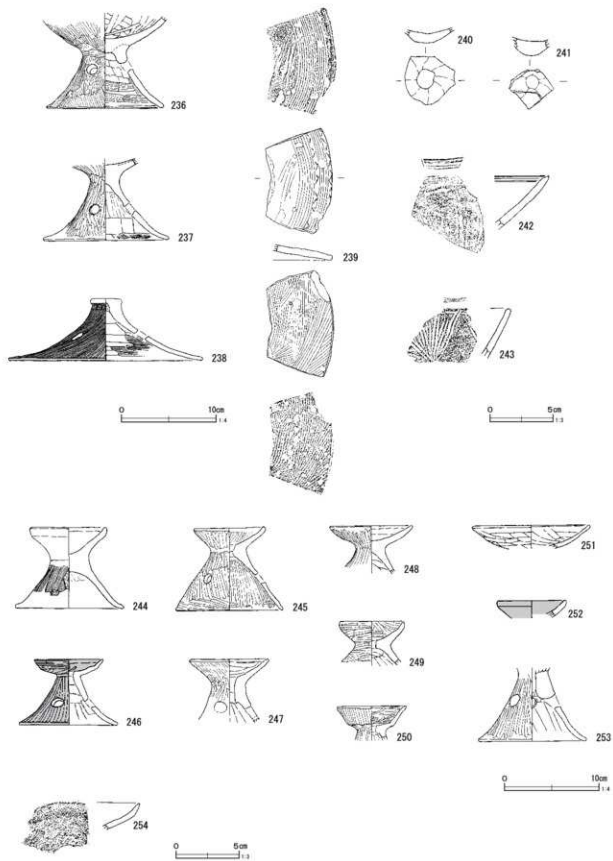
第184图 第36号满跡出土遗物 (12)



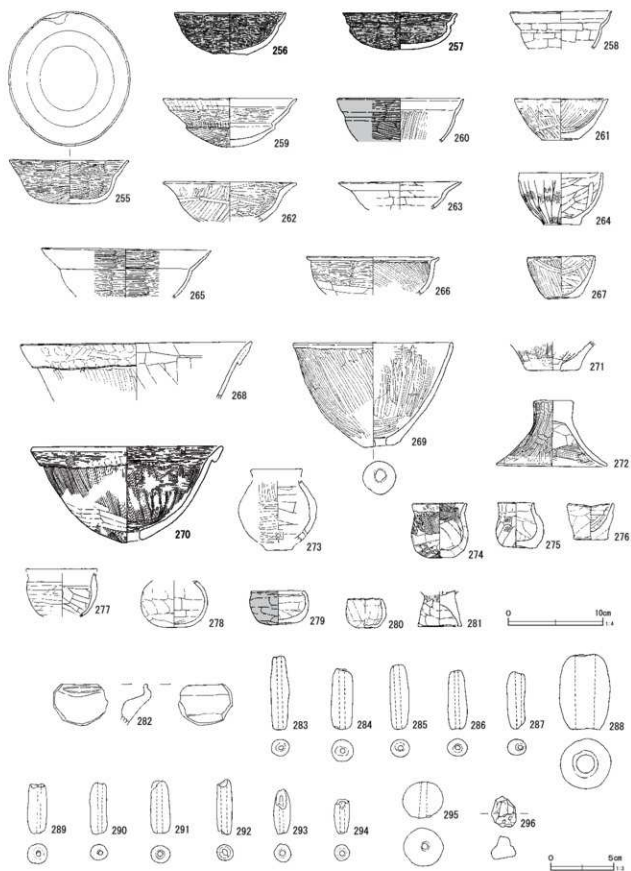
第185团 第36号满坑出土物 (13)



第186图 第36号满踪出土遗物 (14)

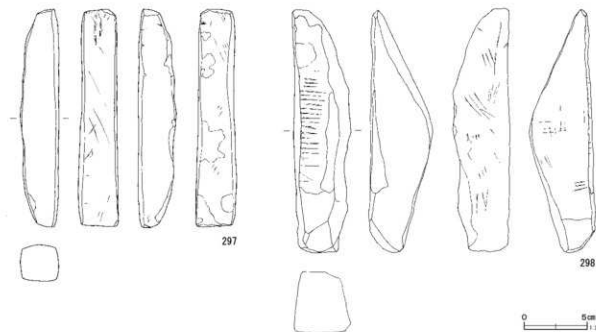


第187图 第36号商坑出土物(15)



第188图 第36号满踪出土遗物 (16)





第189図 第36号溝跡出土遺物(17)

デ、胴部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデが施される。309は焼成が良く、硬質である。

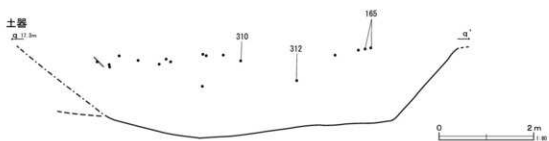
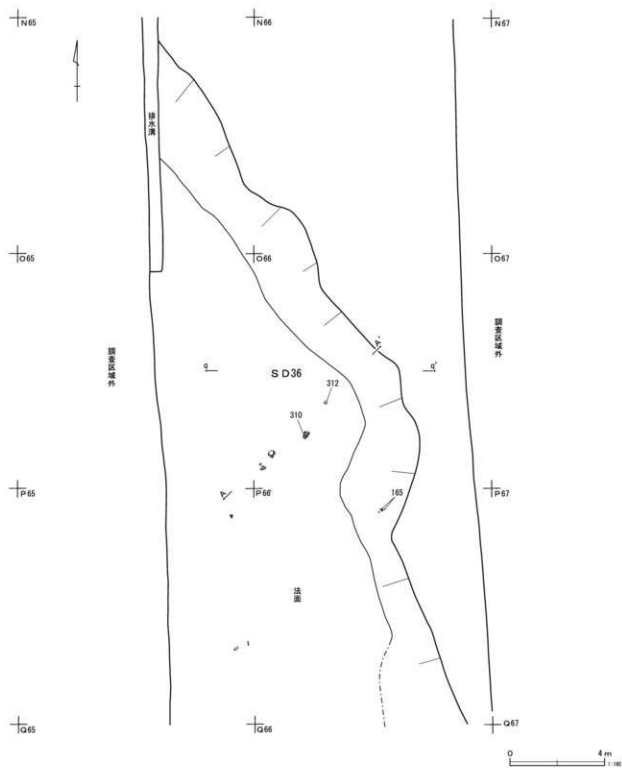
311は比企型坏の坏身模倣坏である。全面が赤彩され、底面に木炭痕が残る。ヘラケズリは不明瞭である。312～314は比企型坏である。312は口唇部に沈線が認められないもので、外面口縁部、内面が赤彩される。外面は器面の風化が著しい。313・314は口唇部に沈線が入るもので、外面口縁部、内面が赤彩される。313の胎土には白色針状物質が含まれ、粒子がやや粗い。314は白色針状物質を含まず、硬質である。

309～311は6世紀の初葉、312は6世紀の末から7世紀の初葉、313・314は7世紀第2四半期から中葉のものである。

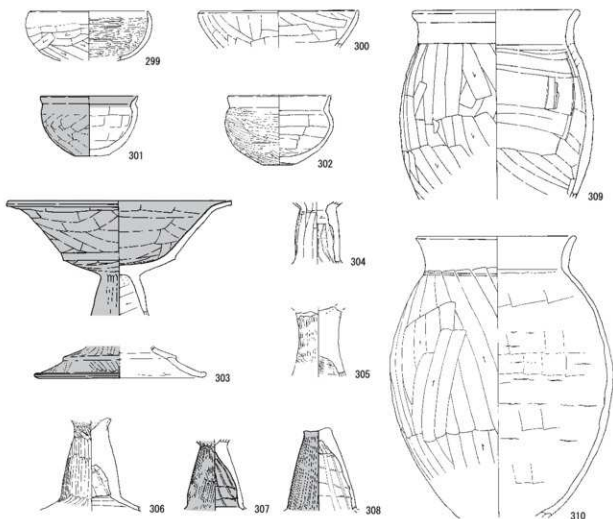
#### 奈良・平安時代以降の土器・鉄器(第203～207図)

第203図315～320、322～329は須恵器坏で、南比企産である。321はロクロ土師器か。323以外は全て底部回転糸切り後無調整である。315～317は口径12cm前後で深身の一群である。法量・器形共に酷似する。いずれも使用痕が殆ど認められず、灰化した火障痕(炭状繊維)がそのまま残る点で

も共通する。ほぼ完形品。同一窯で生産された製品の可能性が高い。318も使用痕はあまり顕著ではない。底部両面に墨痕がある。「二」にも見えるが文字としてよいか不明瞭である。319はやや浅身の坏。内面を中心に使用によると思われる摩滅が認められる。完形品。320も口唇部と内面見込み部が若干摩滅している。完形品。321は口径11.1cmとやや小振りのロクロ土師器(?)坏。底部は小さくやや突出気味で、回転糸切り後無調整。器内は灰色に還元するが、器表面は橙褐色を呈する。白色針状物質は含まれない。体部側面に墨書「大□(門カ)」が記されている。内面と口縁部外面の片側に黒色の変色部(油煙?)が認められる。322の坏は第1号祭祀跡出土。灰化した火障(繊維)痕が残り、315～317ほどではないが、摩滅痕は弱い。底部外面に「弓」の墨書が記されている。完形品。323は口径12.8cmと他の坏よりも一回り大きく、重量感がある。底部は回転糸切り後手持ちヘラケズリ調整で、他の坏よりも明らかに古相である。底部外面にはヘラ記号と「至」の墨書が記される。体部側面にも墨痕が残る。鳩山編年H III



第190图 第36号满清古坟後期遺物分布



第191図 第36号溝跡出土遺物 (18)

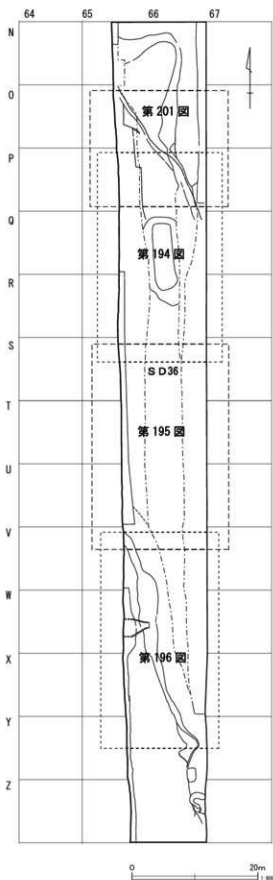
期～HⅣ期か。324～329は須恵器坏破片。324・325・327はあまり摩滅していない。330・331はロクロ土師器無台碗。器壁は厚く、底部は回転糸切りされ、外面には黒斑がある。胎土は粗く、角閃石や礫の混入が目立ち、白色針状物質は見えない。

332は須恵器無台碗である。第1号祭祀跡出土。口縁部を一部欠く。摩滅痕はあまりない。底部は回転糸切り後、屈辺部回転ヘラケズリ調整される。正位の状態で出土し、内面見込み部に「神矢」の墨書が記されていた。南比企産。

333・334は須恵器蓋。いずれも南比企産でつまみを欠く。

335～340は須恵器無台碗。335は底部回転ヘラ

ケズリ後屈辺部回転ヘラケズリ調整。内面のほぼ全面と口唇部・外面にかけては漆が付着していた。漆皮膜は基本的には黒色を呈するが、部分的に茶褐色を示す箇所がみられた。また、内面見込み部とその屈辺には刷毛痕が明瞭に残存しており、漆塗布作業のパレットとして使用されたことを具体的に示している。南比企産。第1号祭祀跡から数片に割れた状態で出土した。336は須恵器無台碗。深碗で、口縁部は外反しており、口唇部内面の面取りはもはや見られない。底径は相対的に小さくなっている。底部は糸切り痕を若干残すが、全面回転ヘラケズリ調整。335同様、内外面に漆が付着していた。漆は黒色で、べっとり厚く、特に

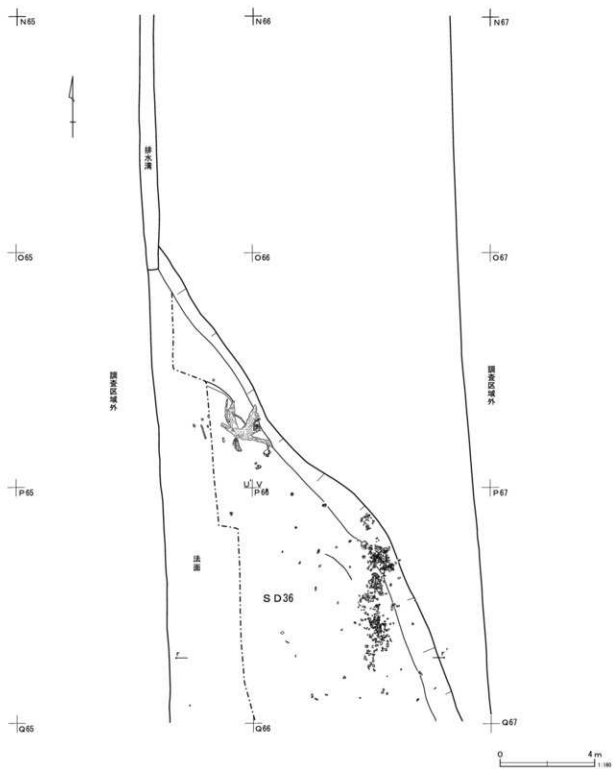


第192図 第36号溝跡上層概念図

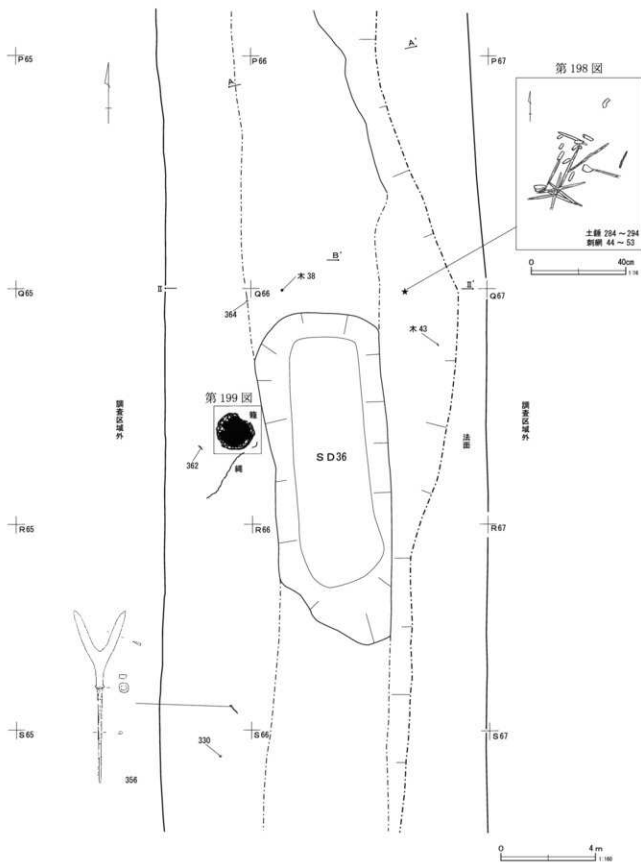
体部内面上位に装(鍔)状に付着している。口縁部は全体の1/3程欠落するが、漆は欠落部から体部外面にかけて垂れたような状態で付着していた。内面には34の須恵器碗の刷毛目ほど明瞭な痕跡ではないが、篋状工具で掻き取ったような痕跡が認められた。口縁部が欠けた(欠いた?)碗を漆バレットに使用したと考えられる。化学分析の結果、精製漆に黒色顔料(油煙)を混ぜた「黒色漆」であり、漆器や武器などの上塗り・中塗りに使用された可能性が指摘されている(第V章4参照)。337・339・340は底部回転糸切り後無調整の無台碗。深身タイプ。337は内面に黒色有機物が多量に付着しており、当初漆を考えたが、油煙であることが判明した。338は底部回転糸切り後、周辺部回転ヘラケズリ調整される。

341~345は須恵器高台碗(碗)である。341・342は同一器形。底部を欠くが高台碗に復元した。口縁部は肥厚し、体部は直線的に伸びる。南比企産。343は胎土が粗く、片岩状鉱物と白色針状物質が含まれる。末野産の可能性もある。346は灰釉陶器高台皿。内面に弱い段(稜)が付く。外面無釉、内面灰釉施軸(刷毛掛けか)。破片割れ口に二次的な磨耗痕があり、砥石に転用されたものと推定される。K-90号室期平行か。猿投産か。347は須恵器大甕口縁部片。口縁部に11本組櫛歯状工具による波状文を4段施文する。南比企産。348は須恵器甕胴部下位片。外面平行叩き、内面無文当て具をナデ消す。南比企産。349は須恵器短頸壺。外面は器面剥落する。鉄分が付着しており、褐色から赤褐色に変色している。南比企産。350は土師器武蔵型甕。口縁部は「コ」の字状を呈する。胴部はヘラケズリ調整。遺構確認前から潰れた状態で出土した。調査工程上やむを得ず取り上げてしまったが、位置は第36号溝跡丁線ラインに接した位置で、遺物の時期・位置関係から第1号祭祀跡に伴う可能性が高いと判断できる。

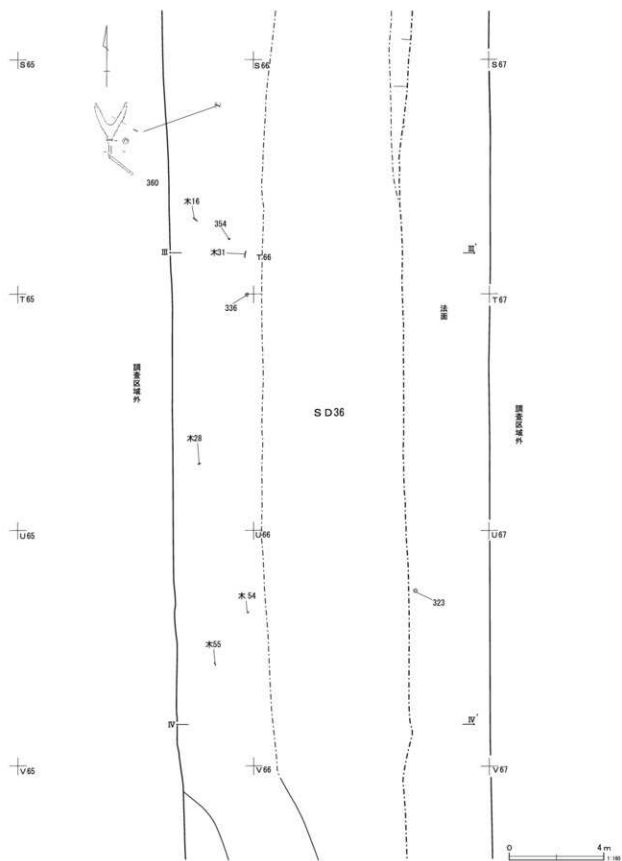
351は平瓦。一側縁が遺存する。凸面は縄叩



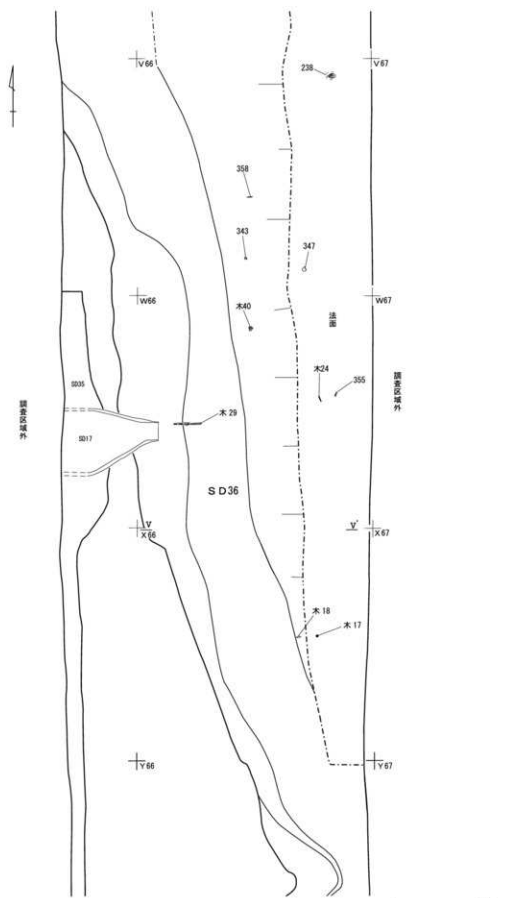
第193图 第36号坑上层遗物分布(1)



第194图 第36号沟路上层遗物分布(2)

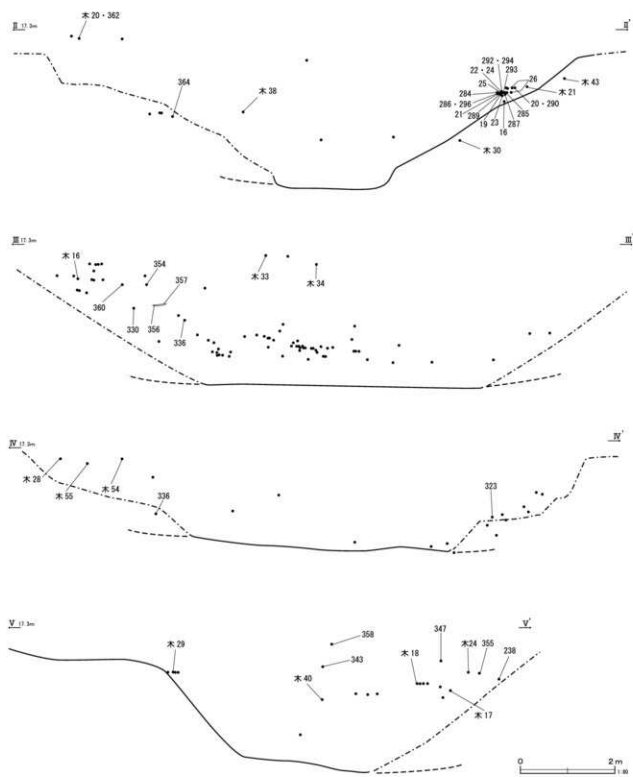


第195图 第36号沟路上层遗物分布(3)

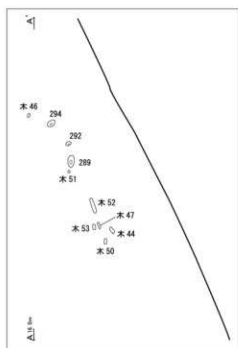
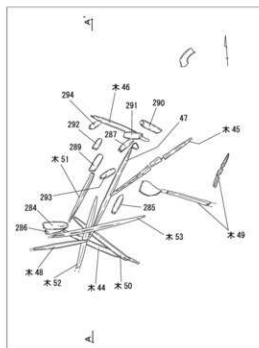


第196图 第36号沟路上层遗物分布(4)





第197图 第36号洞跡上層遺物分布(5)



第198図 第36号溝跡浮子・土鍾出土状況

き十格子甲き、凹面は布目（3cm当たり経・緯糸18本）、模骨痕を残す。枠幅は3.9cmである。南比企産。

352は大型の中世陶器胴部片か。器形は良く分からない。肩部に横方向のミガキ、胴部はナデか。在地産と推定されるが、白色針状物質は含まれない。353は須恵器小型長頸瓶である。頸部から口縁部を欠く。肩部には白灰色の自然釉が掛かる。底部外面「X」状のヘラ記号あり。第1号祭祀跡出土。南比企産。

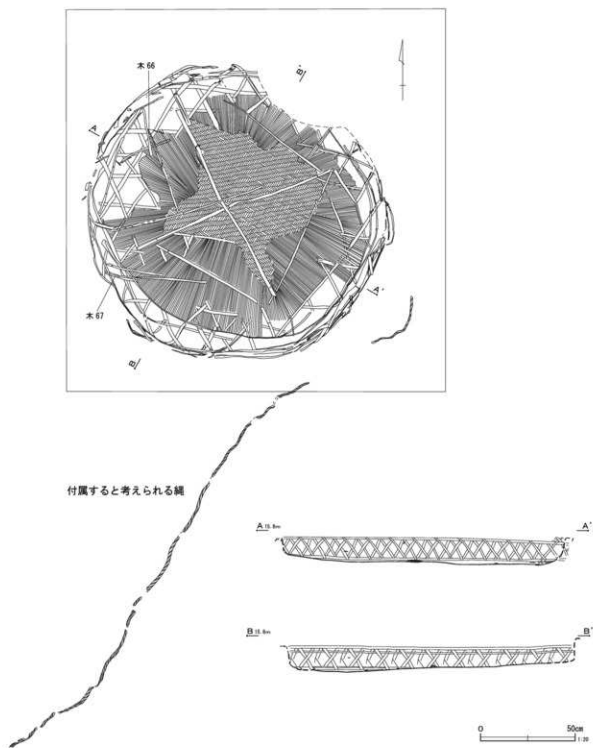
354は瀬戸灰軸合子。器高3.2cmの小型製品である。口縁部は一部欠けている。口縁部から胴部中位まで、内面見込み部に灰軸が施軸されている。底部は回転糸切りで、外面に径1cm、深さ0.4cmほどの抉りがある。12世紀末葉から13世紀前半頃に位置付けられようか。上層出土。

355は金銅製花瓶。第36号溝跡南城の上層から出土した。口径2.2cm、器高8.9cm、胴部最大径4.4cm、脚部径3.2cm。重量92.91g。銅鋼製で、頸部に二条線、胴部に手持ち三条線が2単位刻まれて

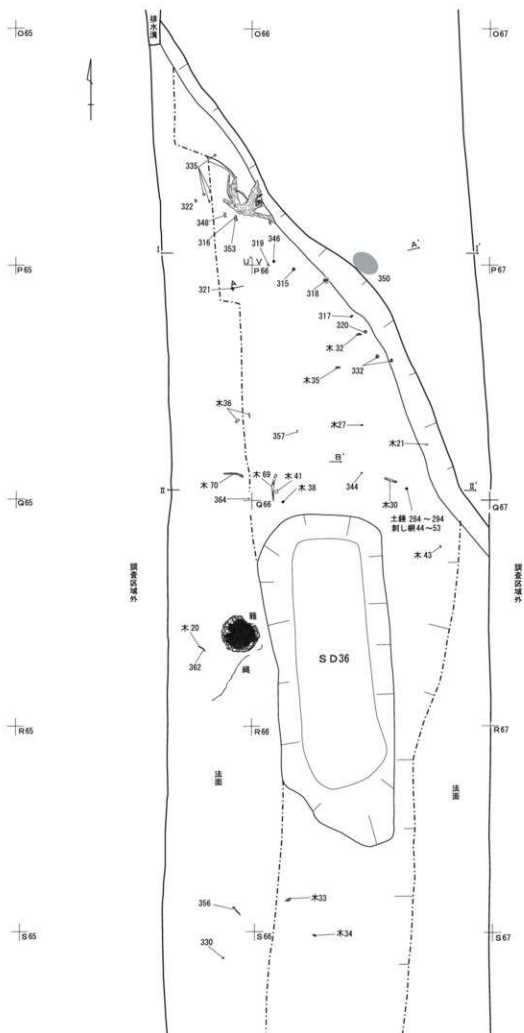
いる。均整のとれたつくりで、条線はシャープである。鍍金は緑青の下に部分的に顔を覗かせている。鍍金方法は銷鍍金によるものと思われる。底板は嵌め底と思われる。鍍金は金色で赤みはない。鎌倉時代（13世紀代）の作と推定される。

第206図356～362は第36号溝跡出土鉄器である。356・360は雁股鎌でR-65グリッドから刃部を上流（北西）に向けた状態で出土した。360は矢柄で、鉄鎌（356）が挿入された状態で出土した（図版74・75参照）。上端には樺（桜）皮が遺存しており、樺皮で鉄鎌と緊縛していたことが分かる。樺皮内面には織維状の有機物が見えるが、別の緊縛材があった可能性もある。矢柄の樹種はタケ亜科、年代は9世紀と見てよい（自然化学分析参照）。

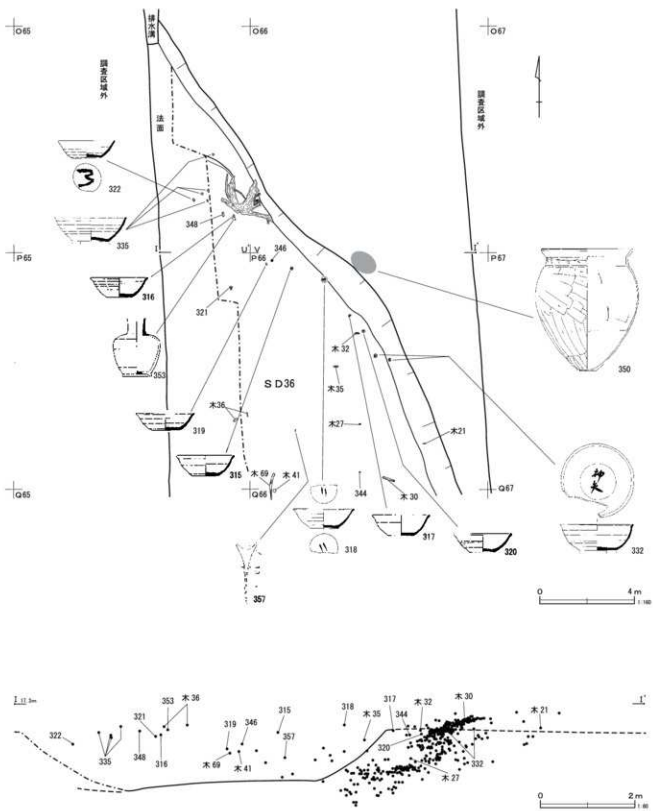
356は刃部先端を僅かに欠くがほぼ完形の鉄鎌（雁股鎌）である。全長は18.4cm、鎌身部長8.2cm、茎部長10.2cm。重量251.4g。刃部の刻り込みは大きい。茎部と鎌身部は台状の方形須で区画される（図版74）。茎部には上から約6cmの長さまで平行から若干右下がりに巻いた植付織維状の痕跡が見



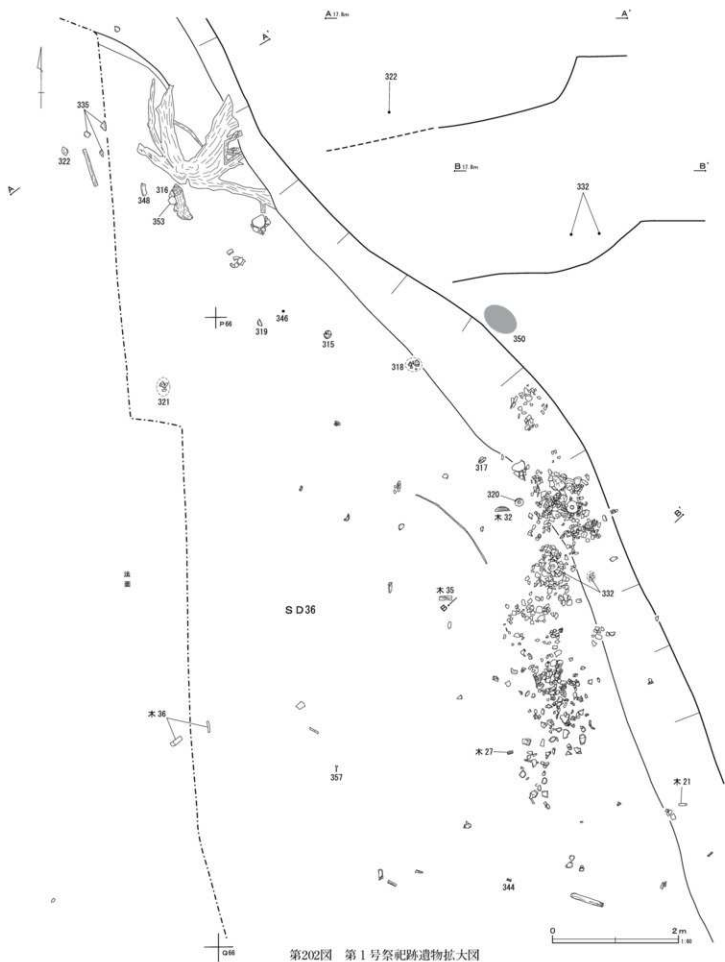
第199図 第36号溝跡籠出土状況拡大図



第200图 第36号满迹北岸古代遗物全体图



第201图 第1号祭祀跡



第202图 第1号祭祀跡遺物拡大図

える。

357は北岸近くのP-66グリッドから出土した雁股鎌である。矢柄は装着されていなかった。刃部先端と茎部先端を僅かに欠く。全長12.2cm、刃部長6.2cm、茎部長6.0cm。重量12.05g。刃部の列り込みは浅い。台状の方形鬚で茎部と区画される(鬚被)。

361は第36号溝跡南岸付近(V-66グリッド)から出土した。刃部と茎部の大半を欠くが、片刃箭(端刃)鎌の可能性ある。残存長11.6cm、鎌身の中央付近で屈曲している。鬚は台状鬚で、鬚被部長約11.0cm。

358は雁股鎌。溝跡中程のS-65グリッドから出土した。刃部先端と茎部先端を欠き、茎部中位で折れ曲がっている。直線に還元した状態で、残存長7.2cm、鎌身部長3.7cm、茎部長4.5cm。重量5.26g。刃部の列り込みは深く、小型の雁股鎌となろう。鬚は環状となる(環状鬚被)。

359はリング状鉄器。F-66グリッド出土。錆化が進み、不明確な部分がある。外径2.3~2.6cmの環状製品で、径1.4cm前後の孔が開く。断面は円形基調と思われる。金環または、口金の可能性があるが不明である。362は鉄製の短刀と思われる。Q-65グリッド出土。刃部先端と柄部先端を欠く。刀身は3片に分かれ、接合しないが、残存長25.0cm前後になる。刃部幅は2.9cm。柄部は楕円で区画される。残存長3.7cm、幅1.4cm。柄部脇から出土した木製品は、短刀に伴う木柄と考えられる(第211B20)。

363はS-66グリッド上層から出土したかわらけ皿である。推定口径15.4cmと大型である。底部は厚く、回転糸切り+板根王痕が付く。体部はロクロ整形。内面見込み部はナデ。雲母状の微粒子と白色斜状物質を含む。在地産と推定される。13世紀前半頃か。364は土師質皿。Q-65グリッド、籠状竹製品の近くから出土した。非ロクロ製品と思われる。底部外面は無調整である。内面見込み部

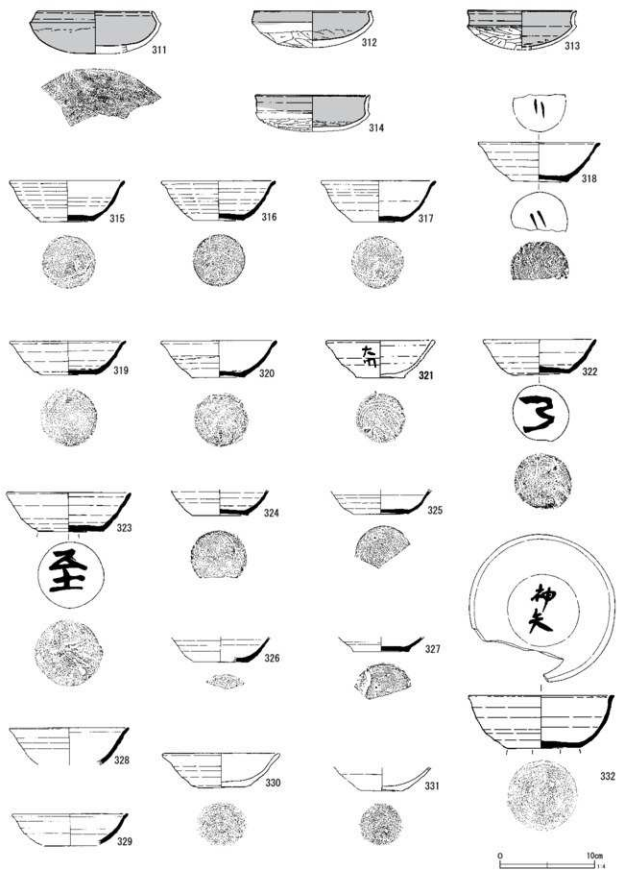
はナデ調整。内外面黒色処理が施されている。胎土には白色斜状物質が含まれ、在地産と推定されるが、系譜・時期共に不明確である。古代末期から中世前期か。365はU-65グリッド上層出土。在地産片口鉢である。須恵質の焼きで口唇部が僅かに内屈する。体部調整はナデか。14世紀後半~15世紀に位置付けられよう。

#### 第1号祭祀跡(第201、202B)

第36号溝跡北岸からは、古墳時代前期の土器が多量に出土したが、それらに混じって平安時代の土器も出土している。「沖矢」、「弓」の墨書土器を含む一群の土器は遺物のB時期の点でも出土状態からも一括性が極めて高く、祭祀に伴う遺物の可能性が高いと判断した。また、溝跡(河川流路)内からは3本の雁股鎌が発見されており、祭祀に関連する弓矢の可能性もある。

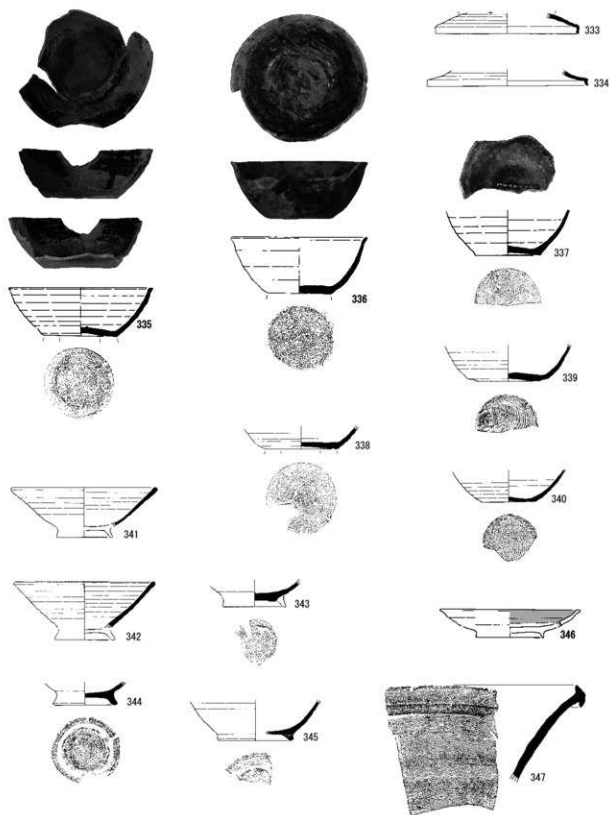
#### 遺物の出土状況

第36号溝跡は北西から南東方向に流路を取っていた。ここでは河川北岸としたが、正確には北東岸である。汀線から約1~3m内側(流路内)に入った位置、岸からの比高差は概ね0.5m~1.2m程度の場所から須恵器環7点、須恵器無台碗2点、須恵器長頸瓶1点が列状に並んで出土した。最も上流(北西部)には322の須恵器環がある。完形品で正位の状態で出土した。当初は気付かなかったが、取り上げると底部外面に「弓」の墨書が記されていた。322の岸寄りの位置からは漆パレットに使用された須恵器碗(335)が数片に割れた状態で出土した。335の東には岸に掛かるような形で大きな木根があった。この木根脇から須恵器小型長頸瓶(353)が横倒しの状態で出土した。口縁部は欠損していた。この長頸瓶の僅かに下位から、完形の須恵器環(316)が木根に寄りかかるとような逆位の状態で出土した。その北東側からは319の環が出土した。完形品で横倒しの状態で出土した。319の東約1mには315の環が出土した。ほぼ完形品で、正位の状態で出土した。その北東



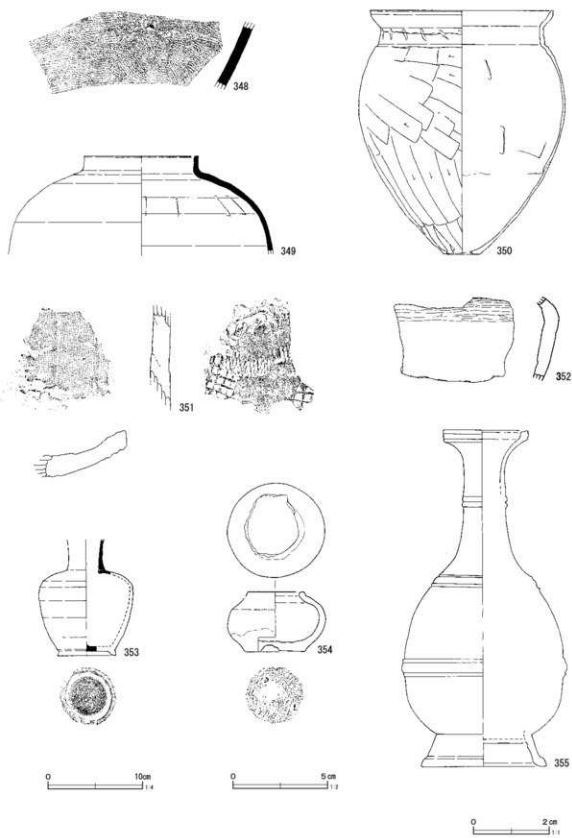
第203图 第36号满跡出土遺物 (19)



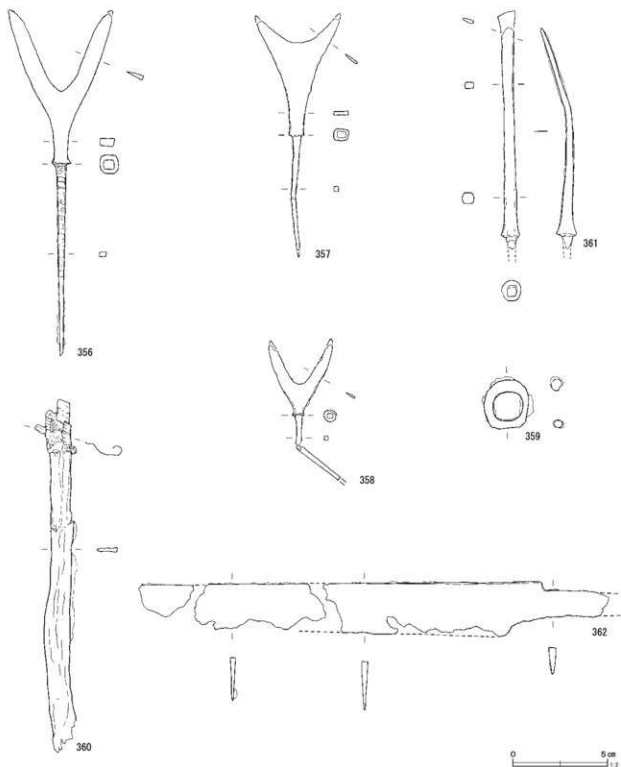


0 10cm

第204团 第36号满踏出土物(20)



第205图 第36号满族出土遗物 (21)

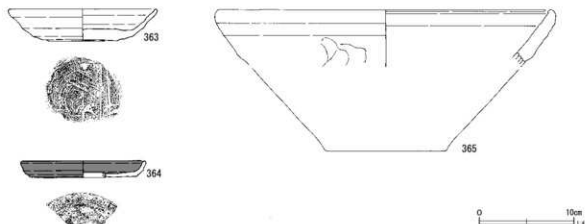


第206図 第36号溝跡出土遺物 (22)

方向約1.4mには318の環が位置する。凡そ1/2を欠き、数片に割れていたが、正位の状態出土した。内外面に「二」に類似した墨書が残る。

318の北東約1.9mからは完形の須恵器環 (317)

が位置する。口縁部を東側に向けた横位の状態で出土した。317の北東方向0.8mには環 (320) がある。完形品で正位の状態出土した。その北東約1.1mには須恵器無台碗 (332) が位置する。一部



第207図 第36号溝跡出土遺物(23)

を欠くが、正位の状態出土し、内面見込み部には「神矢」の墨書が記されていた。墨書は殆ど風化していなかったことから、長期間風雨にさらされたような環境下になかったことを示している。祭祀後、時間をさほど経ない段階で埋没したか、上面に何かで被覆されていたのかもしれない。

また、調査初期の遺構確認時に、P-66グリッドから土師器甕が1点潰れた状態で出土した(350)。調査工程の都合上、グリッドで取り上げてしまったが、平安時代の土師器甕はその1点のみであり、出土位置が祭祀土器群とほぼ重なることから祭祀に関わる遺物と考えた。出土位置は概ね網で示した岸辺部であった。

土器の時期に関しては須恵器環はいずれも底部回転糸切り後無調整であり、9世紀中葉以降に位置付けられる。使用痕の観察される「弓」墨書の312と319はやや浅身に相対的に古相である。315・316・317は深身の器形で使用痕が観察されないなど、最も新相の土器群と理解できる。総じて大きな時期差とはならないが9世紀中葉～後半に掛けての須恵器環から構成される。須恵器無台碗も再調整を含むが、9世紀中葉頃とみてよいであろう。土師器武蔵型甕も口縁部が「コ」の字状を示し、9世紀中葉～後半段階に位置付けてよいものである。従って、祭祀の時期を想定するならば、新相の土器群から9世紀後半に執り行われた

可能性が高いと考えておきたい。

#### 祭祀の復元

列状に存在した土器の様相に関して記した。祭祀関係土器は両端に「弓」と「神矢」の墨書土器を置き、その間に須恵器環類の供膳器を7点と長頸瓶1点を配置したものである。環315・316・317は器形が類似し、使用痕が観察されないことから同一窯から窯出したままの製品を祭祀に使用した可能性が高い。完形品が多く、正位置または、横位で出土したものが多く、二次的に投げ込まれた、あるいは岸から流れ込んだというような状況よりも、岸から僅かに入った位置に据えた(配置した)状況であったと想定される。

第36号溝跡からは356・357・358の3本の雁股鎌が出土した。356には矢柄が装着された状態で出土しており、「矢」として機能していたことは確実である。雁股鎌は3本とも形態が異なるが、9世紀代に存在してよい型式である。矢柄の年代測定からも時期的な矛盾はないことから、墨書に示されるように、「神矢」であった可能性が高いものとする。「神事」の復元は難しいが、土師器甕の出土から米を炊く行為が想定される。おそらくは環類に盛りつけ、神に供えられたのであろう。長頸瓶は「酒」または「水」を入れたものであろうか。また、出土はしていないが「弓」が舞台装置の一つにあり、雁股鎌を付けた「神矢」を

第55表 第36号清跡出土遺物観察表(1) (第173~176図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	15.1	29.1	7.3	ACHIJ	70	良好	にぶい・橙	P66G No.1070・1078	123-1
2	土師器	壺	13.9	16.2	—	ACEHI	40	良好	にぶい・黄橙	R66G 砂利下部	123-4
3	土師器	壺	(15.7)	11.2	—	ACEHI	60	不良	褐	S65G 下層 S66G 砂利層下部	123-5
4	土師器	壺	(29.5)	5.7	—	CEGI	5	良好	灰白	内外面赤彩 P66G 下層 P66G 上層	165-3
5	土師器	壺	(27.4)	5.4	—	CEGI	5	良好	灰白	内外面赤彩 P66G 下層五層	165-3
6	土師器	壺	(21.1)	10.7	—	CEGH	25	良好	橙	S66G No.9	123-2
7	土師器	壺	(22.5)	7.2	—	ACEHIK	10	良好	灰オリーブ	T66G 砂利層	
8	土師器	壺	—	6.0	—	ACEHIJK	90	良好	暗赤褐	赤彩 内面煤付着 P66G No.1131	
9	土師器	壺	19.2	7.3	—	ABCEHI	70	普通	にぶい・橙	P66G No.187・190・195	123-3
10	土師器	壺	(15.7)	6.4	—	ABCEHIK	25	普通	にぶい・橙	R66G No.5	
11	土師器	壺	(21.0)	3.0	—	ACIK	5	良好	にぶい・橙	R66G 下層	
12	土師器	壺	(14.2)	4.2	—	ACEIJK	30	良好	灰黄	P66G No.91 上層	165-3
13	土師器	壺	(18.8)	3.5	—	ADEHI	15	良好	灰白	赤彩 O66G 下層	
14	土師器	壺	12.3	4.5	—	ABCEHIKL	90	普通	灰褐	R66G 砂利層下部	123-7
15	土師器	壺	(13.1)	13.3	5.4	ACEHIJK	70	普通	にぶい・赤褐	内面明赤褐 P66G No.123・144他	123-6
16	土師器	壺	(11.1)	5.6	—	ACIJKL	25	普通	にぶい・赤褐	赤彩 P66G 下層	
17	土師器	壺	(11.8)	3.5	—	ACEIK	15	普通	灰黄	R66G 砂利下部	
18	土師器	壺	(20.2)	4.8	—	ACEHIK	20	普通	にぶい・黄	O66G No.1001	
19	土師器	壺	10.9	6.2	—	ACEHI	50	良好	橙	V66G No.7	124-2
20	土師器	壺	12.0	6.6	—	ACEHIJK	50	普通	にぶい・黄橙	R66G 砂利層	124-3
21	土師器	壺	(17.8)	5.3	—	ABCEIK	20	良好	明黄褐	V66G	
22	土師器	壺	(11.4)	5.7	—	AEIJ	80	良好	褐	内面煤付着 S66G No.11	124-1
23	土師器	壺	—	6.7	—	CGIK	5	普通	にぶい・赤	赤彩 S65G 砂利層	165-1
24	土師器	壺	—	8.4	—	ACEHIJK	20	普通	にぶい・赤褐	外面赤彩 P66G No.94	
25	土師器	壺	—	9.5	—	AEHJK	30	良好	灰白	No.1016	164-3
26	土師器	壺	—	14.0	—	A	40	普通	灰黄	赤彩 P66G No.83・91	124-5
27	土師器	壺	—	18.7	—	AEHL	5	普通	黄褐	U66G No.9	165-2
28	弥生	壺	—	8.7	—	AE	5	普通	黄褐	赤彩 S66G No.17 下層	125-1
29	弥生	壺	—	6.7	—	EHL	5	良好	黄褐	U66G 下層	165-2
30	土師器	壺	—	17.0	4.8	ACDEHIK	90	良好	にぶい・黄	P66G No.1012	124-4
31	土師器	壺	—	14.7	6.1	ABCDEHIK	80	良好	浅黄橙	R66G No.5・7	124-7
32	土師器	壺	—	17.9	13.7	ACHIJ	40	良好	にぶい・黄橙	S66G No.20 R66G 砂利層下部	125-2
33	土師器	壺	—	21.3	7.3	CDHJL	50	良好	灰褐	O66G No.1003・1027	125-3
34	土師器	壺	—	14.0	9.0	ACEIK	70	良好	にぶい・黄橙	U66G No.10	125-4
35	土師器	壺	—	5.4	(8.3)	DEHI	20	普通	にぶい・黄橙	底部木炭痕 P65G	
36	土師器	壺	—	14.0	(8.2)	ACEHIJ	70	良好	にぶい・黄橙	P66G No.1011・1072・1136・1143	125-5
37	土師器	壺	—	8.0	8.7	ACEHIJKL	75	普通	にぶい・橙	底部木炭痕 P66G No.1004	125-7
38	土師器	壺	—	8.6	—	ABDEHIK	80	普通	にぶい・橙	R66G No.17 S66G No.13	125-6
39	土師器	壺	—	5.8	7.4	ACEHIK	40	良好	にぶい・黄橙	赤彩 P66G No.1138	125-8
40	土師器	壺	—	4.1	9.4	ACEHIJ	80	普通	灰黄褐	O66G No.1009	
41	土師器	壺	—	3.2	8.6	AEHK	80	普通	灰黄	P66G No.1007	
42	土師器	壺	—	2.8	6.2	ACDEGHI	95	普通	にぶい・黄褐	T66G 砂利層	
43	土師器	壺	—	6.5	12.0	DHIK	40	普通	橙	底部木炭痕 S66G 砂利層下部 U66G 下層	
44	土師器	壺	—	4.6	8.3	ACEHIK	80	普通	にぶい・黄橙	外面煤付着 P65G No.1004	125-9
45	土師器	壺	—	4.2	—	AHEIJK	5	普通	にぶい・黄橙	S66G 砂利層	
46	土師器	壺	—	4.1	—	ACEHIK	5	普通	にぶい・黄橙	赤彩 Y66G	
47	土師器	壺	—	2.2	—	ACEHIK	5	普通	灰黄褐	P66G 上層	
48	土師器	壺	—	4.5	—	ACEHIKL	5	普通	灰黄	外面赤彩 P65G	164-3
49	土師器	壺	—	5.6	—	ACEHIK	5	良好	赤	赤彩 R66G 砂利層下部	164-3

第56表 第36号溝跡出土遺物観察表(2)(第176~180図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
50	土師器	壺	—	7.3	—	EFL	5	普通	浅黄橙	P66G 下層 大塚式	165-3
51	土師器	壺	—	5.7	—	EFL	5	普通	浅黄橙	R66G 下層 大塚式	165-3
52	土師器	壺	—	4.1	—	EGL	5	普通	浅黄橙	U66G 上層 大塚式	165-3
53	弥生	壺	—	6.7	—	ABEH I	5	普通	灰	R66G 砂利層下部 吉ヶ谷	164-3
54	弥生	壺	—	7.6	—	ABEH I K	5	普通	にぶい黄橙	内面煤付着 R66G 下層 吉ヶ谷	164-3
55	弥生	壺	—	6.9	—	ACEHIKL	5	普通	にぶい黄橙	外面赤彩 P65G	164-3
56	土師器	壺	—	3.5	—	ABEIK	5	普通	褐灰	O65G 上層	164-3
57	土師器	壺	—	3.4	—	AHIK	5	普通	黄灰	P66G 上層	
58	土師器	広口壺	(22.6)	5.2	—	ACEHIK	20	普通	にぶい赤褐	V66G	165-3
59	土師器	小型壺	14.1	20.2	3.0	CEHIJ	90	普通	橙	O66G 下層	126-5
60	土師器	小型壺	14.4	16.5	2.9	ACEGH IJK	50	普通	赤彩	No44・88・169・253・256・262・267	126-6
61	土師器	小型壺	9.1	11.7	4.5	ACD J	70	良好	灰黄	外面煤付着 P66G No1095	126-3
62	土師器	小型壺	9.2	11.6	4.6	AC IJK	80	良好	灰白	No1043	126-4
63	土師器	小型壺	7.3	9.8	2.9	A E H J K	100	良好	にぶい赤褐	O66G No1021	126-1
64	土師器	小型壺	9.6	11.0	—	AC I J	50	普通	にぶい黄	No1057	126-2
65	土師器	小型壺	(9.0)	3.7	—	ABC I K	30	普通	灰黄褐	S66G 砂利	
66	土師器	小型壺	(11.9)	4.6	—	ACEIK	20	良好	にぶい赤褐	赤彩 Q66G 下層	
67	土師器	小型壺	(10.8)	6.6	—	ACEHIK	15	普通	灰褐	赤彩 V66G	
68	土師器	小型壺	(9.0)	4.2	—	ACEHIK	10	良好	橙	P66G 上層	
69	土師器	小型壺	—	6.7	—	ABEHI	40	普通	にぶい橙	P66G No1017	
70	土師器	小型壺	—	6.3	—	ACEHIK	20	普通	橙	U66G 下層	
71	土師器	小型壺	—	7.1	—	ACE IJK	85	普通	にぶい黄橙	赤彩 U66G No13	127-1
72	土師器	小型壺	—	9.1	—	ACEHIK	95	良好	にぶい黄橙	P66G No1123	127-2
73	土師器	小型壺	—	13.5	4.8	ACEHIKL	100	普通	にぶい橙	No145	127-3
74	土師器	小型壺	—	13.5	—	ABCEHIK	80	普通	にぶい橙	赤彩 S66G No8	127-4
75	土師器	小型壺	—	6.9	3.0	ACEHIKL	100	良好	浅黄	赤彩 内面下半煤付着 R66G No10	127-5
76	土師器	小型壺	—	2.6	—	ACE IJK	5	普通	にぶい橙	Q66G 上層	166-3
77	土師器	台付用	9.4	14.5	11.1	ACH I J	90	良好	橙	P66G No1038	127-6
78	土師器	台付甕	22.2	32.3	11.1	ABCEHIJ	80	良好	灰白	内外面煤付着 P66G	128-1
79	土師器	台付甕	(11.2)	15.2	(8.4)	ACEHIJK	45	普通	にぶい橙	外面煤付着 P66G No77・84・91	128-2
80	土師器	台付甕	14.6	19.1	8.7	ACEHIJ	60	良好	にぶい黄橙	外面煤付着 P66G No276・1066	128-3
81	土師器	台付甕	14.5	23.5	9.3	CDEJ	90	良好	にぶい黄橙	外面割部少量付着 O66G No1004・1006	128-3
82	土師器	台付甕	17.5	20.8	—	ACEGIJ	60	良好	灰白	外面煤付着 P66G No1087・1090・1114・1118	128-4
83	土師器	台付甕	16.2	21.2	—	ABCEIK	30	普通	浅黄橙	内外面煤付着 V66G No6	128-5
84	土師器	台付甕	15.8	21.4	—	CDEH	90	良好	にぶい橙	内外面煤付着 P66G No110・1110・1114・1116・1117	128-6
85	土師器	台付甕	(10.4)	9.9	—	BEHIJK	40	普通	褐灰	P66G No141 P66G No142	129-1
86	土師器	台付甕	16.3	25.0	—	ACEHIL	80	普通	にぶい黄橙	P66G No1040・1067・1068	129-2
87	土師器	台付甕	20.7	27.5	—	CDEHJ	70	良好	灰白	外面全体煤付着 N65G No1002	129-3
88	土師器	台付甕	17.6	25.8	—	CDEHI	70	良好	灰白	外面割部少量付着 P66G No1041・1115・1190	129-4
89	土師器	台付甕	18.9	24.5	—	ACDEHJ	90	良好	灰白	内外面煤付着 P66G No105・115・126他	129-5
90	土師器	台付甕	(18.6)	21.0	—	ACEHIL	30	普通	にぶい褐	外面煤付着 P66G No1111	
91	土師器	台付甕	16.1	21.0	—	ACEHI	90	良好	浅黄橙	内外面煤付着 R66G No7	129-6
92	土師器	台付甕	14.7	18.9	—	ACDHJ	90	普通	橙	内外面煤付着 O66G No1007	130-1
93	土師器	台付甕	17.3	18.9	—	ACEHIJ	90	良好	浅黄橙	内外面煤付着 P66G No1087・1121・1128・1127	130-2
94	土師器	台付甕	—	24.4	—	ACDE	40	普通	灰白	外面煤付着 P66G No32	130-3
95	土師器	台付甕	—	23.9	9.2	ABCH	70	普通	灰白	内外面煤付着 P66G No104・1039・1040・1052他	130-4
96	土師器	台付甕	—	15.4	7.4	ACEHIJ	60	普通	にぶい黄橙	P66G No1034・1040	130-5
97	土師器	台付甕	—	18.2	10.8	ACH I J	60	良好	灰褐	内外面煤付着 P66G No117・258	130-6
98	土師器	台付甕	—	3.9	—	ACEHIK	70	普通	にぶい橙	内面煤付着 R66G 下層	166-2

第57表 第36号满跡出土遺物観察表(3) (第180~183図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
99	土師器	台付甕	—	2.6	—	BCEHIJK	30	普通	にぶい赤褐	P66G 下層	1662
100	土師器	台付甕	—	1.5	—	A E H I J K	100	普通	灰黄	P66G 上層	1662
101	土師器	台付甕	—	3.4	—	ACEGHIJK	30	普通	褐灰	内外面煤付着 P65G	
102	土師器	台付甕	—	6.9	—	ACDEGHI	80	普通	にぶい黄	内面コゲ付着 U65・66G	
103	土師器	台付甕	—	6.3	—	ACEHIK	70	良好	褐灰	U65G 上層	
104	土師器	台付甕	—	7.9	—	ACEH	70	良好	にぶい黄橙	P66G小-O66G No1007	
105	土師器	台付甕	—	8.3	(10.3)	ACEFGIJKL	50	良好	灰黄	V66G	
106	土師器	台付甕	—	7.7	9.6	ACEHI	85	普通	にぶい橙	外面煤付着 P66G No1062	
107	土師器	台付甕	—	7.1	10.9	ABCEHI	90	普通	にぶい橙	N66G No1006	
108	土師器	台付甕	—	6.7	10.9	ACEHIK	100	普通	にぶい黄橙	P66G No1029	131-1
109	土師器	台付甕	—	7.0	(10.5)	ACEHIJ	50	普通	橙	外面煤付着 S66G 砂利層	
110	土師器	台付甕	—	6.8	10.2	ABCDEHIK	100	普通	にぶい赤褐	外面煤付着 S66G No7	131-2
111	土師器	台付甕	—	7.7	(10.0)	CEGHJK	70	普通	灰褐	P66G No91	
112	土師器	台付甕	—	7.2	10.1	ACEHIK	90	普通	灰黄褐	外面煤付着 P66G No181	
113	土師器	台付甕	—	7.1	(10.0)	ACEHIK	60	普通	にぶい橙	P66G No131	131-3
114	土師器	台付甕	—	6.5	10.0	ACEHIJ	70	普通	灰褐	N66G No1003	
115	土師器	台付甕	—	8.0	(9.5)	ACEHIJ	80	良好	褐灰	O66G No1018	
116	土師器	台付甕	—	5.2	10.0	ACEHIKL	50	普通	にぶい黄橙	P66G No276	
117	土師器	台付甕	—	6.2	9.6	A E H J K	80	普通	橙	外面煤付着 O66G No1005	132-2
118	土師器	台付甕	—	6.4	9.5	ABCEGHIK	85	普通	灰褐	N66G No1004	
119	土師器	台付甕	—	6.9	(9.0)	A C H I J K	50	良好	にぶい黄橙	P66G No97	132-3
120	土師器	台付甕	—	6.3	9.2	ACEHIK	90	普通	にぶい橙	内外面煤付着 O66G No1020	132-4
121	土師器	台付甕	—	6.4	9.1	ACEHIK	90	普通	灰褐	N66G No1011	132-5
122	土師器	台付甕	—	6.9	9.3	ACEHIJ	95	普通	明赤褐	P66G No1196	132-6
123	土師器	台付甕	—	4.9	9.5	ABCEGHI	95	普通	にぶい橙	O66G No1028	
124	土師器	台付甕	—	6.0	9.1	ACEHIJK	95	良好	にぶい赤褐	外面煤付着 内面赤変 N66G No1014	
125	土師器	台付甕	—	7.1	8.8	BEGHIJK	100	普通	明赤褐	N66G No1015	
126	土師器	台付甕	—	7.1	9.3	ACDEHIK	100	普通	にぶい黄橙	V66G No14	
127	土師器	台付甕	—	7.1	8.8	A E H I J K	90	普通	灰黄	P66G No1117	131-4
128	土師器	台付甕	—	6.1	(8.9)	A E H I J K	80	良好	にぶい赤褐	O66G No1014	
129	土師器	台付甕	—	3.8	(8.6)	A C E I J K	25	良好	にぶい褐	P66G Q66G	
130	土師器	台付甕	—	6.0	7.7	ACEGHJ	100	普通	橙	R66G No11	131-5
131	土師器	台付甕	—	5.9	7.8	ACEHIJK	90	普通	にぶい黄褐	外面煤付着 P66 No45	131-6
132	土師器	台付甕	—	5.2	7.5	ACEIK	90	普通	にぶい橙	O66G No1025	132-1
133	土師器	台付甕	—	2.3	—	CHI	5	普通	にぶい橙	O66G 下層	165-3
134	土師器	台付甕	—	1.8	—	CHI	5	普通	橙	U66G	
135	土師器	台付甕	—	2.5	—	A E I K	5	普通	にぶい黄橙	Q66G 下層	
136	土師器	甕	24.9	27.2	7.6	ACEHIL	90	良好	にぶい黄橙	外面煤付着 No1005・1077	133-1
137	土師器	甕	17.6	20.5	3.3	ACDEHIK	85	普通	灰黄褐	P66G No1085・1090・1115他	133-2
138	土師器	甕	17.5	16.5	6.6	ACEHJL	60	普通	にぶい赤褐	外面煤付着 P66G No1048・1050・1055他	133-3
139	土師器	甕	13.2	15.3	—	ACDEHJ	90	良好	灰黄褐	内外面煤付着 P66G No1081・1084・1086	133-4
140	土師器	甕	(13.7)	12.6	—	ACEFHJK	30	普通	灰褐	外面煤付着 P66G No1002	133-5
141	土師器	甕	(14.8)	15.7	—	ACDEHJ	30	良好	灰黄	V66G No12	133-6
142	土師器	甕	15.4	15.5	—	CDEHJ	60	普通	にぶい赤橙	内外面煤付着 P66G No105・116・126他	134-6
143	土師器	甕	(13.3)	14.5	—	ACHI	25	良好	黒褐	煤付着 R66G No7	
144	土師器	甕	(23.3)	11.5	—	IK	20	普通	灰黄褐	R66G 砂利下部	
145	土師器	甕	19.2	12.2	—	ACHI	50	良好	灰黄褐	外面煤付着 P66G No79・163・1074他	134-2
146	土師器	甕	(12.8)	14.1	—	ABCDEGHI	25	普通	にぶい赤褐	P66G No101・104・105	
147	土師器	甕	(15.5)	12.5	—	ACEHIJK	25	良好	にぶい橙	P66G No1024	

第58表 第36号清跡出土遺物観察表(4)(第183~185図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
148	土師器	甕	(16.7)	9.8	—	ACIK	25	普通	黄灰	P66G No.93	
149	土師器	甕	(17.4)	10.4	—	ACEHIK	35	良好	褐灰	外面煤付着 P66G No1026	
150	土師器	甕	15.8	10.9	—	ACEHIK	40	普通	にぶい・褐	P66G No1040・1066・1071他	134-3
151	土師器	甕	(16.9)	10.9	—	ACEHIJK	20	普通	橙	P66G No144・171	
152	土師器	甕	15.0	10.4	—	ACDEHIJ	25	普通	にぶい・黄褐	外面煤付着 タタキ層 R66G No12	166-1
153	土師器	甕	(14.9)	10.2	—	ADEHIJK	25	良好	にぶい・黄橙	内外面煤付着 P66G No1009	
154	土師器	甕	(12.7)	8.8	—	ACEHIJK	20	普通	橙	Q66G No.28	
155	土師器	甕	(15.5)	9.1	—	EHIK	30	普通	にぶい・橙	外面煤付着 O66G No1012	
156	土師器	甕	(16.8)	10.3	—	ACEHIL	20	普通	黄褐	外面煤付着 V66G No.8	
157	土師器	甕	(11.8)	6.9	—	ACIK	20	普通	褐灰	P66G No1130	
158	土師器	甕	(17.0)	7.3	—	ABCEIK	20	普通	にぶい・黄橙	外面煤付着 U66G 下層	
159	土師器	甕	(17.8)	7.9	—	ACEIK	20	良好	灰褐	P65G	
160	土師器	甕	(12.3)	8.7	—	CDEJ	25	普通	にぶい・橙	外面煤付着 R66G 砂利下部	
161	土師器	甕	(19.2)	7.0	—	ACEIK	30	普通	黒褐	外面煤付着 P66G No1133・1137	
162	土師器	甕	(20.0)	9.2	—	ACHIJK	20	良好	灰褐	外面煤付着 P66G No.28	
163	土師器	甕	(20.9)	6.7	—	AEHI	20	良好	灰黄褐	内外面煤付着 P66G No1011	
164	土師器	甕	(14.7)	8.0	—	ACEIJK	25	普通	黄灰	V66G	
165	土師器	甕	(15.0)	8.7	—	ACEHIK	20	普通	にぶい・黄褐	外面煤付着 P66G No.501・502	
166	土師器	甕	(13.1)	6.9	—	ACEHIK	25	普通	灰褐	外面煤付着 P66G 上層	
167	土師器	甕	(18.1)	8.8	—	ABEHJ	15	良好	暗灰黄	V66G	
168	土師器	甕	(15.8)	11.1	—	BCEHIK	20	普通	にぶい・橙	S66G No.14	
169	土師器	甕	(15.0)	8.9	—	ACDEHIK	20	良好	灰褐	外面煤付着 P65G No.188	
170	土師器	甕	(18.0)	7.8	—	ACEHIK	30	普通	にぶい・褐	P66G No1006	166-1
171	土師器	甕	(18.0)	6.1	—	ACEHI	30	普通	にぶい・黄橙	外面煤付着 砂利下	166-1
172	土師器	甕	(15.2)	5.2	—	AHIKL	15	普通	灰褐	全面煤付着 P66G No1025	
173	土師器	甕	(16.0)	6.7	—	IK	25	普通	灰黄褐	P66G No1025	
174	土師器	甕	(18.1)	5.9	—	ACHIJK	25	普通	にぶい・黄橙	P66G No.91・94・97	
175	土師器	甕	13.8	5.7	—	ACEHIK	20	普通	灰黄褐	外面煤付着 P66G No.244	
176	土師器	甕	(15.8)	5.1	—	AEHIK	25	普通	にぶい・橙	内外面煤付着 P66G No.1053	
177	土師器	甕	(15.9)	4.3	—	ACEIK	5	普通	黒褐	内外面煤付着 V66G	
178	土師器	甕	(18.8)	4.0	—	ACEHIJK	25	良好	灰褐	P66G No.95	
179	土師器	甕	(16.3)	3.9	—	ACHIJKL	20	普通	黒褐	内面端部・外面煤付着 P66G No.177	
180	土師器	甕	(17.8)	3.3	—	CEHIJK	15	良好	にぶい・赤褐	O66G 下層	
181	土師器	甕	(12.2)	3.0	—	ABCEHIK	15	普通	橙	Y66G	
182	土師器	甕	(13.7)	4.4	—	ACEHIJK	30	普通	にぶい・黄橙	T66G 上層 V66G	
183	土師器	甕	(12.0)	5.0	—	ABEHIK	15	普通	灰褐	N65G 下層	
184	土師器	甕	(14.5)	6.6	—	ACEHIJKL	10	普通	にぶい・黄橙	S66G 砂利層	166-3
185	土師器	甕	(9.3)	3.1	—	ACIK	5	良好	浅黄橙	P66G 上層2面	166-3
186	土師器	甕	—	3.3	—	AEHIK	5	普通	にぶい・橙	R66G	166-1
187	土師器	甕	—	2.8	—	AEHIK	5	普通	褐灰	U66G 下層	166-1
188	土師器	甕	—	3.3	—	ABDEHIK	5	普通	にぶい・橙	R36G 砂利下部	166-1
189	土師器	甕	—	3.0	—	AEIK	5	普通	灰赤	外面煤付着 P66G No.151	166-1
190	土師器	甕	—	3.9	—	AHIJK	5	普通	暗灰黄	内外面煤付着 U66G	
191	土師器	甕	—	2.0	—	DGHI	5	普通	にぶい・橙	U66G 上層	
192	土師器	甕	—	5.7	—	AEHK	5	普通	黄褐	R66G 下層	
193	土師器	甕	—	2.7	—	ACEHIKL	5	普通	にぶい・黄橙	S66G 砂利層	
194	甕生	甕	—	4.1	—	ACEK	5	普通	灰黄褐	内外面煤付着 T66G 砂利層	165-1
195	甕生	甕	—	3.4	—	AEHIK	5	良好	灰黄	R66G No.7	165-1
196	甕生	甕	—	2.9	—	CHIK	5	普通	褐灰	煤付着 V66G	



第59表 第36号满峠出土遺物観察表(5)(第185~187図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
197	弥生	甕	—	4.3	—	CEI	5	普通	褐灰	内外面煤付着 W66G	
198	弥生	甕	—	7.5	—	ACEIK	5	普通	黒褐	P66G 砂利層下部	165-1
199	弥生	甕	—	9.1	—	CIK	5	普通	灰黄褐	V66G 上層	165-1
200	弥生	甕	—	4.0	—	ACEHIKL	5	普通	黒褐	T65G 上層	
201	弥生	甕	—	3.5	—	ACEIK	5	普通	黒褐	T66G 砂利層	165-1
202	弥生	甕	—	3.4	—	AEGIJK	5	普通	にぶい黄褐	外面煤付着 O66G 上層	164-3
203	弥生	甕	—	5.2	—	ACEK	5	普通	暗灰	R66G 砂利層	
204	弥生	甕	—	2.8	—	ACEHIK	5	普通	灰白	W66G 砂利層	
205	弥生	甕	—	3.1	—	ABEHI	5	普通	灰黄褐	P66G No.275	
206	弥生	甕	—	2.8	—	HIK	5	普通	にぶい黄褐	P66G	
207	弥生	甕	—	2.1	—	ACHIK	5	普通	にぶい黄褐	P65G	
208	弥生	甕	—	2.4	—	EGHI	5	普通	にぶい黄褐	内面煤付着 W66G	
209	土師器	高坏	(24.0)	5.5	—	ACEHIKL	20	良好	橙	赤彩 R66G 砂利層下部	166-3
210	土師器	高坏	(23.9)	6.2	—	AHEIJK	20	良好	にぶい赤褐	赤彩 S66G 砂利	
211	土師器	高坏	(22.0)	6.0	—	ACEHIKL	15	良好	にぶい橙	赤彩 R66G 砂利下部	
212	土師器	高坏	(19.8)	7.6	—	ACEHI	20	良好	明赤褐	赤彩 P66G No.18	
213	土師器	高坏	(17.9)	5.9	—	ACDEHIJK	50	普通	にぶい橙	P66G No.95・258	134-4
214	土師器	高坏	(15.7)	5.7	—	CIK	25	良好	橙	R66G 砂利層下部	166-3
215	土師器	高坏	(16.8)	5.1	—	ACHI	25	良好	にぶい黄橙	S66G 砂利 砂利層下部	134-5
216	土師器	高坏	19.0	7.5	—	ACEIJK	25	普通	にぶい橙	R66G 砂利	
217	土師器	高坏	(14.0)	5.9	—	ACEHIJK	20	良好	灰黄褐	O66G 下層	
218	土師器	高坏	(15.6)	4.7	—	ACEHIK	30	普通	にぶい黄橙	赤彩 R66G 砂利層下部 砂利	
219	土師器	高坏	15.9	11.0	—	ACIJ	80	良好	橙	赤彩 S66G No.3・7 内外面煤付着	134-6
220	土師器	高坏	12.6	5.7	—	ACEHIK	85	普通	にぶい黄褐	P66G No.91	134-7
221	土師器	高坏	—	5.5	—	ACEHIJ	60	普通	灰褐	R66G No.22	
222	土師器	高坏	(13.6)	4.4	—	ACEHIL	20	普通	にぶい黄橙	赤彩 R66G 砂利下部	136-3
223	土師器	高坏	—	5.7	—	ACEHIK	70	良好	にぶい黄橙	P66G No.1016	135-1
224	土師器	高坏	—	4.5	—	AHEI	85	普通	にぶい橙	S66G 砂利層	
225	土師器	高坏	—	9.1	—	CEHIK	90	普通	にぶい黄橙	赤彩 R66G	
226	土師器	高坏	—	5.3	—	ACEIK	85	普通	灰オリーブ	S66G 砂利層	
227	土師器	高坏	—	6.8	—	AEH	80	良好	橙	P66G No.1013	135-2
228	土師器	高坏	—	7.8	9.8	ACEHIKL	90	普通	にぶい黄橙	N66G No.1013	135-3
229	土師器	高坏	—	7.7	—	ABCEGHI	65	普通	にぶい黄橙	外面赤彩 R66G 下層	135-4
230	土師器	高坏	—	8.5	10.2	CEGHK	70	普通	にぶい黄橙	赤彩 N65G No.1001	135-5
231	土師器	高坏	—	6.3	10.9	BEHIK	90	普通	明褐灰	O66G	
232	土師器	高坏	—	5.9	(11.2)	ACEHIJL	50	普通	明赤褐	O66G No.1013	
233	土師器	高坏	—	4.7	(13.0)	ACEHIKL	20	普通	にぶい褐	P66G No.234	
234	土師器	高坏	—	3.4	(8.0)	AEGHIK	25	普通	にぶい黄橙	Q66G 上層	
235	土師器	高坏	—	4.1	(5.6)	ABCEHIK	20	普通	灰褐	赤彩	
236	土師器	高坏	—	9.7	12.3	ACIJK	70	良好	灰黄褐	P66G No.261・1193	135-6
237	土師器	高坏	—	8.7	(12.9)	ACEIJK	80	普通	にぶい黄橙	S66G No.10	136-1
238	土師器	高坏	—	6.5	20.2	ABCEHK	75	普通	にぶい赤褐	赤彩 V66G No.13	136-2
239	土師器	高坏	—	1.3	—	ACHI	10	良好	灰黄褐	R66G No.25 砂利	166-3
240	土師器	高坏	—	1.2	—	AHEIK	5	普通	にぶい褐	Z66G	166-2
241	土師器	高坏	—	1.4	—	AHEIK	5	普通	にぶい褐	P66G No.112	
242	土師器	高坏	—	4.3	—	AHEI	5	良好	にぶい黄橙	硬質 U66G 上層	166-3
243	土師器	高坏	—	4.1	—	AHEIK	5	普通	橙	U66G	164-3
244	土師器	甕台	7.8	8.5	(11.1)	CEHIK	75	普通	橙	O66G	136-5
245	土師器	甕台	(7.3)	8.7	11.3	ACEHIJ	90	良好	浅黄橙	P66G 上層 No.102・108	136-6

第60表 第36号溝跡出土遺物観察表(6) (第187・188図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
246	土師器	甕台	7.1	6.9	(10.3)	ACEHI	50	普通	にぶい・黄褐色	赤彩 N66G No1008	136-7
247	土師器	甕台	(8.2)	6.7	—	CEIJKL	50	普通	にぶい・赤褐色	O66G No1013	
248	土師器	甕台	8.6	5.1	—	ABCEHIJK	90	普通	にぶい・黄褐色	R66G 下層	137-1
249	土師器	甕台	6.7	4.6	—	ACEHIJKL	70	良好	灰黄	P66G No.1101 上層	
250	土師器	甕台	7.3	3.6	—	ABCEHIJK	90	普通	明赤褐色	N66G No1009	136-4
251	土師器	甕台	(12.2)	2.4	—	ACEHIKL	35	普通	にぶい・褐色	内外面煤付着 R66G No25	
252	土師器	甕台	(7.2)	1.8	—	EIJKL	25	普通	にぶい・赤褐色	赤彩 Q66G 上層	
253	土師器	甕台	—	7.7	11.0	ACEIJK	90	良好	灰黄褐色	V66G	137-2
254	土師器	甕台	—	2.0	—	AHEIK	5	普通	にぶい・褐色	赤彩 W66G	
255	土師器	鉢	13.9	4.4	—	AEIK	90	普通	赤褐色	内外面煤付着 O66G No1011	137-3
256	土師器	鉢	11.6	4.3	3.6	CEHIK	70	良好	暗赤	赤彩 No1010	137-4
257	土師器	鉢	(12.0)	3.8	—	CEHIK	35	良好	にぶい・赤褐色	N65G No1003	137-5
258	土師器	鉢	(10.6)	4.0	—	HIJK	10	良好	浅黄	S66G 砂利層 下部	166-3
259	土師器	鉢	14.1	5.1	—	ABCEHIJK	70	普通	にぶい・褐色	内面黒褐色 P66G No17	137-6
260	土師器	鉢	(13.4)	4.7	—	ACEIK	10	普通	褐色	外面赤彩 R66G 下層	166-3
261	土師器	鉢	9.8	4.4	3.9	ACEHIJK	90	良好	灰褐色	U66G No11	137-7
262	土師器	鉢	(13.8)	4.2	—	AEI	25	良好	黒褐色	P65G No1001	
263	土師器	鉢	(13.0)	2.9	—	ACIJ	5	普通	灰白	R66G 砂利	
264	土師器	鉢	(8.7)	5.5	3.9	CEHIKL	60	普通	にぶい・褐色	O66G No1015	138-1
265	土師器	鉢	(17.8)	5.0	—	ACEIK	10	良好	灰黄	R66G 砂利	166-3
266	土師器	鉢	(13.8)	4.0	—	CHIK	25	良好	褐色	U66G 下層	138-2
267	土師器	鉢	(7.1)	4.4	(3.2)	CEHIK	40	良好	灰黄褐色	T66G 砂利層	138-3
268	土師器	瓶	(24.1)	6.1	—	AHEIK	15	普通	にぶい・褐色	P66G No251 O66G	165-1
269	土師器	瓶	16.6	10.9	3.2	ACEHIK	50	良好	にぶい・褐色	P66G No1098・1449	138-5
270	土師器	瓶	20.1	10.1	2.0	CGHI	90	普通	にぶい・黄褐色	P66G No94・1080・1194	138-4
271	土師器	瓶	—	3.1	5.4	ACEHIK	90	普通	にぶい・赤褐色	O66G 下層	
272	土師器	蓋	11.5	6.8	4.0	ACEGHIJK	90	良好	明赤褐色	P66G No1018	138-6
273	土師器	ミニチュア	—	6.5	—	ACEHIJ	30	普通	灰黄	外面煤付着 T66G 砂利層	
274	土師器	ミニチュア	(5.6)	5.8	(3.0)	ACEHIK	60	良好	黄灰	P66G No1044	138-7
275	土師器	ミニチュア	3.7	4.7	3.6	ABCEHIK	80	普通	にぶい・黄褐色	U66G No14	138-1
276	土師器	ミニチュア	(4.7)	3.9	(3.6)	CEHIJK	50	普通	にぶい・褐色	U66G	139-2
277	土師器	ミニチュア	—	4.7	—	ACEHIL	40	普通	灰黄褐色	P66G 下層	
278	土師器	ミニチュア	—	4.9	—	ACEHIJKL	45	良好	明褐色	Q66G No26	
279	土師器	ミニチュア	5.4	3.5	2.6	ACEHIK	85	普通	にぶい・黄褐色	外面赤彩 N65G 下層	139-3
280	土師器	手捏ね	3.5	3.0	2.1	ABCEHIK	100	普通	にぶい・黄褐色	P66G No266	139-4
281	土師器	ミニチュア	—	3.7	4.4	ABCEIK	80	普通	にぶい・赤褐色	O66G 下層	139-5
282	土師器	手捏	—	3.3	—	AHEIK	5	普通	灰白	R66G 砂利	165-3
283	土製品	土鉢	5.8	1.4	0.4	AIK	100	明赤褐色	R65G No6 10.5g	167-1	
284	土製品	土鉢	4.9	1.7	0.4	A I J K	100	褐色	Q66G No21 13.5g	167-1	
285	土製品	土鉢	5.1	1.5	0.5	A I J K	100	暗灰黄	Q66G No20 9.9g	167-1	
286	土製品	土鉢	4.6	1.5	0.4	A I J K	100	灰黄	Q66G No22 9.0g	167-1	
287	土製品	土鉢	4.5	1.5	0.4	AIK	100	暗灰黄	Q66G No7 7.9g	167-1	
288	土製品	土鉢	5.9	4.0	1.9	ACEH	100	にぶい・黄褐色	煤付着 U66G 83.8g	167-1	
289	土製品	土鉢	(3.9)	1.5	0.4	AIK	90	灰	Q66G No18 9.4g	167-1	
290	土製品	土鉢	4.0	1.3	0.3	A I J K	90	褐色	Q66G No15 6.2g	167-1	
291	土製品	土鉢	4.1	1.5	0.4	AIK	90	褐色	Q66G No16 7.3g	167-1	
292	土製品	土鉢	(4.2)	1.3	0.5	A I J K	90	灰	Q66G No17 5.5g	167-1	
293	土製品	土鉢	(3.5)	1.3	0.5	AIK	90	黄灰	Q66G No19 4.9g	167-1	
294	土製品	土鉢	(2.7)	1.2	0.4	AIK	50	黄灰	Q66G No14 3.3g	167-1	

第61表 第36号清跡出土土物観察表(7) (第188・189・191・203・204図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
295	土製品	土玉	2.8	3.1	0.5	A C D E H J	100		にぶい黄橙 W66G 24.0g		167-1
296	その他	貝殻穴泥岩	—	—	—				にぶい・橙 Q68G 下層 4.0g		
297	石製品	礫石	—	—	—				灰白 T65G №1 全体に酸化鉄凝灰岩		167-1
298	土製品	礫石	—	—	—				にぶい・赤褐 V66G		167-1
299	土師器	鉢 (12.4)	5.2	—	—	A B C E H I K	20	普通	にぶい・黄橙 N65G 下層		
300	土師器	鉢 (16.7)	3.9	—	—		20	普通	にぶい・赤褐 S65G 下層		
301	土師器	鉢 10.1	6.3	3.4	—	A C E H I K	80	普通	にぶい・橙 赤彩 P66G №63		139-6
302	土師器	小型甕	10.7	7.4	3.5	A B C E H I J K	90	普通	明褐色 N66G №1007		140-1
303	土師器	高杯	23.4	—	17.1	A B C E H I J	50	普通	灰白 赤彩 P66G №276・1066・1076		140-5
304	土師器	高杯	—	6.7	—	A C E I K	90	普通	にぶい・赤褐 V66G		
305	土師器	高杯	—	7.4	—	A C E I K	90	普通	にぶい・黄橙 R65G №9		
306	土師器	高杯	—	9.5	—	A C E I J K	80	普通	灰褐 O66G №1012		140-3
307	土師器	高杯	—	7.5	—	B C E H J	90	普通	にぶい・黄橙 P66G №242		
308	土師器	高杯	—	8.3	—	A C E H I K	95	普通	にぶい・黄橙 赤彩 S66G №6		
309	土師器	甕 (17.0)	20.0	—	—	A C E H I J K L	50	良好	にぶい・橙 外燻煤付着 U66G №9 6C後半		140-2
310	土師器	甕	16.5	30.0	—	A C E H I L	85	普通	明赤褐 O66G №502 6C後半		140-6
311	土師器	杯 (12.0)	4.4	—	—	D I J	25	普通	淡黄褐 全面赤彩 U66G 比金型坏 身輪部坏		
312	土師器	杯 12.3	3.9	—	—	H I J L	65	普通	淡褐 赤彩 O66G №501 比金型坏 外面風化		141-1
313	土師器	杯 (11.4)	4.1	—	—	G H I J	40	普通	淡褐 赤彩 P66G №11 比金型坏		141-2
314	土師器	杯 (12.0)	3.9	—	—	C G I	55	良好	淡黄褐 赤彩 V66G 比金型坏 體質感ある胎土		141-3
315	須恵器	杯 11.9	4.3	5.6	—	I J	95	良好	青灰 内外面火葬 P66 №5 比金型 使用痕あり		141-4
316	須恵器	杯 11.9	4.2	5.3	—	J	100	良好	青灰 O65G №9 南比金型 1号祭祝跡		141-5
317	須恵器	杯 12.0	4.3	5.5	—	J	100	良好	青灰 P66G №22 南比金型		141-6
318	須恵器	杯 (12.6)	4.2	5.9	—	I J	50	普通	灰 P66 №6 比金型 器底に灰土混入 [二]不明		142-1
319	須恵器	杯 12.1	3.6	5.9	—	J	100	普通	暗青灰 P66 №4 比金型 使用による磨損あり 火葬		141-7
320	須恵器	杯 12.0	3.9	5.5	—	E I J	100	普通	暗青灰 P66G №24 南比金型 使用による磨損あり		141-8
321	コワ土師器	杯 11.1	4.0	5.0	—	D G I L	60	不良	橙褐 P6 №3 器口に[一]の痕跡あり 器底に[一]の痕跡あり		142-3
322	須恵器	杯 11.8	3.8	6.0	—	I J	100	普通	青灰 O65 №3 比金型 器底に[一]の痕跡あり 器底に[一]の痕跡あり		142-5-6
323	須恵器	杯 12.8	4.1	6.9	—	I J	100	普通	く十九だ灰 O66 №4 比金型 器底に[一]の痕跡あり 器底に[一]の痕跡あり		143-1-2
324	須恵器	杯 —	2.7	5.9	—	I J	70	良好	内外面火葬痕あり O65G 上層		
325	須恵器	杯 —	2.6	5.8	—	I J	35	良好	青灰 V66G 南比金型 底部回転糸切り		
326	須恵器	杯 —	2.7	(5.8)	—	I J	20	普通	灰 V66G 南比金型 底部回転糸切り		
327	須恵器	杯 —	1.6	(5.9)	—	I J	30	良好	青灰 内面火葬 P65G 南比金型 底部回転糸切り		
328	須恵器	杯 (12.4)	4.0	—	—	I J	25	不良	黄灰 X66G Y66G 南比金型 無台坏小		
329	須恵器	杯 (11.9)	3.3	—	—	J	25	良好	青灰 O65G 上層 P66G 上層 南比金型		
330	コワ土師器	杯 12.0	3.7	5.0	—	C E G I	100	不良	褐 R65G №13 胎土 黒あり 器底に[一]の痕跡あり		144-1
331	コワ土師器	杯 —	2.6	4.4	—	C E G	60	不良	黄白 W66G 外面黒痕 底部回転糸切り		
332	須恵器	無台埴	15.1	5.6	7.5	I J	80	良好	紫灰—青灰 P66G №26・172 南比金型 器底に[一]の痕跡あり		143-4-5
333	須恵器	蓋 (15.0)	2.3	—	—	I	15	良好	青灰 T66G 砂利層 南比金型		
334	須恵器	蓋 (17.0)	1.8	—	—	G J	15	普通	灰 Q66G 上層 南比金型		
335	須恵器	無台埴 (15.0)	5.2	7.6	—	I J	60	普通	暗青灰 器底に[一]の痕跡あり 器底に[一]の痕跡あり		
336	須恵器	無台埴 14.2	6.0	6.6	—	J L	80	普通	暗青灰 器底に[一]の痕跡あり 器底に[一]の痕跡あり		
337	須恵器	無台埴 —	4.8	7.0	—	I J	40	普通	暗青灰 内面黒痕 器底に[一]の痕跡あり 器底に[一]の痕跡あり		
338	須恵器	無台埴小 —	2.5	7.5	—	I J	60	良好	青灰 O65G 上層 比金型 器底に[一]の痕跡あり		
339	須恵器	無台埴 —	4.0	6.6	—	D I J	30	普通	灰白 O65G 上層 南比金型 底部回転糸切り		
340	須恵器	無台埴小 —	3.4	5.6	—	J	35	普通	灰黒 V66G 南比金型 底部回転糸切り		
341	須恵器	(高台)埴 (15.0)	4.2	—	—	D I J	10	普通	黄褐 R66G 砂利層 南比金型 口縁部肥厚		
342	須恵器	高台埴 (14.5)	4.9	—	—	H I J L	25	不良	褐 S66G 砂利層 U66G 南比金型		
343	須恵器	高台付埴 —	2.3	—	—	D E I J L	60	不良	暗褐 V66G 南比金型 胎土粗く		

第62表 第36号溝跡出土遺物観察表(8)(第204~207図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
344	須恵器	高台埴	—	2.5	6.2	I J	80	良好	明褐	P66G №54 南比企産 無化腐焼成 土師製	
345	須恵器	高台埴	—	4.4	(7.5)	D G I	20	不良	灰褐	S6G 砂利層 軟質須恵器 白色針状物質不明	
346	灰輪陶器	段皿	(14.5)	1.9	—	I J	15	良好	灰白	P66G №23 猿投産か 砥石に転用	
347	須恵器	甕	—	10.3	—	I J	5	良好	青灰	V66G №4 南比企産	
348	須恵器	甕	—	7.2	—	I J	5	良好	黒灰	06G №5 南比企産 外面平行叩き 内面ナデ	
349	須恵器	短頸壺	(12.0)	10.4	—	E J	25	良好	赤褐	T66G 上層 南比企産 外面器表剥落	
350	土師器	甕	(19.2)	25.9	—	D H I	60	普通	暗褐	P66G 上層 白色針状物質確認できない	144-4
351	瓦	平瓦	—	—	—	J	5	不良	茶褐	P66G 確認面	145-1, 2
352	陶器	火鉢	—	—	—	A E I	5	普通	暗褐	14世紀以降 在地系 中世	
353	須恵器	長頸瓶	—	12.2	6.0	I J	95	良好	黒灰	06G №7 南比企産 底面ナデ(×)裏のヘラ記号	144-3
354	灰輪陶器	合子	(2.8)	3.2	3.1	I J	90	良好	青灰	S65G №5 瀬戸?	144-2
355	金属(銅)	花瓶	2.2	8.9	3.2	—	100		紫青	鉄鋼 底板はめ底	145-3
356	鉄鎌	雁股鎌	長さ18.4cm	身部長8.2cm	茎部長10.2cm				R65G	360とセット	145-4
357	鉄鎌	雁股鎌	長さ12.2cm	身部長6.2cm	茎部長6.0cm				P66G		146-1
358	鉄鎌	雁股鎌	長さ7.2cm	身部長3.7cm	茎部長3.5cm (復元長4.5cm)				S65G	小型の雁股鎌	146-2
359	鉄製品	硬質鉄製品	外径2.3cm~2.6cm								144-7
360	木製品	矢柄	長さ18.6cm							356とセット	1465-6
361	鉄鎌	片刃鎌	長さ11.0cm	茎部長0.8cm					V66G		146-3
362	鉄製品	短刀	長さ25.0cm	刃身幅2.9cm	柄部幅1.4cm				G65G		146-7
363	かわらけ	皿	(15.4)	3.3	7.3	A J	55	良好	淡褐	S66G 上層 在地産 (南比企産)	144-5
364	かわらけ	皿	(12.8)	1.8	11.3	J	20	良好	黒褐	Q65G №7 在地産 (南比企産)	144-6
365	瓦質土器	(片口)鉢	(35.0)	6.0	—	H J	5	普通	暗青灰	U65G 上層 在地産 (南比企産)	

河川内に向かって射たのであろう。漆パレットの出土を積極的に解するならば、弓に漆を塗布した際に使用したとも想像できる。なお、当初、河川内から出土した筈を祭祀に伴う遺物(弓矢的)ではないかと推定したが、年代測定の結果、中世に降る可能性が高まったため、報告では祭祀関係遺物からは除外した。

#### 木製品

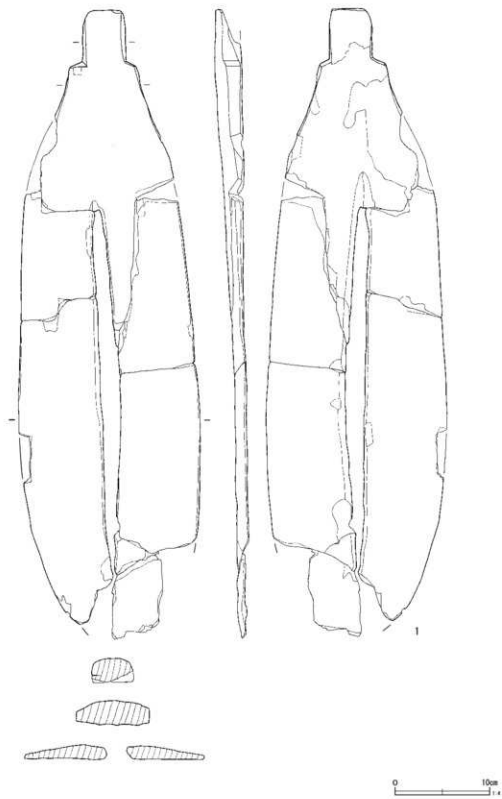
第36号溝跡からは自然木、流木とともに多くの木製品が出土している。調査では、基本的に製品について取り上げ、一部自然木をサンプリングした。その点数は213点に上る。大きく、下層(古墳時代前・中期)、上層(古代・中世)に分けて掲載した。

古墳時代前期のものは農具、木鍾、樹皮巻き、建築材がある。

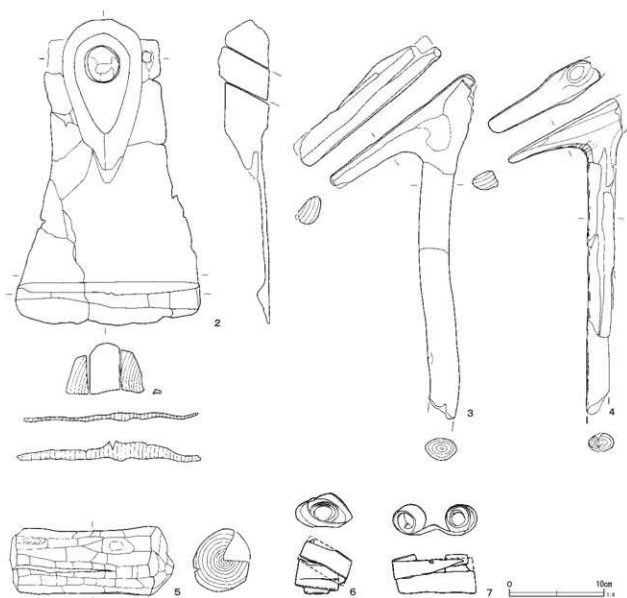
1は曲柄平鋸である。平面形はナスビ形である。残存長66.8cm、軸部の長さ5.3cm、幅4.5cm、厚さ

2.9cm、肩部の幅17.8cm、厚さ2.7cm、刃部の幅19.1cm、厚さ2.0cmである。傷みが著しく、割れやそれぞれの部品の凹跡の欠損が多い。特に肩部と刃部の先端は大きく欠損している。刃部の中央にスリットが入っており、又鋸とは異なる。軸部は短く、斜めにカットされている。軸部と肩部の境に段を持つ。最大幅が下位にあり、下膨れである。肩部から刃部先端にかけて厚みを減じていく。刃部は中央が最も厚く、両側は薄くなる。工具痕は観察できなかった。木取りは榎目、樹種はコナラ属アカガシ亜属である。

2は直柄の平鋸である。肩部の辺は直線的で、大きな角形突起が特徴である。中に柄の一部が遺存している。残存長32.2cm、肩部の幅11.6cm、厚さ0.5cm、刃部の幅19.3cm、厚さ2.0cmである。角形突起は長さ17.2cm、幅8.3cm、高さ4.7cmである。柄の装着角度は62~65°である。傷みが著しく、割れやそれぞれの部品の凹跡の欠損が多い。特に刃



第208图 第36号满踪出土木製品 (1)

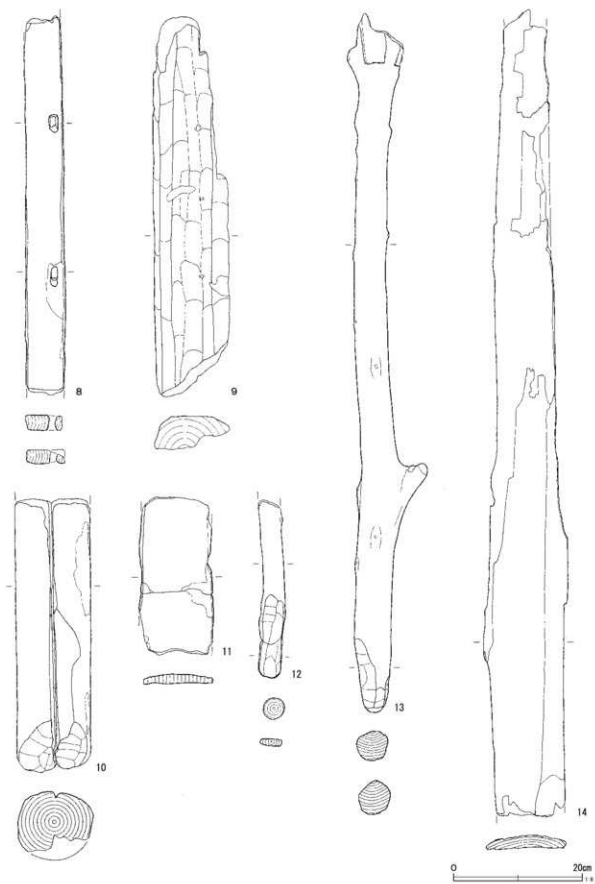


第209図 第36号溝跡出土木製品（2）

部の中央付近は厚みを失っている。舟形突起の右側に降泥板を装着するための径1.0cmほどの穴が開けられている。柄は径3.7cmである。工具痕は観察できなかった。木取りは柾目、樹種はイチイガシである。柄は芯無し削り出しで樹種はムクロジである。

3・4は膝柄である。いずれも鍛台の基部と柄の先端が欠損している。4は傷みが著しく、割れた部品ごとに欠けている。全体の残存長は3が36.5cm、4が33.8cmである。鍛台は3が残存長18.7

cm、幅3.2cm、厚さ1.9cm、4が残存長12.8cm、幅2.4cm、厚さ2.1cmである。平面形は3が隅丸方形、4が嘴形に基部より一段細い方形になっている。着柄角度は3が $53^{\circ}$ 、4が $62^{\circ}$ である。柄は3が径3.3cm、4が径2.6cmである。3は鍛台の基部に近い部分が平坦でなく、山形になっており、このままでは鍛あるいは斧を装着することができないことから未成品である可能性もある。断面形は丸みのある扁平な方形である。4の鍛台は平坦で、断面形は方形に近い。3の柄は曲がりのあるもので



第210图 第36号满路出土木製品(3)

ある。3の樹種はエゴノキ属、4の樹種はサカキである。

5は木鍾である。長さ173cm、径6.0~72cmである。工具痕は幅1.0~1.5cmで、1.5~2.0cmピッチのものが多く、細かく加工されている。両端は片側は尖り気味に、片側は扁平に仕上げられている。使用による磨耗等は認められなかった。芯持丸木で、樹種はハイノキ属である。

6・7は樹皮巻きである。出物等を綴じる際に用いられるもので、本遺跡での出物の製作を示すものである。6は長さ43.0cm、幅2.8cm、厚さ0.1cmである。7は6よりやや幅広で、長さ44.0cm、幅3.6cm、厚さ0.15cmである。

8は板材である。両端が欠損している。残存長61.0cm、幅5.9~6.2cm、厚さ2.5cmである。22cmの間隔を空けて1.2×1.0cm、1.8×1.0cmの膺穴が開けられている。何らかの建築材の一部と考えられる。加工痕は観察できなかった。木取りは柵目、樹種はモミ属である。

9は柱材である。両端と、径の縦半分を欠失している。残存長61.2cm、径12.9cm、現状での厚さ5.0cmである。幅2.5~3.0cm、長さ6~12cmの工具痕が鮮明に残る。芯持丸木で、樹種はコナラ属アカガシ亜属である。

10・12・13は杭である。12・13は上端を欠失し、10は両端を欠失している。10は大径のもので、径12.0cm残存長43.9cmである。先端を斜めに削られている。工具の幅は4.0cmである。端部は欠失している。芯持丸木で、樹種はコナラ属アカガシ亜属である。12は残存長28.6cm、径は3.5cmである。先端は両側から大きく斜めに削られる。工具の幅は約2.0cmである。杭ではなく、掘り棒のような機能を持つ可能性がある。芯持丸木で、樹種はコナラ属アカガシ亜属である。13は残存長112.2cm、径は上下で異なり、上部が10.5cm、下部が5.0cmである。欠失している上端と下端から38cmの箇所が枝分かれしている。下側のものは他の材を掛ける

ために、故意に削らずに残している可能性が高い。加工は先端部のみ認められ、四方から大きく斜めに削られている。工具痕の幅は約3.0cmである。芯持丸木で、樹種はクリである。

11・14・15は板材である。15は上端を、11・14は両端を欠失している。11は残存長25.0cm、幅11.7cm、厚さ1.1cmである。側縁部がやや薄く仕上げられている。あるいは板材ではなく他の性格を持つものも可能性もある。全体的に若干炭化している。木取りは柵目、樹種はイチイガシである。14は両側縁部も欠失している部分が多い。残存長130.1cm、最大幅13.7cm、厚さ2.4cmである。全体に炭化している。木取りは板目、樹種はモミ属である。15は、右側側縁部の約半分を欠失している。残存長148.2cm、最大幅15.4cm、厚さ2.4cmである。両側縁部が削られている。工具痕は幅3.0~4.0cm、長さ12~15cmである。木取りは板目、樹種はモミ属である。

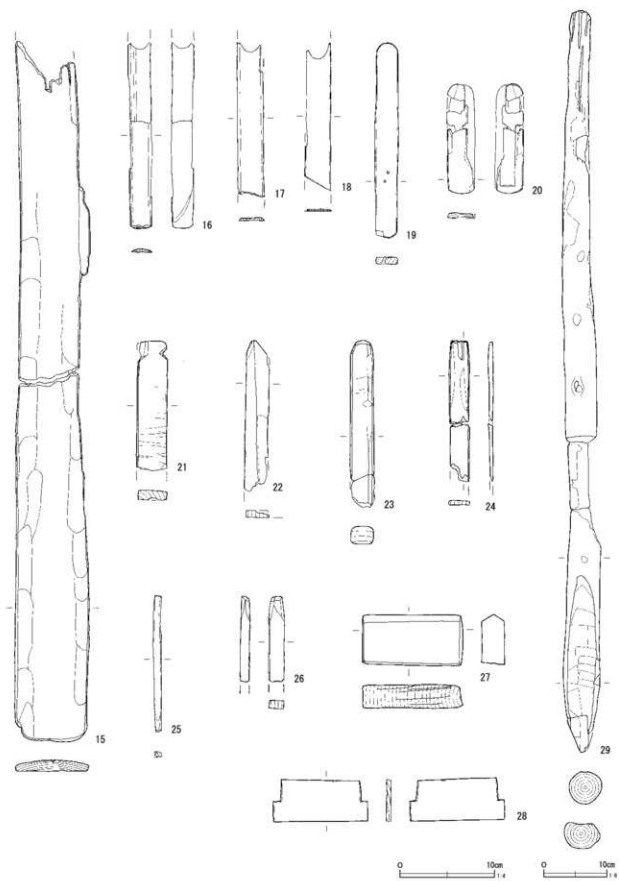
以下は、上層から出土したものである。

16~18は刀子の鞘である。17・18は端部を欠失する。いずれも薄い板状で、片側に半円形の切り込みがある。16は裏面に刀の切先の形の掘り込みが認められる。16は長さ19.6cm、幅2.3cm、厚さ0.3cmで、木取りは板目、樹種はスギである。17は残存長16.5cm、幅2.8cm、厚さ0.3cmで、木取りは柵目、樹種はスギである。18は残存長15.6cm、幅2.7cm、厚さ0.2cmで、木取りは柵目、樹種はスギである。

19は板材である。両端を丸く加工している。目釘孔が2箇所認められ、一つは貫通しているが、一つは片側のみで止まっている。工具の柄等と考えられる。残存長20.6cm、幅2.6cm、厚さ8.9cmである。木取りは柵目、樹種はヒノキである。

20は刀子の柄である。362とセットの可能性がある。傷みが激しく、欠損が著しい。柄頭は丸く作られている。茎孔の下部は方形に作られている。断面形は方形である。残存長11.6cm、幅2.8cm、厚さ0.6cmで、茎孔の幅は2.1cmである。木取りは追





第211图 第36号满路出土木製品(4)

柾目、樹種はムクノキである。

21は付札である。着装部と下端が欠けており、分厚く、未成品と考えられる。表面に加工痕が見られる。残存長13.6cm、幅3.1cm、厚さ1.0cm、木取りは追柾目、樹種はサワラである。

22はへら状の工具である。片側の端部と身の半分を欠失する。先端は尖り気味に削られている。残存長15.9cm、幅2.6cm、厚さ0.8cm、木取りは板目、樹種はモミ属である。

23は工具の柄である。下端は欠失する。柄頭は丸く作られている。工具痕が若干認められる。残存長17.6cm、幅2.5cm、厚さ1.9cmで、芯なし削り出し、樹種はコナラ属アカガシ亜属である。

24は板材である。両端を欠失する。端部にやや丸みを持たせている。幅1cm前後の工具痕が見られる。鞘等の可能性が考えられる。残存長14.9cm、幅2.0cm、厚さ0.5cmで、木取りは追柾目、樹種はサワラである。

25は棒状の木製品で片側が焦げており、点け木、もしくは燃えさしと考えられる。残存長14.5cm、幅0.8cm、厚さ0.6cmである。割材で、樹種はヒノキである。

26は板材である。下端を欠失する。端部を削り、やや丸みを持たせている。工具の柄等の可能性が考えられる。残存長9.1cm、幅1.6cm、厚さ0.9cmである。割材で、樹種はスギである。

27は建築材の一部の可能性がある。上端が断面三角形、下端は平坦である。下端面に工具痕が認められる。残存長10.6cm、幅5.3cm、厚さ2.4cm、木取りは追柾目、樹種はモミ属である。

28は指物である。両側縁に段が作られている。上端に幅3mmほどの圧痕が見られる。幅9.9cm、高さ4.3cm、厚さ0.5cm、木取りは板目、樹種はスギである。

29は杭である。上端は半分傷んでいるがほぼ端部に近いと考えられる。全体的に傷んでいる部分が多いが、加工は端部のみと考えられる。先端は

斜めに大きく削られ、更に二方向からも削られている。工具幅は約3.0cmである。残存長119.7cm、径5.7cm、芯持丸木で、樹種はクワ属である。

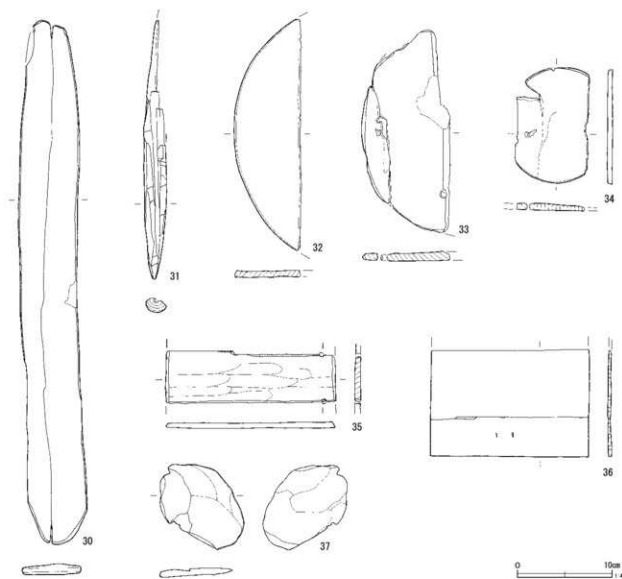
30は板材である。外周全体を欠失している。残存長55.6cm、幅6.2cm、厚さ1.1cmである。加工痕は認められなかった。木取りは板目、樹種はヒノキである。

以下は出土位置が不明なものである。大部分が上層と同一の時期と考えられる。

31は尖り棒である。全体に傷みが激しく、片側を欠失している。芯持ちの半割り材で、幅1cm前後の加工痕が認められる。裏面には加工が認められない。残存長27.3cm、幅2.3cm、厚さ1.4cm、樹種はムラサキシキブ属である。

32～34は曲物の底板である。33・34は痛みが激しく、割れや磨耗が進んでいる。33は約半分を、34は両側縁部を欠失する。32は約3分の2を欠失する。復元推定径は21.8cmである。残存長24.5cm、幅6.9cm、厚さ0.7cm、木取りは柾目、樹種はヒノキである。33の復元推定径は21.8cmである。33には径5mmの縦じ孔が2ヶ所、34には一辺2mmの方形の縦じ孔が見られる。33は残存長21.2cm、幅9.2cm、厚さ0.8cm、木取りは柾目、樹種はサワラである。34は径12.2cm、残存幅7.7cm、厚さ0.7cm、木取りは柾目、樹種はヒノキである。

35・36は箱の部材である。35は上下端を欠失する。片側に幅3mmほどの縦じ孔が2ヶ所見られる。表面には幅1.0～1.5cmの工具痕が見られるが、裏面には見られず、凹凸がある。残存長18.0cm、幅5.6cm、厚さ0.7cm、木取りは板目、樹種はスギである。36は上端を欠失する。上下に割れており、更に下半は二つに折れている。上端と中段の2ヶ所に段を有し、他の部材と組み合わせたと考えられる。下端が最も厚く、上端が最も薄い。下半の中央には5×1mmほどの小さな縦じ孔が2ヶ所見られ、樹皮紐が残っている。残存長16.8cm、幅11.4cm、厚さ0.4cm、木取りは板目、樹種はスギ



第212図 第36号溝跡出土木製品(5)

である。

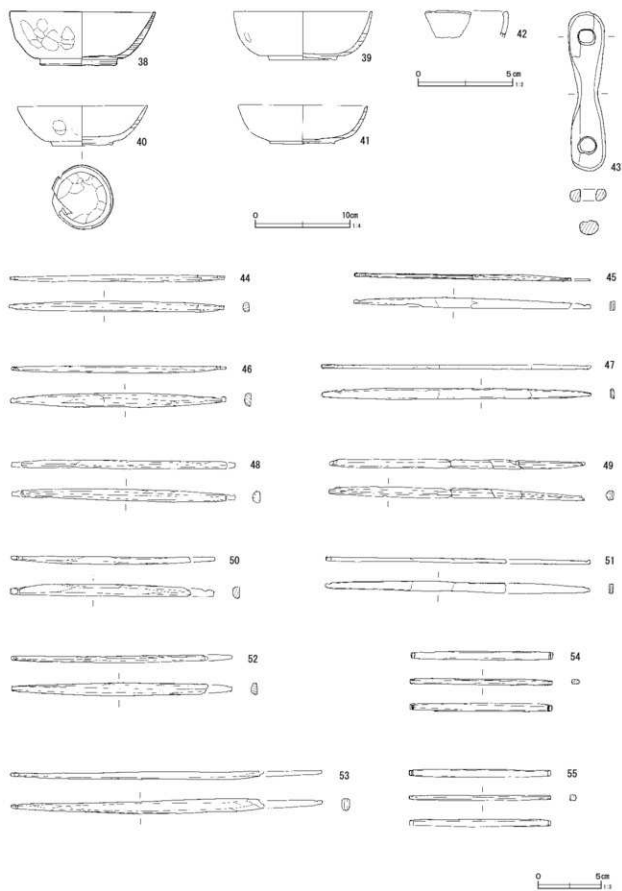
37は樹皮である。加工痕が見られ、容器等の一部の可能性がある。8.2×8.0cmの大きさで、厚さ0.7cmである。樹種はトチノキである。

38～41は漆器である。39は皆朱漆、それ以外は黒漆である。外面に一部ケズリの痕跡が見え、内面のロクロ目が明瞭である。39がやや高台らしく仕上げられている以外は、平坦な底面、所謂ベタ底である。各々の口径・底径・器高は、38が15.3・8.2・5.7cm、39が14.4・7.2・5.2cm、40が13.6・6.4・4.3cm、41が13.4・6.9・4.1cmである。

42は小破片である。口唇部のみに黒漆が見える。木取り、樹種は、40が横木取りでトチノキである以外は、横木取りでケヤキである。

43は締め具である。Q-66グリッドから前述の浮子、土鍾とともに出土している。長さ12.5cm、幅2.8cm、1.5cm、厚さ1.1cmで、自在鉤のような形態を呈している。孔径1.1cmの孔が2箇所開けられている。木取りは柾目、樹種はヒノキである。

44～55は浮子である。54・55以外は、Q-66グリッドから283～287、289～294の土鍾とともに一括して出土している。形態は細い棒状で、中央に



第213图 第36号洞跡出土木製品(6)

最大径を持ち、両側端が細くなり、鉤状の持ちが施されている。断面形は扁平な長方形、或いは半球形で、角が丁寧に削られている。残存長及び幅、厚み、木取り、樹種は、44が17.0・0.8・0.5cm、榎目、スギ、45が17.2・0.8・0.4cm、板目、モミ属、46が16.6・1.1・0.5cm、榎目、スギ、47が21.3・0.9・0.3cm、板目、モミ属、48が16.3・0.9・0.6cm、榎目削り出し、モミ属、49が16.3・0.9・0.6cm、榎目削り出し、モミ属、50が14.5・0.9・0.6cm、割材、スギ、51が13.9・0.8・0.3cm、板目、モミ属、52が15.5・1.0・0.6cm、榎目削り出し、モミ属、53が20.2・1.0・0.6cm、板目、スギ、ヒノキ、54が11.2・0.6・0.3cm、板目、ヒノキ、55が11.3・0.6・0.4cm、割材である。Q-66グリッドから一括して出土した一群が大型と中型、54・55が小型である。前者は完形の44や47を参考にする、21cm前後、17cm前後で、後者は11cm前後である。44・47・54・55は両側に持ちがあるが、それ以外は片側のみである。47には木目に対して直交するような痕跡が見られ、あるいは網の跡である可能性が考えられる。44・46・47・50・53・54・55は、鉤状の部分に圧痕が、その周囲に擦痕が見られる。

以下は上層出土だが、一括して取り上げられており、出土位置が不明なものである。

56~60は出物である。60は大型、56・57は中型、58・59は小型である。56・59は側縁部に段を持たず、側板にはめ込むタイプ、57・58は段を持ち、側板を乗せるタイプである。56は全面に加工痕が残り、釘の痕跡が1ヶ所認められる。57は段の縁が幅1cmあり側板が相当厚くなると思われる。59はごく薄く、径5mmの縦じ孔が認められる。56は径18.0cm、厚さ1.0cm、木取りは追榎目、樹種はヒノキである。57は残存長14.5cm、復元径16.6cm、厚さ0.6cm、木取りは板目、樹種はヒノキである。58は残存長10.2cm、復元径10.8cm、幅3.9cm、厚さ0.8cm、木取りは榎目、樹種はサワラである。59は残存長11.2cm、幅5.1cm、厚さ0.1cm、木取りは榎

目、樹種はヒノキである。60は残存長16.1cm、幅2.6cm、厚さ1.0cmで径の復元は困難だが30cm以上になると思われる。木取りは板目、樹種はヒノキである。

61・63は組物の側板である。双方とも木取りは板目、樹種はサワラである。61には0.8×0.4cmの縦じ孔が見られる。残存長16.4cm、幅2.2cm、厚さ0.5cmで、63は上端に目釘の痕跡が3ヶ所認められ、幅1.0cmの工具痕が見られる。63は残存長10.9cm、幅4.3cm、厚さ4.0cmである。

62は板材である。片側を欠失する。残存長11.3cm、幅2.7cm、厚さ0.6cm、木取りは板目、樹種はスギである。

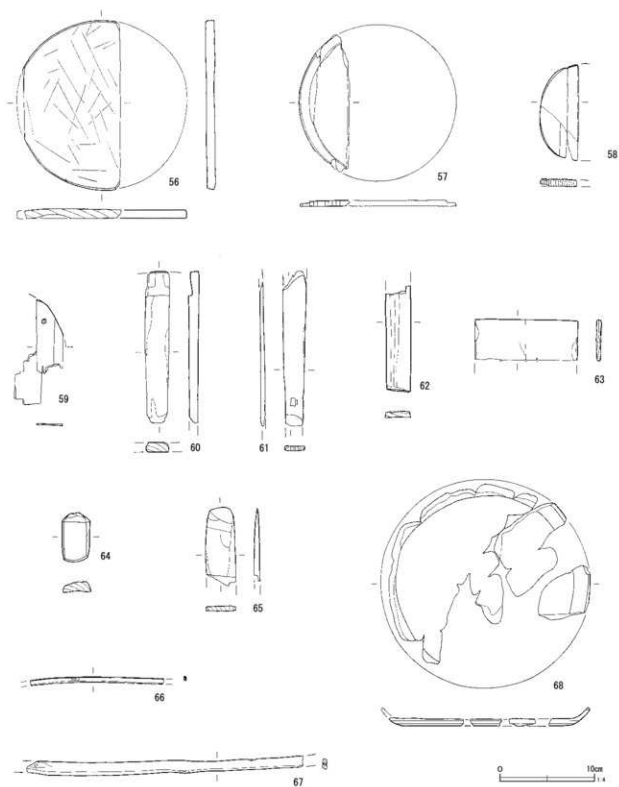
64は性格不明の雑具である。断面形は台形で、上下端を丸く仕上げている。長さ5.3cm、幅3.0cm、厚さ1.1cm、木取りは板目、樹種はスギである。

65はへら状工具である。下端を欠失し、上端2.5cmが薄く仕上げられ、若干潰れている。加工は表側のみである。上端が残存長8.3cm、幅3.2cm、厚さ0.6cmで木取りは榎目、樹種はスギである。

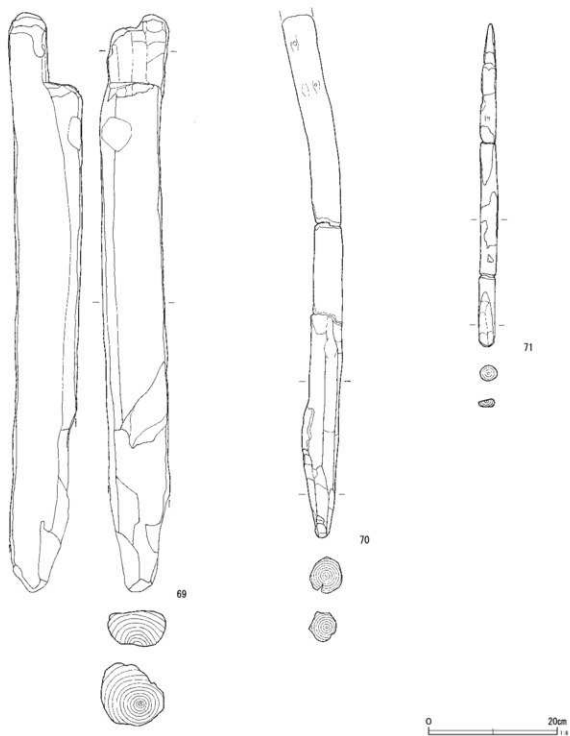
66・67は72の籠の部品である。66は残存長14.1cm、幅0.6cm、厚さ0.3cmである。67は残存長29.1cm、幅1.4cm、厚さ0.5cmである。双方とも、芯持丸木で樹種はタケである。

68は木皿である。傷みが激しく側縁部の大部分と体部の約半分を欠失する。体部はごく平坦である。残存口径21.9cm、推定口径22.0cm、底径18.0cm、器高1.9cmである。木取りは横木取り、樹種はケヤキである。

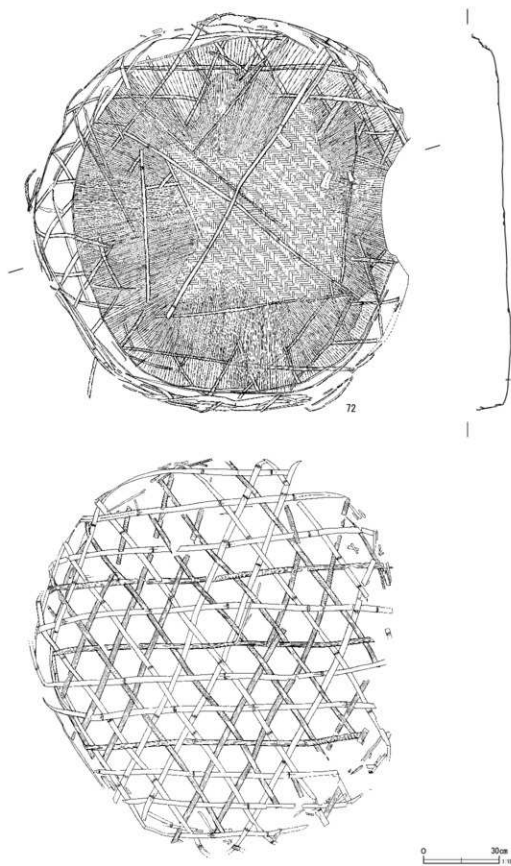
69・70は杭である。69は残存長93.0cm、径9.7~10.0cmである。上端に仕口が作られている。工具痕の幅は2.5~3.0cmである。木取りは板目、樹種はモミ属である。70は上端が欠失しているものである。残存長84.3cm、径5.0~5.7cmである。皮付きの芯持ち丸木である。幅2.0~2.5cmの工具痕が明瞭に認められ、先端部は断面形が六角形に削られている。樹種はコナラ属クヌギ節である。



第214图 第36号洞迹出土木製品(7)

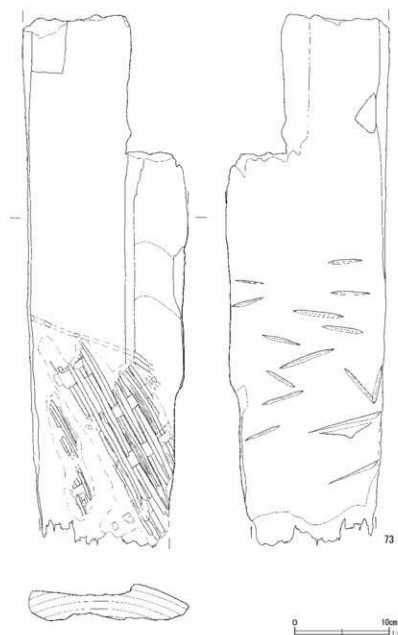


第215图 第36号满踪出土木制品 (8)



第216图 第36号满踏出土木製品(9)





第217図 第36号溝跡出土木製品 (10)

71は両端尖り棒である。皮付きの芯持丸木で、両端の先端部にのみ加工が認められるものである。上端を欠失している。残存長52.1cm、径2.4~2.7cmである。幅1.0~1.3cmの工具痕が明瞭に認められる。樹種はサクラ属である。

72~74は編組製品である。製作技法等についてはⅥで詳述されているため、ここでは法量、部材等について述べる。72は大型のかごである。口径159cm、高さ17cmである。口縁部は大部分が欠損

している。所謂六目籠である。幅2cm前後のマダケの割り裂き材を使用している。底部に放射状にワラ状の植物を敷き、更に中央に一辺83cmの方形の網代編みの敷物を重ねている。

73は裏面に刃物痕が多く見られる短板状の板材で、裏返して再利用され、敷物またはスタレ状の製品が乗せられている。板材の長さ56.8cm、幅16.5cm、厚さ3.7cmである。敷物またはスタレ状の製品は部分的なもので残存長は25cmである。



第218図 第36号溝跡出土木製品 (11)



74は編組製品が二重に重ねられたものである。物あるいはスタレ状の製品は長さ約27cm、幅約43cm、上のかごの外縁は腐朽して失われている。下の敷物あるいはスタレ状の製品は長さ約27cm、幅約43cm、上のかごは35.0×28.0cmである。

## 報告書抄録

ふりがな		そりまちいせき							
書名		反町遺跡1							
副書名		高坂駅東口第二特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次		1							
シリーズ名		埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号		第361集							
編著者名		福田 聖・赤熊浩一							
編集機関		財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地		〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台四丁目4番地1 TEL 0493-39-3955							
発行年月日		西暦2009(平成21)年3月24日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因	
		市町村	遺跡番号	° ° °	° ° °				
そりまちいせき 反町遺跡	さいたま市の市 はらみずのまち 大字高坂257番 地他	11212	371	36°00'02"	139°24'54"	20050401 ～ 20070331	15,395	土地区画 整理	
所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
反町遺跡		縄文時代	縄文土器		縄文土器		県内ではほとんど例のない後期前半のまとまった資料		
		弥生時代	住居跡 方形周溝墓 土器棺墓 溝跡	7軒 5基 2基 3条	弥生土器				
		古墳時代	住居跡 方形周溝墓 土壇 高跡	23軒 3基 5基 4箇所	土師器				
		奈良・平安時代	住居跡 溝跡	2軒 2条	土師器 須恵器				
		中・近世	溝跡 土壇	24条 19基	陶磁器 鉄器 木器				
		弥生～中世	流路跡	4箇所	弥生土器 土師器 須恵器 鉄製品 木製品 漆器 陶器	古墳時代前期を中心に大量の土器、木製品が出土。墨書土器、雁股鎌を用いた祭祀跡が検出されている。			
	時期不明	ビット	多数	土師器 須恵器 陶磁器					
要約		<p>反町遺跡は、埼玉県東松山市の都幾川の右岸に立地する。周辺は肥沃な水田地帯が広がり、遺跡はその下に埋没した自然堤防上に形成されている。これまでに4回の調査が行われ、古墳時代前期を中心とする250軒以上の住居跡が検出されている。本事業に伴う調査では弥生時代中期から中世にいたる竪穴住居跡117軒、掘立柱建物跡1棟、方形周溝墓7基、土器棺墓2基、古墳跡12基、流路跡5箇所、溝跡88条、土壇61基が調査された。古墳時代前期の遺構・遺物を中心とする。住居跡の1軒は水晶製勾玉、碧玉製管玉の製作工房であることが明らかになった。流路跡からは多量の土器、木製品が出土している。岸边から奈良・平安時代の「神矢」・「弓」・「三田万呂」・「飯万呂」の銘のある墨書土器、雁股鎌を用いた祭祀跡が検出された。</p>							

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第361集

## 反町遺跡Ⅰ

高坂駅東口第二特定土地地区画整理事業地内  
埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ  
(第1分冊)

平成21年3月19日 印刷

平成21年3月24日 発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台四丁目4番地1  
電話 0493(39)3955

<http://www.saimibun.or.jp>

印刷／巧和工藝印刷株式会社